

秋田県文化財調査報告書第109集

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅹ

—はりま館遺跡・横館遺跡・大岱Ⅰ遺跡—

1984・3

秋田県教育委員会

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書 X

一鹿角部小坂町に所在する

はりま<sup>だて</sup>館遺跡

よこ<sup>だて</sup>横館遺跡

おお<sup>だい</sup>大岱 I 遺跡

の調査一

秋田県教育委員会

## 序

東北縦貫自動車建設に伴う発掘調査は、秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から昭和56年度までは、鹿角市が対象でしたが、昭和57年度からは、小坂町を対象として発掘調査を行なっております。

本報告書は、昭和57年度に発掘調査を実施した小坂町のはりま館・横館・大岱Ⅰの3遺跡の調査結果を収録しております。この報告書が、鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後にこの調査に御協力いただきました顧問、専門指導員、日本道路公団、小坂町、同教育委員会ははじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長 斎藤 長

## 例 言

1. 本書は、東北縦貫自動車道路線内の小坂町分に所在する14カ所の遺跡のうち、昭和57年度に秋田県教育委員会が行った、はりま館遺跡（遺跡番号No.35）、横館遺跡（遺跡番号No.36）、大岱I遺跡（遺跡番号No.44）の発掘調査報告書である。
2. 調査成果については機会をみて発表してきたが、本書を正式のものとする。
3. 本書の執筆・編集は下記のとおりを担当して行った。

調査に至る経緯と経過	永瀬福男
調査の組織と構成	永瀬福男
地形と地質	藤本幸雄
遺跡の立地と環境	永瀬福男
はりま館遺跡	柴田陽一郎
横館遺跡 第1章第1節	竹村昭雄
その他	永瀬福雄
大岱I遺跡	大野憲司

4. 本文中の「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏に執筆を、石器の石質は、秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏に鑑定をお願いした。記して感謝したい。
5. 土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』を活用した。
6. 発掘作業員及び整理作業員は、今回報告した3遺跡に共通する人が多いため、その氏名は本書末尾に記した。
7. 遺構には調査時の発見順に一連番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断されたものもあり、欠番がある。
8. 遺構に付した略記号は下記のとおりである。  
S1……整穴住居跡    SK……土竈    SKT……Tビット    SKF……フラツコ状ビット    SR……埋設土器    SD……溝    SN……焼土遺構    SB……孤立柱建物跡    SX……その他の遺構
9. 土層図中などのレベル数値は、標高である。

10. 本書中の「地形と地質」を除く部分で、スクリーントーンを以下のように用いた。

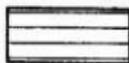
① 遺構に関して



焼土



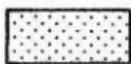
大海軽石層



地山黄褐色火山灰層

② 遺物に関して

〈はりま館・横館遺跡の半円状扁平打製石器〉

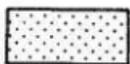


擦る (滲す)

〈大倍Ⅰ遺跡の多目的礫器など〉



敲く



滲す



擦 (磨) る

# 目 次

序	
例 言	
調査に至るまでの経緯と調査経過	1
調査の組織と構成	2
地形と地質	2
遺跡の立地と環境	9
はりま館遺跡	13~194
第1章 発掘調査の概要	15
第1節 遺跡の概観	15
第2節 調査の方法	15
第3節 調査経過	19
第2章 調査の記録	21
第1節 縄文時代の遺構と遺物	21
1 発見遺構と遺物	21
2 遺構外出土遺物	61
第2節 弥生時代の遺物	107
第3節 平安時代の遺構と遺物	107
1 発見遺構と遺物	107
2 遺構外出土遺物	129
第4節 その他の遺構と遺物	129
1 発見遺構	129
2 出土遺物	129
第3章 まとめ	131
横館遺跡	199~246
第1章 発掘調査の概要	201

第1節	遺構の外観	201
第2節	調査の方法	201
第3節	調査の経過	205
第2章	調査の記録	205
第1節	縄文時代の遺構と遺物	205
1	発見遺構と遺物	205
2	遺構外の上遺物	208
第2節	弥生時代の遺構と遺物	211
1	遺構外の出土遺物	211
第3章	まとめ	230

## 大岱 I 遺跡 247～383

第1章	発掘調査の概要	249
第1節	遺跡の概観	249
1	遺跡の立地	249
2	遺跡の基本層序	249
3	遺構の分布	250
4	遺物の分布	250
第2節	調査の方法	250
第3節	調査経過	250
第2章	調査の記録	256
第1節	縄文時代の遺構と遺物	256
1	発見遺構と遺物	256
2	その他の出土遺物	272
第2節	弥生時代の遺構と遺物	320
1	発見遺構と遺物	320
2	その他の出土遺物	323
第3章	まとめ	330
1	土器横置石囲炉について	330
2	多目的燗器について	331
3	弥生時代の土壌について	331
4	弥生式土器について	332

# 図・図 版 目 次

## 巻頭図版目次

巻頭図版 1

巻頭図版 2

巻頭図版 3

## 調査に至るまでの経緯と経過～遺跡の立地と環境

### 図 目 次

第1図	地質図	3
第2図	柱状図	4
第3図	柱状図	7
第4図	柱状図	8
第5図	周辺遺跡分布図	11-12

### 表 目 次

第1表	はりま館遺跡の火山灰層の重鉱物組織 ( $1\frac{1}{2}$ ～ $1\frac{1}{4}$ mm径の個数%)	5
第2表	大浜工遺跡の火山灰層の重鉱物組織 ( $1\frac{1}{2}$ ～ $1\frac{1}{4}$ mm径の個数%)	5

## はりま館遺跡

### 図 目 次

第1図	遺跡周辺地形図	16
第2図	遺構配置図	17-18
第3図	基床土層図	17-18
第4図	大浜軽石堆積層 (MB75)	17-18
第5図	S I 001竪穴住居跡・出土遺物	22
第6図	S I 007・015・016竪穴住居跡	23-24
第7図	S I 007竪穴住居跡出土土器	26
第8図	S I 007竪穴住居跡出土遺物	27
第9図	S I 007竪穴住居跡出土土器	28
第10図	S I 007竪穴住居跡出土土器	29
第11図	S I 015竪穴住居跡出土遺物	30
第12図	S I 015竪穴住居跡出土土器	31
第13図	S I 009竪穴住居跡	33-34
第14図	S I 009竪穴住居跡出土土器類群	35
第15図	S I 009竪穴住居跡出土遺物	36
第16図	S I 009竪穴住居跡出土土器	37

第17図	S I 014竪穴住居跡	38
第18図	S I 014竪穴住居跡出土遺物	39
第19図	S I 063竪穴住居跡	40
第20図	S K F 029・030・031・078土層出土遺物	42
第21図	S K F 037土層・出土土器	43
第22図	S K F 037土層出土遺物	44
第23図	S K 008・010・011・033・064土層・ S K 010土層出土遺物	45
第24図	S K 070・071・074・076・077・090 土層・S K 074・090土層出土遺物	46
第25図	S K 079・087・089・091・092土層	47
第26図	S K 093・094・098土層・S K T 022・ 023・024Tピット・S K T 024Tピット 出土遺物	48
第27図	S K T 025・026・027・028・032Tピット	50

第26回	S K T 036・051・095・096 T ビット・ S K T 036・051 T ビット出土土器……………51	第59回	遺構外出土土器・瓦状石器・石槍・漆器……………92
第29回	S K T 061・097 T ビット・S N 043・065 067 焼土道構・S N 067 焼土道構出土土器……………52	第60回	遺構外出土土器・不定形石器……………93
第30回	S R 013・017・034・069・073 埋設土器……………55	第61回	遺構外出土土器・不定形石器……………94
第31回	S R 013・017 埋設土器……………56	第62回	遺構外出土土器・不定形石器……………95
第32回	S Q 034・069 埋設土器……………57	第63回	遺構外出土土器・磨製石斧・石器……………96
第33回	S R 069 埋設土器①……………58	第64回	遺構外出土土器・半円状扁平打製石器……………97
第34回	S R 069 埋設土器②……………59	第65回	遺構外出土土器・半円状扁平打製石器……………98
第35回	S R 073 埋設土器……………60	第66回	遺構外出土土器・磨石……………100
第36回	墓中出土遺物……………65	第68回	遺構外出土土器・凹石……………101
第37回	遺構外出土土器（前期）……………66	第69回	遺構外出土土器・凹石……………102
第38回	遺構外出土土器（前期）……………67	第70回	遺構外出土土器・凹石……………103
第39回	遺構外出土土器（前期）……………68	第71回	遺構外出土土器・台石……………104
第40回	遺構外出土土器（前期）……………69	第72回	遺構外出土土器・土製品・石棒……………105
第41回	遺構外出土土器（前期）……………70	第73回	S I 002 竪穴住居跡・出土遺物……………108
第42回	遺構外出土土器（前期）……………71	第74回	S I 002 カマド……………109
第43回	遺構外出土土器（前期）……………72	第75回	S I 003 竪穴住居跡・出土遺物……………111
第44回	遺構外出土土器（前期）……………73	第76回	S I 003 竪穴住居跡跡戸……………112
第45回	遺構外出土土器（前期）……………74	第77回	S I 003 竪穴住居跡出土土器……………113
第46回	遺構外出土土器（前期）……………75	第78回	S I 004 竪穴住居跡・カマド……………115
第47回	遺構外出土土器拓本（前期）……………76	第79回	S I 004 竪穴住居跡出土遺物……………116
第48回	遺構外出土土器（後期）……………77	第80回	S I 005 竪穴住居跡・出土土器……………118
第49回	遺構外出土土器（後期）……………78	第81回	S I 005 竪穴住居跡カマド……………119
第50回	遺構外出土土器（後期）……………79	第82回	S I 006・018 竪穴住居跡……………120
第51回	遺構外出土土器拓本（晩期）……………80	第83回	S I 006・018 出土土器……………121
第52回	遺構外出土土器……………81	第84回	S I 020 竪穴住居跡・出土遺物……………123
第53回	遺構外出土土器……………82	第85回	S I 020 カマド……………124
第54回	遺構外出土土器……………83	第86回	S I 038 竪穴住居跡・出土遺物……………125
第55回	遺構外出土土器……………84	第87回	S B 075 竪立住居跡跡……………126
第56回	遺構外出土土器拓本（縄文晩期・弥生）……………85	第88回	R C 052～059 炭化材出土状況……………127
第57回	遺構外出土石器・石槌・石鎌・石鏃……………90	第89回	遺構外出土遺物フイゴ割口……………128
第58回	遺構外出土土器・石匙・石碇……………91	第90回	遺構外出土陶磁器……………130
		第91回	試料採取地点模式図……………136

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡遺景（東▶） 調査前（北▶）……………137	図版 4	大海懸石堆積状態 S I 001 竪穴住居跡（北▶）……………140
図版 2	瓦土除去後（北▶） 調査状況（北▶）……………138	図版 5	S I 007・015・016 竪穴住居跡（南▶） S I 007 竪穴住居跡（北東▶）……………141
図版 3	土器出土状況 土器出土状況……………139 石棒出土状況……………139	図版 6	S I 007 石器出土状況 S I 009 竪穴住居跡（東▶）……………142

図版7	S I 009 整穴住居跡土器埋設跡 S I 014 整穴住居跡 (北▶) .....	143	図版24	S R 069 埋設土器 .....	160
図版8	S I 002 整穴住居跡 (南▶) S I 002 整穴住居跡カマド産物出土状況 (北▶) .....	144	図版25	S R 073 埋設土器 S B 075 獨立柱建物跡 (南▶) .....	161
図版9	S I 003 整穴住居跡 (東▶) S I 003 整穴住居跡印被出土状況 (北▶) .....	145	図版26	R C 炭化村全景 (南▶) R C 54 炭化村 .....	162
図版10	S I 004 整穴住居跡 (北▶) .....	146	図版27	S I 007 整穴住居跡出土遺物 .....	163
図版11	S I 004 整穴住居跡カマド (北▶) .....	146	図版28	S I 007 整穴住居跡出土遺物 .....	164
図版12	S I 005 整穴住居跡 (西▶) S I 005 整穴住居跡カマド (北▶) .....	147	図版29	S I 007 整穴住居跡出土遺物 .....	165
図版13	S I 006・018 形穴住居跡 (西▶) .....	148	図版30	S I 015 整穴住居跡出土遺物 .....	166
図版14	S I 020 整穴住居跡 (西▶) S I 020 整穴住居跡カマド (北▶) .....	149	図版31	S I 015 整穴住居跡出土遺物 .....	167
図版15	S I 038 整穴住居跡土層断面 (西▶) .....	150	図版32	炉埋設土器 S I 009 整穴住居跡出土遺物 .....	168
図版16	S K F 029・030・031 フラスコ状ヒット (東▶) S K F 037 フラスコ状ヒット (北▶) .....	151	図版33	S I 009 整穴住居跡出土遺物 .....	169
図版17	S K F 078 フラスコ状ヒット土層断面 S K F 078 フラスコ状ヒット土層断面 S K F 078 フラスコ状ヒット (南▶) .....	152	図版34	S I 014 整穴住居跡出土遺物 .....	170
図版18	S K 076・077 土壇 (北西▶) S K 079 土壇 (北東▶) .....	153	図版35	S K F 037 フラスコ状ヒット出土遺物 .....	171
図版19	S K T 023 T ビット (北西▶) S K T 024 T ビット (北西▶) S K T 025 T ビット (北西▶) S K T 026 T ビット (北西▶) .....	155	図版36	S R 013・017・034 埋設土器 .....	172
図版20	S K T 027 T ビット土層断面 (北西▶) S K T 028 T ビット (北西▶) S K T 032 T ビット (南西▶) .....	156	図版37	S R 069・073 埋設土器 .....	173
図版21	S K T 051 T ビット (南▶) S K T 036 T ビット (北西▶) S K T 061 T ビット (西▶) .....	157	図版38	遺構外出土遺物 (前期) .....	174
図版22	S K T 095・096 T ビット (東▶) S R 013 埋設土器 .....	158	図版39	遺構外出土遺物 (前期) .....	175
図版23	S R 017 埋設土器 S R 034 埋設土器 .....	159	図版40	遺構外出土遺物 (前期) .....	176
			図版41	遺構外出土遺物 (前期) .....	177
			図版42	遺構外出土遺物 (前期) .....	178
			図版43	遺構外出土遺物 .....	179
			図版44	遺構外出土遺物 .....	180
			図版45	遺構外出土遺物 .....	181
			図版46	遺構外出土遺物 .....	182
			図版47	遺構外出土遺物 .....	183
			図版48	遺構外出土遺物 .....	184
			図版49	遺構外出土遺物 .....	185
			図版50	遺構外出土遺物 .....	186
			図版51	遺構外出土遺物 .....	187
			図版52	遺構外出土遺物 .....	188
			図版53	遺構外出土遺物 .....	189
			図版54	遺構外出土遺物 .....	190
			図版55	遺構外出土遺物 .....	191
			図版56	遺構外出土遺物 .....	192
			図版57	遺構外出土遺物 .....	193
			図版58	遺構外出土遺物 .....	194
			図版59	S I 002・008 整穴住居跡出土遺物 .....	195
			図版60	S I 004 整穴住居跡出土遺物 .....	196

住居跡出土遺物	197
図版62 遺構外出土遺物	198

## 横館遺跡

### 図目次

第1図 遺跡周辺の地形と発掘調査区	202	第13図 遺構外出土遺物	218
第2図 土層実測図	203	第14図 遺構外出土遺物	219
第3図 遺構分布図(A区)	204	第15図 遺構外出土遺物	220
第4図 フラスコ状ピット実測図	206	第16図 遺構外出土遺物	221
第5図 土構実測図	208	第17図 遺構外出土遺物	222
第6図 遺構内出土遺物	208	第18図 遺構外出土遺物	223
第7図 遺構外出土遺物	212	第19図 遺構外出土遺物	224
第8図 遺構外出土遺物	213	第20図 遺構外出土遺物	225
第9図 遺構外出土遺物	214	第21図 遺構外出土遺物	226
第10図 遺構外出土遺物	215	第22図 遺構外出土遺物	227
第11図 遺構外出土遺物	216	第23図 遺構外出土遺物	228
第12図 遺構外出土遺物	217	第24図 遺構外出土遺物	229

### 図版目次

図版1 遺跡遺景(左岸→右岸) 遺跡全景(南 ▶)	233	図版8 遺構外出土遺物(弥生土器)	240
図版2 土層 発掘風景	234	図版9 遺構外出土遺物(弥生土器)	241
図版3 S K F 01 S K F 02	235	図版10 遺構外出土遺物(石珠・石籠)	242
図版4 S K F 03 S K F 04	236	図版11 遺構外出土遺物(三日月形石器・撥器・ 削器等)	243
図版5 S K F 02 埴土遺構	237	図版12 遺構外出土遺物(削器・表面加工石器)	244
図版6 遺構内出土遺物(第1群土器)	238	図版13 遺構外出土遺物(扁平打製石器)	245
図版7 遺構外出土遺物(第2群~4群土器)	239	図版14 遺構外出土遺物(石皿・石斧・凹石等)	246

## 大岱 I 遺跡

### 図目次

第1図 遺跡の立地	251	第7図 S I 01 竪穴住居跡	259
第2図 土層図	251	第8図 S I 01 竪穴住居跡出土遺物	260
第3図 遺跡全体図・遺跡土層断面図	253・254	第9図 調査区南端部遺構配置図	262
第4図 調査区北東部遺構配置図	255	第10図 S K 04 土壇と出土遺物	263
第5図 S I 31 竪穴住居跡と出土遺物	257	第11図 S K 05 土壇と出土遺物	265
第6図 S I 03 竪穴住居跡と出土遺物	258	第12図 S K 07 土壇と出土遺物	266

第13図	S K 10 S K 18 S K 21 S K 50 土壇……………	268
第14図	S K 15 S K 17 S K 20 S K 28 S K 29 土壇……………	269
第15図	S K 16 S K 23 S K 30 土壇と出 土遺物……………	270
第16図	S K T 12 S K T 13 T ヒット S K 69 S K 14 井戸状土壇……………	271
第17図	縄文時代前期の土器……………	273
第18図	I 群 1・2 類土器……………	275
第19図	I 群 3 類土器……………	276
第20図	I 群 4 類土器……………	277
第21図	I 群 5 類土器……………	278
第22図	I 群 6・7 類土器……………	279
第23図	I 群 8・9 類土器……………	280
第24図	II 群 1・2 類土器……………	281
第25図	III 群・IV 群土器 (1) ……	283
第26図	IV 群 1 類土器……………	284
第27図	IV 群 2・3・4 類土器……………	285
第28図	IV 群 5 類土器……………	286
第29図	IV 群 6 類土器……………	287
第30図	IV 群土器 (2) ……	288
第31図	IV 群土器 (3) ……	289
第32図	V 群土器……………	290
第33図	縄文時代晩期の土器……………	291
第34図	円盤状土製品……………	292
第35図	出土石器 (1) 石鏃・匙状石器……………	297
第36図	出土石器 (2) 匙状石器・石槍・獲器……………	298
第37図	出土石器 (3) 獲器・削器……………	299

第38図	出土石器 (4) 削器……………	300
第39図	出土石器 (5) 削器……………	301
第40図	出土石器 (6) 削器・匙状石器……………	302
第41図	出土石器 (7) 楕円形石器・小形円形石器・ その他の石器……………	303
第42図	出土石器 (8) その他の石器……………	304
第43図	出土石器 (9) 半円状扁平打製石器……………	305
第44図	出土石器 (10) 半円状扁平打製石器・有痕 痕打製石器……………	306
第45図	出土石器 (11) 有痕痕打製石器……………	307
第46図	出土石器 (12) 有痕痕打製石器・麻製石斧……………	308
第47図	出土石器 (13) 麻製石斧・磨製石斧類石 製品・石風・石棒……………	309
第48図	出土石器 (14) 多目的礎器……………	310
第49図	出土石器 (15) 多目的礎器……………	311
第50図	出土石器 (16) 多目的礎器……………	312
第51図	出土石器 (17) 多目的礎器……………	313
第52図	出土石器 (18) 多目的礎器……………	314
第53図	出土石器 (19) 多目的礎器……………	315
第54図	出土石器 (20) 多目的礎器……………	316
第55図	出土石器……………	317
第56図	出土石器……………	318
第57図	出土石器……………	319
第58図	S K 06 土壇 (墓) と出土土器……………	322
第59図	S K 02 土壇 (墓) と出土土器……………	323
第60図	弥生時代 1・2 類土器……………	325
第61図	弥生時代の土器 (1) ……	326
第62図	弥生時代 3 類土器……………	327
第63図	……………	328

## 図 版 目 次

図版 1	上 遺跡遺象 (南東▶)	
	下 遺跡全景 (南▶) ……	335
図版 2	上 遺跡全景 (南▶)	
	下 調査終了後 (南▶) ……	336
図版 3	上 調査終了後 (北西▶)	
	下 土層断面……………	337
図版 4	上 土器出土状況	
	下 S I 03 竪穴住居跡 (北▶) ……	338
図版 5	上 竪穴住居跡石圍伊見見状況 (	
	西▶) ……	339

	下 S I 03 竪穴住居跡 (西▶) ……	339
図版 6	上 S I 01 竪穴住居跡見見状況 (東▶)	
	下 S I 01 竪穴住居跡石圍跡 (北▶) ……	340
図版 7	上 調査区南端部遺構群 (南▶)	
	下 S K 04 大型円形土壇 (北▶) ……	341
図版 8	上 S K 05 土壇確認時の状況 (南▶)	
	下 S K 05 大型円形土壇 (南▶) ……	342
図版 9	上 S K 07 大型円形土壇 (東▶)	
	下 S K 10 袋状土壇 (南▶) ……	343
図版 10	上 S K 18 円型土壇 (南▶) ……	344

図版10	下	S K 21	円形土壇(南▶)	344	図版32	出土石器(1)	石錘・匙状石器・石槍・ 擗器	366
図版11	上	S K 29	円形土壇(西▶)		図版33	出土石器(2)	擗器・削器	367
	下	S K T 12	Tピット確認状況(南西▶)	345	図版34	出土石器(3)	削器・尾状石器	368
図版12	上	S K T 12	Tピット(北東▶)		図版35	出土石器(4)	楕円形石器・小型円形石 器・その他の石器	369
	下		埋土の状況(北東▶)	346	図版36	出土石器(5)	半円状扁平打製石器・有 柄板打製石器	370
図版13	上	S K T 12・13	Tピット確認状況 (南西▶)		図版37	出土石器(6)	有柄板打製石器・磨製石 斧	371
	下	S K T 13	Tピット(北▶)	347	図版38	出土石器(7)	磨製石斧・磨製石斧穂石 製品・石皿・石棒・多目 的礮器	372
図版14	上	S K 08	井戸状遺構(北▶)		図版39	出土石器(8)	多目的礮器	373
	下	S K 14	井戸状遺構(東▶)	348	図版40	出土石器(9)	多目的礮器	374
図版15	S I 31・03・01	竪穴住居跡出土遺物	349	図版41	出土石器(10)	多目的礮器	375	
図版16	S K 04・05・23	土壇出土遺物	350	図版42	出土石器(11)	多目的礮器	376	
図版17		縄文時代前期の土器	351	図版43	円盤状石製品、有孔石製品・線刻曜・有柄板曜、 有溝礮	376		
図版18		縄文時代I群1・2類土器	352	図版44	上 S K 06 土壇(上か南)			
図版19		縄文時代I群3・4類土器	353		下 S K 06 断面の状況(西▶)	377		
図版20		縄文時代I群5類、II群1・2類土器	354	図版45	上 S K 02 土壇(西▶)			
図版21		縄文時代I群6・7類土器	355		下 S K 02 断面の状況(西▶)	378		
図版22		縄文時代I群8・9類土器	356	図版46	上 S K 06 出土土器			
図版23		縄文時代中期末～後期の土器(1)	357		下 S K 02 出土土器	379		
図版24		縄文時代V群1類土器	358	図版47	弥生時代I・II群土器	380		
図版25		縄文時代V群2・3・4類土器	359	図版48	弥生時代の土器	381		
図版26		縄文時代V群5類土器	360	図版49	弥生時代II群5類土器・把手	382		
図版27		縄文時代V群6類土器	361					
図版28		縄文時代後期の土器(2)	362					
図版29		縄文時代後期の土器(3)・V群土器	363					
図版30		縄文時代後期の土器	364					
図版31		円盤状土製品	365					



はりま館遺跡とその周辺（北から、高度  $m$ ）



大岱 I 遺跡とその周辺（北から、高度  $m$ 、左端は小坂川）



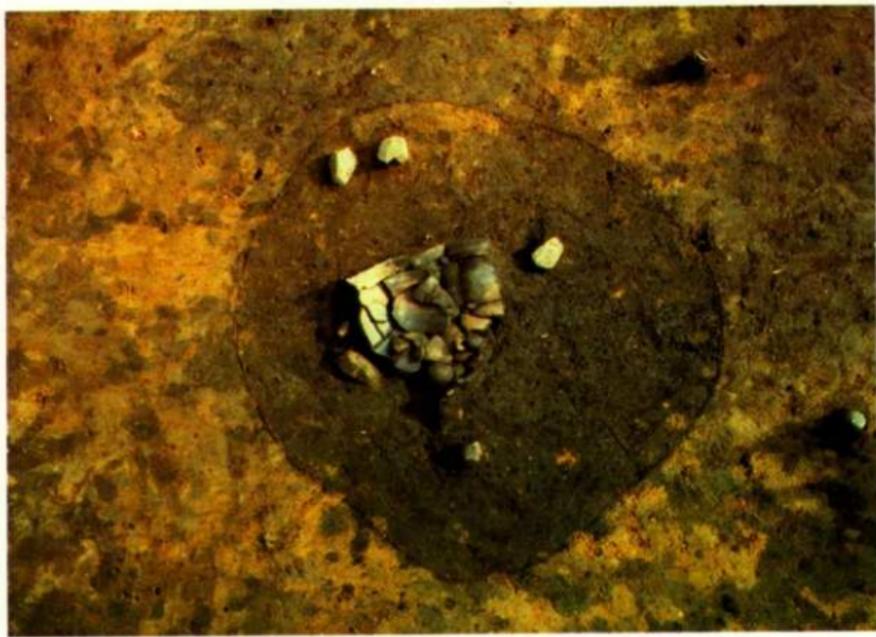
小坂町とその西側の段丘（北から、自動車道は段丘面の左端を走り、遺跡群が南北に連る）



はりま館遺跡 SI 007、015 竪穴住居跡（大形住居跡）



はりま館遺跡 SXU069 埋設土器出土状況



大岱 I 遺跡 SK06 弥生時代の土壺

## 調査に至るまでの経緯と調査経過

東北縦貫自動車道は、秋田県の北東部（鹿角市と鹿角郡小坂町）を通過する。秋田県教育委員会は、文化庁と日本道路公団とが交わした覚書に基づき、昭和44年・同48年・同52年に遺跡分布調査を実施した。その後、路線内に所在する遺跡について、日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会との間で協議が持たれ、最終的に記録保存することが決定された。発掘調査は昭和54年度から昭和56年度までは花輪地区が対象となり、34遺跡の発掘調査が実施された。そして昭和57年度からは小坂地区が対象となった。

小坂地区では、路線上に13遺跡、工事用道路上に1遺跡が、それぞれ所在する。秋田県教育委員会は、日本道路公団仙台建設局の発掘依頼（「仙雄総管 107号」昭和57年3月26日）を受けて、はりま館・横館・大袋Ⅰ・大袋Ⅱ・大袋Ⅳの5遺跡を昭和57年度に発掘調査することにした。なお、大袋Ⅱと大袋Ⅳの2遺跡は、土地買収の関係で、昭和58年度にも継続調査されることになった。

昭和57年度の調査経過は、大略下記のとおりである。なお、個々の遺跡の調査経過は、それぞれの項に記載してある。

4月上旬は、発掘調査事務所内外の整理・整頓を行い、調査本部としての体制を整える。4月中旬からは、発掘調査予定地の予備調査（基本層序の確認・周辺地形の理解）を実施した。

発掘調査は、6月7日に大袋Ⅰ遺跡が、8月10日からは、はりま館遺跡と横館遺跡が、9月13日からは、大袋Ⅱ遺跡と大袋Ⅳ遺跡がそれぞれ開始された。今年度は天候にめぐまれ、調査は順調に進行したが、11月に入ると濃霧と霜に悩まされた。調査がすべて終了したのは、11月20日であった。

出土遺物の整理は、発掘調査と併行して、現場で実施したが、復元・実測・トレース等は、12月から3月まで、秋田県埋蔵文化財センターで実施した。

（註1） 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』 1970年

（註2） 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』 1972年

（註3） 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書（八幡平～十和田錦木）』  
1978年

## 調査の組織と構成

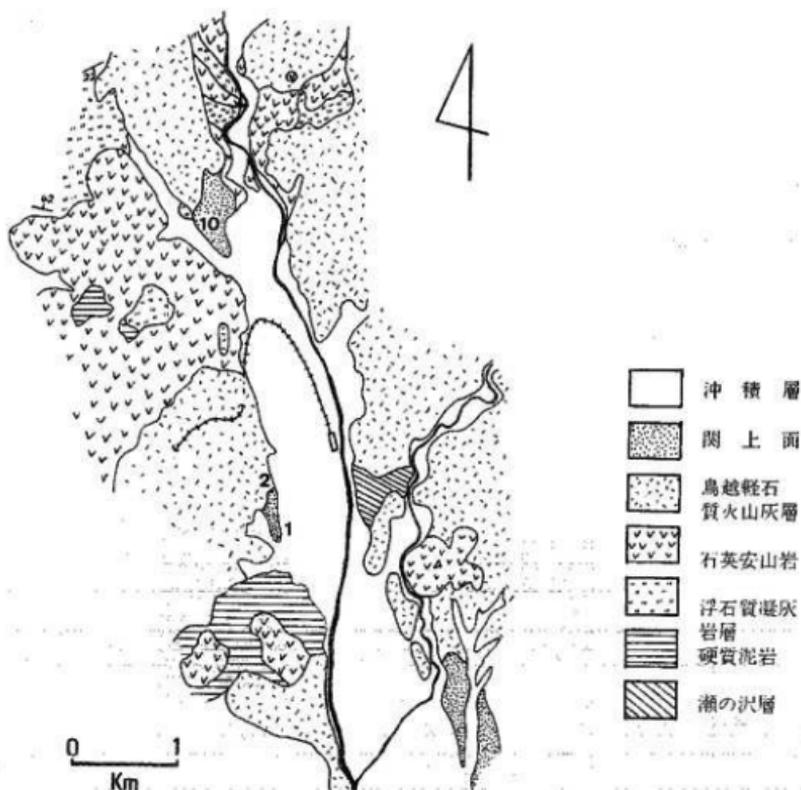
調査主体	秋田県教育委員会
調査顧問	坪井清足 奈良国立文化財研究所所長 声沢長介 東北大学教授
専門指導員	小林達雄 国学院大学助教授 林 謙作 北海道大学教授 須藤 隆 東北大学助教授 進藤秋輝 多賀城跡調査研究所研究第一科長 藤沼邦彦 東北歴史資料館考古研究科長
調査担当者	水瀬福男 秋田県埋蔵文化財センター 社会教育主事 大野憲司 秋田県埋蔵文化財センター 社会教育主事 柴田陽一郎 秋田県埋蔵文化財センター 文化財主事 小林 克 秋田県埋蔵文化財センター 文化財主事 橋本高史 秋田県埋蔵文化財センター 文化財主事
調査補佐員	阿部義行・安保徹・大信用学・佐々木正昇・鈴木秋良・高橋修・竹村昭雄 島山圭・花田孝夫・福本雅治・松岡忠二・三ヶ田達也
事務補助員	小田島洋子・安田育子

## 地形と地質

### 1 地形地質の概況

本地域は鹿角盆地北部に位置し、今回報告する遺跡は南流する小坂川の右岸の火山灰台地上に点在している。本地域は地形的に①山地②丘陵③台地④沖積低地の4つに区分される。次にその各々について概要をまとめてみる（第1図）。

①山地は小坂川右岸で高森（482.0m）を最高点とし北部で400m以上の標高を示すのに対し、南部では主として230～250mの波状の起伏を示す丘陵の中に、290～350mほどの残丘状突起部が点在している。一方小坂川左岸では200～280mのなだらかな丘陵および火山灰台地の中に270～350mの残丘状突起部が分布しており、その東と西では特に起伏量のちがいはみとめられない。これらの山地は秋田県（1973）によれば、小坂川右岸において主として新第三紀中新世の大滝層に属する浮石質凝灰岩層、硬質泥岩およびそれらに貫入する石英安山岩よりなり、特に残丘状の部分と北部の300m以上の山地は石英安山岩からなることが多い。また小坂川左岸では大滝層より下位の瀬の沢層を構成する凝灰岩・砂岩・泥岩の互層も一部に見られる



1. はりま館遺跡 2. 横館遺跡 10. 大岱1遺跡

第1図 地質図 (秋田県: 1973にもとづく)

が、小坂館山より南では新第三紀中新世上部の遠部層を構成する石英安山岩質凝灰岩が広く分布しており、残丘状の部分は小坂川右岸と同様に石英安山岩よりなっている。

②丘陵は 230～250mの波状起伏を示し、下位から第四紀更新世の石英安山岩質凝灰岩、河床性の砂礫層、軽石質火山灰層等で構成される。このうち石英安山岩質凝灰岩と軽石質火山灰層は層相・鉱物組成・地形との関係から内藤(1966)の長土路溶結凝灰岩層、小坂軽石質火山灰層にそれぞれ対比される。

③台地は十和田火山から供給された火砕物による段丘地形であり、内藤(前出)による鳥越面

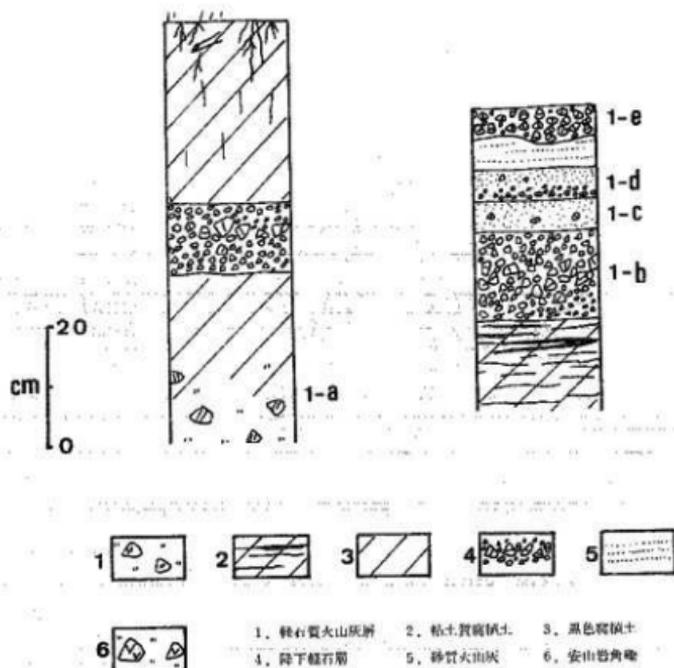
と関上面に2分される。このうち鳥越面は小坂川右岸の大袋で標高 255～260m、下流のはりま館で 215mであり、関上面は大袋で 230～235m、はりま館で 200m土となる。

④沖積低地は主として河床堆積物よりなり、部分的に比高2mほどで段化することもある。また、小坂川下流部では十和田火山最新期の火山噴出物である毛馬内軽石質火山灰層（内巻・前出）も分布しており、比高数mの段丘地形を形成している。

## 2 遺跡の地形と地質

### (1) はりま館遺跡

標高 200～203mの平坦な関上面上に位置する。地質は下部が黄褐色～オレンジ色の1～6



第2図 柱状図

cm大軽石片が不規則に混入する火山灰層で地積構造は認められず、二次堆積物というよりは初生的な火砕流堆積物といった印象である。この火山灰層の上位には黒色の腐植土層が漸移的に重なっており、漸移部は10数cmで黒褐色になる。黒色腐植土層は地形的に高い部分で薄く、低い部分ないし斜面の下で厚くなる傾向を示す。また地表から30~45cm下位に黄褐色の軽石層を含んでいる。代表的な柱状図を第2図Aに示す。なお、下部の軽石について重鉱物組成(1/2~1/4mm大の個数%)を求めたところ鉄鉱物31、単斜輝石26、斜方輝石34、角閃石9を得た。これは鳥越軽石質火山灰層の組成に一致するものである。次に上部の黒色腐植土層中に挟在する軽石層についてであるが、遺跡の東端部で数cm、中央部ないし西側で12cm±の厚さを示し、軽石片の最大径は2~7cmで平均3.3cmとなる。軽石片の大きい部分は軽石層内部のほぼ中央部であり、空隙が多くてくずれやすい降下火砕物の特徴をよく示している。なお、遺跡中央部の西端で第2図Bに示すような層状構造を示す部分が見られる。ここでは下部が15~22cmの降下軽石

No.	鉄 鉱 物	単斜輝石	斜方輝石	角 閃 石	合計個数
1-a	31	26	34	9	314
1-b	36	9	53		298
1-c	37	21	49		289
1-d	37	15	48		230
1-e	29	18	52	1	240

表1 はりま館遺跡の火山灰層の重鉱物組成  
(1/2~1/4mm径の個数%)

No.	鉄 鉱 物	単斜輝石	斜方輝石	角 閃 石	合計個数
14-a	44	18	31	7	293
14-b	39	19	32	10	273
11-12	30	23	30	17	270
10-a	32	25	35	8	268
20-A	39	23	38		292
20-b	36	16	37	11	270

表2 大信1遺跡の火山灰層の重鉱物組成  
(1/2~1/4mm径の個数%)

層(①層)、その上位に黒灰色のより細粒な基質中に数mmの軽石を含む層が7cm(②層)、更に径0.5~2.7cmの軽石に富む層が5~7cm(③層)で重なり、最上部は12~13cmの厚さで細粒火山灰層(④層)と0.5~3cmの軽石を含む火山灰層(⑤層)が堆積している。このうち①層は周辺の降下軽石層に連続するか②層以上は連続性が悪く、かつ黒色の土壌質な砂を多少とも含んでおり、細粒部は弱い平行ラミナをもっている。また①層の下位には黒色の有機質粘土層がフィルム状にみられ、堆積面が凹状の地形の存在を示す等のことから②層以上は二次的な堆積物と推定される。重鉱物分析の結果はいずれも角閃石を含まず、斜方輝石が単斜輝石よりかなり多い大湯軽石質火山礫層の組成に一致している(第1表)。

## (2) 横館遺跡

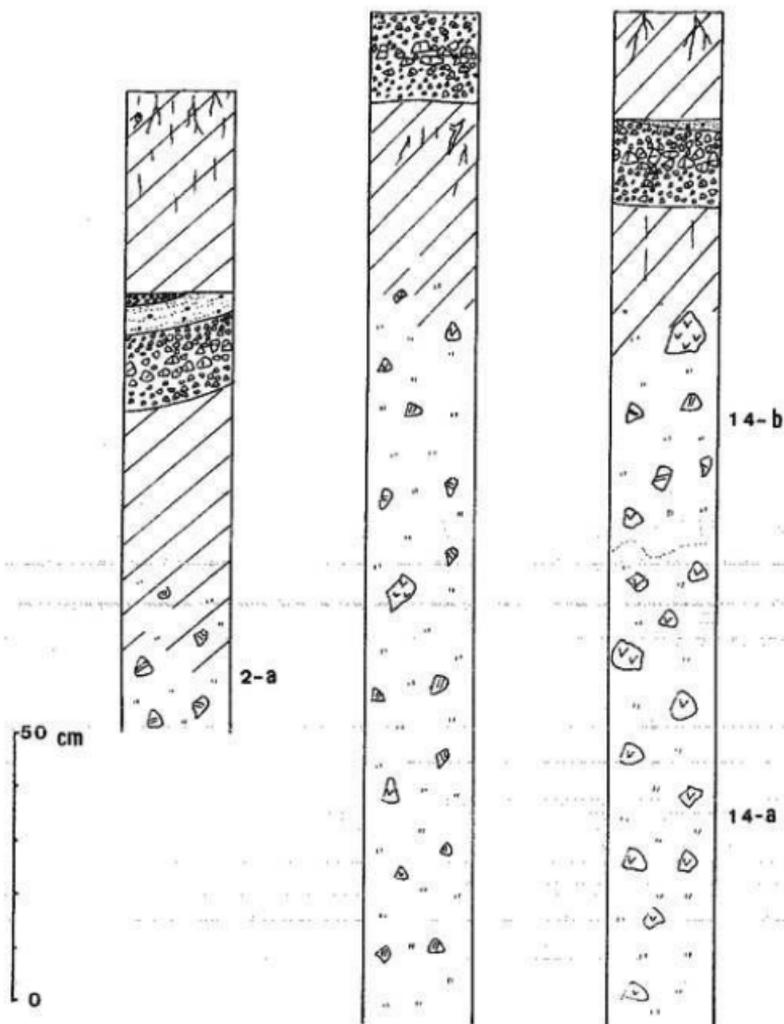
標高 214~216mの鳥越面上に位置するが南端は225mほどの丘陵に至る斜面になる。地質は下部が軽石質火山灰層でその上に60~100cmの厚さで黒色腐植土層が漸移的にみられ、この中に降下軽石層が地表から40cmほどのところにはさまれている(第3図A)。下部の軽石質火山灰層は径3~10cmの軽石を不規則に含んでおり、無層理であることから火砕流堆積物と推定される。この軽石についての重鉱物分析結果は鉄鉱物42、単斜輝石19、斜方輝石28、角閃石11%となり鳥越軽石質火山灰層の組成に一致している。また、黒色腐植土層中に含まれる降下軽石層は13cm±の層厚を示し、凹所では灰褐色の風成とみられる二次堆積物を数cmの厚さでともなっている。軽石の大きさは0.1~0.4cmのものが多いが大きいものでは、1.8~5.2cmであり、露頭において大きい順に並べた10個についての平均は3.0cmを得た。この降下軽石層は、層相黒色腐植土層との関係から見て大湯軽石質火山礫層(内藤・前出)に対比できる。

## (3) 大袋I遺跡

標高 231~235mの開上面上に位置するが、西側に明瞭な段丘崖で標高245~248mの鳥越面も発達している。いずれも極めて平坦な段丘面であり、原面をよく保存している。

地質は、乳白色の基質中に0.3~5cm大の安山岩質角礫や1~5cm大の黄褐色軽石を不規則に含んだ火山灰層と、その上位に重なる80~100cmの厚さの黒色腐植土層からなっており、後者の地表面から30cm位のところには厚さ17~35cmの軽石層がはさまれている(第3図B)。この軽石層は中央部で粒径が大きくなる傾向を示し、空隙が多くくずれやすい。また大きい軽石10個についての平均粒径は4.2cmとなり、はりま館遺跡の3.3cm、横館遺跡の3.0cmより大きい値を示す。層相から見てこの軽石層は大湯軽石質火山礫層に対比される。

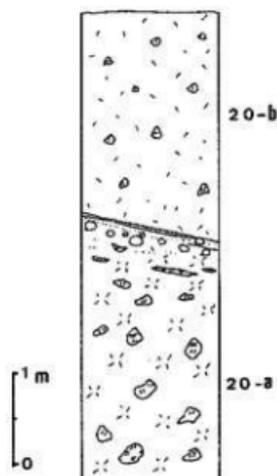
一方、下部の軽石質火山灰層についてであるが、これについては遺跡北部東端の深さ2.3mの掘削点から2試料(第3図C)、遺跡に登る道路わきの崖(標高220m付近)の無層理軽石層から1試料、および鳥越面に登る途中の道路わきの崖から1試料(標高240m付近)をそれぞれ採集し、軽石について重鉱物組成を求めてみた(第2表)。その結果はいずれも角閃石を7



第3図 柱状図

～17%含んでおり、鳥越軽石質火山灰層に一致する組成であることを示している。

ところで、本遺跡に登る坂道の最も低い部分にやや大きい露頭が見られるが、そこでは下位に20～25cm径の軽石を含む火砕流的な火山灰層があり、上位には5～10cm径の軽石を含む同様の火山灰層が累積している(第4図)。両者の境界面はゆるく南に傾斜しており、境界面から数10cm下部には10～20cm径の河床性の礫円礫が含まれている。また特記すべき点として、下位の火山灰層の軽石が境界面から1mほど下部において部分的にレンズ状に引きのばされた形を示すことがあげられる(最大でたて：横が1：5)。このことは下位の火山灰層が堆積した当時、軽石を引きのばすだけの温度と荷重が部分的にせよあったことを示している。なお重鉱物組成は下位の火山灰層が角閃石を含まず単斜輝石が割合多い組成を示す反面(第2表20-A)、上位の火山灰層は角閃石を含む特徴を示す(第2表20-B)。これらの結果と地形面との関係からみて下位と上位の火山灰層は、内藤(1966)の高市軽石質火山灰層、鳥越軽石質火山灰層にそれぞれ対比することができる。



第4図 柱状図

文 献

- 秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・十和田湖  
 秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・花輪  
 秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・大館  
 秋田県(1973)：秋田県総合地質図幅・碓ヶ関  
 内藤博夫(1966)：秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形、地理学評論、V 39、  
 P. 463-484  
 内藤博夫(1970)：秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史、地理学評論、V 43、P.  
 594-606  
 中川久夫、ほか(1972)：十和田火山発達史概要、東北大地質古生物研報、No.73、P. 7

## 遺跡の立地と環境

小坂地区の路線上の遺跡は、湖と麓山の町として知られる小坂町に所在する。小坂町は、秋田県の北東部に位置し、町の北辺は青森県と接する。秋田県と青森県にまたがる国立公園十和田湖は、町の北東部に位置する。

秋田県の北部を西流する米代川の流域には、上流から下流にむかって、鹿角・大館・鷹巣の3盆地が形成されている。小坂町は鹿角盆地の最北端に位置する。鹿角盆地の北側は白神山地に、西側は高森山地に、東側は奥羽山脈に、それぞれ囲まれている。鹿角盆地の北部を、小坂川が南流する。小坂川は、支流である相内川・古遊部川・砂子沢川・荒川川の水を集め、米代川と合流する。

小坂川の右・左岸には、段丘地形が認められる。標高は200～255mであり、鳥越面・関上<sup>(注1)</sup>面に相当する。小坂川沿いには、狭小な沖積地が形成されている。

明治期に飛躍的な発展をとげた小坂麓山は、多大な利益を得る一方で、山野を不毛化するという弊害を周辺地域に与えた。排煙のなかに含まれる亜硫酸ガスが草木を枯死させたのである。現在は、戦後の植林の努力で、かなり緑を回復しているが、十和田火山を給源とする火山灰層の露出している地域を、随所に見ることができる。

小坂地区の歴史の確実な上限は、縄文時代前期からであると考えられている<sup>(注2)</sup>。この時期の遺跡としては、下大谷地・元山・内の岱・鶉・一ツ森・大地・荒川遺跡等が知られている。これらの遺跡からは、円筒下層式土器が出土しており、東北地方北部から北海道南部に形成された円筒土器文化圏に属することが知られる。小坂川右岸の一ツ森遺跡と左岸の元山・下大谷地遺跡からは、円筒下層A式土器が出土する。また、右岸の大地遺跡と左岸の内の岱遺跡からは円筒下層C式土器が出土している。それぞれ、土器文様が類似していることから、小坂川をはさんで、右岸と左岸の交流ないしは移動があったものと考えられる。

縄文時代中期の遺跡は、寺の沢・下大谷地・二夕渡・鶉・手紙坂・松森遺跡等である。中期に主体をなす土器は、円筒上層式土器であるが、鶉遺跡では大木式土器も出土しており、東北地方南部の影響を受けるようになる。二夕渡遺跡からは、北陸地方の土器が出土している。秋田県内における北陸地方の土器は、日本海沿岸や子吉川・雄物川・米代川の下流域で出土している。二夕渡遺跡出土の土器は、日本海から、米代川を上り、米代川支流である荒川川に入り、搬入されたものであろう。

縄文時代後期の遺跡は、松木沢・内の岱・牛馬長根・館野・大生乎・下大谷地杉沢・寺上・下大谷地内の岱・大地遺跡等である。いずれも、後期前葉の十数内I式土器が出土している。後期の遺跡のなかで、もっとも注目されるのは、下大谷地杉沢遺跡<sup>(注3)</sup>の組石群である。組石の周

岡からは土壌が検出され、土壌底面に敷かれた粘土・火山灰や副葬品から、墓塚とする結論が出された。大湯環状列石を代表とする類似遺構は、祭祀説と墳墓説があるが、下大谷地杉沢遺跡の発掘調査結果は、墳墓説が有力であることを示唆してくれた。小坂町には、配石の一部と考えられる塚が露出している場所がかなりあり、今後の学術調査が期待される。

縄文時代晩期の遺跡は、館野・下大谷地・寺の沢・大地遺跡等があり、大洞BC-A式の土器を出土する。

縄文時代は、狩猟・採集を主体とする文化であると考えられている。小坂川の兩岸の段丘面は、縄文人の本拠地であり、狩猟・採集の場であったと考えられる。

弥生時代の遺跡としては、尾樽部・砂山・下大谷地・曙台・寺の沢・火薬庫東方・からみ山・内の岱等の遺跡が知られている。これらの遺跡からは、弥生時代中期や後期に編年されている田舎館式及び天玉山式期の土器のほか、北海道に濃密に分布する後北式土器が出土している。

昭和56年に、青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡<sup>(註4)</sup>から弥生時代の水田跡が発見され、東北地方北部においても稲作農耕の存在が確実となった。垂柳遺跡は低地に存在する遺跡であり、明らかに稲作を目的に設定された集落であると考えられる。小坂地区の弥生時代の遺跡は、いずれも段丘上に立地しており、稲作農耕の可能性は薄いものと考えられる。後北式土器を使用した人々の文化は、狩猟・採集を主体とするといわれる。津軽海峡を渡り、青森県を通過して、小坂地区にきたものであろう。

古代の遺跡としては、牛馬長根II・つつじが岱遺跡が知られているが、実態は不明である。

中世の館跡としては、八幡館・小坂館・白長根館・火地館・荒川館・湯川館・台作館・横館・館平館が知られている<sup>(註5)</sup>。近世初期の成立とみられている『鹿角由來記』には、大地村・小坂村・湯川村・荒川村・八幡館村等の村々が登場する<sup>(註6)</sup>。小坂地区の主な集落は、中世末期には成立していたものと考えられる。

(註1) 内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形」『地理学評論 第39巻第7号』1966年

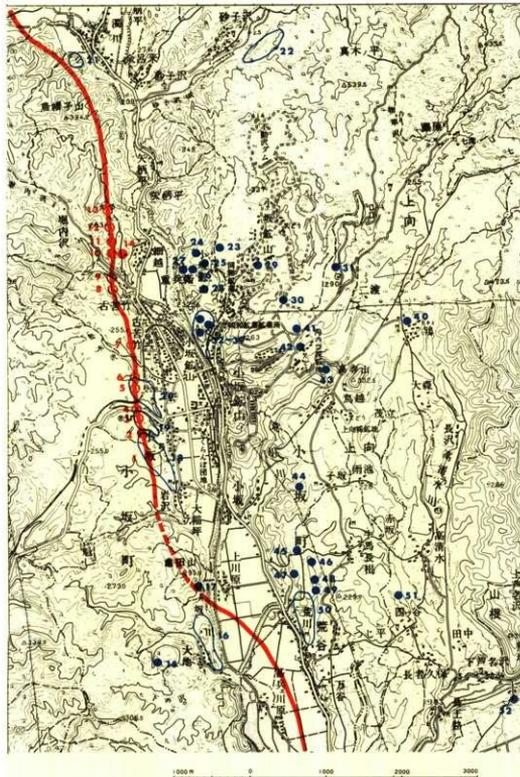
(註2) 安保彰「小坂のあけぼの」『小坂町史』1975年

(註3) 小坂町教育委員会・小坂環状列石調査団『小坂環状列石墳集』1969年

(註4) 青森県立郷土館『弥生時代の青森』1982年

(註5) 秋田県教育委員会『中世城館』1981年

(註6) 鹿角市『鹿角市史』1982年



第5図 東北縦貫自動車道路線上の遺跡と周辺遺跡（小坂地区）

### 小坂地区・遺跡一覧

番号	遺跡名	遺構・遺物	番号	遺跡名	遺構・遺物
1	はりま館	竪穴住居跡・フラスコ状ヒット・縄文土器（前・晩）	31	西ノ原木馬	弥生土器（田舎館式・天王山式）粘練車アメリ型石鐮
2	橋 館	フラスコ状ヒット・縄文土器・石器・弥生土器（小坂×式）	32	下大谷地Ⅰ	縄文土器（前期）・石器
3	館平館Ⅰ		33	下大谷地Ⅱ	縄文土器（中期）
4	館平館Ⅱ		34	下大谷地Ⅲ	縄文土器（後期）・土偶
5	白長根館Ⅰ		35	下大谷地Ⅳ	縄文土器（晩期）
6	白長根館Ⅱ		36	下大谷地Ⅴ	弥生土器（天王山式?）
7	近 森	縄文土器（晩期）	37	砂 山Ⅰ	弥生土器
8	道合Ⅰ	石靴	38	砂 山Ⅱ	土師器
9	道合Ⅱ	縄文土器	39	小坂 館	
10	大 信Ⅰ	丁ビット・土埴・縄文土器・弥生土器	40	雉	縄文土器（上層土層C・D式）・青電形石器
11	大 信Ⅱ	土埴・縄文土器	41	一の 渡	伊勢・縄文土器（後期）
12	大 信Ⅲ	縄文土器・弥生土器（後北C式）	42	櫻 谷	弥生土器（後北C式古）
13	四ノ原 石片		43	一つ 森	縄文土器（大木7a式・上層土層式）
14	大 信Ⅳ	竪穴住居跡・縄文土器（円筒下層Ⅱ式）	44	大生手	縄文土器（後期）
15	中 の 崎	縄文土器（中期）	45	手紙坂	縄文土器（上層土層Ⅱ式）・土偶
16	大 地 館		46	つづしがら	土 師 器（柳文系）
17	大 地	縄文土器（後期）・石器・土偶	47	松 森	縄文土器（円筒下層Ⅱ式）
18	橋 館		48	牛馬白根Ⅰ	縄文土器（後期）
19	館平 館		49	牛馬白根Ⅱ	土 師 器
20	白長根館		50	坂 川 館	
21	宮川 館		51	四ッ谷	弥生土器
22	八 幡 館		52	坂 の 上	弥生土器
23	小坂前山 縄文土器	縄文土器（後期）・四石			
24	太 平 池 縄文土器	縄文土器（後期）			
25	寺の沢Ⅰ	縄文土器（晩期）・石剣・有孔石製品			
26	寺の沢Ⅱ	竪穴住居跡、縄文土器（後・晩期）			
27	小坂前山 利石沢遺跡	土埴・縄文土器（後期）			
28	下大谷地 縄文土器	縄文土器（後期）			
29	元 山	縄文土器（前期）・石器			
30	内ノ原館Ⅱ	縄文土器（前期）・岩偶・石器			

# はりま館遺跡

遺跡番号	No.1
所在地	鹿角郡小坂町小坂字下上ノ山37番地他
調査期間	昭和57年8月10日～11月20日
発掘調査予定面積	13,920㎡
発掘調査面積	12,608㎡

## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観 (第1・3・4図)

遺跡は鹿角盆地の北端、小坂川右岸にあり、同和鉱業小坂線小坂駅の南西1km、標高200m前後の台地上に位置している。遺跡内はほぼ平拓となっており、北側から南側に緩く傾斜している。標高は北で約204m、南で198mで、その比高差は6mである。西側は標高220~230m前後の台地を形成し、南側では小谷が入り込み舌状を呈している。北側は緩やかな斜面で平坦面をなし、調査区の約100mほど北で急崖となる。遺跡を中心とした平坦面は南北約450m、東西約100~150mの広さがある。

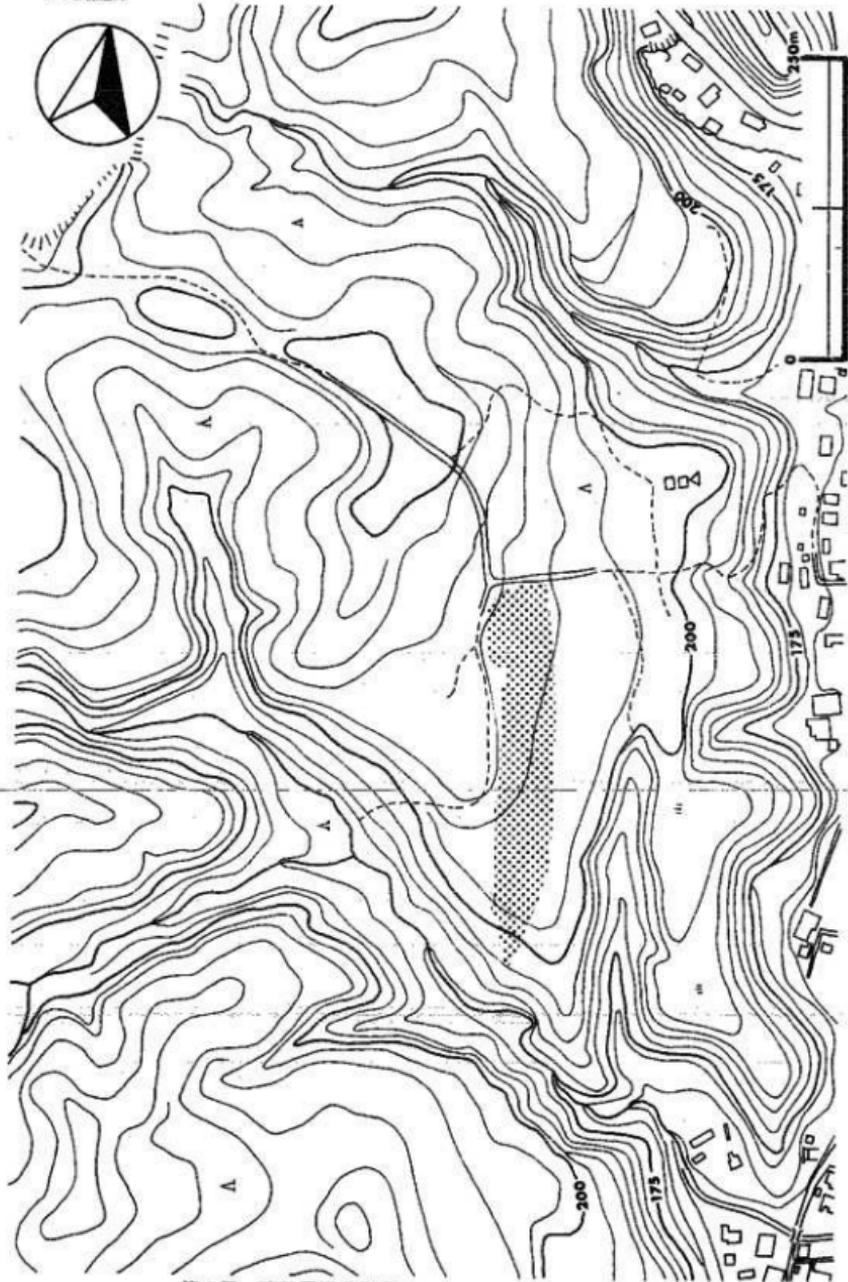
遺跡の東側約100mには谷を隔てて、南北約200m、東西約50~100mの平坦な台地がある。この平坦面を通称「はりま館」と呼んでいる。この台地は、今回の調査対象となった平坦面とは本来地続きであったものが、南北に入り込んだ浸食谷により2つの台地に区切られたものと思われる。

本遺跡の基本層位は、第I層(表土)から第VI層(ロームの漸移層)までである。第III層は十和田火山起源の火山灰層で、厚さ10~15cmで、遺跡全体を覆っている。南半分は緩斜面となっているためか、層の厚さは一定でなく、層をなしていない場所もあった。平安時代の住居跡は第III層上面を掘り込んで構築されている。第IV層は、チョコレート色を呈す弥生時代の遺物包含層であるが、層が薄く層位毎に明確に遺物の採り上げはできなかった。第V層は縄文時代の遺物包含層である。

本遺跡の南寄りの西側斜面で、大湯軽石層の厚い堆積が観察された(第4図)。凹地では45cmとかなり厚く、西側にいくほど薄くなる。第1層・第6層・第7層(スクリーントーン)は大湯軽石(径3~40mm)が多量に混入している。他の層はいずれも軽石の混入はなく、粘土のようにすべすべしている。第1~第6層とも粘性はないが、しまりは非常に良いのが特徴である。上記のように大湯軽石が厚く堆積している箇所は、調査区全体には見られず、大きく凹んだ他の2地点で観察されたにすぎない。

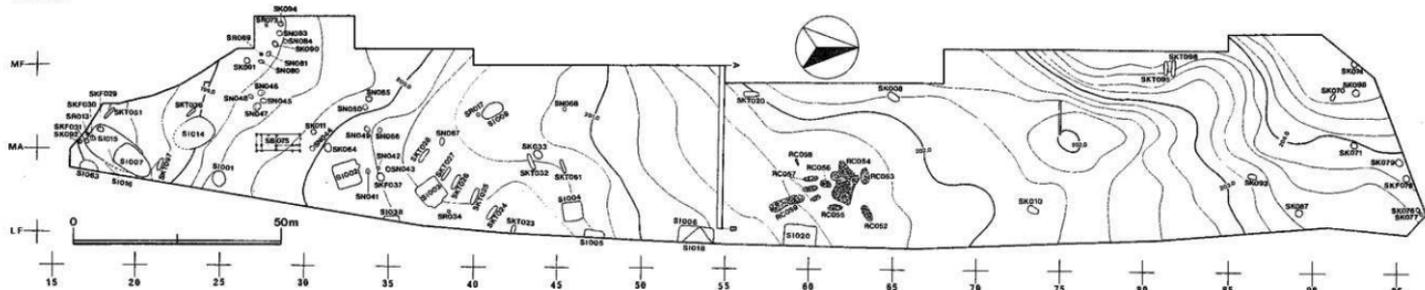
### 第2節 調査の方法

日本道路公団が設置した、東北縦貫自動車道予定地内の中心杭S T A 95+00から磁北を求め

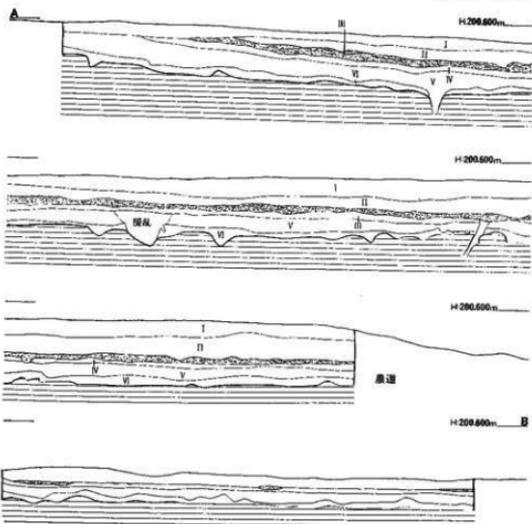


第1図 遺跡周辺地形図

(スクリーントーン——今回の調査対象範囲)

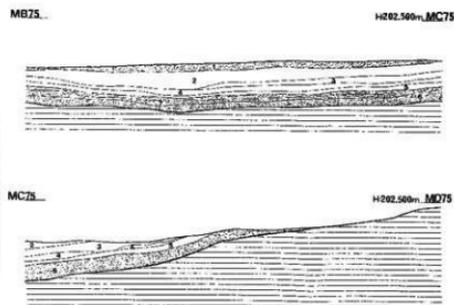


第2図 遺構配置図



第3図 基本土層図

層	土質	説明
I	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
II	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
III	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
IV	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
V	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
VI	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
VII	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
VIII	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
IX	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
X	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物



層	土質	説明
1	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
2	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
3	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
4	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
5	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
6	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物
7	黄褐色土	表層土、耕作層、堆積物

第4図 大溝軽石地横図 (MB75~MC75グリッド)

それを基線にして東西・南北に4×4mの方眼杭を打ち、グリッドを設定した。グリッドはS T A 95+00をMA 50として、南北に2桁の算用数字、東西にアルファベット2文字を付し、一桁目はA～J(40m)の繰り返しで二桁目は40m行く毎に変わる。グリッドは南東隅をその呼称とした。

土層の観察は調査に先立ち、4月の予備調査時にトレンチ(55ライン付近)を掘り、遺跡の基本土層の把握につとめた。前述したように本遺跡の基本土層は、第Ⅵ層の漸移層までである。第Ⅲ層目は大湯軽石層で、平安時代に降下したと言われており、この上に中世の遺構・遺物の存在が予測されたため、第Ⅲ層上面の精査を行った。第Ⅳ層(赤黒色土)は弥生時代の遺物包含層である事が、本年度調査した大岱Ⅰ遺跡(No10)や、横館遺跡(No2)で確認されている。本遺跡では、65ラインより北で弥生式土器が出土したが、層の厚さは一定でなく、層が薄かったり層をなしていない所もあり、層位的に明確に把握はできなかった。これは南西に緩く傾斜しているので、雨等によって流失した為と思われる。

第Ⅴ層は縄文時代の遺物包含層であるが、遺構のプランは主に第Ⅵ層か地山上面でなされた。

### 第3節 調査経過

調査は昭和57年8月10日から11月20日まで行ったが、それに先立ち、重機による表土除去、グリッド杭打設をした。

調査経過は以下の通りである。

- 8月10日 午前、作業員に調査の内容と作業上の諸注意について説明する。午後、大湯軽石層上面の精査を北端部より開始。
- 8月18日 S I 001住居跡のプランを確認。南端部の大湯軽石層上面の精査開始。
- 8月21日 平安時代の住居跡5軒を確認。
- 8月25日 大湯軽石層上面の精査終了。
- 9月2日 L F 38グリッドで縄文時代前期の一括土器出土。S I 001住居跡の精査開始。
- 9月3日 S I 002住居跡の精査開始。大湯軽石層を掘り込んで構築されている事が判明した。
- 9月4日 S I 001住居跡の精査が続く。
- 9月7日 小坂高校 安保彰氏、生徒一行来跡。
- 9月10日 地元、小坂町文化財保護審議委員7名来跡。
- 9月16日 S I 004竪穴住居跡の精査開始。
- 9月27日 S I 003竪穴住居跡は東側に張り出し部を持っている事が判明。

- 9月29日 S I 007・014 住居跡を確認。
- 10月1日 S I 006住居跡は2軒の重複である事が判明。
- 10月6日 MD 56グリッドでS K T 020Tピットを検出。小坂町上川原老人クラブ来跡。
- 10月8日 S I 007住居跡は3軒の重複である事が判明。
- 10月16日 S K T 28Tピット精査開始。Tピットは北東方向にほぼ等間隔で6基が列をなしている事が判明。
- 10月21日 S I 020堅穴住居跡の精査開始。
- 10月26日 S K F 37フラスコ状ピットを確認。
- 10月28日 小坂町教育長、教育委員一行が来跡。
- 10月29日 遺跡の航空写真撮影。
- 11月5日 焼土遺構の精査開始。
- 11月8日 S R 069焼土遺構を確認。
- 11月9日 国学院大学助教授 小林達雄氏、文化課 高樫泰時氏来跡。
- 11月10日 掘立柱建物跡を確認。
- 11月18日 資・器材の撤収開始。
- 11月19日 遺構の平・断面図の作成を全て完了。
- 11月20日 全ての資器材の撤収を終え、遺跡を後にした。

※註1 秋田県教育委員会 「秋田県の中世城館」 秋田県文化財調査報告書 第86集1981年

## 第2章 調査の記録

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 発見遺構と遺物（第2図）

発見された遺構は、竪穴住居跡7軒、フラスコ状ピット5基、土壇17基、Tピット14基、埋設土器5基、焼土遺構19基である。

#### (1) 竪穴住居跡

##### S1001 竪穴住居跡（第5図）

【位置と確認面】 LI 25グリッドに位置し、地山上面で確認された。

【平面形と規模】 西側のプランは不明だが、不整形円形を呈するものと思われる。長軸3.55m（推定）、短軸2.86mで推定面積8.3㎡である。

【壁・床面】 東側で深さ18cmで、北と南の西寄りでは浅くプランが判然としなくなる。床は全体的に比較的軟かい。

【柱穴】 西と北の壁寄りの中ほどに各1本ずつ、計2本検出された。

【炉】 南東の壁寄りにあり、径約50cmの方形の石囲炉である。中は全面が焼けている。

【その他】 東側の壁寄りに5個の河原石が、わずかに間隔を置いて並べられ、その中に薄い焼土の堆積が観察された。

【出土遺物】 羽状縄文を施文した縄文時代前期の土器片1点が覆土から出土したが、これは住居跡外から流れ込んだものと判断される。

壁溝は検出されなかった。

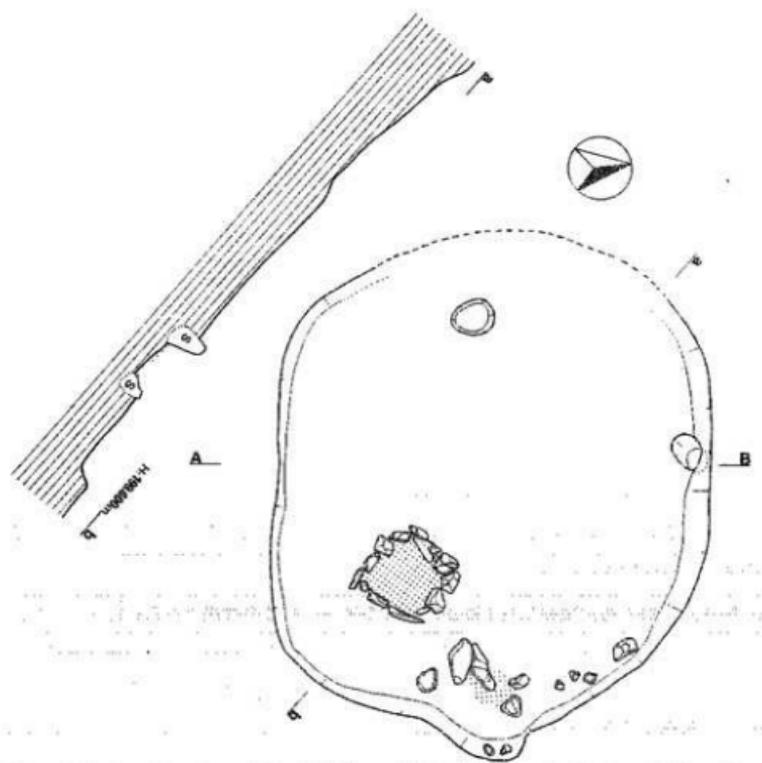
##### S1007 竪穴住居跡（第6図）

【位置と確認面】 南側の舌状台地の端部 LJ 19、20グリッドに位置し、地山上面で確認された。

【重複】 S1015 竪穴住居跡を一部切って構築されている。

【平面形と規模】 南壁は直線的で、北壁は半円状であり、全体的には所謂舟形を呈する。規模は、長軸9.40m（推定）、短軸6.20mである。全体の面積は50㎡で、ベッド状床面21㎡、土間状床面29㎡である。

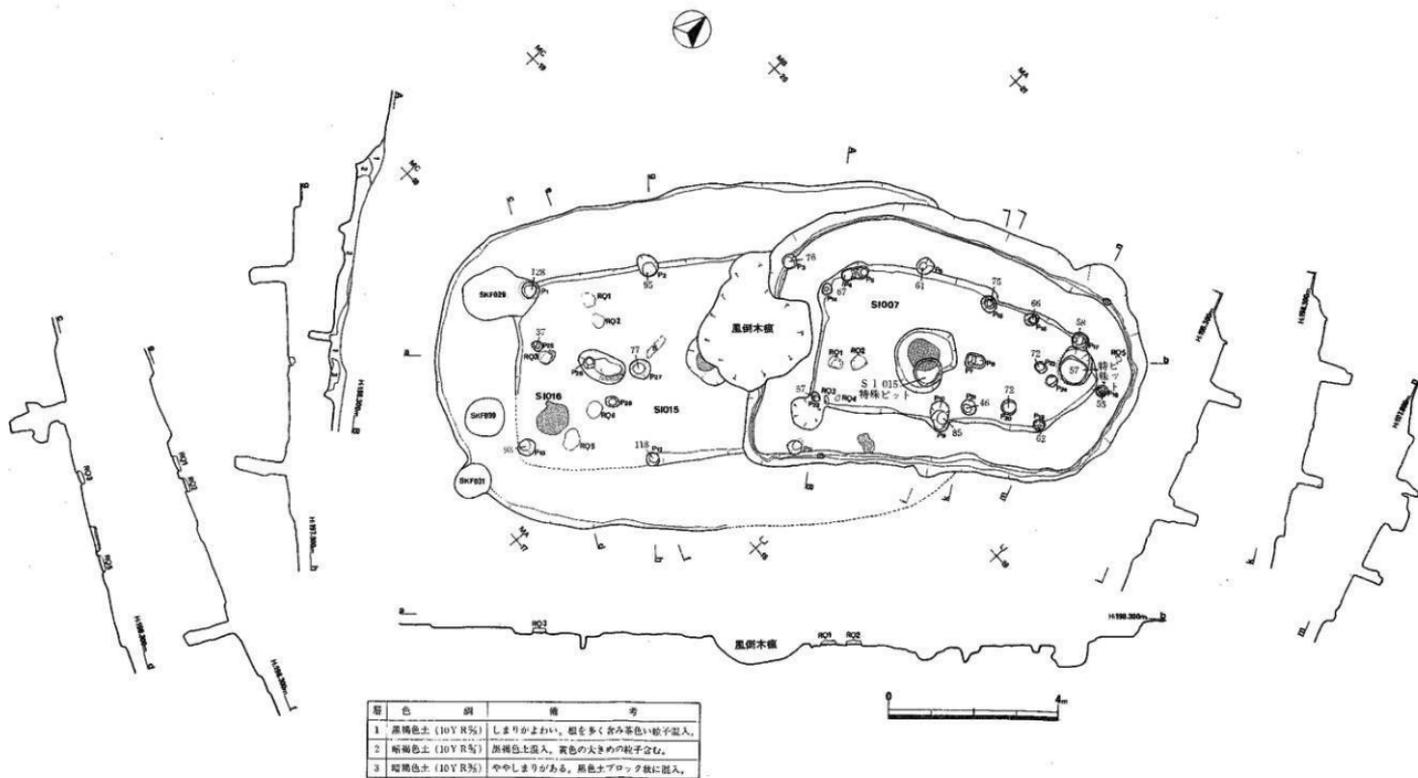
【壁・床面】 北壁が最も深く48.0cmで、南側に行くにつれて浅くなり南壁で9.7cmである。床面は土間状床面とベッド状床面の2段構造となっている。壁際のベッド状床面は幅90～100cm



層位	色 調	備 考
1	黒褐色土 (10Y R5/2)	粘性中, しまり中, 炭化物混入, 砂粒, 黄褐色土混入。
2	褐色土 (10Y R4/2)	粘性弱, しまりおろい砂粒, 砂を含み, 黄褐色土混入。
3	におい黄褐色土 (10Y R5/2)	粘性弱, しまりおろい, 砂粒混入, 炭化物混入。
4	明黄褐色土 (10Y R6/2)	粘性弱, しまりおろい, 砂地山層。



第5図 SI001 竪穴住居跡・出土遺物



第6図 S1007, 015, 016 竪穴住居跡

で全周する。ベッド状床面と土間状床面の段差は、北側で18.5cm、南側で8cmを計る。ベッド状床面全体には、厚さ2cm前後に地山のローム土を敷き、固めて貼床としている。床面は全体的に平坦で、非常に堅緻である。

〔壁面〕 壁とベッド状床面との境にあり全周する。

〔柱穴〕 S I 015 壁穴住居跡の柱穴も本住居跡の床面にあるが、本住居跡に伴うと思われる柱穴は11本である。主柱穴はP 14～P 17、P 19～P 22と思われるが、P 16、P 20は他の柱穴との間が近すぎる事から、P 23、P 24の関係等を考えあわせれば間仕切りとしての機能を果たしていたのかも知れない。

〔炉〕 住居跡のほぼ中央部の床面で検出された。長軸165cm、短軸125cm、深さ7.5cmで浅い鍋底状を呈する地床炉である。焼土そのものの範囲は長軸80cm、短軸68cmである。東壁の南寄りのベッド状床面で焼土が検出されたが、掘り込みもなく、ロームがわずかに焼けているだけで炉とは考え難い。

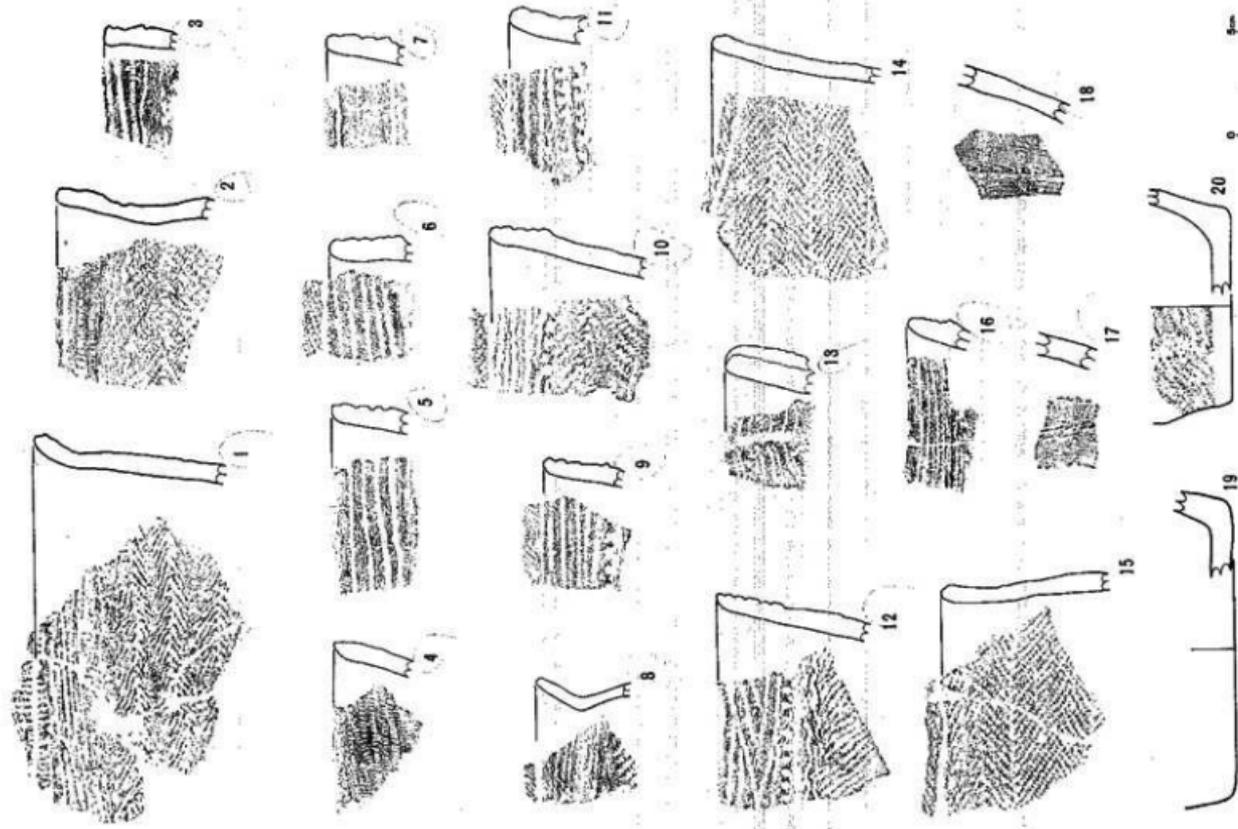
〔その他〕 北側のベッド状床面と土間状床面との段境には、長軸85cm、短軸76cm、深さ57cmで平面形が円形を呈する特殊ビットが存在する。用途については不明である。

ほとんどの遺物は住居跡が廃棄されて、埋っていく段階で投棄された状況で出土した。

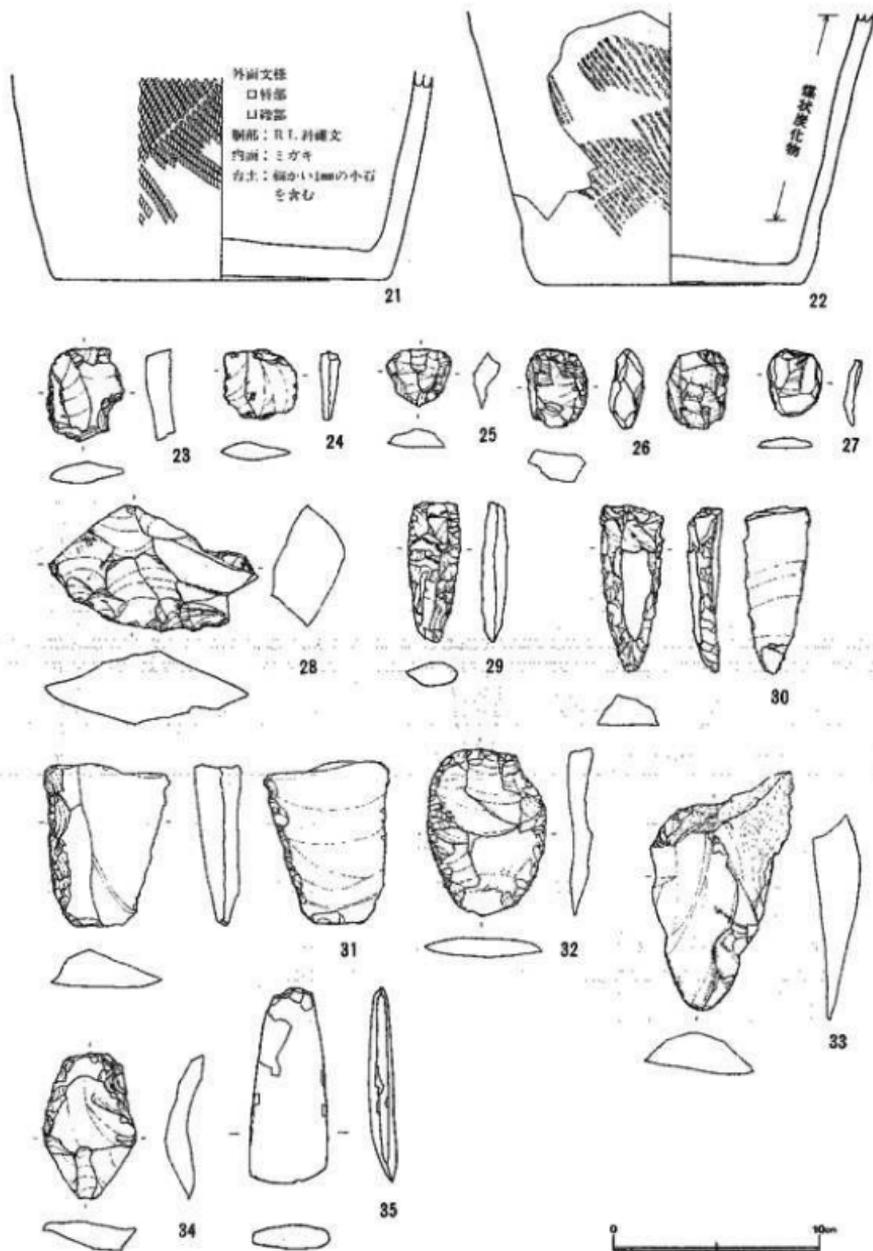
〔出土遺物〕 (第7～10図)

1～13、16は口縁部の破片で文様帯の幅が極めて狭い。1は口頸部でわずかに外反し、口縁部が波状口縁となるもので、口唇部に絡条体圧痕文、その下には平行に4条の絡条体圧痕文、口頸部に2～3条の絡条文を、胴部は結東第1種の羽状縄文を施文している。2～9・12は口縁部に絡条体圧痕文、10、11は側面圧痕を施文し、9～12は口頸部と胴部の境のわずかな隆帯上に刺突文を施す。6・8～11は口唇部に縄文を施す。13は波状口縁を呈すもので、波状口縁の直下に垂下する1条の隆帯を貼付し、その上に絡条体圧痕文を施す。14・15は同一個体で口縁部に羽状縄文、口唇部に縄文を施す。16・17・18は同一個体で、小形の円筒錐形土器であろう。口縁部に縄文の側面圧痕文、その下のわずかな隆帯に刺突文、その下に撚りの細かい木目状捺糸文を施すものである。上記の土器の内面はいずれも研磨され、光沢を有する。

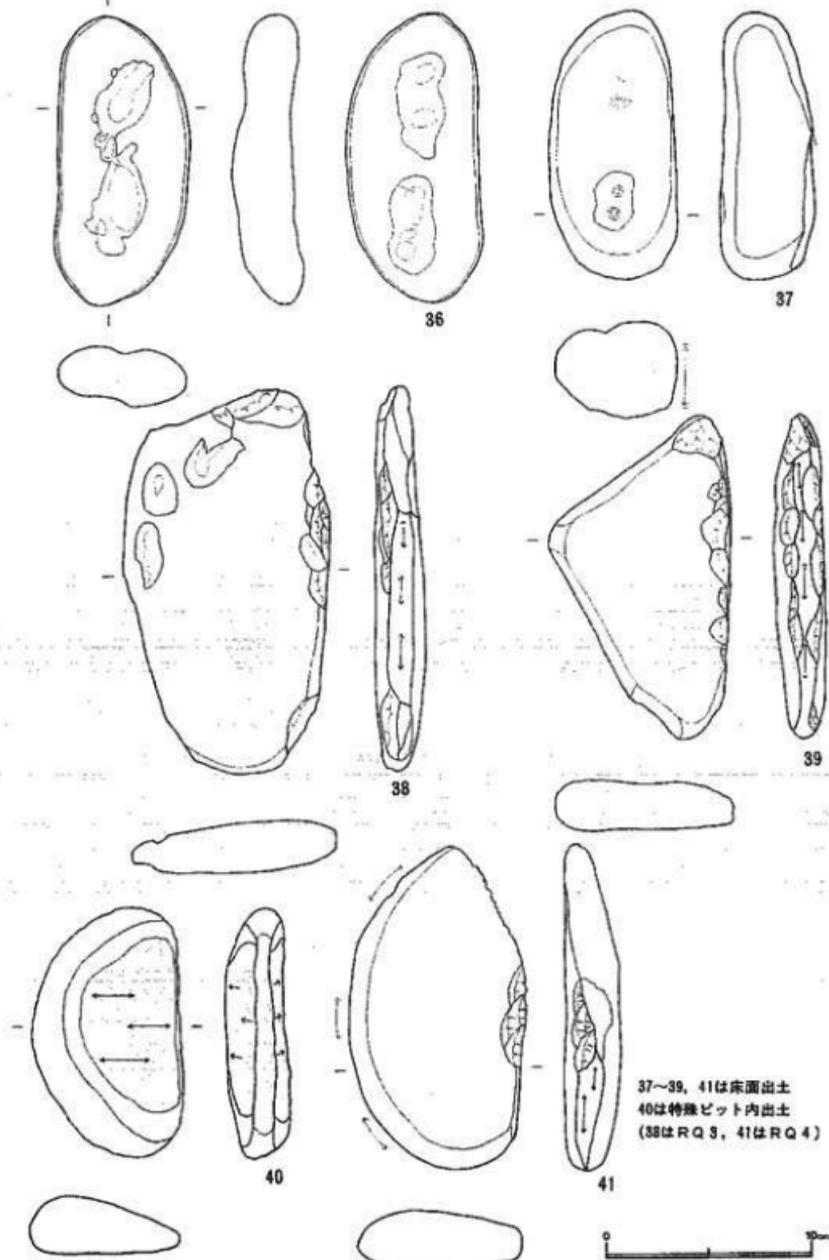
石器は25点出土した。23～28、31～34は不定形石器で、29、30は搔器でいずれも硬質頁岩製である。35は小形の磨製石斧で長さ9.5cm、幅3.7cm、重さ60gで石質は緑色凝灰岩である。床面より出土した。40、43は特殊ビット内出土のもので、40は半円状扁平打製石器、43は磨石で、両側縁に磨り減った痕跡がわずかに認められる。38、41の半円状扁平打製石器と、44、46の白石は、土間状床面の南西隅にセットで出土したものである。38は両側縁が磨り減って先端部は片方が割れているが、もう一方には敲打痕が認められる。41は全周縁が磨り減っており、直線部にその傾向が著しい。石質はいずれも凝灰岩である。44、46の白石は、いずれも中央部が磨



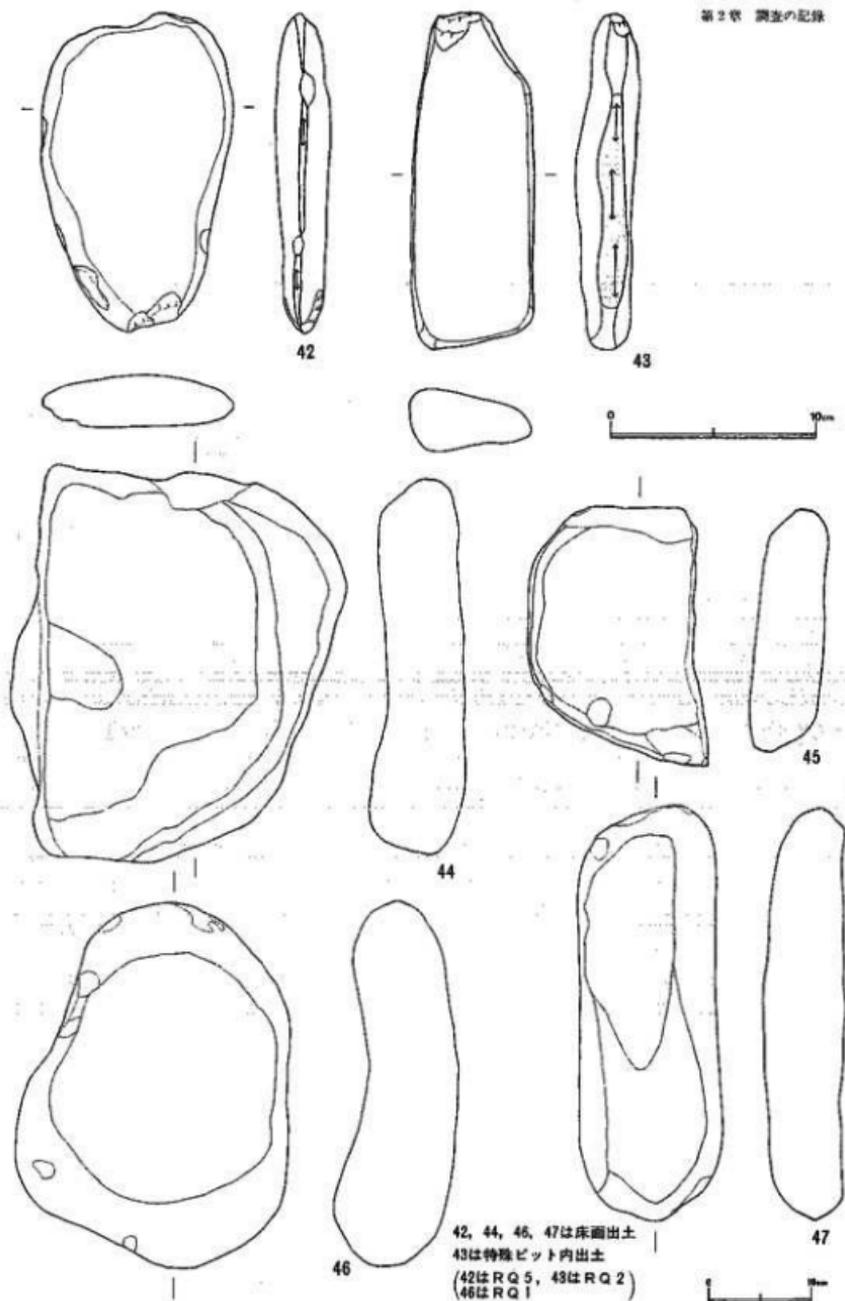
第7图 S1007型穴住居出土瓷器



第8図 SI007 竪穴住戸跡出土遺物



第9図 SI007 竪穴住居跡出土石器



第10図 SI007 竪穴住居跡出土石器

り減って凹んでいる。石質は安山岩である。

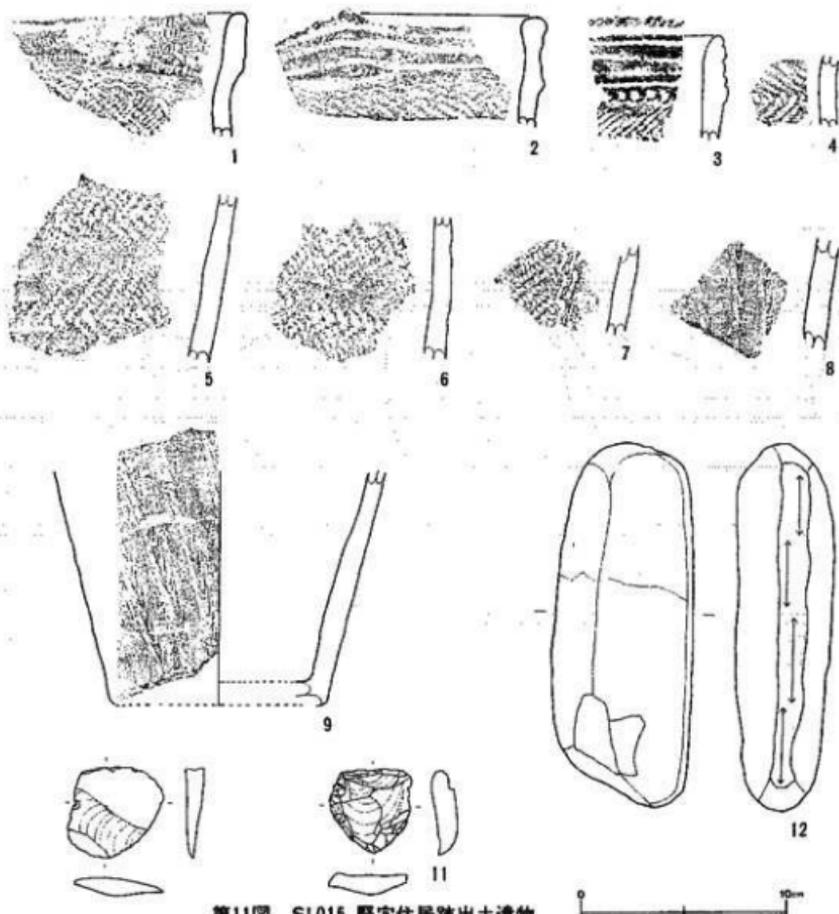
S 1015 竪穴住居跡 (第6図)

〔位置と確認面〕 MA 18・19グリッド付近の地山上面で検出された。

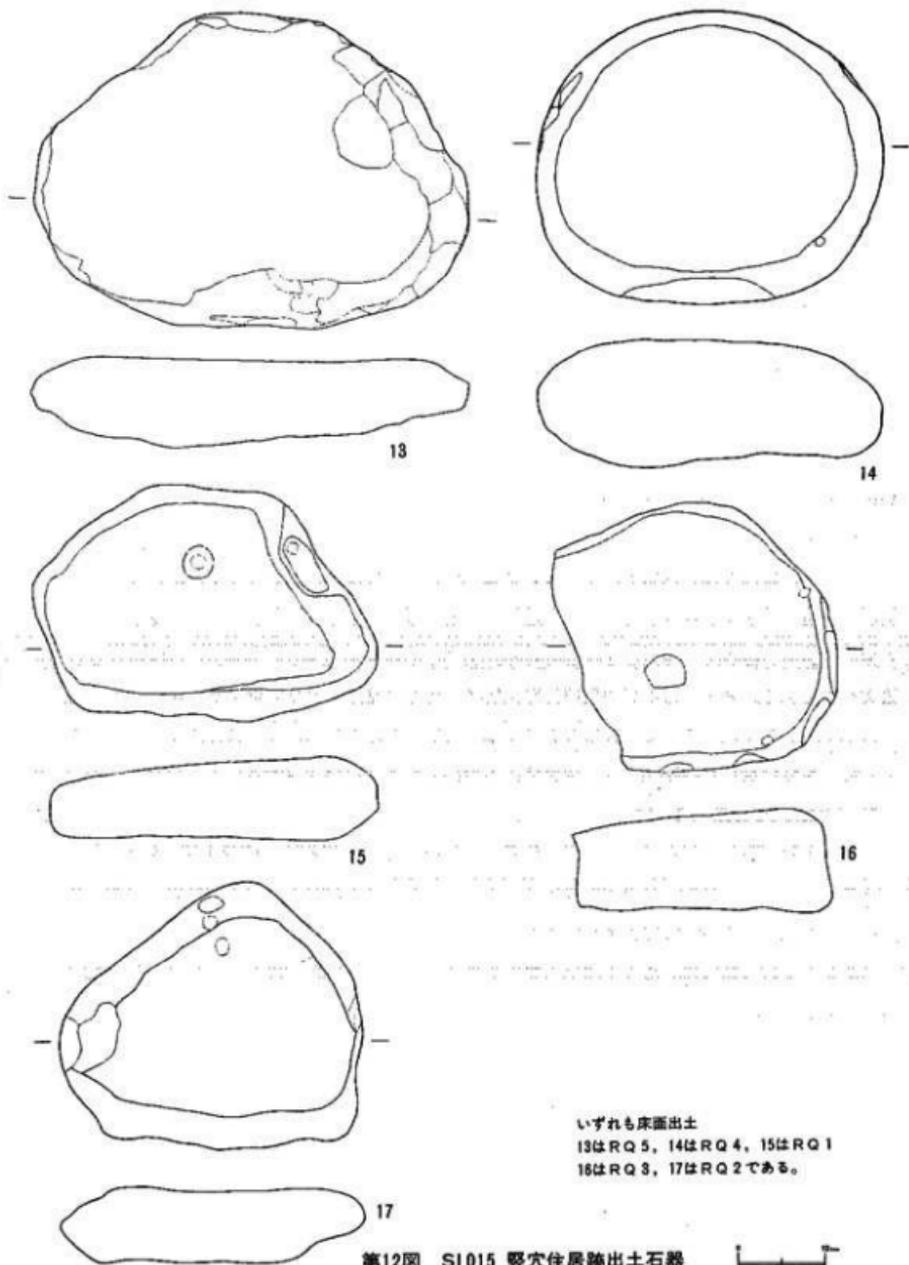
〔重複〕 S I007竪穴住居跡によって切られている。

〔平面形と規模〕 西壁の一部が検出できず、北側がS I007竪穴住居跡との重複で、壊されているため平面形ははっきりしない。しかし、S I007竪穴住居跡の地床炉下の特殊ピットと、土間状床面下で検出されたP 7・P 8は、本住居跡に付随し舟形を呈するものと考えられることから、長軸13.50m、短軸8.00mと推定される。全体の面積は93㎡である。

〔壁・床面〕 西壁で16.0cm、南壁で4.0cmである。床面は、ベッド状床面と土間状床面の



第11図 S I015 竪穴住居跡出土遺物



いずれも床面出土  
 13はRQ5, 14はRQ4, 15はRQ1  
 16はRQ3, 17はRQ2である。

第12図 SI015 竪穴住居跡出土石器



2段構造となっており、その段差は7.5～17.5cmである。ベッド状床面の幅は、100～180cmで全周するものと思われる。床面はいずれも非常に堅緻で、平坦となっている。

〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴〕 主柱穴はP1～P13と考えられる。P4とP5、P7とP8、P9とP10はS1007竪穴住居跡の床面を掘り下げてから検出されたもので、2時期の重複である。部分的に建て替えられたものと考えられる。P27も本住居跡に伴うものであろう。

〔炉〕 住居跡のほぼ中央部で地床炉が検出された。風倒木痕によって半分以上破壊されている。現存部の長さ120cm、深さ10cmで鍋底状を呈し、焼土そのものの範囲は径50cmほどである。土間状床面のRQ3の下と、P26のわきのわずかな凹みの落込み際に焼土が見られるが、炉とはしがたいものである。

〔その他〕 S1007竪穴住居跡の地床炉の下で、特殊ビットを検出した。長軸46cm、短軸32cmの円形を呈し、深さ38cmである。遺物は床面の台石を除き、住居跡が廃棄されて埋ってゆく段階に投棄された状況で出土した。

〔出土遺物〕 (第11・12図)

1・2は口縁部で同一個体である。波状口縁をなし、口縁部には平行な3条の縞条休圧痕文、胴部との境にわずかな隆帯があり、その直下に3条の縞絡文を施している。3は口縁部に縞文の側面圧痕文、隆帯上に刺突文を施している。胎土には繊維が混入している。7は縦に走る縞絡文が見られる。8・9は小形の円筒鉢形土器で、撚りの細かい木目状摺糸文を施文している。内面は研磨され光沢を有する。12は磨石で1側縁に磨った面を持つ。13～17は床面出土の台石である。全体に磨った痕跡があり、中央部に平坦部もしくは凹部を有する。

#### S1016竪穴住居跡 (第6図)

〔位置と確認面〕 MA17グリッドに位置し、S1015竪穴住居跡の土間状床面で検出した。

〔柱穴〕 P25、P26、P28が柱穴と考えられる。この3本の柱穴は、その位置・規模・深さから考えて、S1015竪穴住居跡に付随するものとは考えにくい。

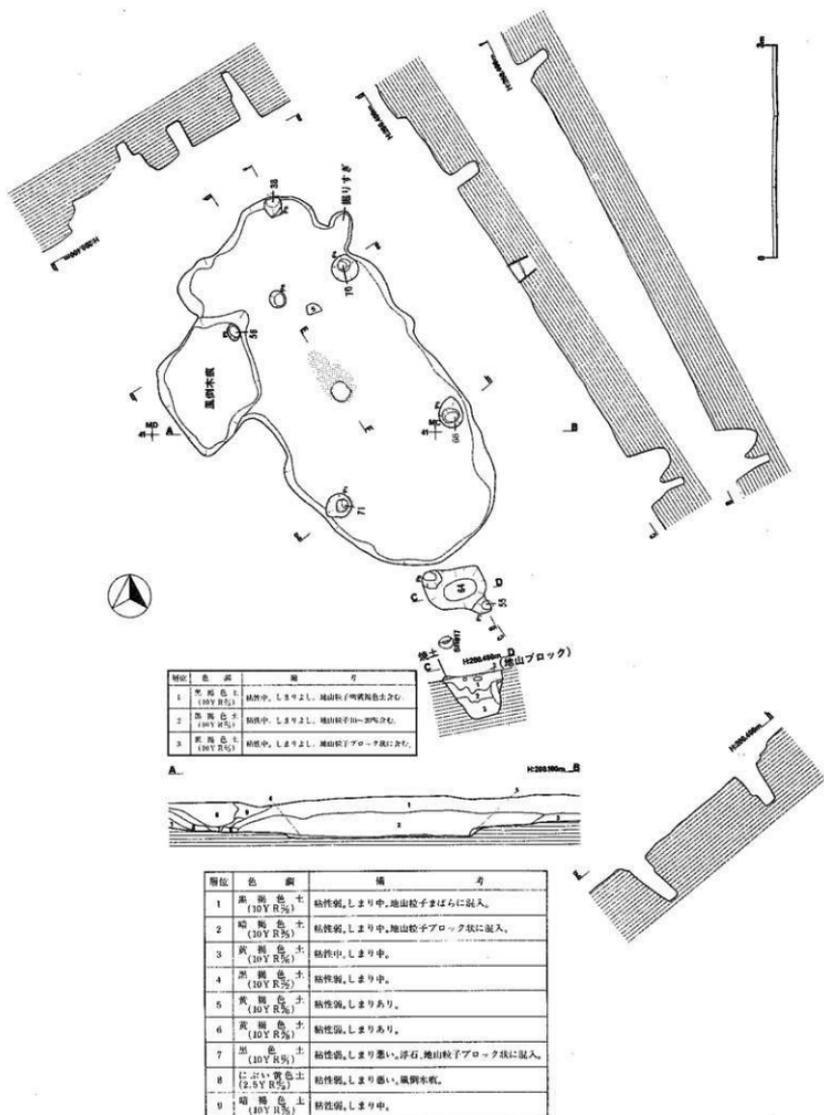
〔炉〕 S1015竪穴住居跡の土間状床面の南東コーナーに、径70cmほどの円形の焼土が10cmほど上で確認された。

〔その他〕 本住居跡は、焼土とその北西を取り囲むP25、P26、P28の3本の柱穴から住居跡と判断したもので、焼土と同レベルであったと思われる床面や壁は確認できなかった。

#### S1009竪穴住居跡 (第13・14図)

〔位置と確認面〕 MC41グリッド付近に位置し、地山上面で検出された。

〔平面形と規模〕 舟形を呈し、長軸5.60m、短軸3.70mで全体の面積は約14㎡である。しかし、平面形、柱穴の配置、南壁の外の特殊ビットの存在、土層断面の観察等から、本住居跡

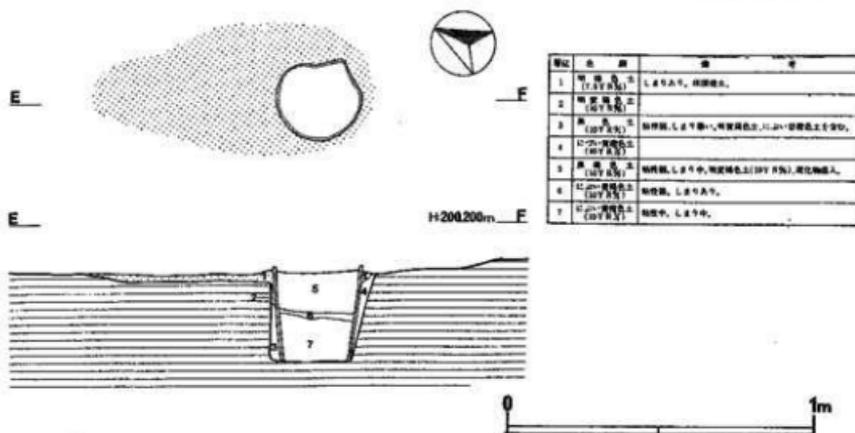


層位	色 調	備 考
1	黒 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまりよし, 地山粒子や炭屑混入多量
2	黒 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまりよし, 地山粒子約10%混入
3	黄 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまりよし, 地山粒子アロップ状に混入



層位	色 調	備 考
1	黒 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまり中, 地山粒子まばらに混入
2	暗 褐色 土 (10Y R 3/2)	粘質砂, しまり中, 地山粒子アロップ状に混入
3	黄 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまり中
4	黒 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまり中
5	黄 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまりあり
6	黄 褐色 土 (10Y R 5/2)	粘質砂, しまりあり
7	黒 色 土 (10Y R 5/1)	粘質砂, しまり悪い, 浮石, 地山粒子アロップ状に混入
8	にぶい 黄 色 土 (2.5Y R 7/2)	粘質砂, しまり悪い, 風動土質
9	暗 褐色 土 (10Y R 3/2)	粘質砂, しまり中

第13図 S1009 墓穴住居跡



第14図 SI009 竪穴住居跡土器埋設炉

の規模は、本来もう少し外側に広いものであったと推定される。

【壁・床面】 壁高は8～26cmで、床面は平坦で非常に堅緻である。東壁の外側は積査時において、比較的堅緻で光沢があり、床面として使用されていたものと考えられる。土層断面図の観察によると、東側の2層（暗褐色土）は、3層（黄褐色土）上面から住居跡を構築した後、廃棄されてからの覆土と思われる。つまり、2層と3層の境目が住居跡の本来の壁にあたり、その西側に幅50～60cmの平坦部があり、中で10～20cmほど低くなり、ベッド状床面と土間状床面の2段構造となっていたと思われる。

【柱穴】 柱穴は6本で特殊ビット周辺のを含むと8本となる。

【炉】 (第14図)

住居跡の中央部に土器が埋設されており、土器の口縁部及びその周辺は加熱を受けて焼けていた。掘方は深さ約30cm、径30cm前後で円形、土器は正立の状態で壁と密着して埋められ、周囲には数cmのすき間があるだけである。底部はない。

【その他】 特殊ビットは長軸90cm、短軸56cmである。

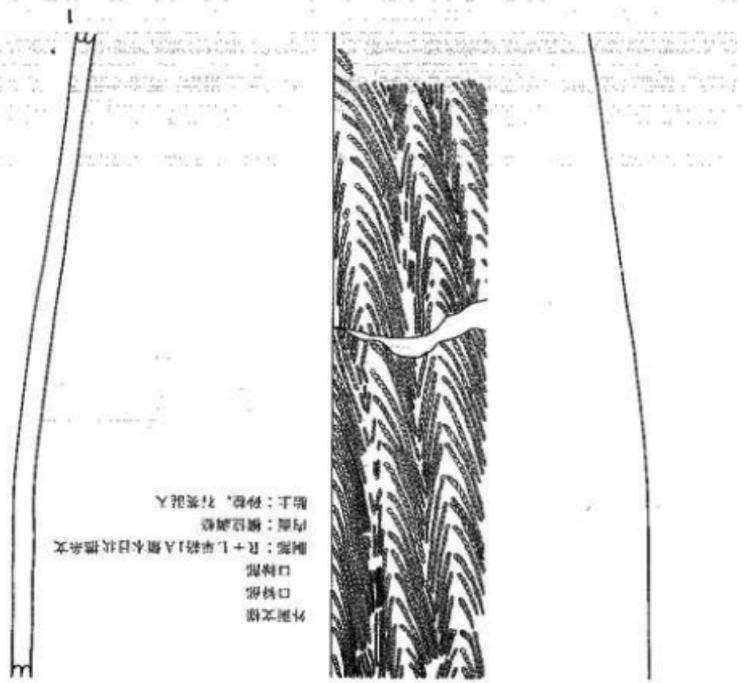
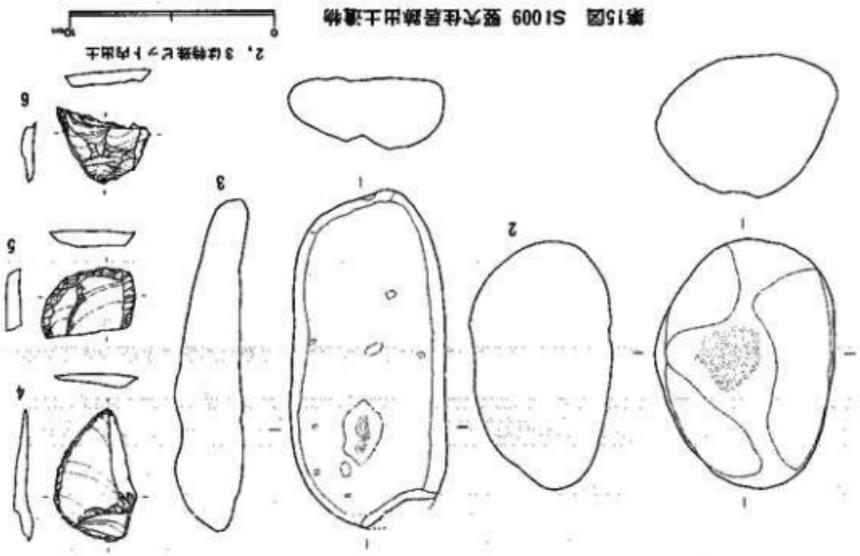
【炉埋設土器】 (第15図1)

口縁部より底部付近まであった土器を1は図上で復元したもので、胴部上半から下半にかけて木目状捲糸文を施している。口縁部は文様帯の幅はかなり狭く、胴部下半では緩やかなふくらみを持つ。胎土にはわずかに繊維を含む。

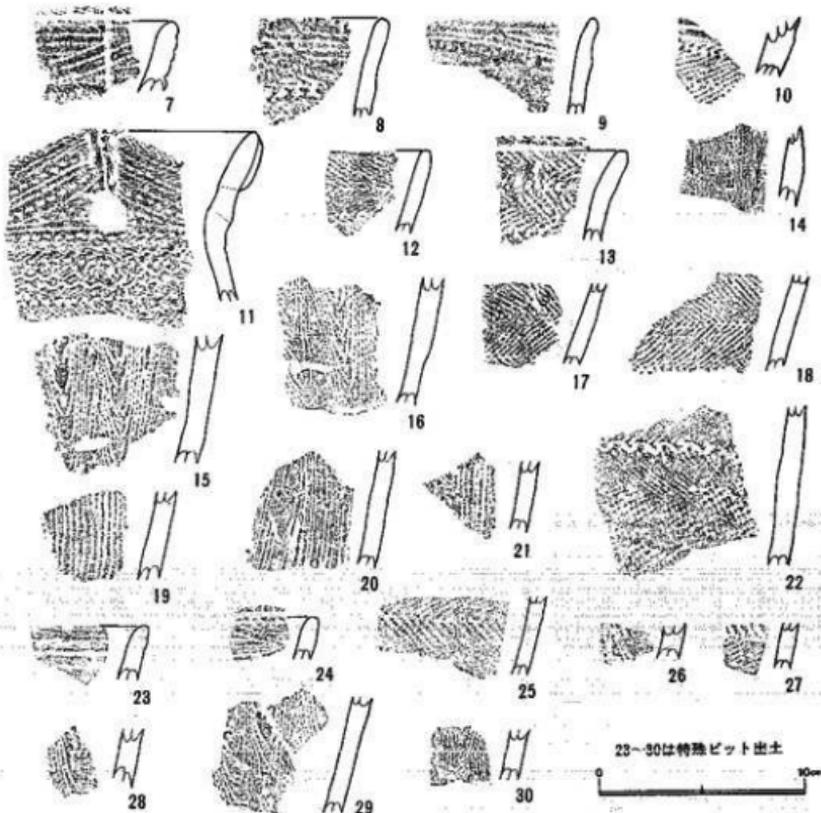
【出土遺物】 (第15・16図)

7～12は口縁部の破片である。7～9は口縁部の文様帯の幅がきわめて狭い。11は波状口縁

第15圖 S1009 堅穴住居跡出土遺物



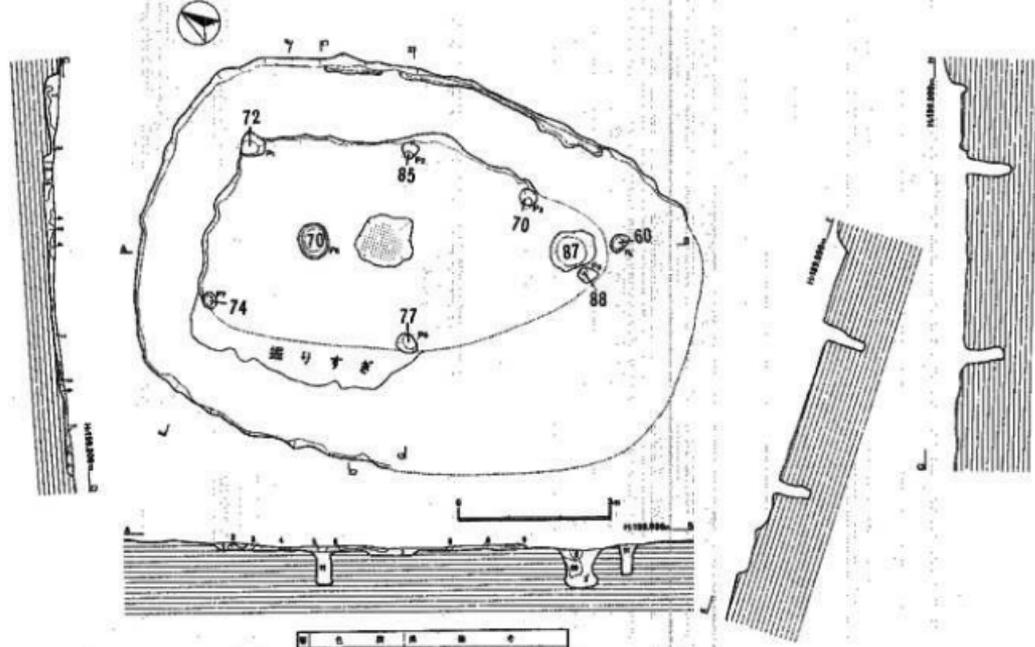
外面文様  
口縁部  
口縁部  
胴部：凡し、甲筋より日本式摺糸文  
内面：横道調紋  
胎土：砂粒、石灰混入



第16図 SI009 竪穴住居跡出土土器

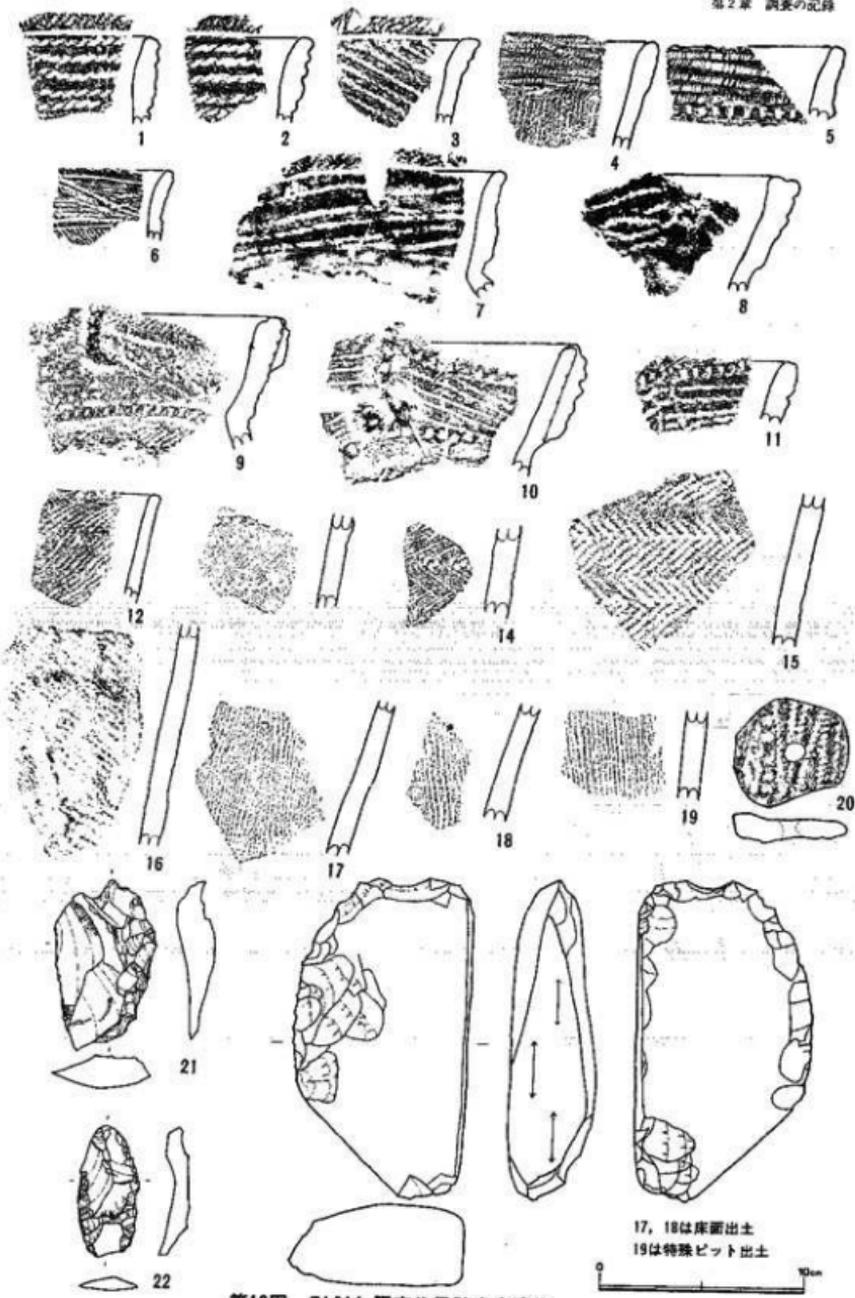
を呈するもので、口頸部が「く」の字状に外反し、波頂部から縦に1条の隆帯が垂下し、隆帯上に縄の側面圧痕、その直下に円形の穴を穿つ。口唇部に縄の側面圧痕文、口縁部は縄の側面圧痕文と刺突文、頸部のわずかな隆帯上に刺突文、胴部上半は斜縄文の上に刺突文と綾絡文を施している。内面は研磨され、胎土に繊維は含まない。15～16は木目状摺糸文を施している。9・10は同一個体である。20・21は胴部で、条痕文を施している。23～30は特殊ビット内より出土したものである。23・24は口縁部の狭い文様帯に、絡条体圧痕文を施している。28～30は同一個体で、木目状摺糸文を施している。

1・2は凹石で、1は表裏に凹みを持ち、全体に磨いた痕跡があり、先端部に敲打痕が認められる。他に搔器1点、削器2点が出土した。



順	名	材	質	備	考
1	掘りすぎ (70 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
2	掘りすぎ (72 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
3	掘りすぎ (77 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
4	掘りすぎ (85 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
5	掘りすぎ (87 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
6	掘りすぎ (88 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
7	掘りすぎ (90 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
8	掘りすぎ (90 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
9	掘りすぎ (90 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
10	掘りすぎ (90 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ
11	掘りすぎ (90 Y 形)	褐色土	アール状の凹み	掘りすぎ	掘りすぎ

第17図 S1014 掘りすぎ



第18図 SI014 壘穴住居跡出土遺物

S1014 竪穴住居跡 (第17図)

〔位置と確認面〕 MA 23、MB 23グリッドに位置し、地山上面で検出された。

〔平面形と規模〕 南側のプランははっきりしないが、舟形を呈するものと思われる。推定で長軸10.80m、短軸8.10mで、全体の面積は72㎡である。

〔壁・床面〕 北壁は25cmで南側にいくにつれて浅くなり、南壁は判然としない。床面は2段構造で、ベッド状床面の幅は100～120cmで、土間状床面との段差は9～20cmである。床面は平坦で比較的堅い。

〔壁溝〕 東壁のベッド状床面に部分的に認められたが、他にはない。

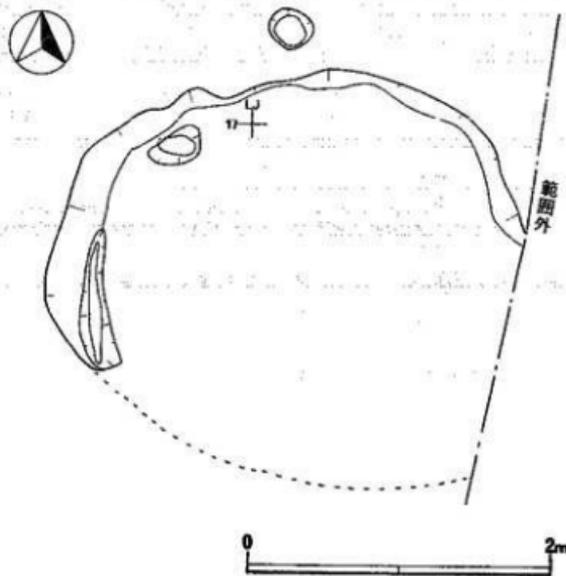
〔柱穴〕 柱穴は8本で、P 1～P 7はいずれもベッド状床面と土間状床面との段境に存在する。

〔炉〕 中央部に長軸125cm、短軸100cm、深さ10cmの浅い鍋底状を呈す地床炉がある。焼土そのものの範囲は78cm×65cmのほぼ円形である。

〔その他〕 南側に長軸87cm、短軸68cm、深さ87cmの特殊ピットが存在する。

〔出土遺物〕 (第18図)

1～12は口縁部の破片、1～6は平縁口縁である。1・2は口縁部に縄の側面圧痕、4～6は格条体圧痕文を施している。7～10は波状口縁で、波頂部から縦に垂下する1条の隆帯を



第19図 S1063 竪穴住居跡

有する。17～19は摺糸文である。20は口縁部の周辺を加工、穿孔した円盤状土製品である。

石器は4点出土した。21は搔器で、片面の1側縁に剝離を施すもので、22は削器で、片面の両側縁に細かい剝離を施すものである。石質はいずれも硬質頁岩である。23は半円状扁平打製石器で、ほぼ全周縁に剝離を施し、直線部はかなり磨滅し平坦部となす。最大幅3.5cmで、石質は凝灰岩である。

#### S 1063 竪穴住居跡 (第19図)

〔位置と確認面〕 南端部のLJ 17グリッドに位置し、地山上面で検出された。約々ほどは調査区外である。

〔平面形と規模〕 南壁のプランは判然としないが、およそ円形を呈すると思われる。径は推定で約2.80mである。

〔壁・床面〕 壁高は北壁で13cm、西側で8cm、床面は軟かい。

〔柱穴〕 住居跡内と北壁の外で各1本ずつ検出された。

〔その他〕 壁溝と炉は検出されず、遺物も出土しなかった。

#### (2) フラスコ状ピット (第20・21図)

フラスコ状ピットの検出面は、地山もしくは竪穴住居跡の床面である。記述順序は以下のとおりである。①開口部の平面形 ②底部の平面形 ③断面形 ④口径・底径・深さ ⑤その他

SKF 029 ①楕円形 ②円形 ③フラスコ状 ④175cm×117cm・200cm×185cm・94cm

SKF 030 ①円形 ②円形 ③フラスコ状 ④94cm×91cm・174cm×190cm・142cm

SKF 031 ①円形 ②円形 ③袋状に近い ④95cm×80cm・120cm×114cm・118cm ⑤出

土遺物は磨石が1点出土している。

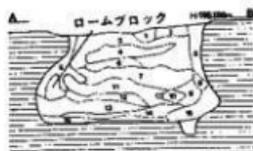
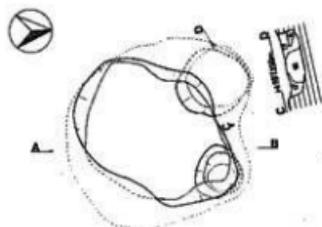
SKF 037 ①円形 ②円形 ③フラスコ状 ④172cm×158cm ⑤底面より1個体分の土器(第22図)が出土した。1～10は覆土出土のものである。2は口頭部が「く」の字状に外反し口縁部に繩の側面圧痕、隆帯上に刺突文が施される。7は胴部の破片で、多輪絡条体上に綾絡文を施している。石器は削器が3点出土した。いずれも硬質頁岩である。

SKF 078 ①楕円形 ②楕円形 ③フラスコ状 ④168cm×144cm・170cm×145cm・134cm

#### (3) 土壇 (第23～27図)

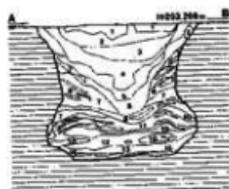
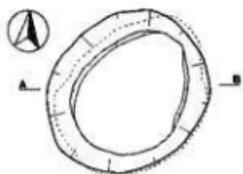
土壇は縄文時代の住居跡と同様に、ローム上面で確認された。遺物を伴出した土壇も少なく時期を明確にできないが、周囲の状況等も考え合せて縄文時代の土壇として扱った。記述順序は以下の通りである。①平面形 ②断面形 ③口径・深さ ④その他・特記事項

SK 008 ①楕円形 ②袋状 ③180cm×115cm・93cm



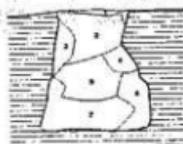
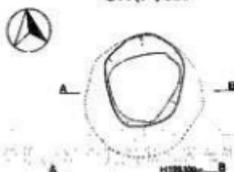
SK(F)029

番号	品名	産地	備考
1	...	...	...
2	...	...	...
3	...	...	...
4	...	...	...
5	...	...	...
6	...	...	...
7	...	...	...
8	...	...	...
9	...	...	...
10	...	...	...
11	...	...	...
12	...	...	...
13	...	...	...
14	...	...	...
15	...	...	...
16	...	...	...
17	...	...	...
18	...	...	...
19	...	...	...
20	...	...	...
21	...	...	...
22	...	...	...
23	...	...	...
24	...	...	...
25	...	...	...
26	...	...	...



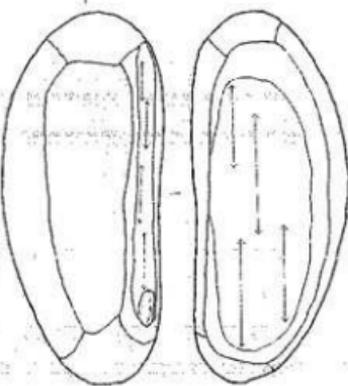
SK(F)078

番号	品名	産地	備考
1	...	...	...
2	...	...	...
3	...	...	...
4	...	...	...
5	...	...	...
6	...	...	...
7	...	...	...
8	...	...	...
9	...	...	...
10	...	...	...
11	...	...	...
12	...	...	...
13	...	...	...
14	...	...	...
15	...	...	...
16	...	...	...
17	...	...	...
18	...	...	...
19	...	...	...
20	...	...	...
21	...	...	...
22	...	...	...
23	...	...	...
24	...	...	...
25	...	...	...
26	...	...	...

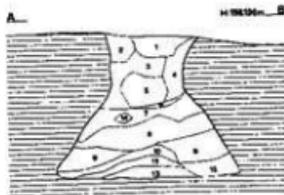
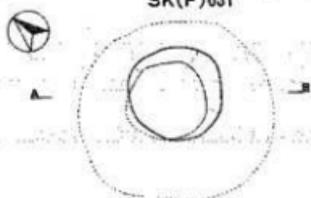


SK(F)031

番号	品名	産地	備考
1	...	...	...
2	...	...	...
3	...	...	...
4	...	...	...
5	...	...	...
6	...	...	...
7	...	...	...
8	...	...	...
9	...	...	...
10	...	...	...
11	...	...	...
12	...	...	...
13	...	...	...
14	...	...	...
15	...	...	...
16	...	...	...
17	...	...	...
18	...	...	...
19	...	...	...
20	...	...	...
21	...	...	...
22	...	...	...
23	...	...	...
24	...	...	...
25	...	...	...
26	...	...	...



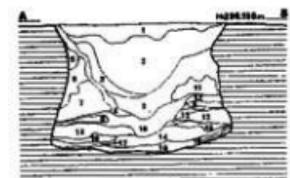
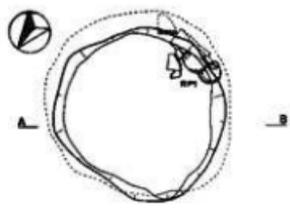
SKF31出土遺物



SK(F)030

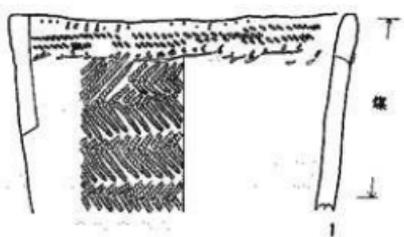
番号	品名	産地	備考
1	...	...	...
2	...	...	...
3	...	...	...
4	...	...	...
5	...	...	...
6	...	...	...
7	...	...	...
8	...	...	...
9	...	...	...
10	...	...	...
11	...	...	...
12	...	...	...
13	...	...	...
14	...	...	...
15	...	...	...
16	...	...	...
17	...	...	...
18	...	...	...
19	...	...	...
20	...	...	...
21	...	...	...
22	...	...	...
23	...	...	...
24	...	...	...
25	...	...	...
26	...	...	...



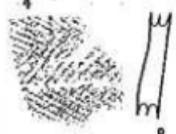
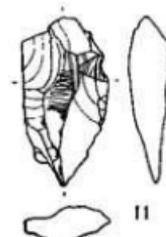


外周文様  
 □ 巻部：L.R.織文  
 □ 縁部：斜交文  
 L.R.製細正絹  
 刺交文  
 柄：L.R.+H.L.組束刺；輪郭状織文  
 内面：縦交調子  
 胎土：砂粒混入

第2家 調査の記録

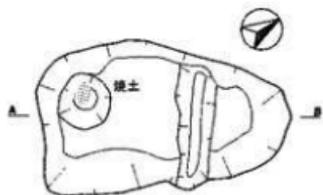


図記	品名	説明
1	外周文様	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
2	縁部	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
3	巻部	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
4	刺交文	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
5	輪郭状織文	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
6	縦交調子	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
7	砂粒混入	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
8	胎土	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
9	胎土	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
10	胎土	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
11	胎土	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
12	胎土	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。
13	胎土	柄織、しよろよ、表面が滑らか、胎土混入なし。



第21図 SKF037 フラスコ状ビット・出土遺物



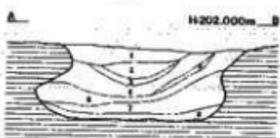
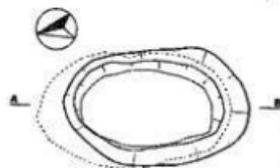


SK010

層位	色	厚	備	考
1	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
2	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物。	
3	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土の子灰土。	
4	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土の子灰土。	
5	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土の子灰土。	
6	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物。	

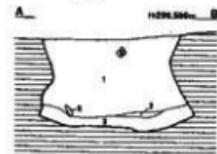
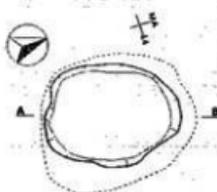


SK010出土遺物



SK008

層位	色	厚	備	考
1	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物。	
2	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
3	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
4	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
5	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
6	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
7	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人。	
8	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物。	



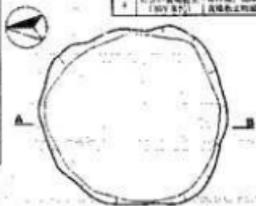
SK006

層位	色	厚	備	考
1	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土の子灰土層人。	
2	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、H201-黄褐色土層人。	
3	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物。	



SK011

層位	色	厚	備	考
1	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人、黄褐色土層人。	
2	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人、黄褐色土層人。	
3	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人、黄褐色土層人。	
4	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、黄褐色土層人、黄褐色土層人。	



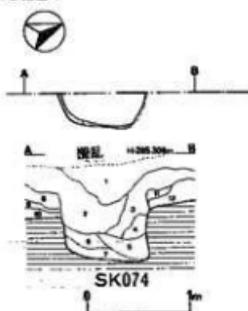
SK004

層位	色	厚	備	考
1	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、粘状物層人、黄褐色土層人。	
2	黄褐色土	(10Y 5/3)	粘状物、しまり物、粘状物層人、黄褐色土層人。	



第23図 SK 土壌・出土遺物

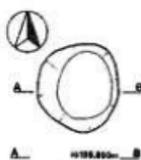
はりま館遺跡



層位	土質	遺物
1	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
2	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
3	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
4	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
5	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
6	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
7	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
8	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
9	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
10	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
11	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
12	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。



SK074出土遺物



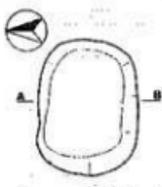
層位	土質	遺物
1	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
2	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。

SK090



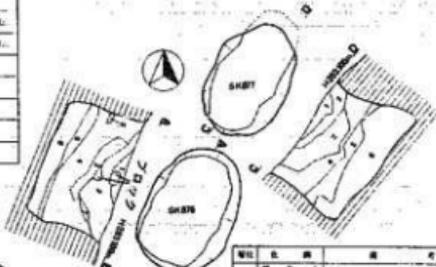
SK090出土遺物

層位	土質	遺物
1	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
2	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
3	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
4	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
5	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
6	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
7	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。

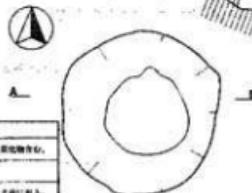


SK070

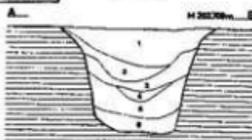
層位	土質	遺物
1	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
2	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
3	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。



層位	土質	遺物
1	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
2	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
3	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
4	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
5	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。
6	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中。

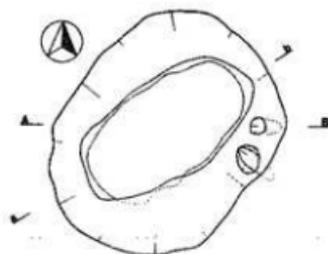


SK071

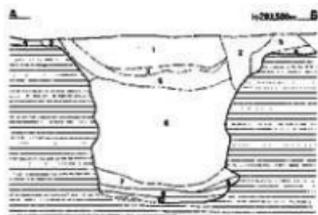


層位	土質	遺物
1	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
2	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
3	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
4	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
5	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。
6	黄褐色土 (10Y 5/6)	磁器片, しまり中, 灰化層, 褐色土層下層に分布。

第24図 SK 土坑・出土遺物



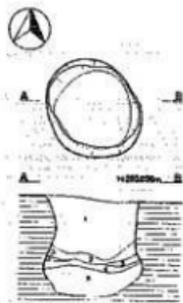
層位	色 調	備 考
1	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし。
2	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし。
3	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、黒砂が混入。
4	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし。
5	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、砂が混入。
6	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、砂が混入、黒砂が混入。
7	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、砂が混入、黒砂が混入。
8	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、赤砂が混入、黒砂が混入。
9	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、赤砂が混入。
10	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、赤砂が混入。



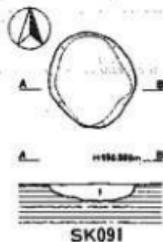
SK079



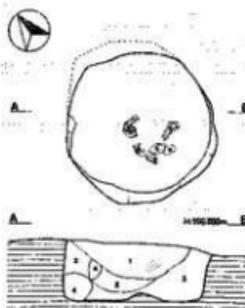
層位	色 調	備 考
1	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入。
2	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。
3	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。
4	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。
5	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。
6	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。
7	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。
8	赤 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、赤砂、赤土が混入、赤土が混入。



SK089



SK091



SK092

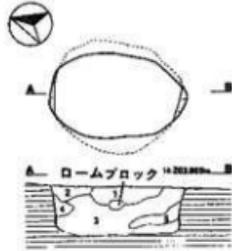
層位	色 調	備 考
1	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、赤砂が混入。
2	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし。
3	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし。
4	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、赤砂が混入。

層位	色 調	備 考
1	1.5 Y 5.5/1 (黄 色)	粘状土、赤砂が混入、赤砂が混入。
2	1.5 Y 5.5/1 (黄 色)	粘状土、赤砂が混入、赤砂が混入。
3	1.5 Y 5.5/1 (黄 色)	粘状土、赤砂が混入、赤砂が混入。
4	1.5 Y 5.5/1 (黄 色)	粘状土、赤砂が混入、赤砂が混入。

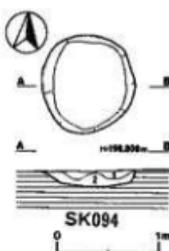
層位	色 調	備 考
1	黄 色 (1.5 Y 5.5/1)	粘状土、しまりよし、赤砂が混入、赤砂が混入。



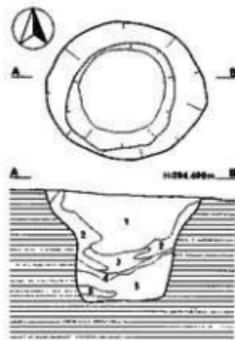
第25図 SK 土壌・出土遺物



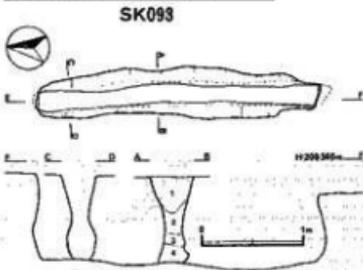
層	土	質	説明
1	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
2	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
3	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
4	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
5	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
6	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質



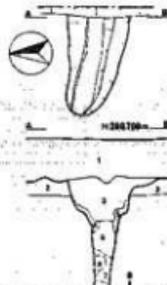
層	土	質	説明
1	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
2	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
3	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
4	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質



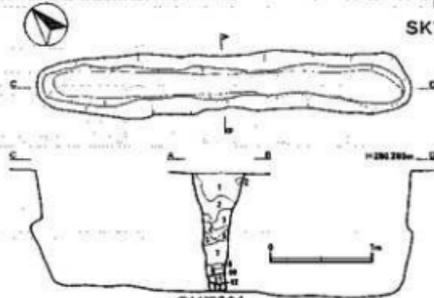
層	土	質	説明
1	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
2	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
3	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
4	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
5	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
6	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質



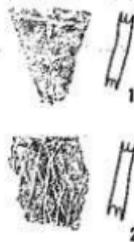
層	土	質	説明
1	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
2	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質



層	土	質	説明
1	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
2	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
3	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
4	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
5	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
6	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質



層	土	質	説明
1	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
2	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
3	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
4	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
5	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質
6	黄砂	中	黄砂、中砂、細砂、粘土質



SKT024出土遺物



第26図 SK 土壌・SKT Tピット・出土遺物

SK 010 ①楕円形 ②鍋底状 ③242cm×146cm・43cm ④覆土より網目状捺糸文を有する土器片1点、石器の剥片1点出土した。

SK 011 ①円形 ②袋状 ③100cm×92cm・53cm

SK 033 ①楕円形 ②フラスコ状に近い形状を示す。③133cm×100cm・83cm

SK 064 ①円形 ②浅い皿形 ③192cm×186cm・23cm

SK 070 ①隅丸方形 ②皿形 ③134cm×97cm・27cm

SK 071 ①円形 ②ビーカー状 ③154cm×160cm・105cm

SK 074 ①円形と思われる ②ビーカー状 ③85cm・50cm ④石器1点出土

SK 076 ①楕円形 ②ビーカー状 ③127cm×86cm・79cm ④覆土は大変ねばねばしている。

SK 077 ①楕円形 ②ビーカー状 ③116cm×77cm・84cm ④覆土は大変ねばねばしている。

SK 079 ①楕円形 ②フラスコ状に近い ③242cm×200cm・164cm ④東壁が一部擾乱されている。6層は埋められた土と思われる。

SK 087 ①円形 ②ビーカー状 ③104cm×96cm・61cm

SK 089 ①円形 ②フラスコ状に近い ③104cm×88cm・69cm

SK 090 ①円形 ②皿形 ③87cm×80cm・16cm ④覆土より晩期の土器片4点、半月形の石器1点出土。

SK 091 ①円形 ②浅い皿形 ③87cm×80cm・16cm

SK 092 ①円形 ②ビーカー状 ③96cm×85cm・10cm ④底面に6個の自然礫がある。

SK 093 ①楕円形 ②ビーカー状 ③134cm×84cm・49cm

SK 094 ①円形 ②浅い皿形 ③97cm×92cm・18cm

SK 098 ①円形 ②ビーカー状 ③158cm×135cm・107cm

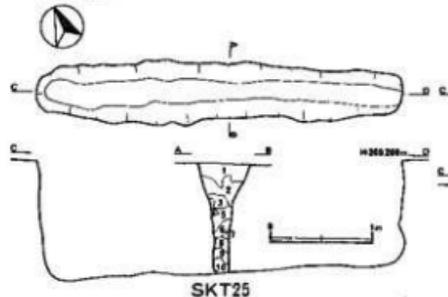
#### (4) Tビット (第26~29図)

Tビットは14基で、いずれも地山上面で検出された。SK T 24~28はほぼ同一形態・規模で隣接し群をなし、ほぼ同一方向を向く。

SK T 020 MD 56グリッドに位置する。長軸277cm、短軸47cm、深さ84.8cmで、長軸の方向はN-3°-Wである。

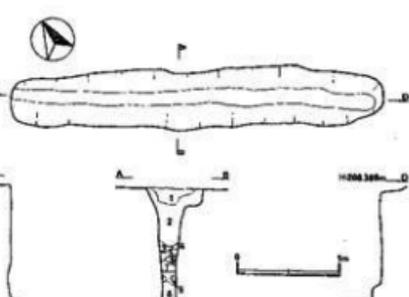
SK T 023 LF 42グリッドに位置する。東半分は路線外のため完掘できなかった。短軸58cm、深さ120cmで、長軸の方向はN-81°-Wである。

SK T 024 LG 41グリッド付近に位置する。長軸367cm、短軸59cm、深さ120cmで、長軸の方向はN-48°-Wである。覆土上面より、縄文土器が2点出土した。網目状捺糸文のものと無文のものである。



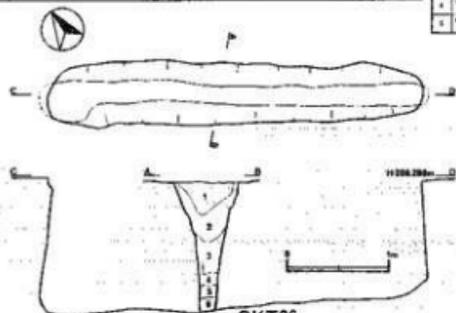
SKT25

NO	品名	規格	数量	単位	備考
1	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
2	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
3	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
4	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
5	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材



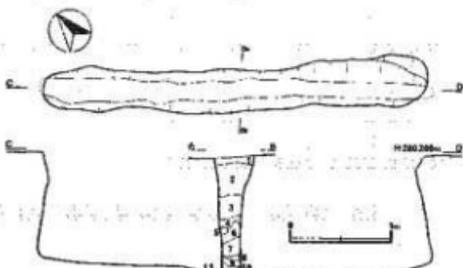
SKT27

NO	品名	規格	数量	単位	備考
1	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
2	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
3	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
4	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
5	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材



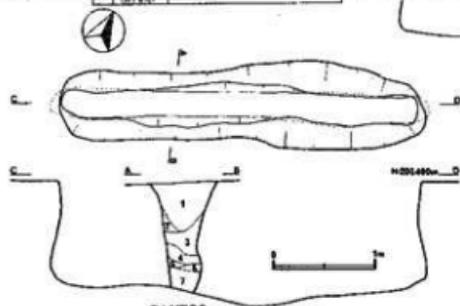
SKT26

NO	品名	規格	数量	単位	備考
1	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
2	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
3	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
4	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
5	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材



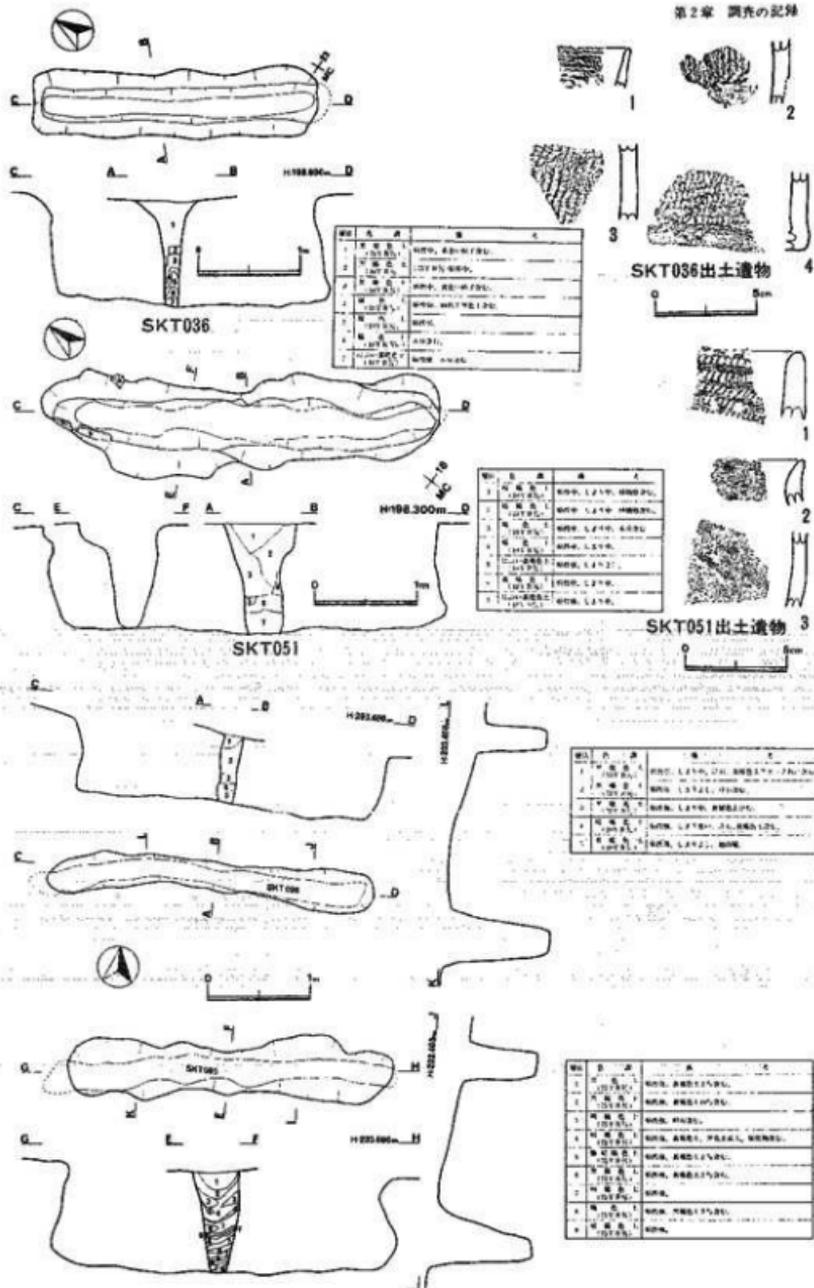
SKT28

NO	品名	規格	数量	単位	備考
1	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
2	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
3	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
4	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材
5	丸太	径40mm 長さ1.5m	1	本	中心部、埋設用材

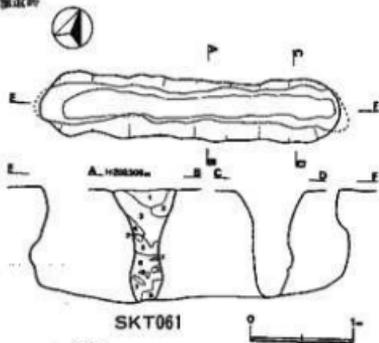


SKT32

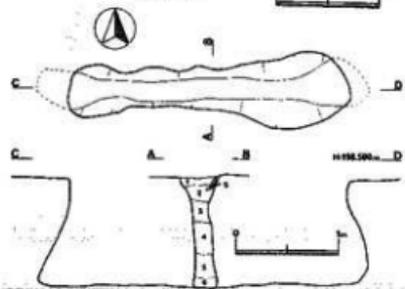
第27図 SKT Tピット



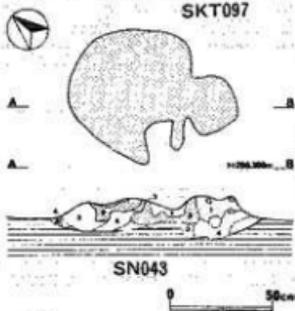
第28図 SKT Tピット・出土遺物



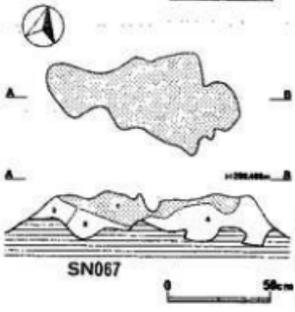
SKT061



SKT097



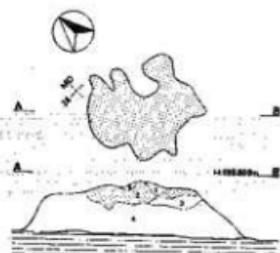
SN043



SN067

層別	色	質	備	考
1	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
2	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
3	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
4	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
5	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
6	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
7	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
8	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	

層別	色	質	備	考
1	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
2	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
3	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
4	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
5	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	



SN065

層別	色	質	備	考
1	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
2	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
3	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
4	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	

層別	色	質	備	考
1	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
2	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
3	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
4	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	



SN065出土遺物

層別	色	質	備	考
1	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
2	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
3	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	
4	黄褐色	2	粘質中、瓦層中、粘土質に多い。	

第29回 SKT Tピット・SN 焼土遺構・出土遺物

**SKT 025** LH 40グリッド付近に位置する。長軸360cm、短軸63cm、深さ117cmで長軸の方向はN-68°-Wである。

**SKT 026** LH 38グリッド付近に位置する。長軸369cm、短軸60cm、深さ130cmで、長軸の方向はN-59°-Wである。

**SKT 027** LI 38グリッド付近に位置する。長軸364cm、短軸58cm、深さ121cmで、長軸の方向はN-59°-Wである。

**SKT 028** LJ 36グリッド付近に位置する。長軸376cm、短軸43cm、深さ120cmで、長軸の方向はN-52°-Wである。

**SKT 032** LJ 43グリッド付近に位置する。長軸356cm、短軸85cm、深さ120cmで、長軸の方向はN-62°-Eである。

**SKT 036** MC 23グリッド付近に位置する。長軸283cm、短軸66cm、深さ106cmで、長軸の方向はN-33°-Wである。覆土上面で縄文土器4点が出土した。1は口縁部の文様帯が大変狭く、隆帯上と口縁部に縄文の側面圧痕文を施し、2は胴部で摺糸文を施し、3は底部近くまで絡条体圧痕文を施している。

**SKT 051** MB 18グリッド付近に位置する。長軸387cm、短軸79cm、深さ106cmで、長軸の方向はN-36°-Wである。確認面よりわずかの覆土で3点の土器が出土した。1・2は口縁部の破片で、1は口縁部に絡条体圧痕文、口唇部に縄文を施している。3は土師器である。

**SKT 061** LI 45グリッド付近に位置する。長軸321cm、短軸84cm、深さ120cmで、長軸の方向はN-67°-Eである。

**SKT 095** ME 81グリッド付近に位置する。長軸316cm、短軸41cm、深さ104cmで、長軸の方向はN-85°-Eである。

**SKT 096** ME 81グリッド付近に位置する。長軸316cm、短軸27cm、深さ73cmで、長軸の方向はN-87°-Eである。

**SKT 097** MA 21グリッド付近に位置する。長軸274cm、短軸35cm、長軸の方向はN-89°-Wである。

#### (5) 埋設土器 (第30図)

今回の調査では5基の埋設土器が検出された。SR 069・073は比較的近い距離に構築されているが、他の3基は散存している。いずれも地山の黄褐色土層(ローム層)に埋められ、倒立または正立の状態で検出された。埋設土器内からの出土遺物はない。埋設土器はいずれも円筒下層d式のものである。

## SR 013 (第31図)

南端部のMA 17グリッドに位置する。S I015の南壁のすぐ南側でVI層(漸移層)上面で検出された。掘方平面形は円形で口径38cm、底径45cmで、底面と土器底部との間にわずかに間がある。北側にやや寄っており、南壁と15cmほどの間がある。正立埋設である。土器の口縁部は現存せず胴部下半のみである。

## SR 017 (第31図)

S I009竪穴住居跡の南壁のすぐ南側で、MB 40グリッドに位置し、地山上面で検出された。掘方は平面形が円形で、口径50cm、断面形は深さ15～19cmで浅い鍋底状を呈す。埋設の方法は倒立埋設で、西側で掘方底面と土器の口縁部にわずかに間がある。壁寄りに埋設されている。

## SR 034 (第32図)

平安時代のS I003竪穴住居跡の北東方向のLG 38グリッドに位置し、地山上面で検出された。掘方の口径35cm、底径22cmで、正立の状態ではほぼ中ほどに埋設されている。土器は幾分南側に傾斜し、土器の底部はもともとなく、胴部は破損していた。掘方の平面は判然としなかった。

## SR 069 (第32～34図)

SR 073と比較的隣接しており、MF 27グリッドに位置する。土器上面の確認はVI層下面で掘方のプランは地山上面でなされた。掘方の平面形はほぼ円形で、その大きさは口径45cm、底径37cmである。3個の土器(①、①'、②と呼称)が同時に埋設され、南壁で若干広がるが、ほぼ壁と密着している。掘方底部では土器外面と3～7cmの間がある。3個体とも南に傾いている。埋設の方法は、二重になったもの(①、①')が倒立埋設、残りの1個体は正立埋設である。

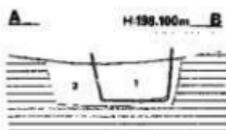
土器内からの出土遺物はない。

埋設の方法であるが、(1)①、②の土器が入る位のはは垂直な掘込みをする。(2)掘方底面に、褐色土(9層)を埋める。(3)南壁寄りに①'を逆さに置き、その上にさらに①を逆さに置く。(4)①、①'と北壁の間にまた褐色土を少し入れ、その上に②を正立にして置く、という順序で埋設された事が推定される。

## SR 073 (第35図)

調査区の南寄りの東端で、MH 27グリッドに位置する。土器上面の確認はVI層下面で、掘方のプランは地山上面でなされた。掘方の平面形は円形でその大きさは、口径50cm、底径25cmである。土器は正立埋設で、掘方底面にはほぼ水平に埋設されている。土器外面は南壁では若干の間があるが、北壁では胴部上半付近でやや広がる。

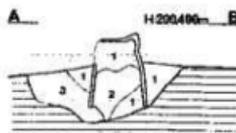
順	土 器	備 考
1	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、青色土(1978年)埋入。
2	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、青色土(1978年)、黒鉛700g埋入。



SR013

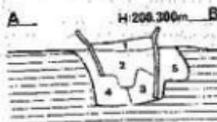
0 30cm

順	土 器	備 考
1	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
2	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片、黒鉛700g埋入。
3	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片、黒鉛700g埋入。



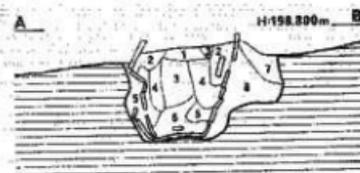
SR017

0 30cm



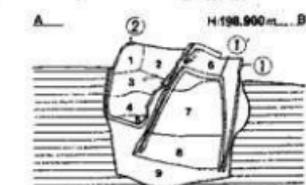
SR034

0 30cm



SR073

0 50cm



SR069

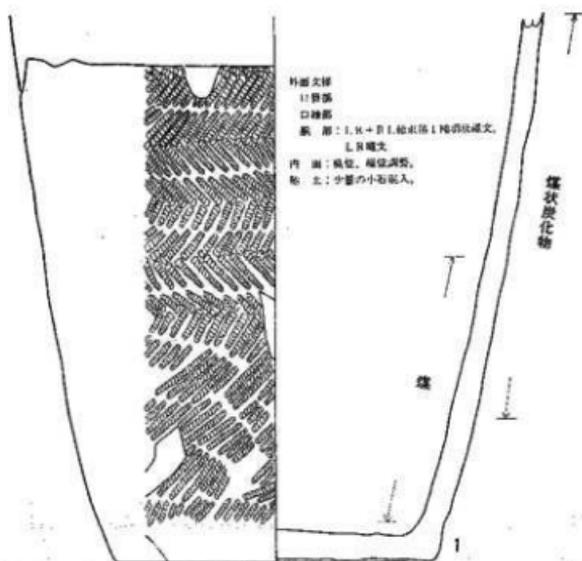
0 30cm

順	土 器	備 考
1	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
2	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
3	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
4	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
5	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
6	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。
7	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片。

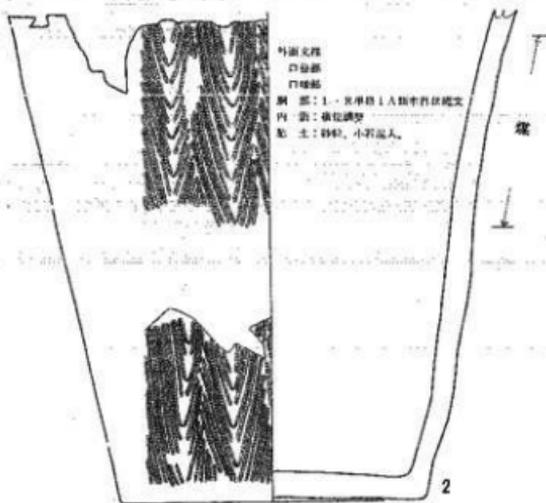
順	土 器	備 考
1	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
2	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片、土器片。
3	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
4	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片、土器片埋入。
5	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
6	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
7	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
8	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
9	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。

順	土 器	備 考
1	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
2	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
3	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
4	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
5	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
6	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
7	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
8	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。
9	青 磁 器 土 (1978年)	土器片、土器片埋入。

第30図 SR 埋設土器



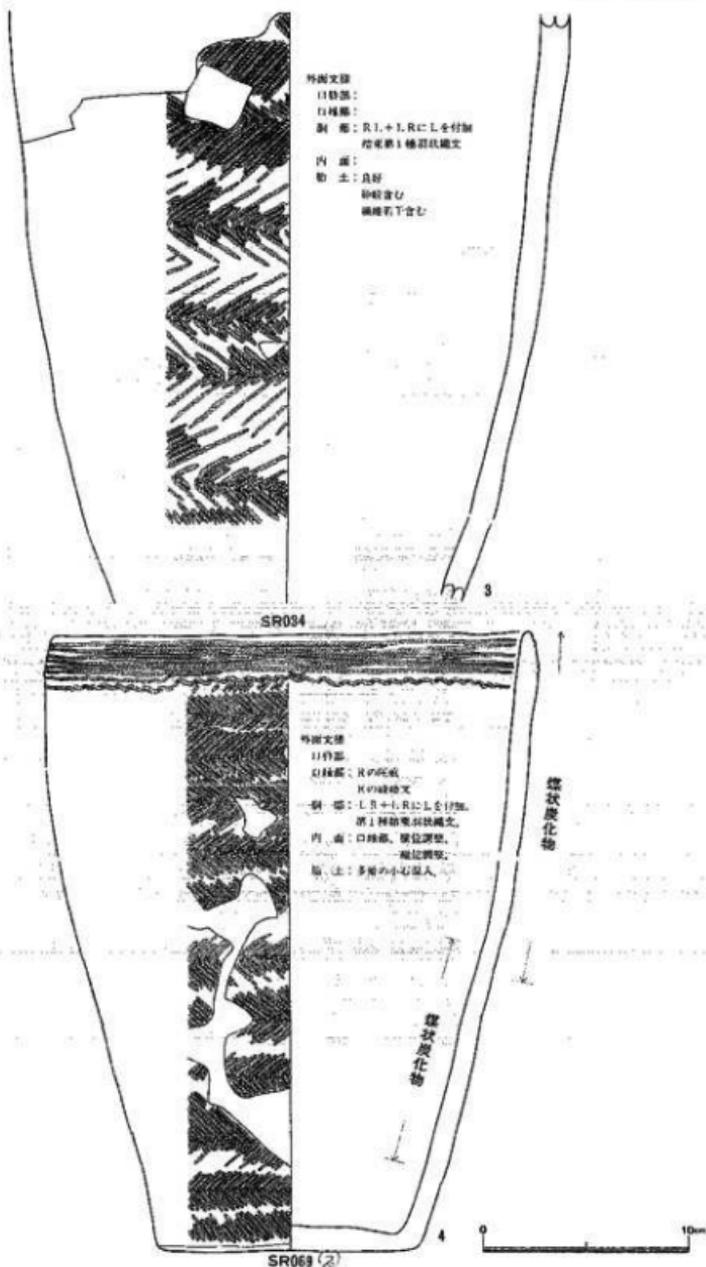
SR013



SR017

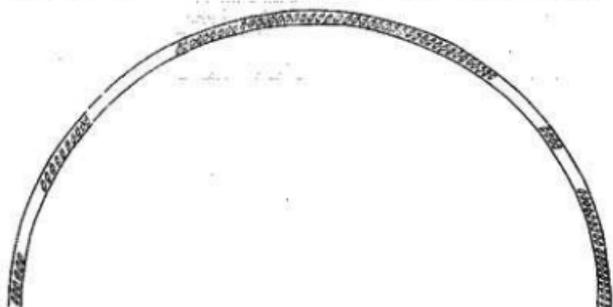
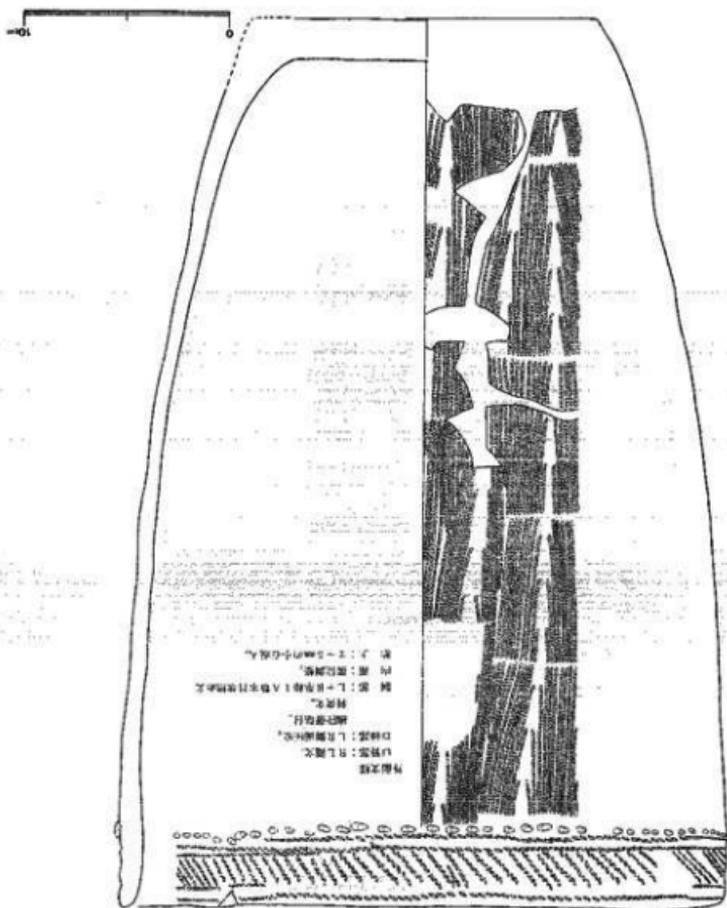


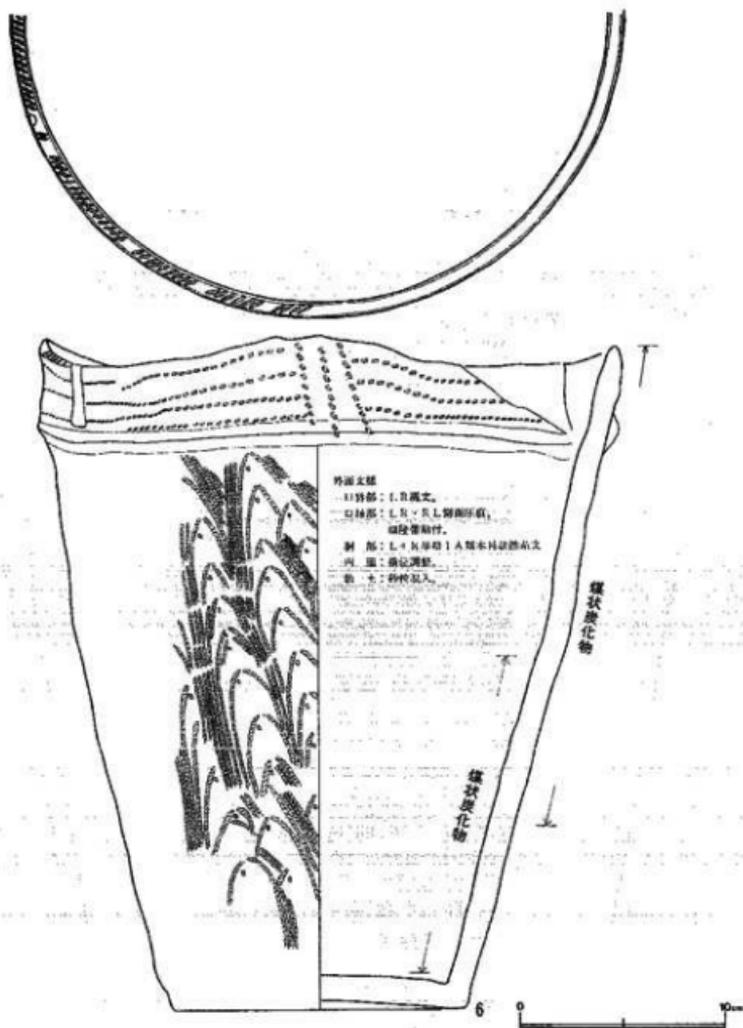
第31図 SR 埋設土器



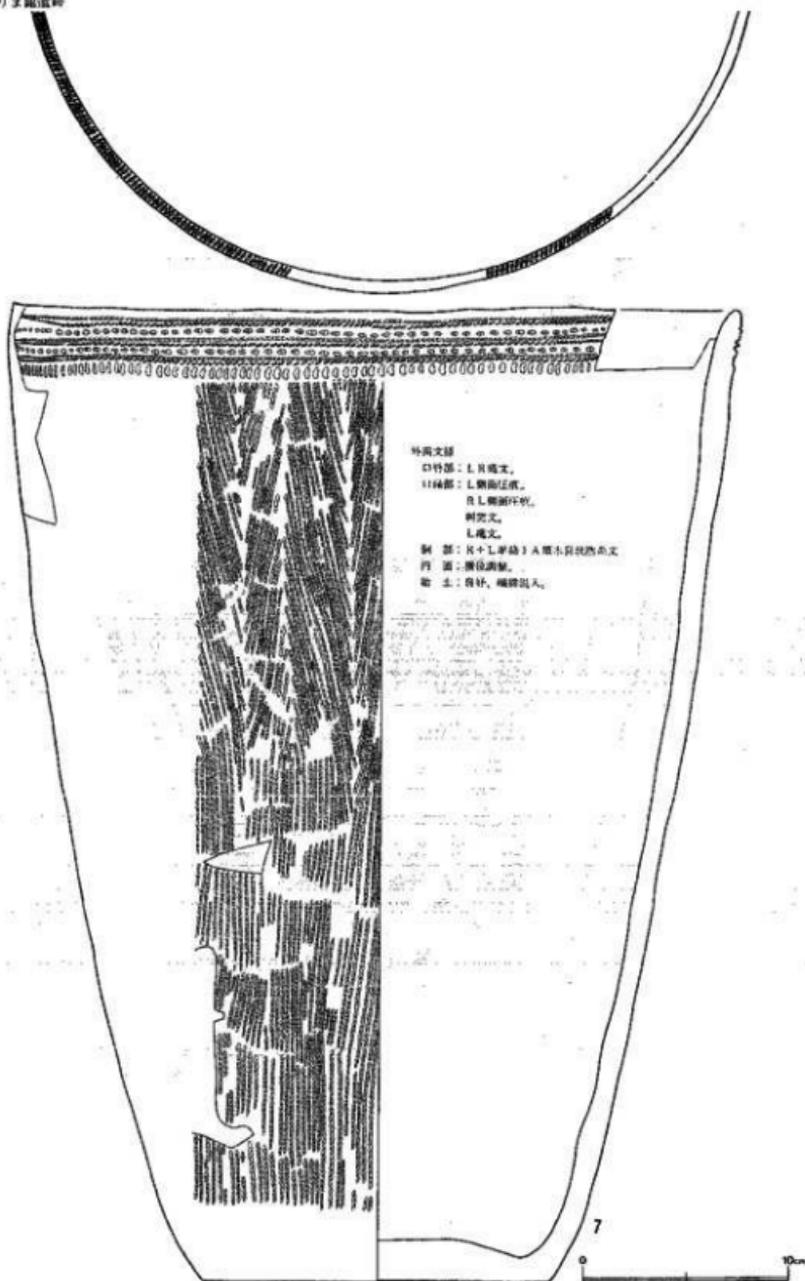
第32図 SR 埋設土器

第39圖 埋設土器 ① SR069





第34図 SR069 ① 埋設土器



第35圖 SR073 埋設土器

## (6) SN 焼土遺構 (第29図)

検出された焼土遺構は18基である。全体的に調査区の南半部に集中しており、北半部から検出されなかった。焼土遺構の平面形は略円形か略楕円形で、その規模は50~90cm、焼土の厚さは5~10cmほどである。焼土遺構の下に遺構は検出されなかった。出土遺物はSN65焼土遺構上面より2点の土器片が出土した。同一個体で胴部に羽状縄文を施すもので、内面が研磨されており、前期の土器と思われる。2点の土器だけでは判断できないが、周辺の土器の分布、遺構の分布状況から勘案して、前期の円筒下層d式期のものと考えられる。

## 2 遺構外出土遺物

## (1) 土器

遺構外から出土した土器は、縄文時代前期初頭、前期中葉、前期後葉、中期中葉、後期初頭、晩期中葉、晩期末葉の時期のもので、前期後葉の土器が大半を占める。他の時期のものは点数が少ない。いずれもV層からの出土である。以上の土器を時期毎に分け、さらに分類した。

## a 第1群土器 縄文時代前期の土器群である。3類に分類できる。

第1類土器(第37図) 1個体だけであるが、前期初頭に位置づけられる土器が出土している。第37図は口縁部から胴部及び底部付近の破片があるが、うまく接合せず、図上復元したものである。底部は丸底になる。口唇部は指頭圧による刻み目を有し、その結果、口縁部は細かい波状を呈す。口縁部から底部まで、 $R \left\{ \frac{1}{1} \right\}$ 、 $L \left\{ \frac{7}{7} \right\}$ の0段多条の縄を交互に回転施文して、羽状縄文にしている。原体の幅はおおよそ27mmである。器厚は8~10mmで色調はにぶい橙色~黒褐色を呈し、胎土には砂粒と繊維を含み、焼成は良好である。内面には横位、斜位の調整痕を有する。前期初頭、長七谷地第III群の仲間である。

第2類土器(第40図6、第47図22~24) 前期中葉円筒下層b式土器の仲間を本類とした。頸部に隆帯のあるものとなないものがある。6は胴部下半を欠損しているが、 $R L + L R$ 結束第1種の羽状縄文をほぼ全体に施したと思われる。平口縁で口頸部でわずかに外反する。22は口縁部は羽状縄文で、わずかに外反する。頸部に1条の縄の側面圧痕、その下に燃糸文を施している。胎土に砂粒が混入している。23は口縁部は斜縄文、わずかに外反する頸部には横位に繊維束と思われる圧痕文を施文し、その直下には平行する絡条体圧痕文が見られる。24は口頸部の破片で、隆帯上に指頭圧痕文、直下に縦位の燃糸文を施している。胎土には繊維を含む。

第3類土器(第38・39図、第40図57、第41~46・47図) 前期後葉、円筒下層d式土器を本類とした。ほぼ完形のもの及び図上で復元できたものは19点である。口頸部・胴部・底部の形態や、口頸部の文様帯に多くのバリエーションが認められる。

3は平口縁で円筒深鉢形を呈するものと思われる。口縁部文様帯の幅はきわめて狭く、2.5cmほどで、原体LRの側面圧痕を施文している。細隆帯上には刺突文、その直下には2条の綾格文胴部には羽状縄文を施している。胎土には繊維を含まない。5は口頸部と胴部下半が欠損しているが円筒深鉢形を呈するものと思われる。口頸部と胴部との間には刺突文があり、その直下には綾格文を施し、胴部は木目状捺糸文がめぐる。胎土に繊維の混入は認められない。4は口縁部に4つの小突起を有する円筒深鉢形土器である。波頂部下の口頸部とその間に計8個の粘土塊の貼付が見られ、その上には絡条体圧痕文、胴部には羽状縄文を施している。

2は波状口縁で、口頸部がやや外反する。口頸部に縄の鋸歯形圧痕があり、その中と細隆起帯上に刺突文を施している。胴部には木目状捺糸文を施している。17も波状口縁を呈するもので、胴部に木目状捺糸文を施している。胴部は丸みを持ち、口縁部は「く」の字状に外反する。波頂部直下には縦に、頸部には横に1条の刺突文、口頸部と胴部の境に1条の綾格文を施している。

13は頂部の凹む小突起を持ち、口頸部には絡条体圧痕文を鋸歯形に細隆帯上に刺突文、その直下に綾格文、胴部に付加条の羽状縄文を施している。8、10、11は4ヶの小突起を有し、10、11は波頂部が凹み、口頸部が「く」の字状に外反する。これらはいずれも波頂部の直下に垂下する隆帯を貼付し、縄の側面圧痕や、刺突文を施している。11の胴部には縦に垂下する2条の綾格文が認められる。15は図上復元したもので、波状口縁を呈し、波頂部と頸部との間に1つの円形の穴を穿つものと思われる。器形は口頸部が「く」の字状に外反する。口頸部の文様帯は広く、文様は縄の側面圧痕、刺突文、綾格文が交互に繰り返される。胴部との境には3条の綾格文、胴部には羽状縄文が施される。12、14、16は単筋の縄文を地文とし、その上に縦に垂下する綾格文を施すもので、14は口縁部が欠損しているため不明であるが、12、16は平口縁である。いずれも胎土に繊維を含まない。

18～21は胴部下半のみ、もしくは胴部のみのもので、全体の文様構成は不明である。18、20、21は羽状縄文で、20は結束第2種の附加条羽状縄文を施している。

25～39は口頸部と胴部の破片である。25、26は同一個体で口頸部にボタン状の粘土塊を貼付し、平行な捺糸圧痕文を施文している。口頸部と隆帯上には縄の側面圧痕が見られる。胎土に繊維を含まない。27、28は同一個体かと思われるもので、細隆帯上に刺突文、その下には撚りが非常に細かい木目状捺糸文を施文するものである。胎土には繊維を含まず、内面は丁寧に研磨されている。小形の円筒鉢形土器と思われる。

29～39は胴部に櫛状工具による条痕文を有する土器である。平縁口縁で、文様帯の幅は2cmほどである。口頸部の文様は縄の側面圧痕が2～3本平行に、その下に3本の条痕文が平行に走り、胴部との境には刺突文を施している。胎土には繊維を含まず、内面は丁寧に研磨されて

いる。

**b 第2群土器** (第48図) 縄文時代中期の土器を本群としたが、40の1点だけで、図上復元したものである。4つの小波状突起を呈する口縁で底部から胴部が急に外側に張り出し、口頸部で「く」の字状に強く内反する。口縁部の鱗状突起上に刺突列点文、波頂部下に円形の穴を穿つ。鱗状突起の下や胴部にはR L縄文を、胴部下半には、波状の浅い沈線を施している。

**c 第3群土器** 後期の土器群である。4類に分けた。

第1類土器 (第48図41・43・45、第49図47・48、第50図50～56・58～64・66～79) 後期初頭、十腰内I式土器に比定し得る土器群である。45は波状口縁で、口頸部に2条、胴部の下半部に1条の沈線をめぐらし、胴部の文様帯を画している。文様帯には篋摺沈線文が4単位めぐる。43は、平口縁で胴部上半が強く張り出す鉢形土器である。口縁部の下には、細い隆帯をめぐらし、口唇部から縦に隆帯を貼付し、横に竹管状工具による円形の穴を穿つ。48は口縁に平行な2本の隆帯をめぐらす縦には1本の隆帯が垂下し、胴部で隆帯を中心にして沈線による楕円形状を2重に施文するもので4単位と思われる。縦の隆帯と隆帯の間には「X」字状に2条の沈線が互いに交差し、その上下に楕円形文が配される。いずれも縄文の後に沈線を施文し沈線間以外の縄文を磨消している。41、47は無文の壺形土器である。41は蓋付壺で、焼成前に胴部上半を竹ヒゴ状工具で連続的に突き刺して切断し蓋としたものである。現存部の器高18.7cm、底径6.6cmである。

50～53は波状口縁で沈線のみで文様を構成するもので、61もその類と思われる。54～56、58は平口縁である。54、58は口縁部に縄文を、その下に1条の沈線を施文するものである。59、60、62、64、66は縄文を施文後、平行沈線もしくは曲線的な沈線で文様帯を構成するものである。

67～69は沈線で縄文を矩形に区画するものである。70～72は縄文の上に曲線的な沈線を施文するものである。73は浅い沈線で曲線を施文するものである。74～79は網目状摺糸文である。

第2類土器 (第49図46) 後期初頭の土器を本類とした。46の1点のみである。平口縁の深鉢形土器と思われる。口縁部には縄文、その下は幅の広い平行沈線文で中を磨消している。胴部下半に1条の沈線を施文し、上半の平行沈線との間を文様帯としている。文様帯は上と下に弧状の沈線を配し、その間を磨消する。この磨消による無文部には、中に2条の沈線を配した4個の縦位の楕円形文が描かれている。

第3類土器 (第48図42・44、第50図57・65) 十腰内II式土器に属すると思われる土器群である。42は平口縁で、胴部上半に4条の平行沈線を施して文様帯としているもので、平行沈線間を「S」字状に区切る。57、65は平行沈線を弧状に区切るものである。44は4つの波状口縁をなすもので、7状の平行沈線間を竹管状工具による刺突文で区切るものである。内外面のミガキが顕著である。

第4類土器(第49図49) 後期中葉加層利B式土器に併行すると思われるものである。49は図上復元したものである。波状口縁の深鉢形土器で底部から緩やかに外にふくらみ、頸部で1度すばんでから大きく外反する。口縁部に3個の突起と注ぎ口が付き、注ぎ口と向い合う位置に大突起が配され、その間にやや規模の小さな突起が付く。口縁部や胴部には磨消縄文による文様が描かれるが、基本となるモチーフは胴部の1部に表された文様によって示される。底部は欠失している。胎土には細砂粒を若干含み、焼成は良好で橙色を呈す。

d 第4群土器 縄文時代晩期の土器群である。2類に分けられる。

第1類土器(第51図82・85、第56図116-124) 晩期前葉大洞B-C式土器の仲間を本類とした。82以外はいずれも羊歯状文を施すものである。85は台付鉢形土器で、胴部下半から丸みを持って立ち上がり、頸部でややすぼみ、口縁部は外反する。文様帯は胴部上半と口縁部に1段ずつの2段構成で、口唇部にはB状突起、胴部下半にはR L斜行縄文が施される。内外面には煤状炭化物が付着している。116-118は85とほぼ同じ文様であるが、文様帯は口縁部のみである。120-122は同一個体で、口縁部に3条の平行沈線と羊歯状文を施すものである。123、144は口縁部の突起により波状をなし、口縁部は緩く外反するものである。外面には口縁部からL R斜行縄文を施している。

第2類土器(第51図80-84) 晩期末葉の大洞A'式土器が本類である。出土したのは5点と数が少ない。83、84は浅鉢形土器である。83は口縁部に突起を有し、文様帯は狭く、3条の平行沈線、胴部にはL R縄文を全面に施すものと思われる。84は底部から胴部がなだらかに立ち上がり、口縁部で一段のくびれ部を有し、その内側に1条の沈線を施している。口縁部の突起の下には変形工字文と平行沈線文で、三角形の交点や平行沈線間を刻みこんで粘土粒を貼付している。

80-82は壺形土器である。80は肩部がやや張り出し、三角形の突起を有し、突起の下と頸部にはための沈線を施すし、その間は無文としている。突起には、頂点に切り目を入れたものと切れ目を入れずにその下に2個1対の粘土粒の貼付のみられるものがある。81、82は頸部から上が欠損しているもので、縄文を胴部全体に施している。82は頸部に3条の平行沈線文をめぐるし、中の沈線には小突起を有する。

e 第5群土器(第52-54図、55図99・100・102・103・105) いずれも深鉢形か鉢形土器と思われるがメルクマルとなる文様がないものを本群として一括して扱った。胴部が欠損しているものが多く時期を特定できるものはほとんどない。



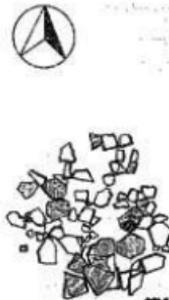
第39図の4に対応



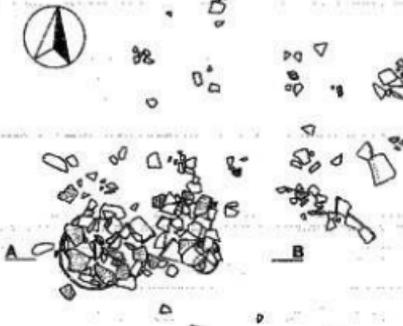
第33図の79に対応



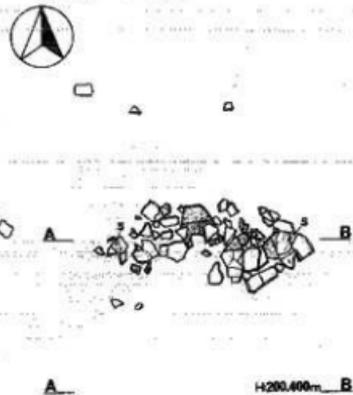
第49図の28に対応



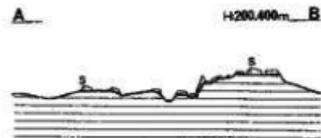
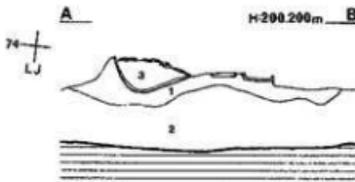
第57図の1に対応



第55図の111に対応



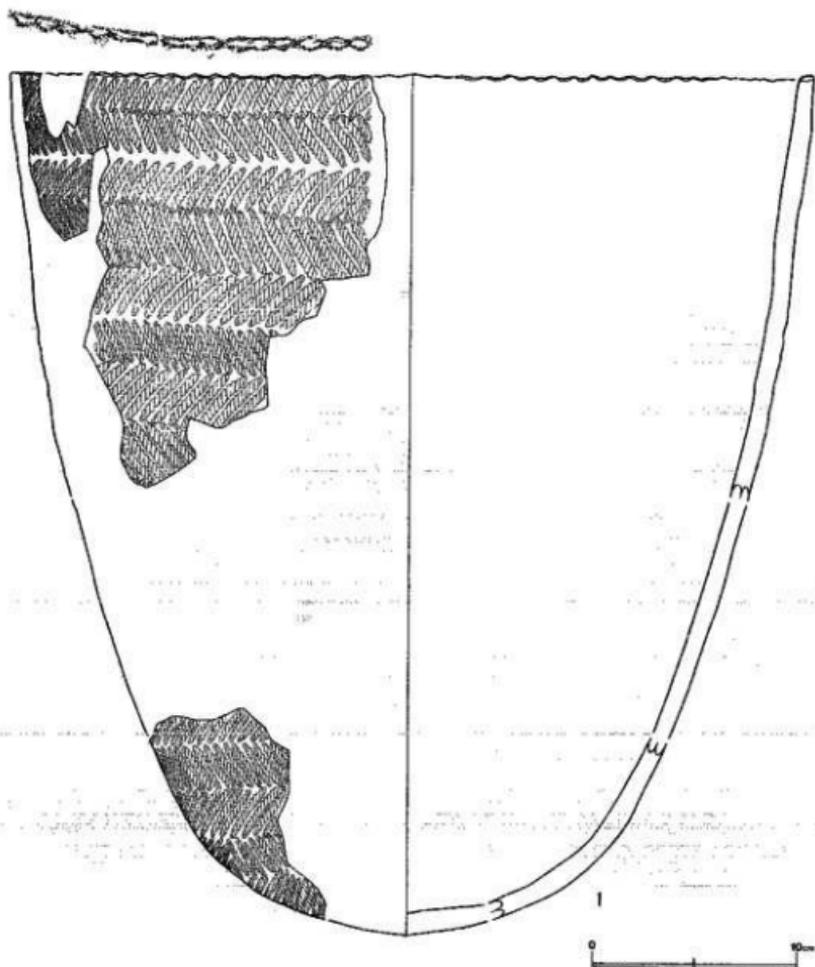
第45図の17に対応



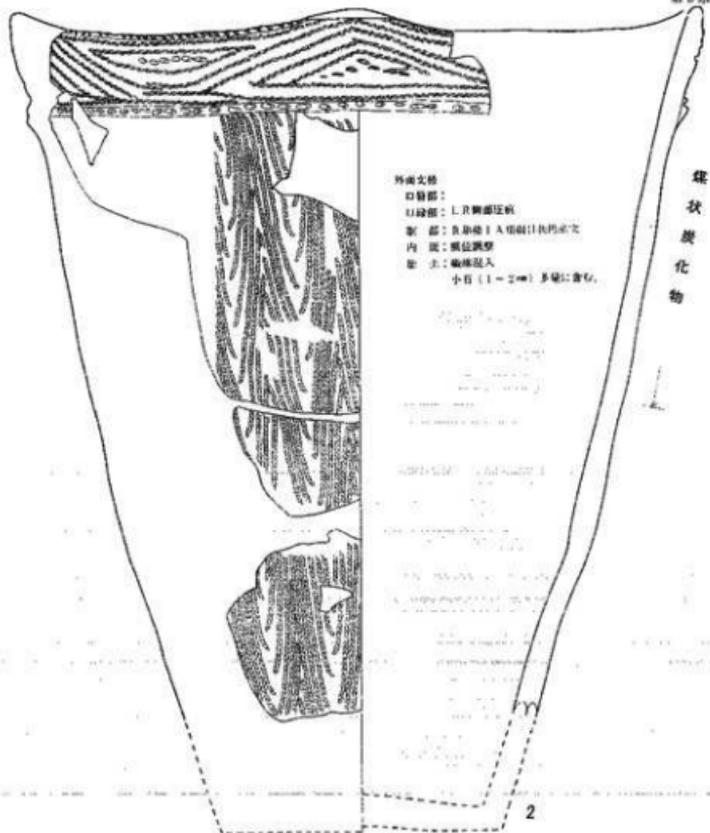
No	品名	産地	備考
1	赤土器 (赤土器)	和歌山、しまり郡、和歌山から。	
2	赤土器 (赤土器)	和歌山、しまり郡、和歌山	
3	赤土器 (赤土器)	和歌山、しまり郡、和歌山から。	



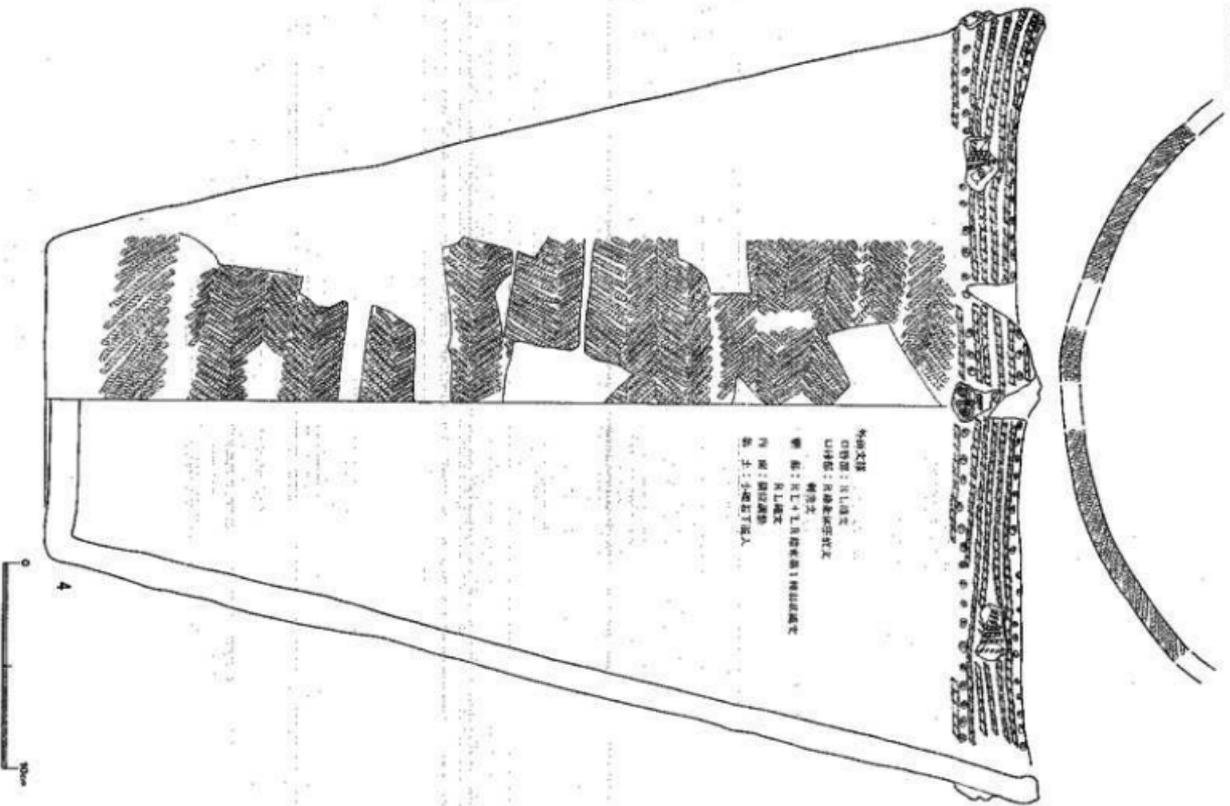
第36図 集中土器出土状況



第37図 遺構外出土器(前期)



第38図 遺構外出土土器(前期)



外飾文樣

口飾帶：瓦山雲

口飾帶：瓦山雲

飾帶文

飾：瓦山雲

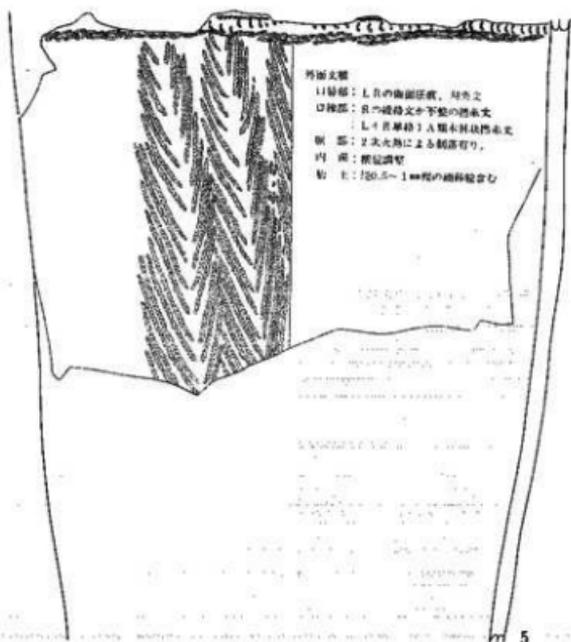
飾：瓦山雲

飾：瓦山雲

飾：瓦山雲

飾：瓦山雲

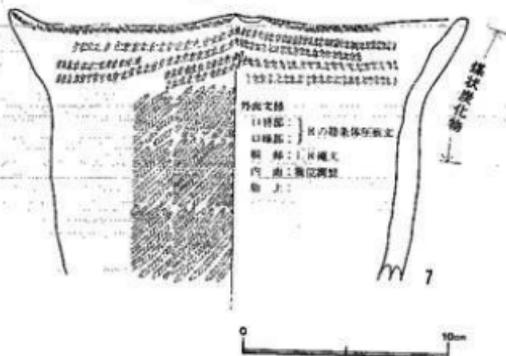
第39圖 遠傳外出土器(前期)



5

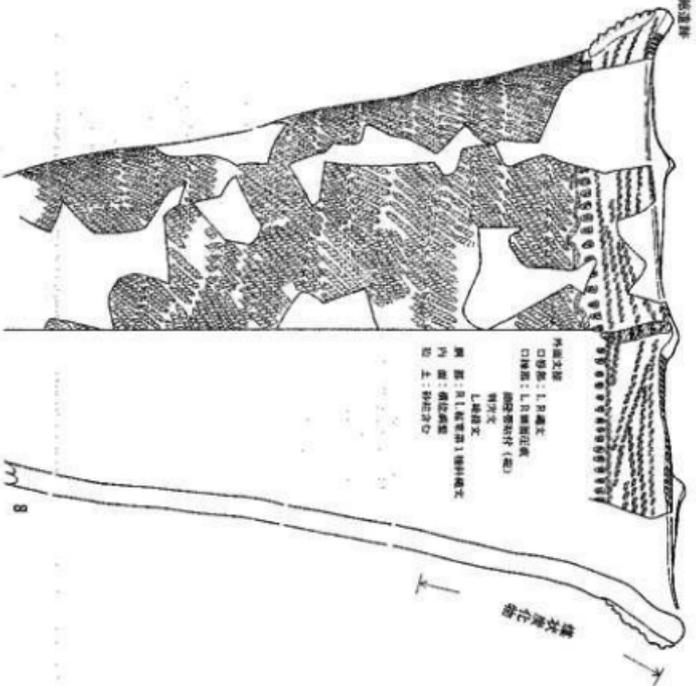


6

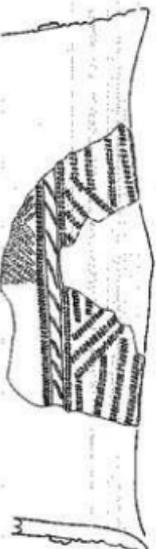


7

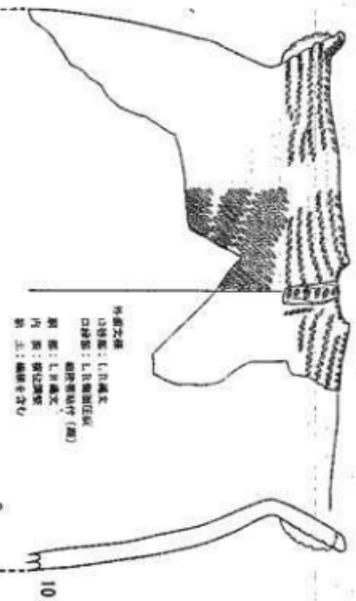
第40図 遺構外出土土器(前期)



8  
 內面正反面  
 口飾邊：L、R、縐紗  
 口飾邊：L、R、縐紗  
 口飾邊：縐紗行（經）  
 縐紗  
 L、縐紗  
 裏：L、R、縐紗；縐紗縐紗  
 內：縐紗縐紗  
 包：L、縐紗

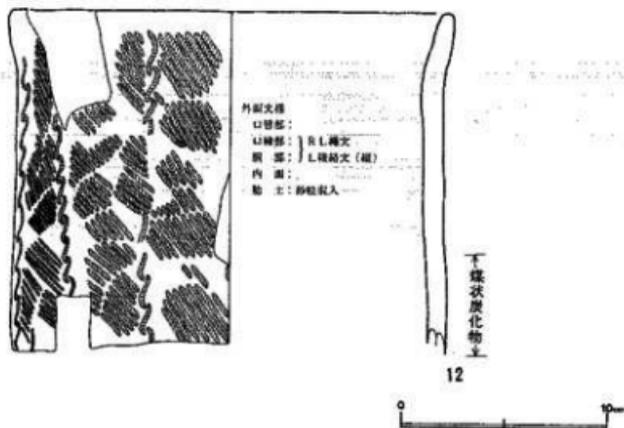
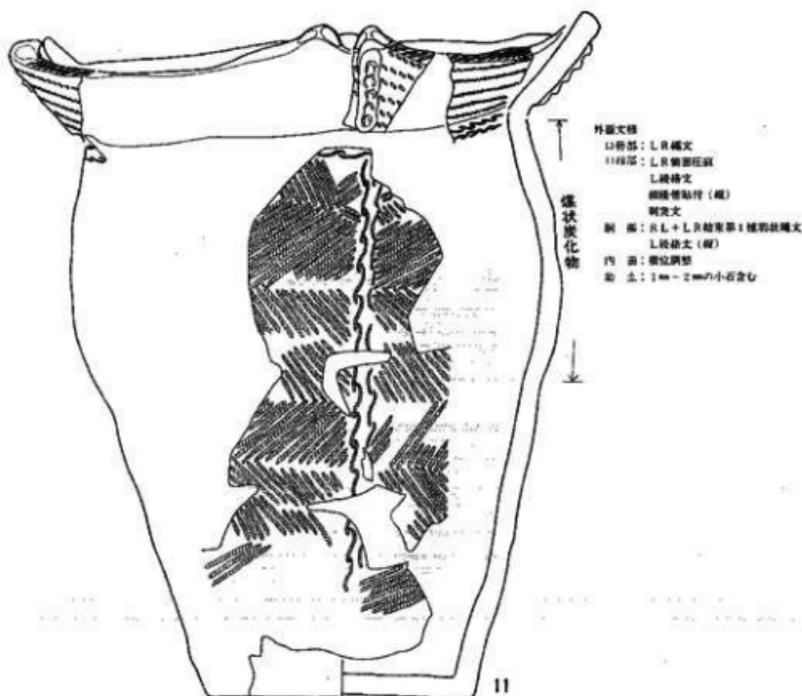


9  
 內面正反面  
 口飾邊：L、R、縐紗  
 口飾邊：縐紗縐紗  
 L、縐紗縐紗  
 裏：L、R、L、縐紗；縐紗縐紗  
 內：縐紗縐紗  
 包：L、縐紗縐紗

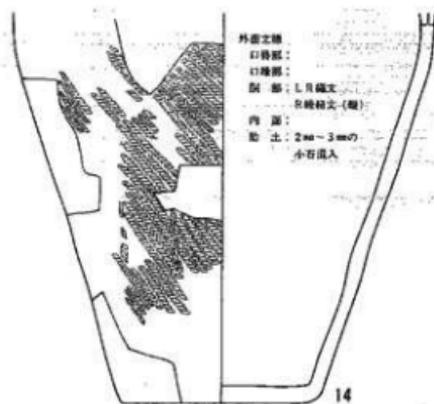
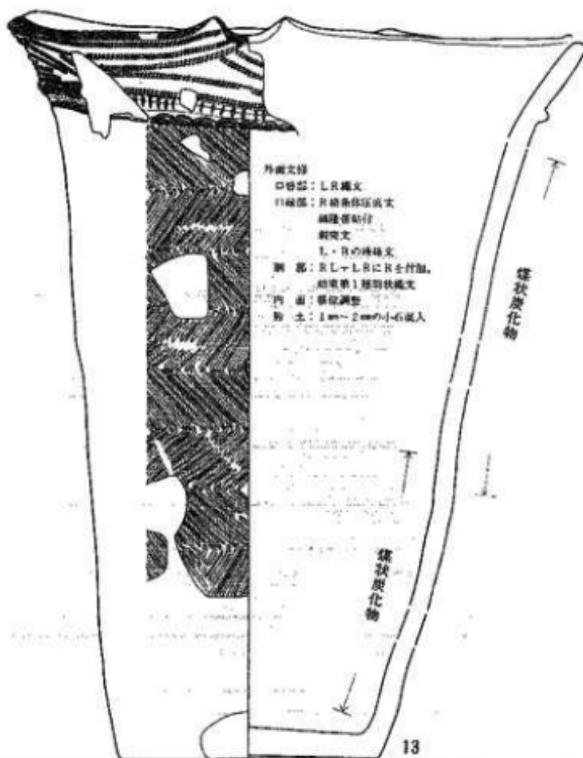


10  
 內面正反面  
 口飾邊：L、R、縐紗  
 口飾邊：L、R、縐紗縐紗  
 口飾邊：縐紗縐紗行（經）  
 縐紗  
 L、縐紗  
 裏：縐紗縐紗  
 內：縐紗縐紗  
 包：L、縐紗縐紗

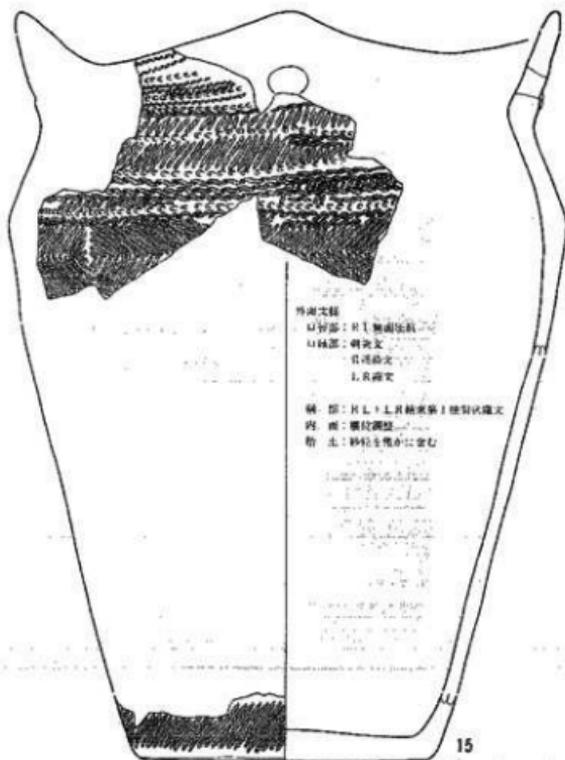
第41圖 遺囑外出土器(前期)



第42図 遺構外出土土器(前期)

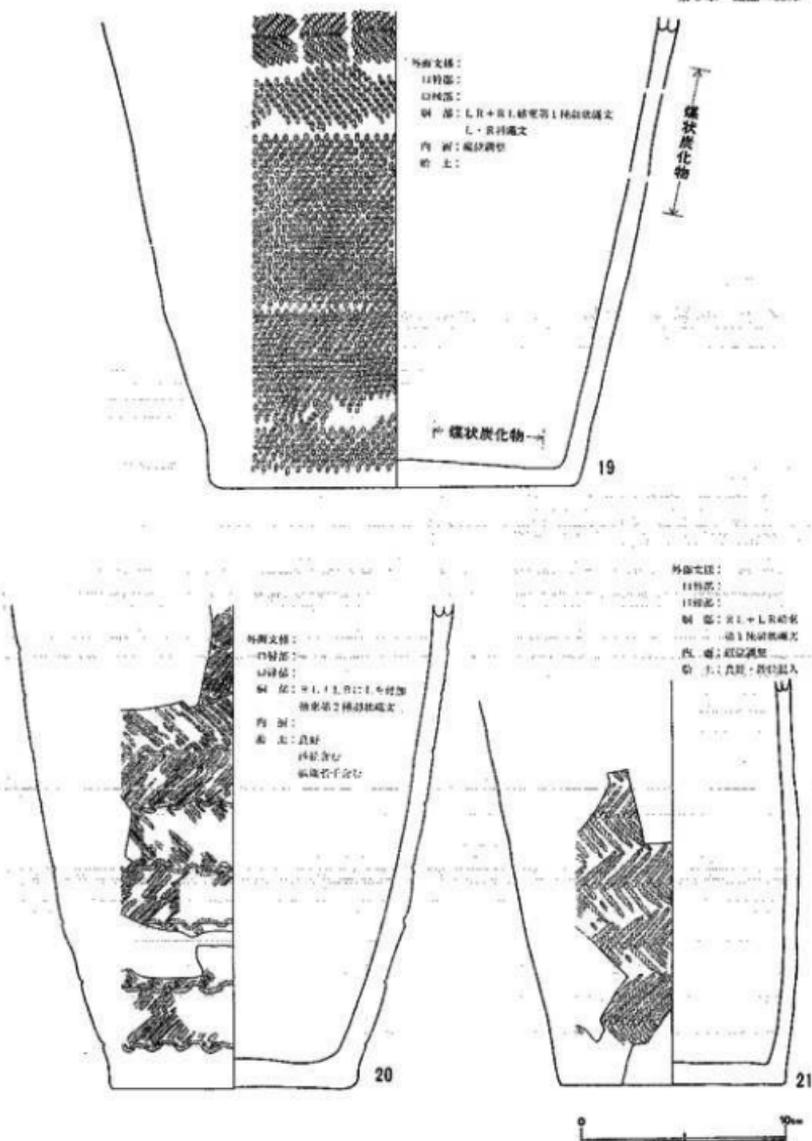


第43図 遺構外出土土器(前期)

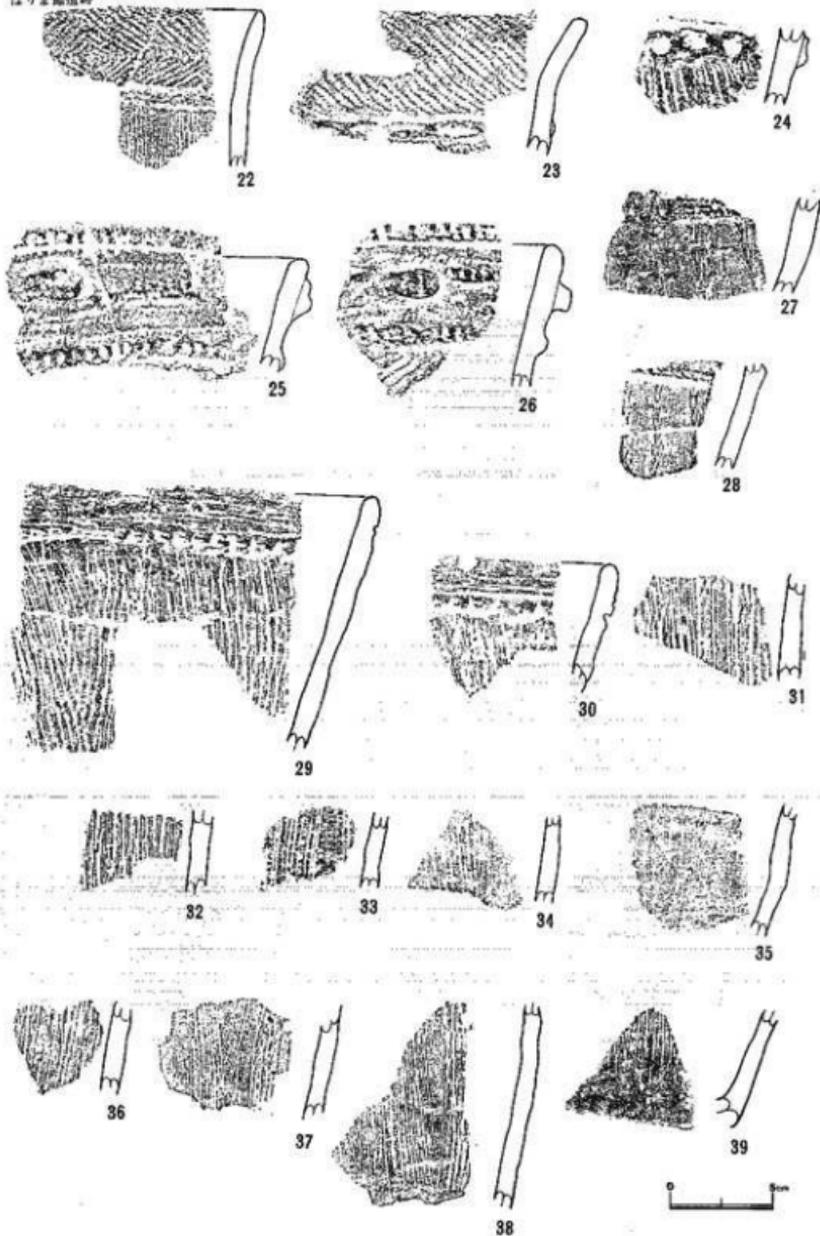


第44図 遺構外出土土器(前期)

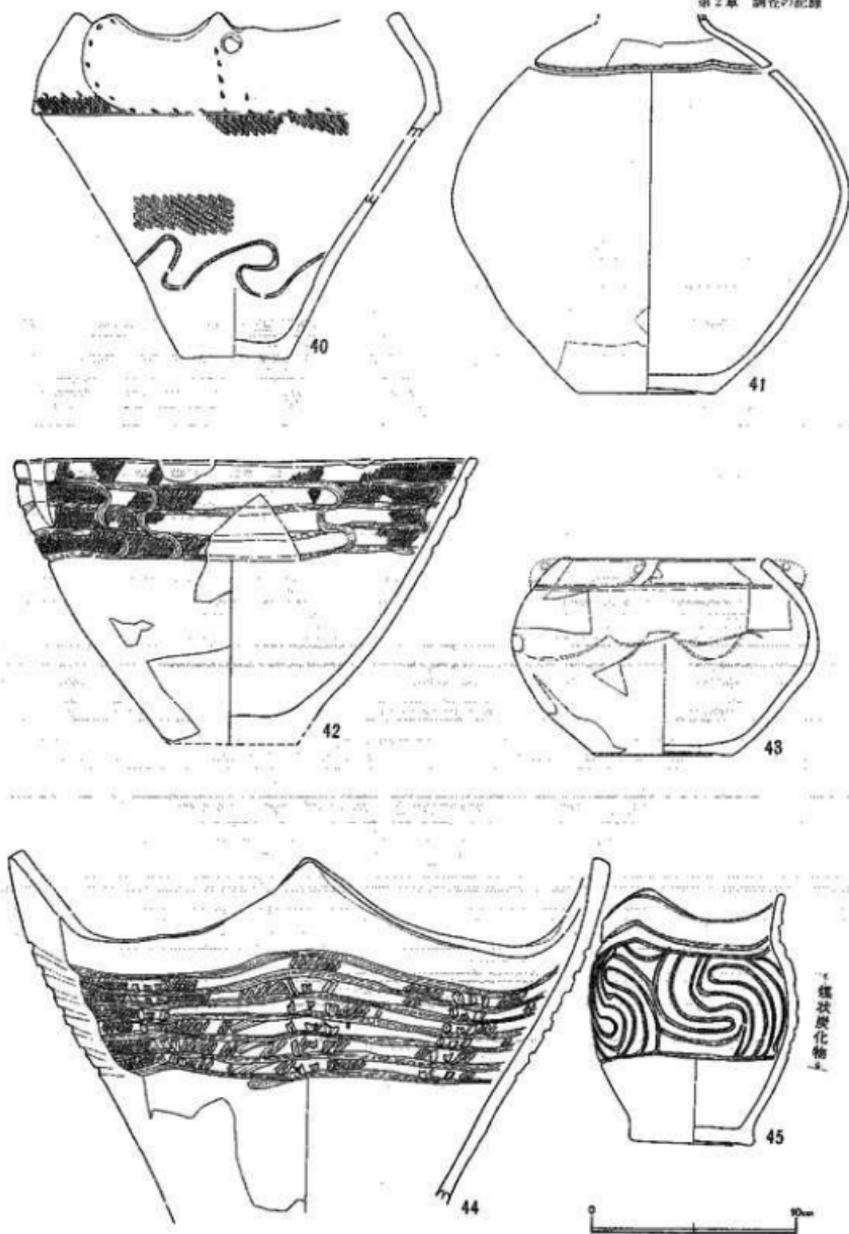




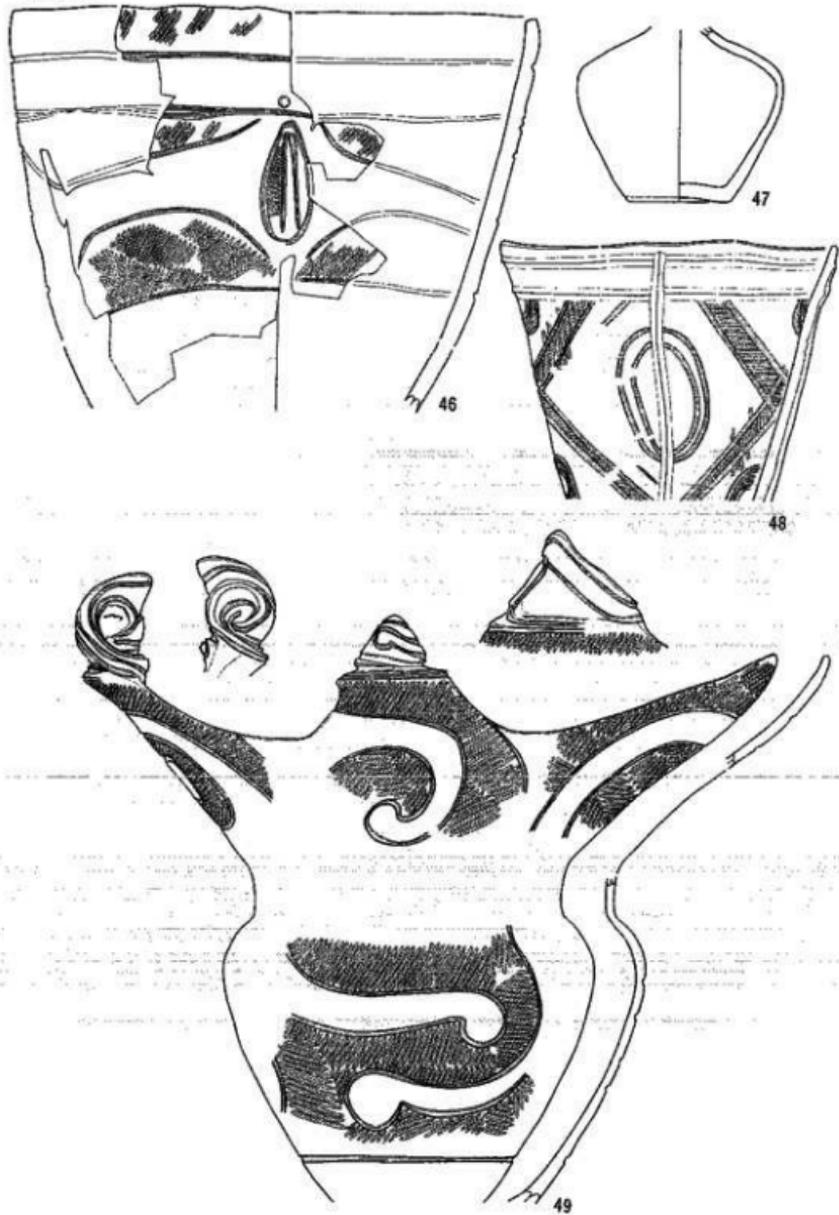
第46図 遺構外出土土器(前期)



第47図 遺構外出土土器拓本(前期)

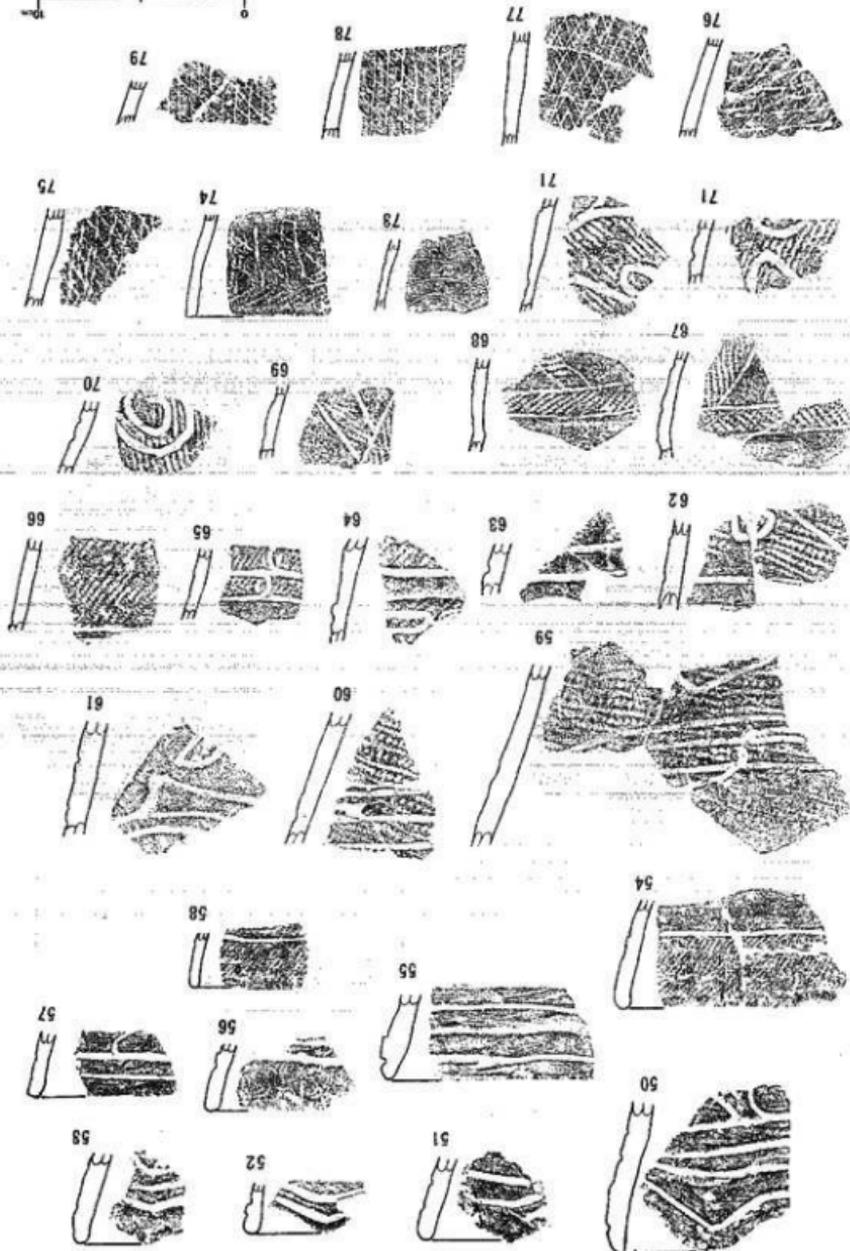


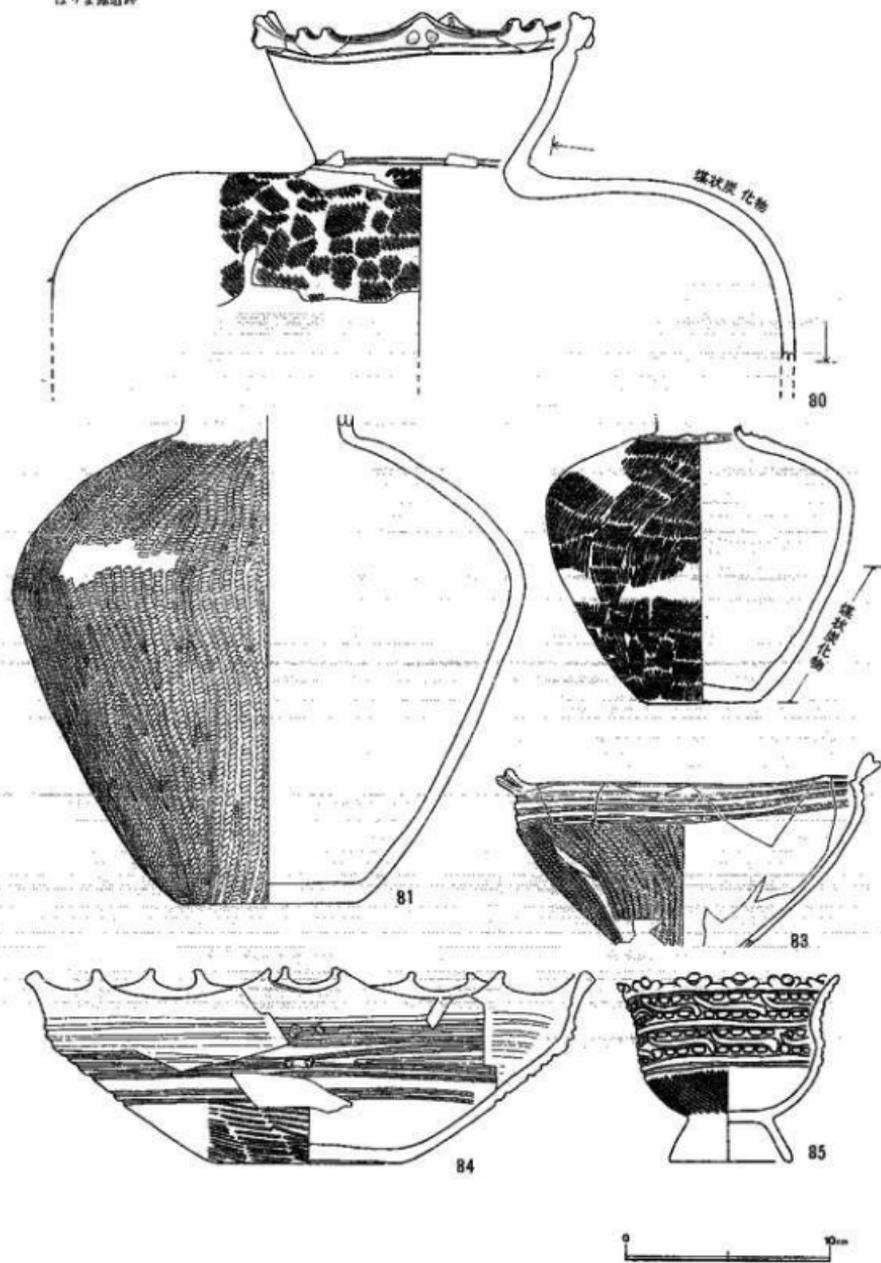
第48図 遺構外出土土器(前期)



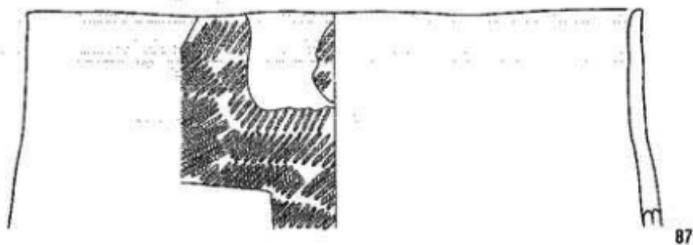
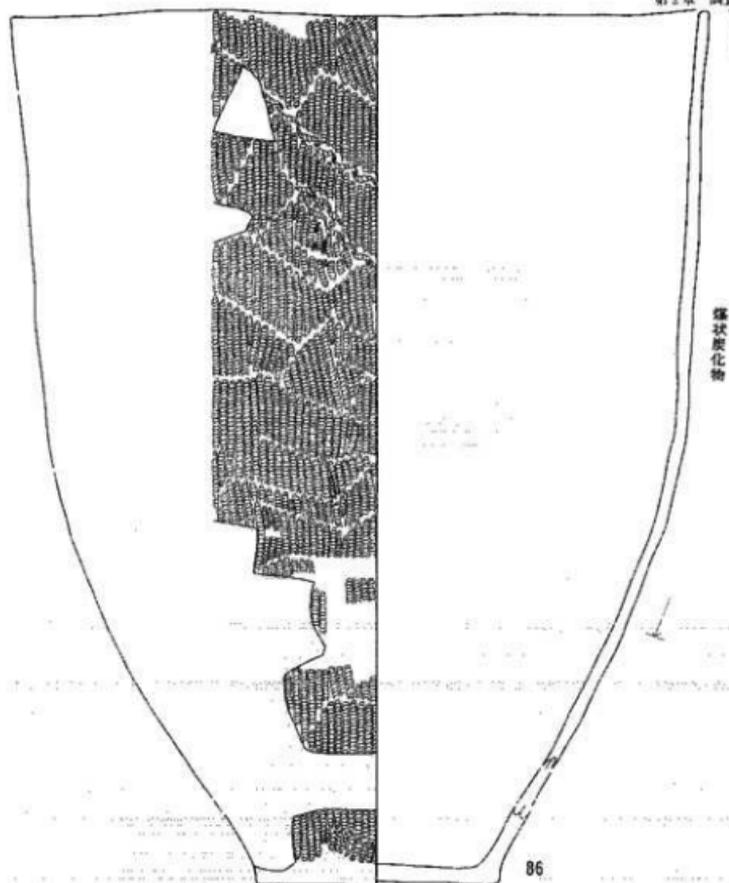
第49図 遺構外出土土器(後期)

圖50 後期(水拓土器外遺構)

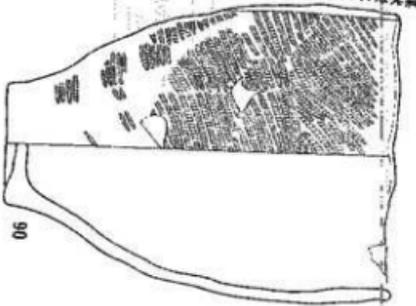
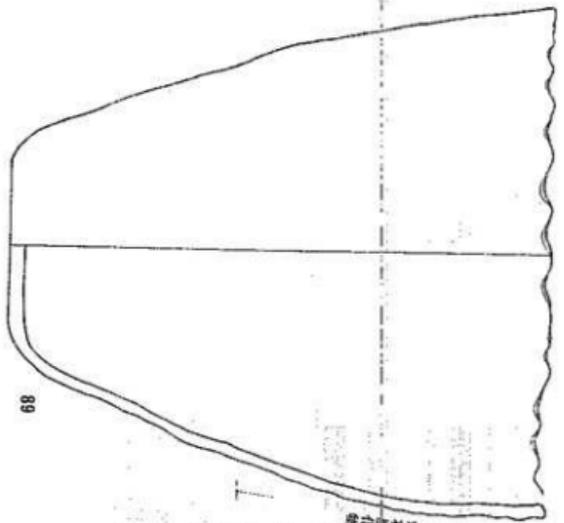
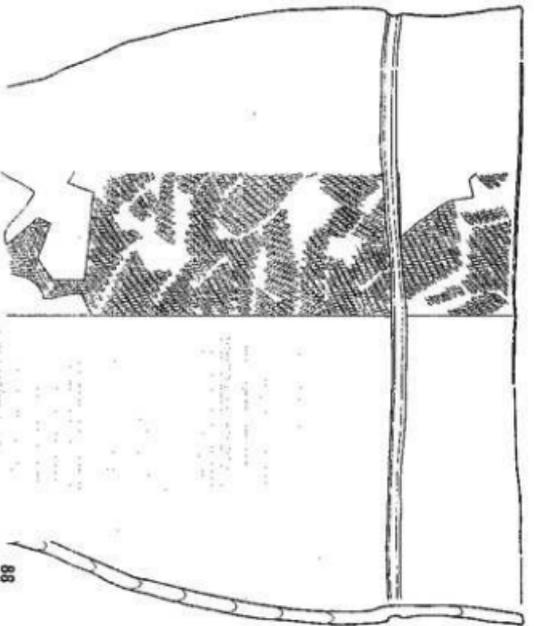




第51圖 遺構外出土土器(晩期)



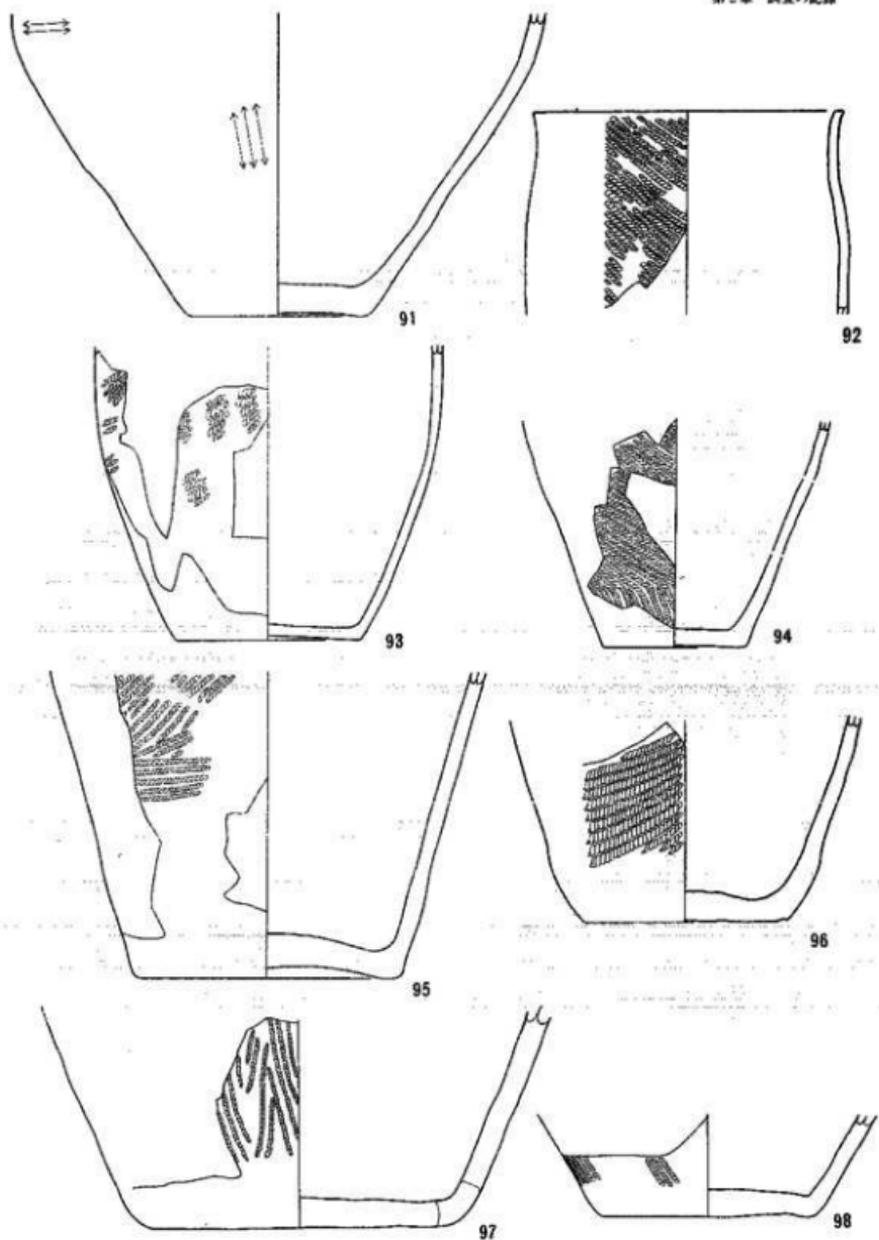
第52図 遺構外出土土器



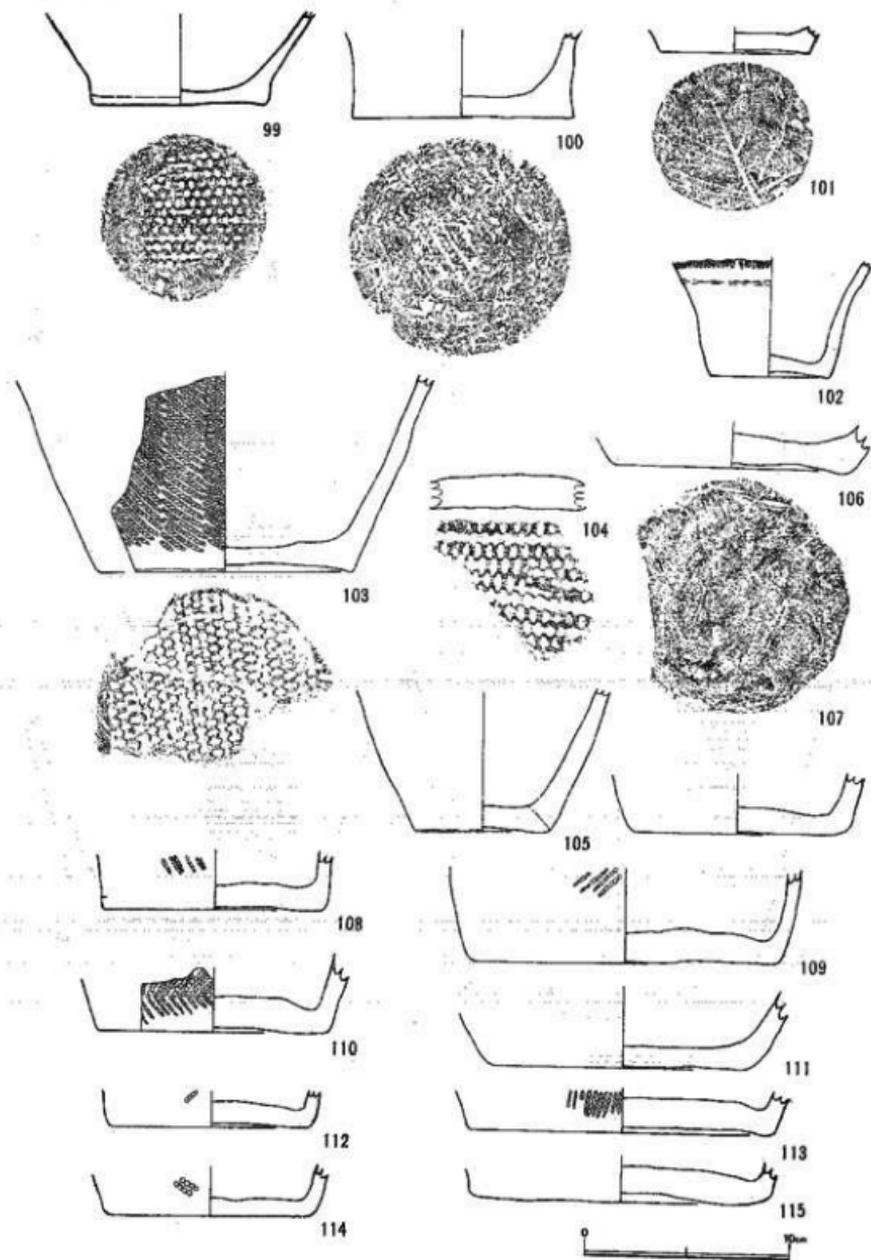
新石器时代



第58图 遗物出土土器

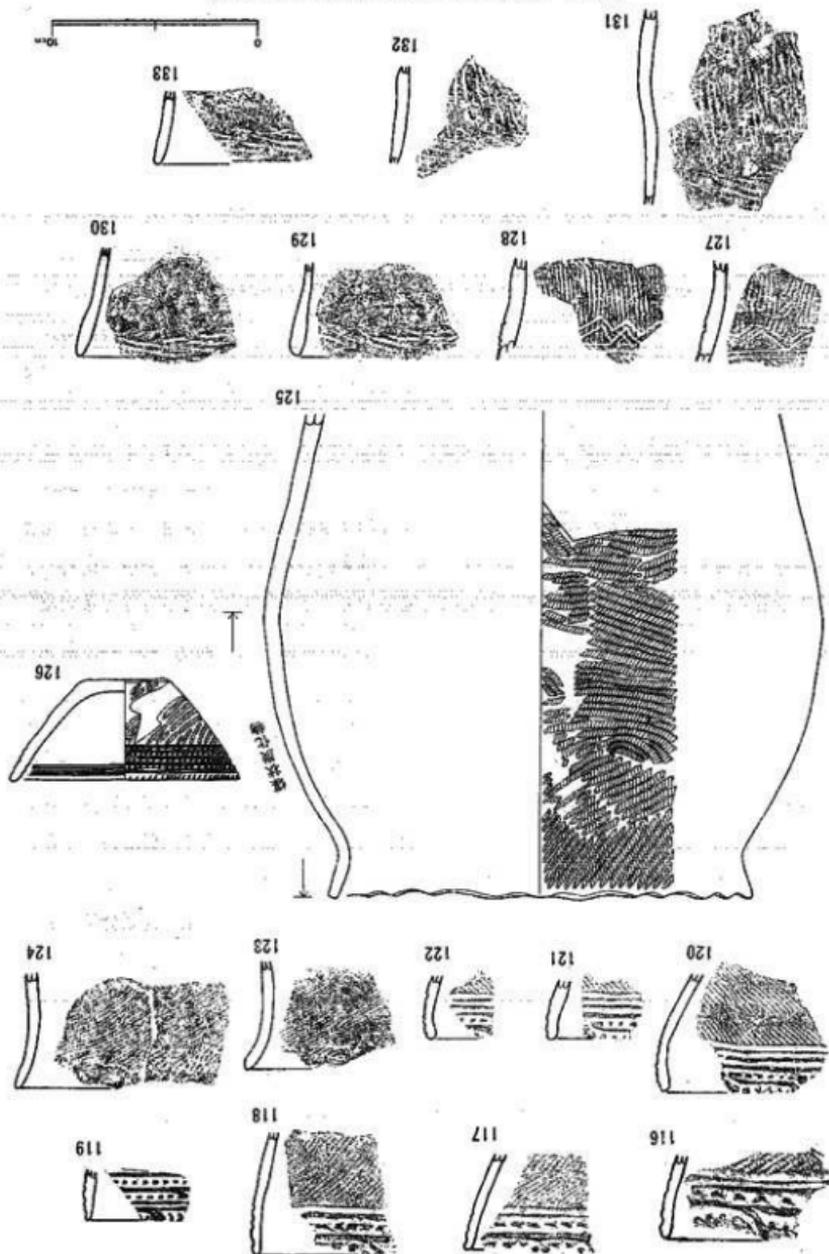


第54図 遺構外出土土器



第55图 遗物出土土器

第55圖 遺構外出土土器・拓本(縄文晩期・弥生)



86は大形の深鉢で、底部から胴部下半は緩やかに、上半はほぼ直つぐ立ち上がるもので、全体に縦にLRの縄文を、その後に胴部上半から斜めに綾絡文を施文するものである。胎土には砂粒が多く混入しており、大変脆い。88は口頸部がややくびれ、そこに1条の浅く、太い沈線をもつものである。89、91は無文の土器で、内・外面を研磨している。89は口縁部が小波状を呈する。97は木目状捲糸文が施されているもので、内外面が研磨されており、胎土に繊維を含むものである。円筒下層d式期の所産と思われる。98も繊維の混入はないものの、焼成、色調器形から同時期と思われる。99、100は無文の土器で暗褐色を呈し、底部には網代痕が見られる。102は胴部下半部が外傾ぎみに立ち上がるもので、底部方向から磨きを加えている。

#### f 土器底部 (第55図101・104・107~115)

底部の文様は網代痕(104)、木葉痕(101)、笹の葉状の痕跡?(106)を有するものがあるがほとんどは文様のないものである。109、111、113、115は大形の深鉢形土器の底部である。いずれも橙色を呈し、内外面に丁寧な研磨がみられるもので、前期の所産と思われる。110、112、114は小形の深鉢形土器で、にぶい橙色~橙で内外面に丁寧な研磨がみられる。110には羽状縄文が認められる。時期は不明である。

## (2) 石器

### 石鏃 (第57図1~6)

数は少なく6点だけである。1~5は無茎のもので、基部は1が円基式、2が平基式で形態は二等辺三角形である。3~5は円基式で、4、5は他のものより厚い。6は有茎で形態は柳葉形を呈する。石質はいずれも硬質頁岩である。

### 石錐 (第57図7~9)

3点の出土である。7、8は錐部の片側に調整剝離のあるもの、9は基部の表裏に調整剝離を行ない、先端に抉りを入れて錐部としているものである。7、8は硬質頁岩、9は頁岩である。

### 石鏃 (第57図10・11)

いずれも楕円形で両側縁を打ち欠いているものである。10は泥岩、11は凝灰岩である。

### 石匙 (第58図12~28)

17点出土した。12~18は横型のものである。12の基部にはアスファルトの付着が認められる。ほとんどは両面に調整剝離を施すが、15は片面のみである。14、16は粗製のもので部分的にわずかに調整剝離を施しているのみである。

19~28は横型のものである。19~27はいずれも片面にのみ調整剝離を施すものである。24、26は粗製のものである。28は両面加工のもので、刃部の1側縁は弧状を呈する。1/2ほどが欠損しており、基部の有無は不明で、所謂石匙とは形状がやや異なるが、石匙として扱った。

石質はいずれも頁岩である。

#### 石剣 (第58図29)

全面が丁寧に研磨されている。断面は三角形に近い形状を呈する。途中で折れている。

#### 鏡状石器 (第59図30～37・39～41)

11点の出土である。30、31は片面を主体に加工したもので刃部が直線的である。32、33、36 37は両面を加工したもので、楕円形に近い形状を呈する。34、35、40、41は片面のみを加工したものである。39は両面を加工したもので先端が尖る。いずれも頁岩である。

#### 石槍 (第59図38)

1点の出土で、半分ほど欠損している。両面に細かく調整剝離を施す。石質は硬質頁岩である。

#### 搔器 (第59図42～49)

形は円形もしくは円形に近い形状のものである。片面のみに、急角度に調整された刃部をもち、断面形は亀甲状を呈するものが多い。石質はいずれも頁岩である。

#### 不定形石器 (第60～62図)

出土数は44点で、各器種中で最も点数が多い。形態上、かなりバラエティーに富むが、大きく9類に分類した。石質はいずれも頁岩である。

#### A類 (第60図50～55)

縦長のもの(50～53)や、刃部が半円状のもの(54、55)である。54、55は破損したものかも知れない。50～52は片面のみの調整で、53～55は表を主に調整している。

#### B類 (第60図56～65)

いずれも内厚である。56～60・65は両面の両側縁を調整し、刃部を作出しているもので、57 65は、調整が先端部にも及ぶ。61～64は片面を主に調整するもの。64は先端部が尖っているもので、錐として使用された可能性がある。

#### C類 (第60図66・67、第61図68～73)

比較的幅の広い刮片で、いずれも片面のみを調整するものである。67～70は加撃方向以外の全周縁を調整するもので、66、72、73は刃部が弧状を呈するものである。

#### D類 (第61図74～78)

主に片面を調整するもので、三角形かそれに近い形状を呈し、74～77は先端部が尖る。

#### E類 (第61図79～81)

形は一定していないが、いずれも片面の弧状となっている所を主に調整しているものである。

F類 (第61図82・83)

いずれも縦長で、長軸のどちらかの幅がやや広がるもので、82は1側縁の連続的な調整によって刃部を作り出している。

G類 (第61図84・85、第62図86～89)

片面の長軸の両側縁を調整するもので、84、86、87は大形である。

H類 (第62図90～93)

主に片面の1側縁を調整するものである。90は刃部が直線的である。

I類 (第62図94～99)

円形もしくは楕円形で、刃部は弧状か円形となるものである。95、98は片面のみの調整である。99は小形で両面の全周縁を調整している。

磨製石斧 (第63図100～108)

出土点数は9点である。石質は緑色凝灰岩、泥岩、輝緑岩、安山岩である。100は長さ23.6cm、幅7.4cmと大形で、両側縁に沿って敲打痕がみられ、敲石として転用されたものであろう。108は擦切石斧である。体部に表裏の段ズレによる擦切痕が残る。

半円状扁平打製石器 (第64図、第65図119～127・131)

19点出土した。石質は凝灰岩が主で、次いで安山岩である。

平面形態及び製作技法により5分類した。

A類—周縁を打ち欠いているもの。

B類—長軸の両端に打ち欠きにより抉りを入れているもの。

C類—半円状を呈する面を打ち欠いているもの。

D類—周縁もしくは1側面を部分的に打ち欠き、直線部に磨擦痕がみられるもの。

E類—周縁を打ち欠いているが、磨擦痕の幅が薄いもの。

A類 (第64図110～116)

7点である。平均は長軸19.1cm、短軸9.1cm、厚さ3.4cm、重さ802gである。

表裏の周縁を打ち欠いているものが多いが、110、111、113は直線部の片側に、部分的にしか打ち欠きを行っていない。110～113、116は比較的大形で肉厚である。114、115は他のものよりやや小さく薄い。打ち欠きは丁寧である。

B類 (第64図117・118、第65図119・120)

4点である。平均は長軸11.2cm、短軸7.7cm、厚さ3.1cm、重さ523gである。

117・118は両端に抉りがあり、直線部のみを打ち欠き、半円状を呈する部分(以下、弧状部とする)を部分的に打ち欠く(117)か、全くそれを行わない(118)もので磨擦痕の巾は3.0cm前後と広い。119、120は半分ほどで折れて片方にしか抉りがないが、両端にあったものと思

われる。いずれも両側面に打ち欠きが認められ、119の直線部には磨擦痕が明瞭に残る。挟りを有する部分を作り出す場合、いずれも打ち欠きによるものである。118の場合は短軸の両側縁の挟りを有する部分全体に、凹凸が見られ打ち欠き痕がほとんど残っておらず、磨擦痕を有する部分にもその痕跡が著しく多い。これは本石器が本来持っていた機能とは別の2次的な痕跡で、物を敲いた結果できたものと思われる。

#### C類 (第65図121-124・127)

5点である。平均は長軸16.0cm、短軸8.6cm、厚さ3.2cm、重さ598gである。121、124は打ち欠き部分にわずかに磨擦痕があるが、122、123、127は自然面となっていた直線部に3.0cm-3.5cmの幅で、明瞭に磨擦痕を残す。これらの違いはおそらく対象物が異なり、物によって使い分けたものと思われる。

#### D類 (第65図125、126)

2点である。平均は長軸15.7cm、短軸7.2cm、厚さ3.35cm、重さ490gである。いずれも長軸の両側縁がほぼ平行になるもので、長軸の一方の側縁に磨擦痕がみられる。いずれも短軸の1側縁が丸みをおびており、敲打痕が認められる。

#### E類 (第65図131)

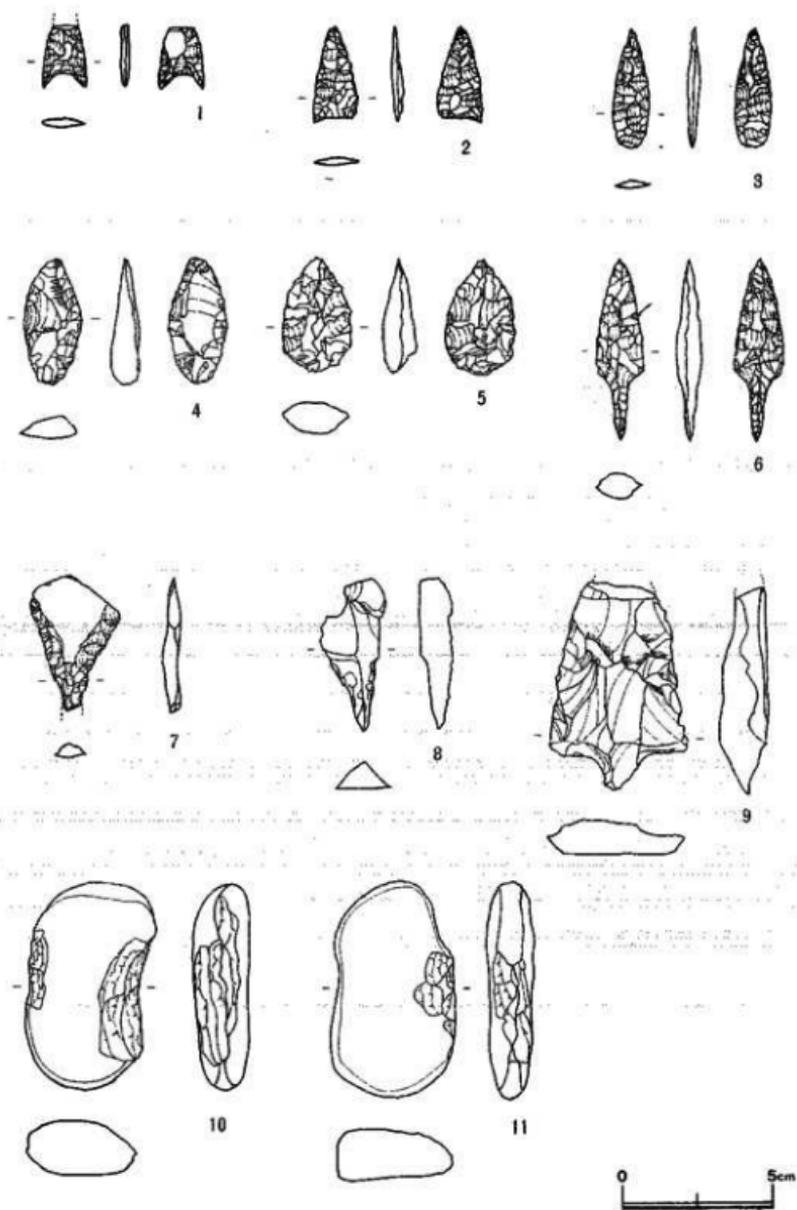
1点である。長軸22.5cm、短軸8.8cm、厚さ2.3cmと他のものより比較的大形で薄い。重さは500g。周縁を打ち欠いたもので、直線部は磨擦痕で打ち欠きかのはっきりしない。薄く剥がれやすい板状節理の石を用いており、磨擦痕の幅は0.5cm-0.7cmと、他のものに比較して狭い。

本石器はいずれも板状に割れやすい性質の石を使用しており、形態はD類を除きいずれも半円状かそれに近い形状を呈する。磨擦痕を有する部分は打ち欠いた所でしかも長軸の直線部にあるものがほとんどである。その幅は、狭いもの(A類、C類121・124)と広いもの(B類C類122・123・127・D類)があるがこれは使用した結果で、使用度の高いものほど擦り減って広い面を持っているものと考えられる。E類としたものは薄く、磨擦痕の幅は狭く、ほぼ一定であることから、石鐮的な機能を持つのかも知れない。

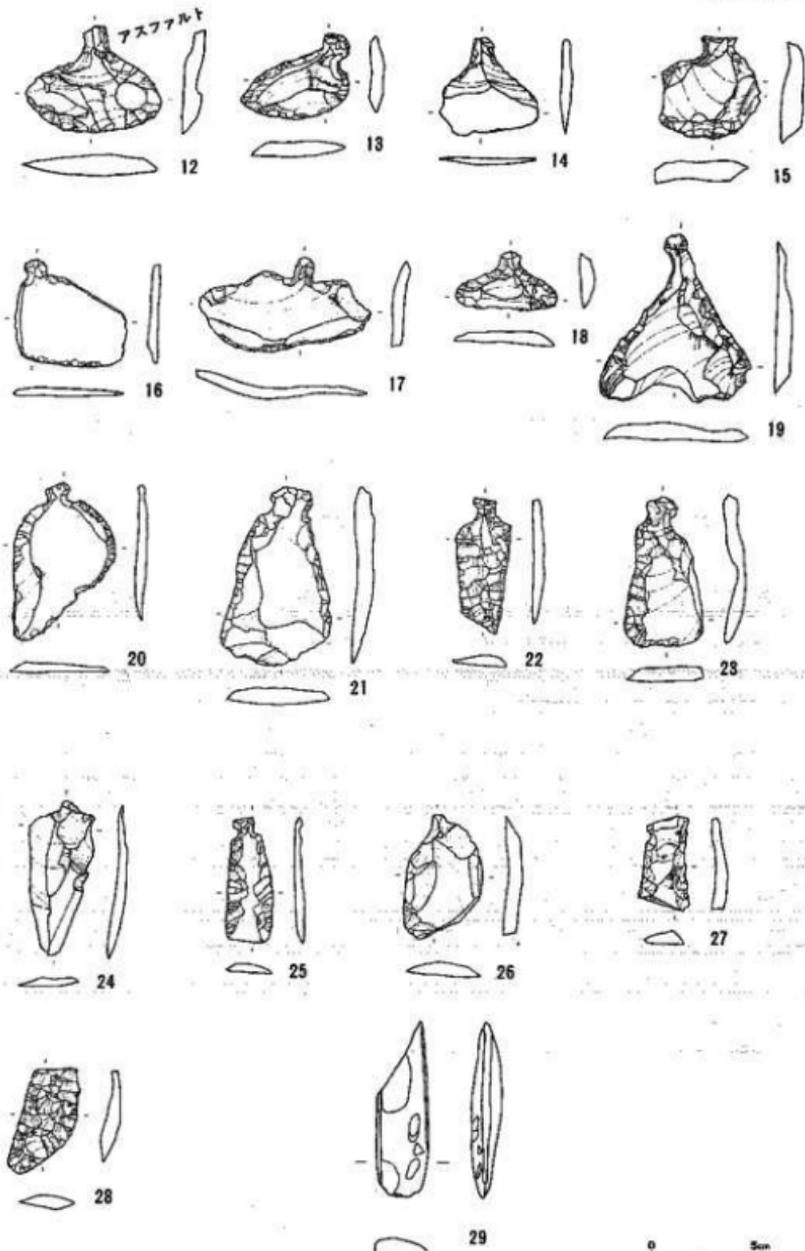
#### 挟入扁平磨製石器 (第65図128-130)

3点である。129、130は短軸の1辺に挟りがみられ、他の短軸は先細りを呈する。全体を挟りにより成形しているが、長軸の両側縁か1側縁に打ち欠きの痕跡がわずかに残ることから打ち欠いた後に成形したものである。両側縁に磨擦痕が残る。128は半分が欠損しており挟りはないが、上記の2点と同じ特徴を持つことから本石器の仲間とした。129は長軸16.0cm短軸8.0cm、厚さ1.8cm、重さ320g、石質は凝灰岩である。130はそれぞれ18.8cm、8.5cm、2.8cm、640gで安山岩である。128の石質は凝灰岩である。

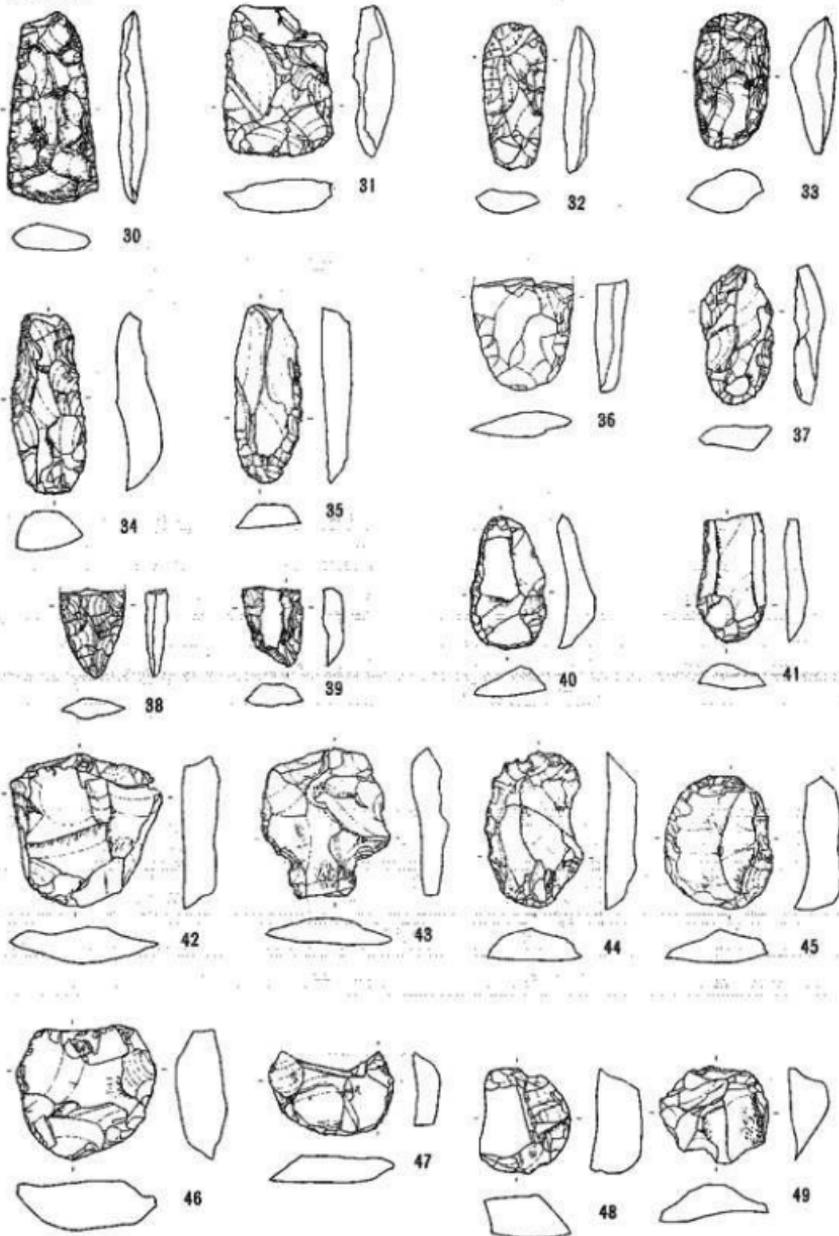
#### 磨石 (第66・67図)



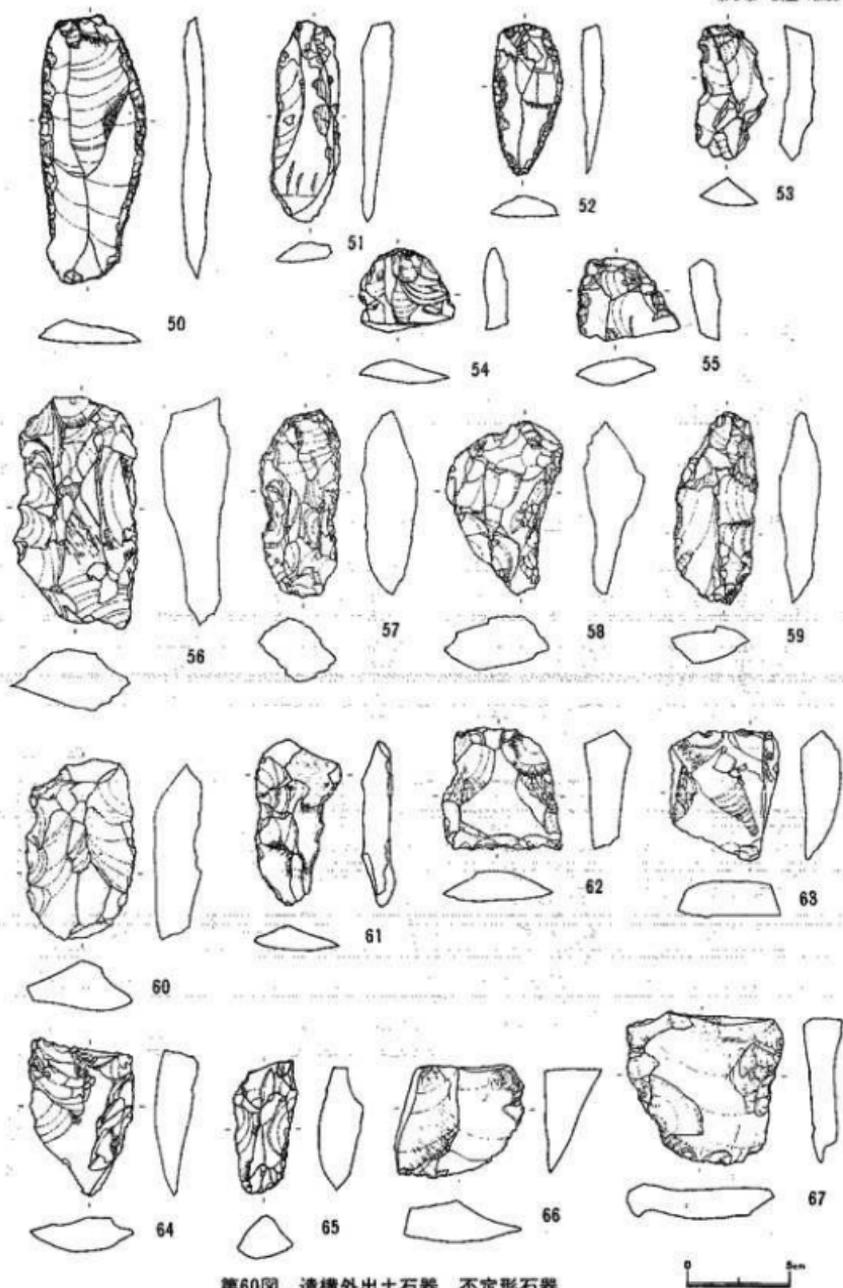
第57図 遺構外出土石器 石礫・石錐・石鏃



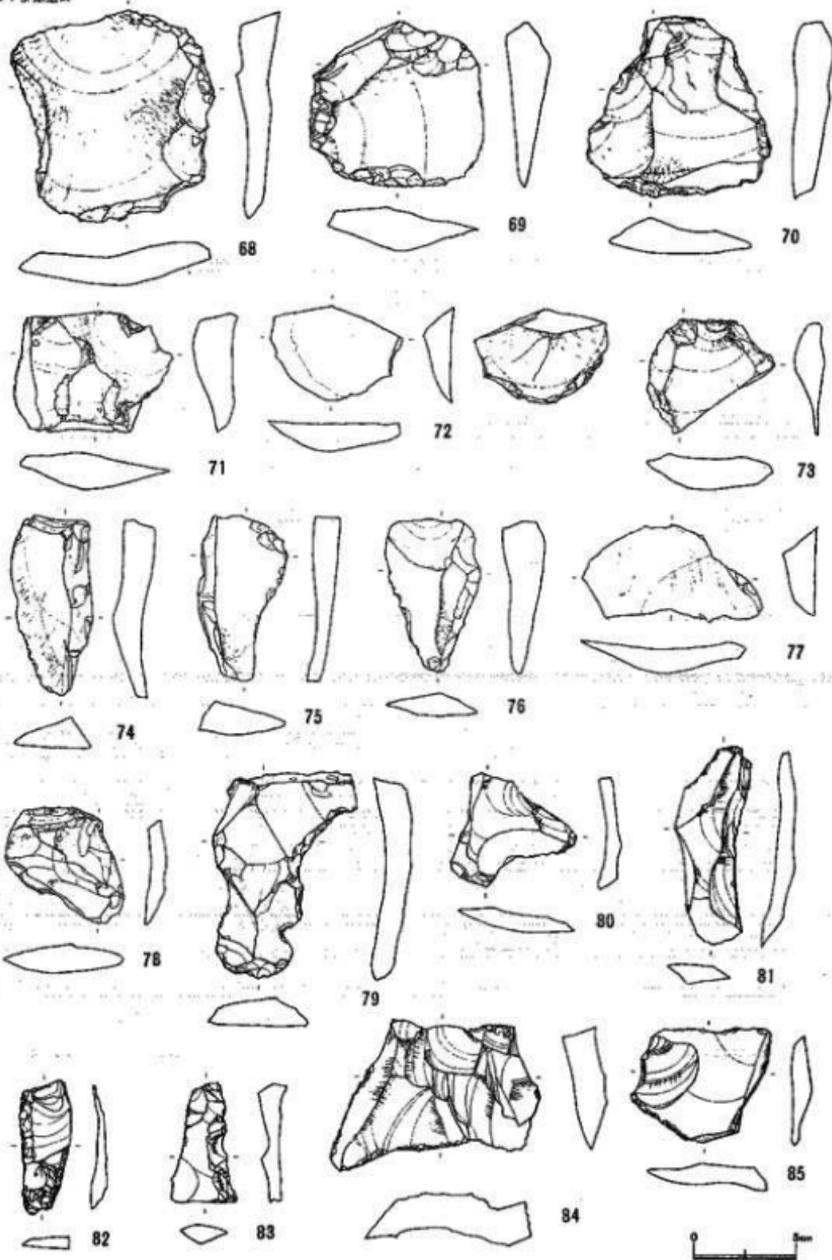
第58図 遺構外出土石器 石匙・石剣



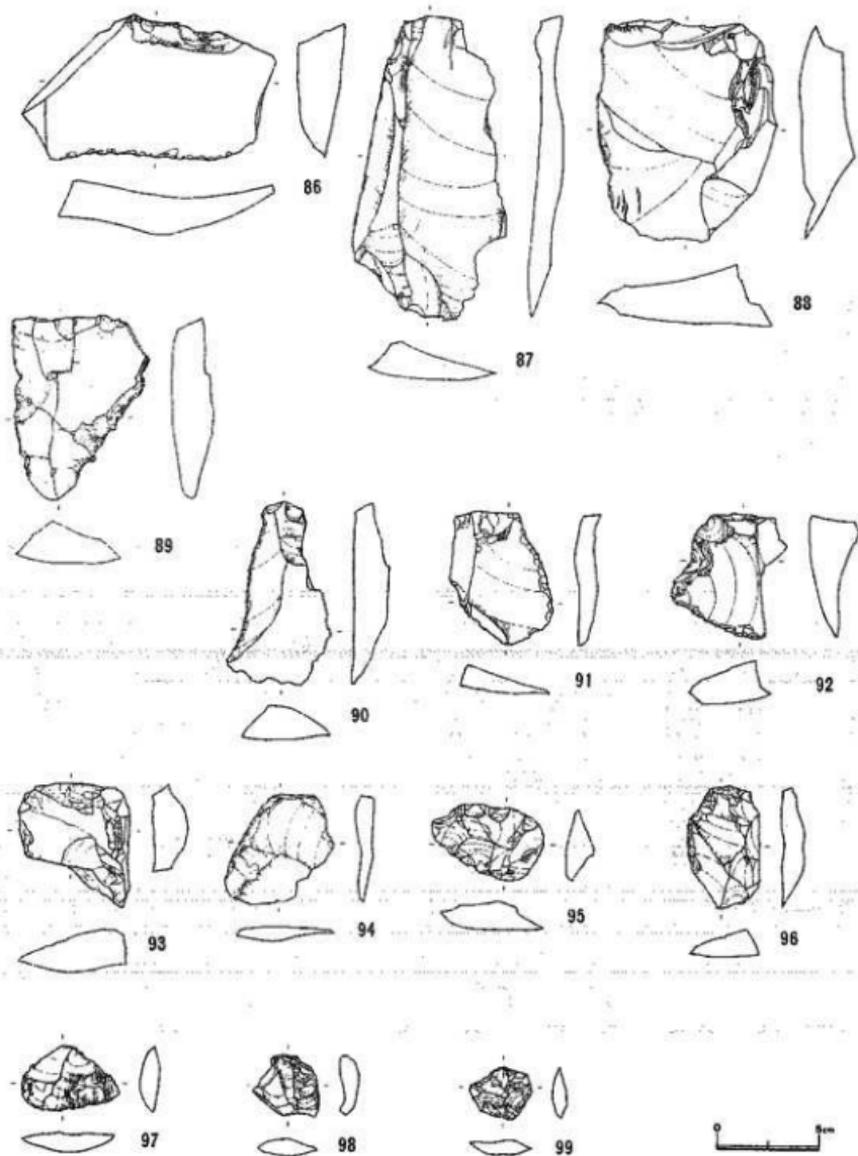
第59図 遺構外出土石器 筒状石器・石槍・擲器



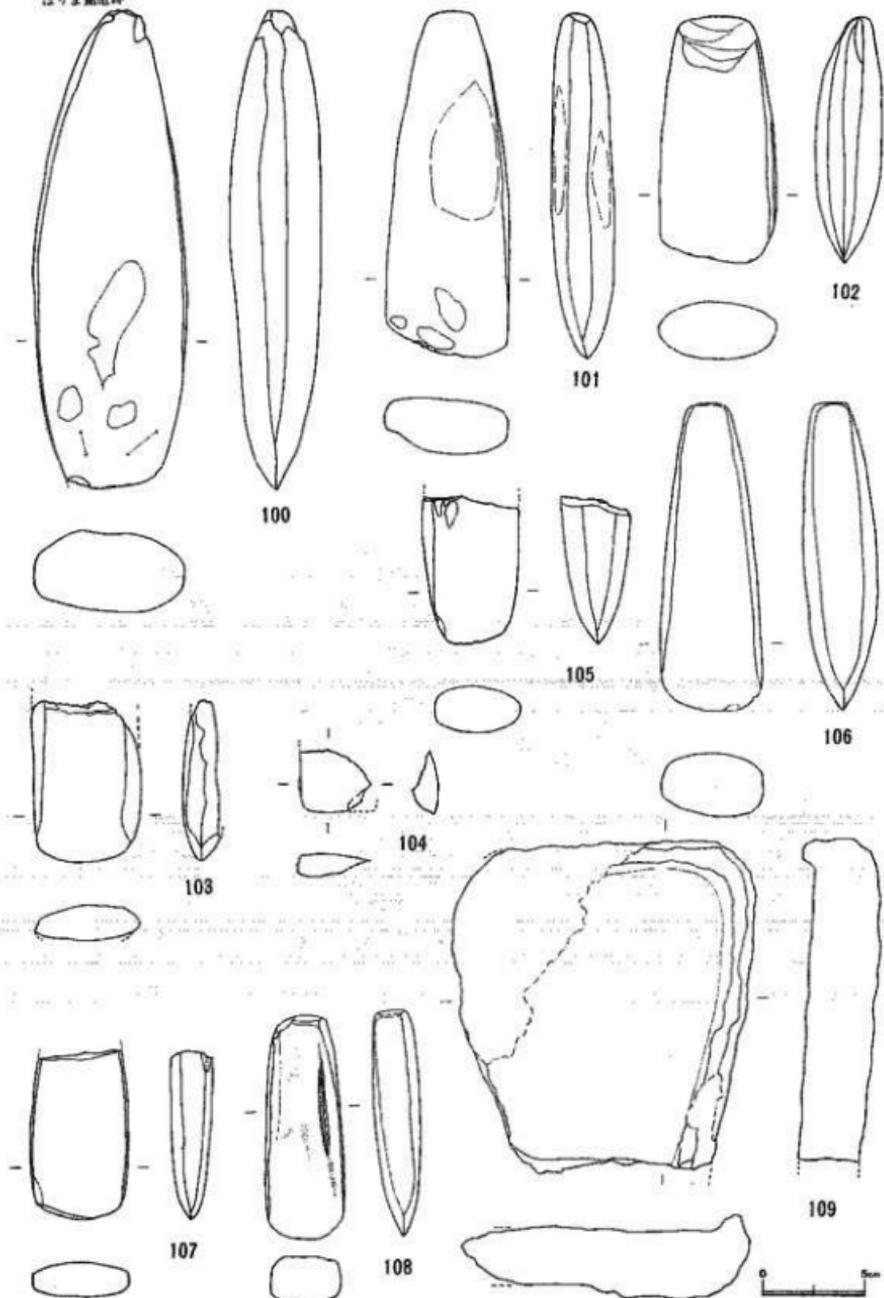
第60図 遺構外出土石器 不定形石器



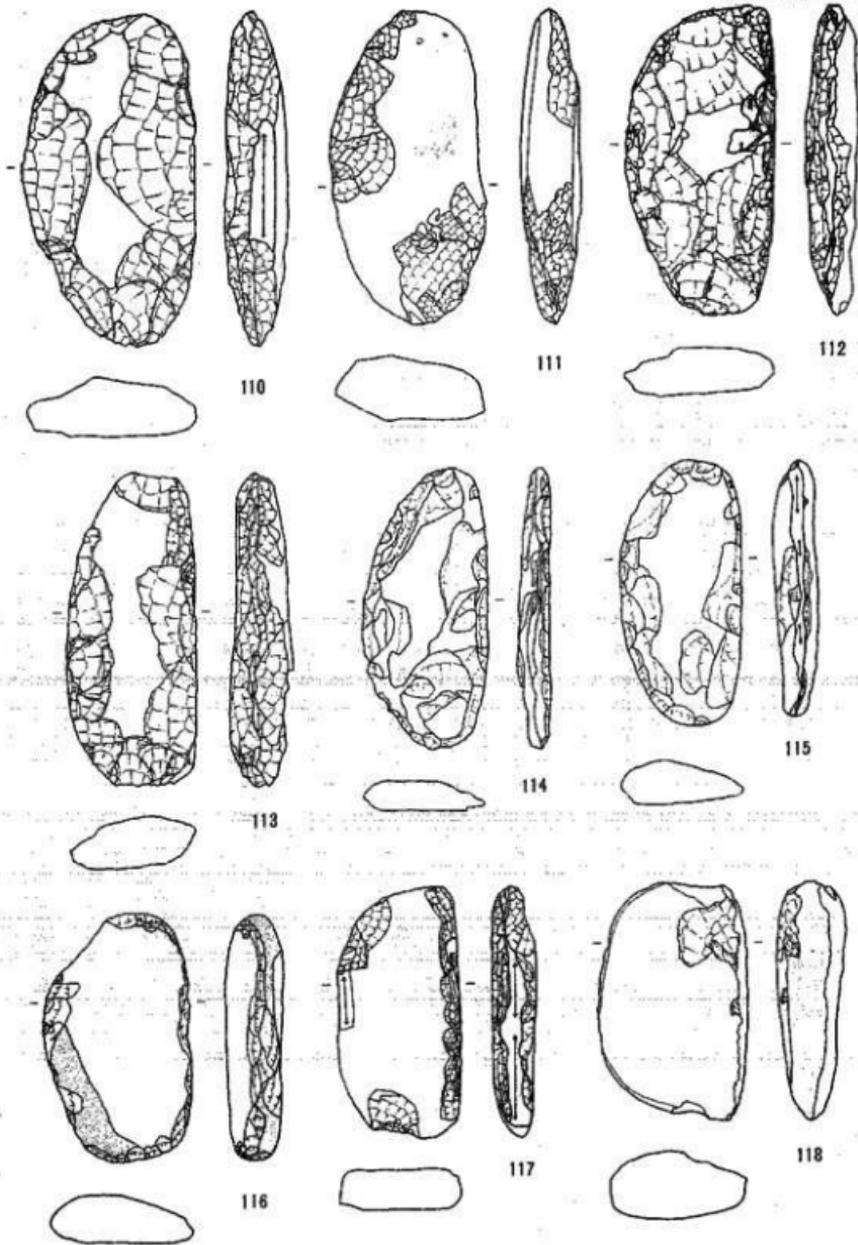
第61圖 遺構外出土石器 不定形石器



第62図 遺構外出土石器 不定形石器

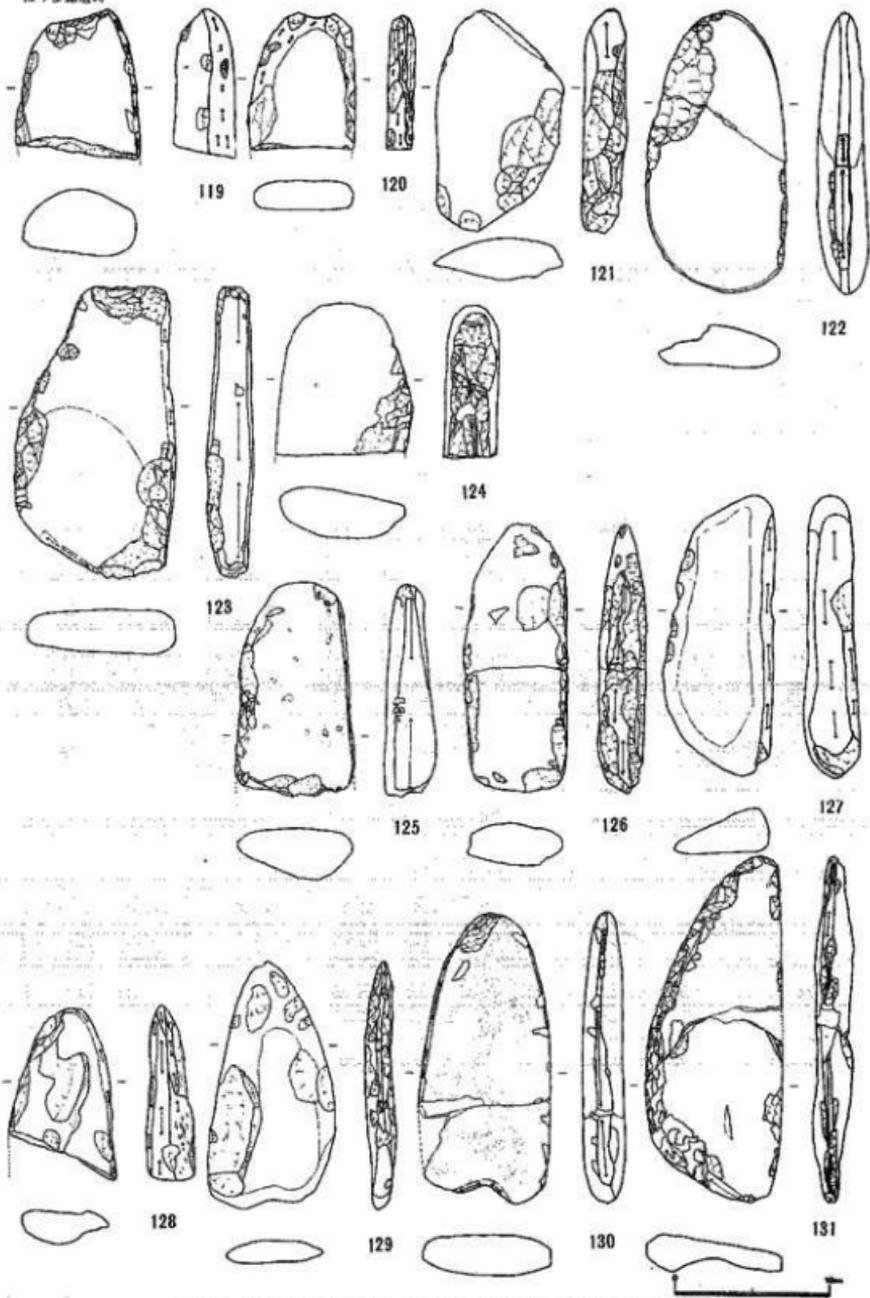


第63圖 遺構外出土石器 磨製石斧・石皿



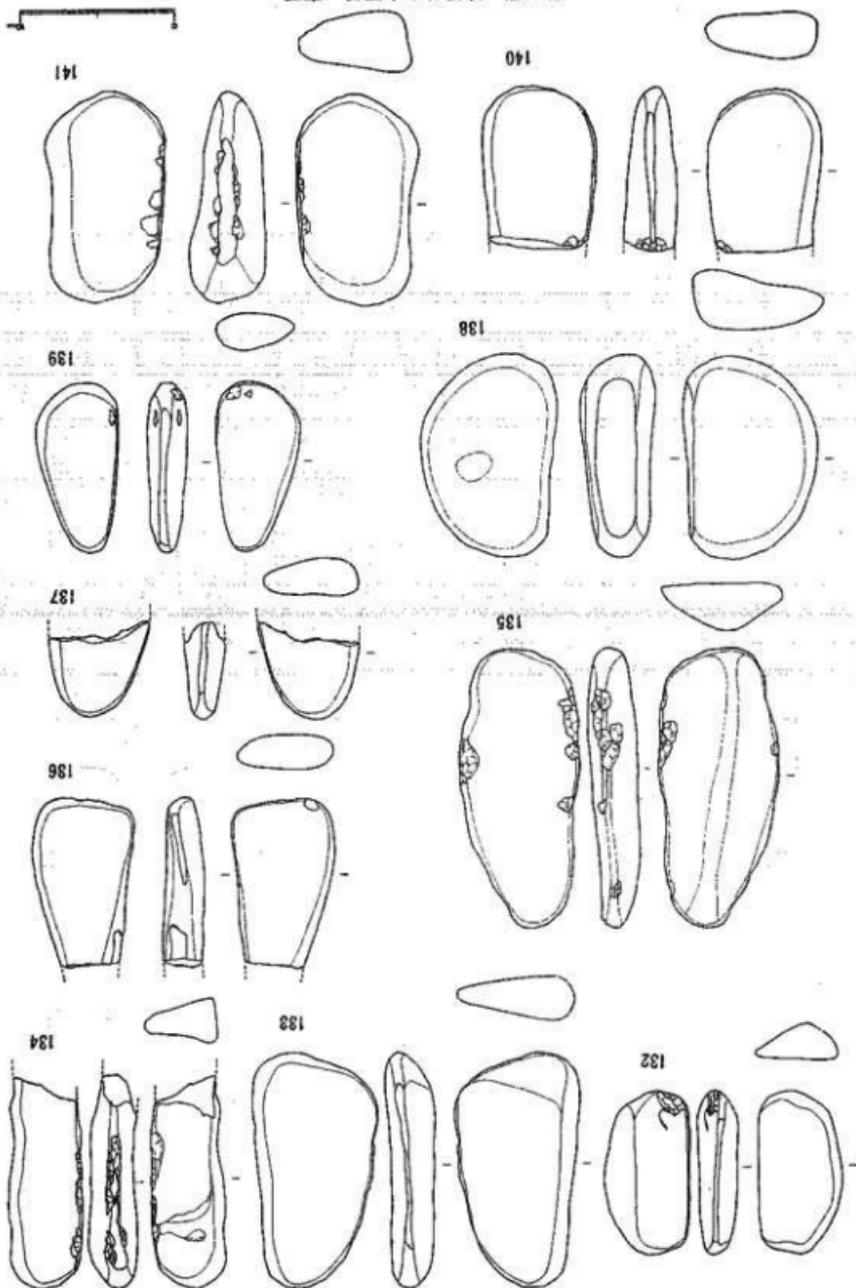
第64図 遺構外出土石器 半円状扁平打製石器

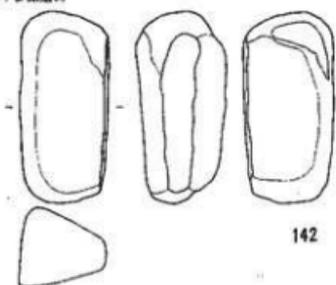




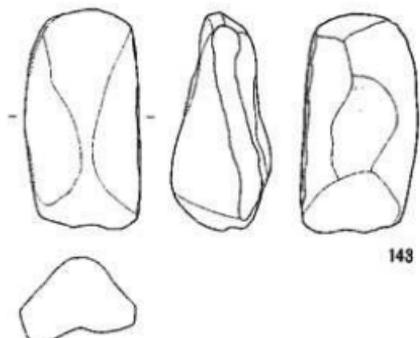
第65図 遺構外出土石器 半円状扁平打製石器・挟入扁平磨製石器

第66圖 海樽外比尺形器 圖五

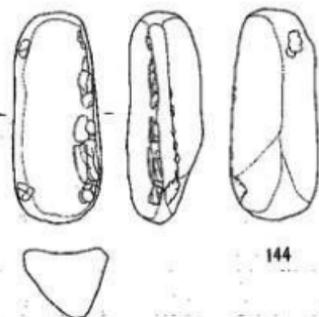




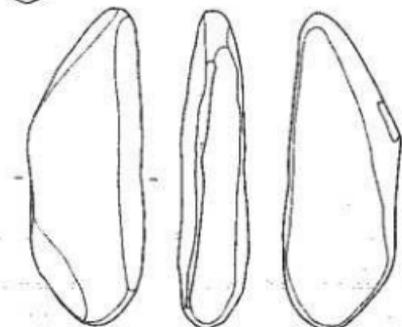
142



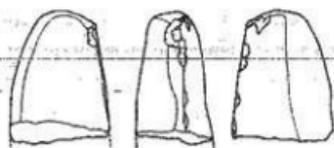
143



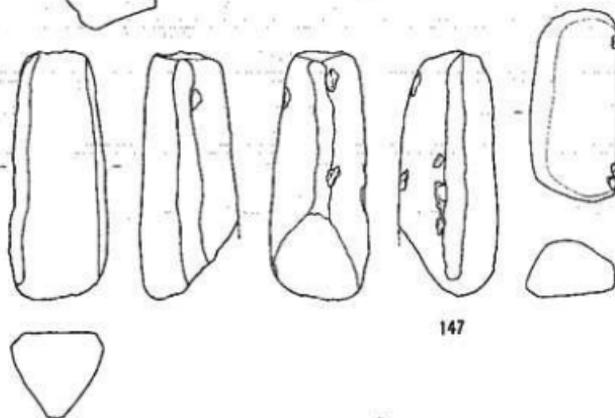
144



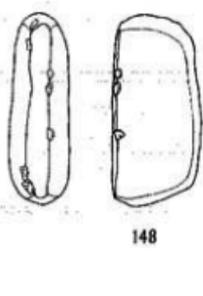
145



146



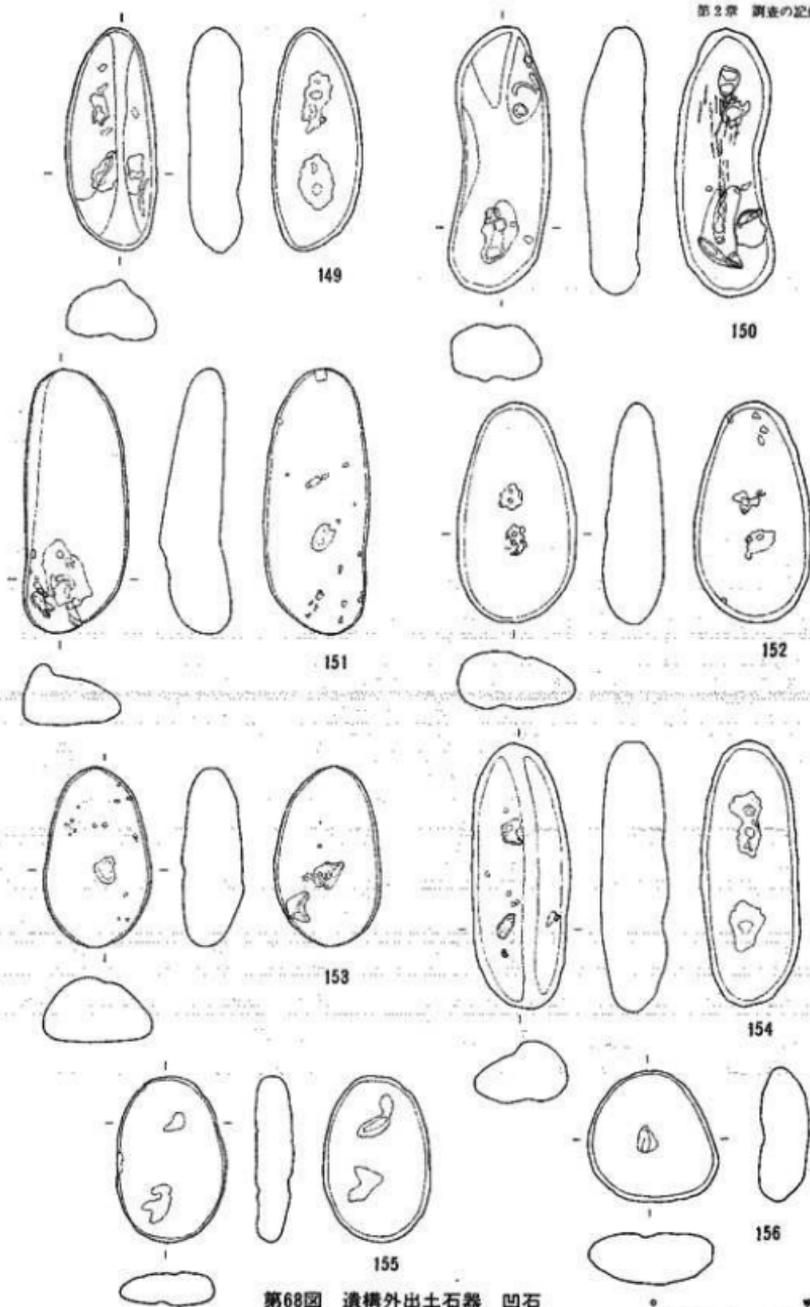
147

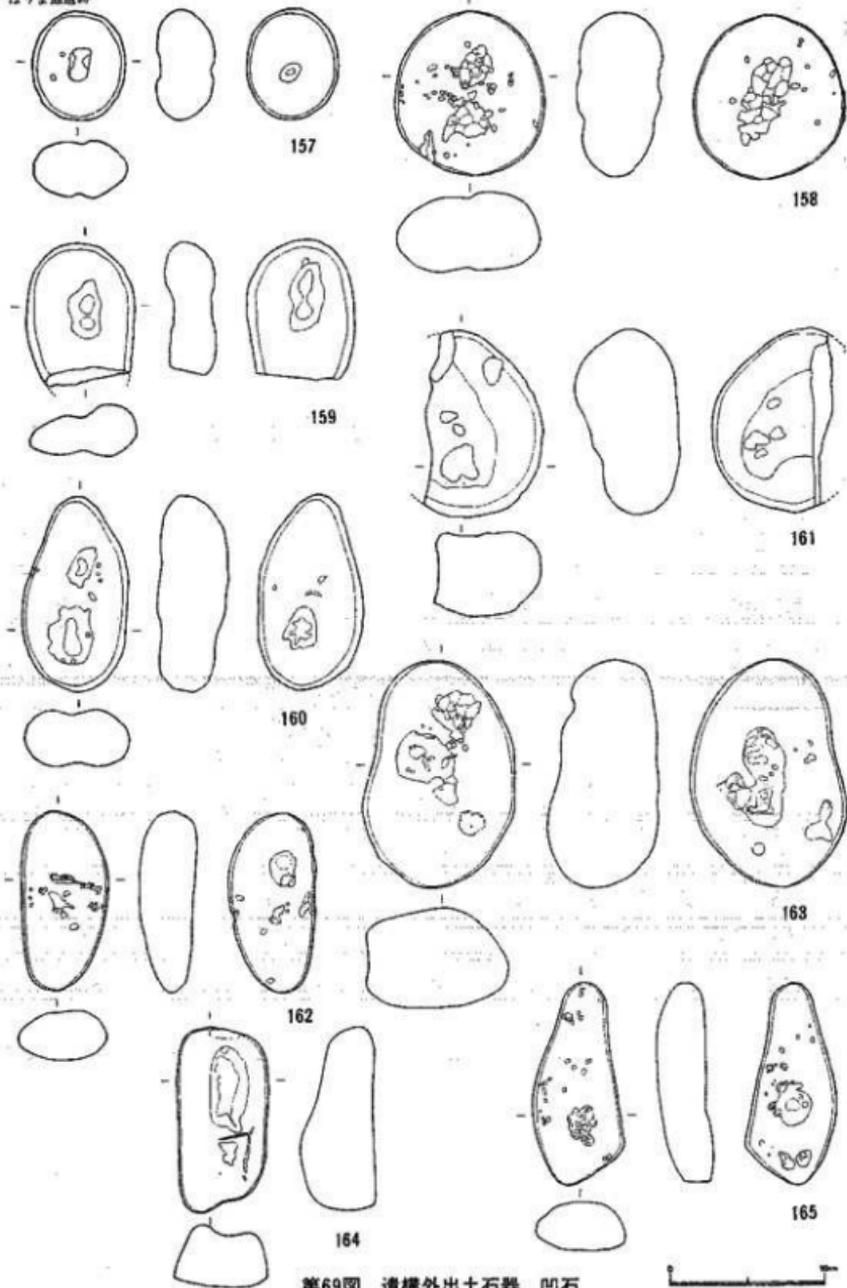


148



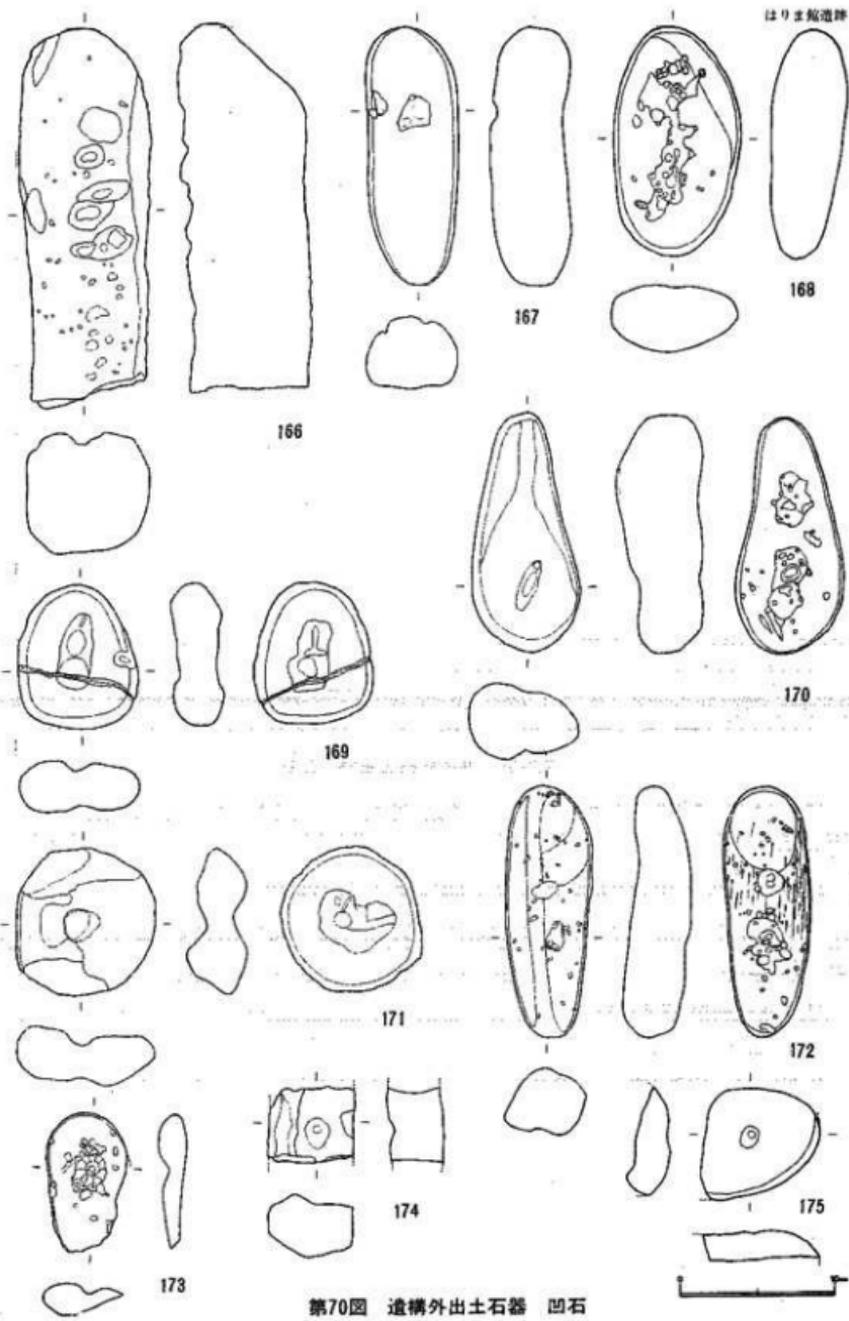
第67圖 遺構外出土石器 磨石



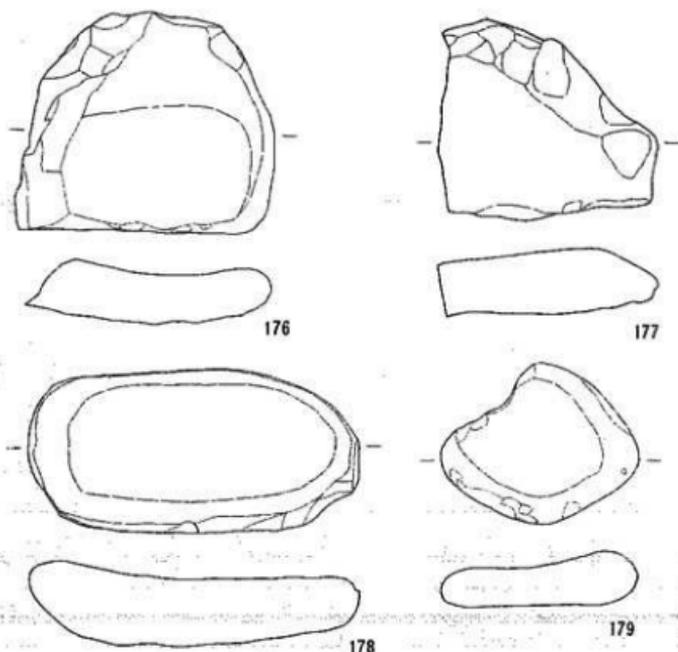


第69图 遺構外出土石器 凹石





第70図 遺構外出土石器 凹石



第71図 遠構外出土石器 台石

17点である。凝灰岩が主体を占め、次いで安山岩である。両端もしくは片側に敲打痕をもつものが多い。

132～137、139、140は磨擦痕が長軸の1側縁にあり、その幅が狭い。

138、141、142、144、146、148は断面形が略三角形を呈し、使用度が高かったとみえ、磨擦痕の幅が広い。

147は全体に磨擦痕がみえる。

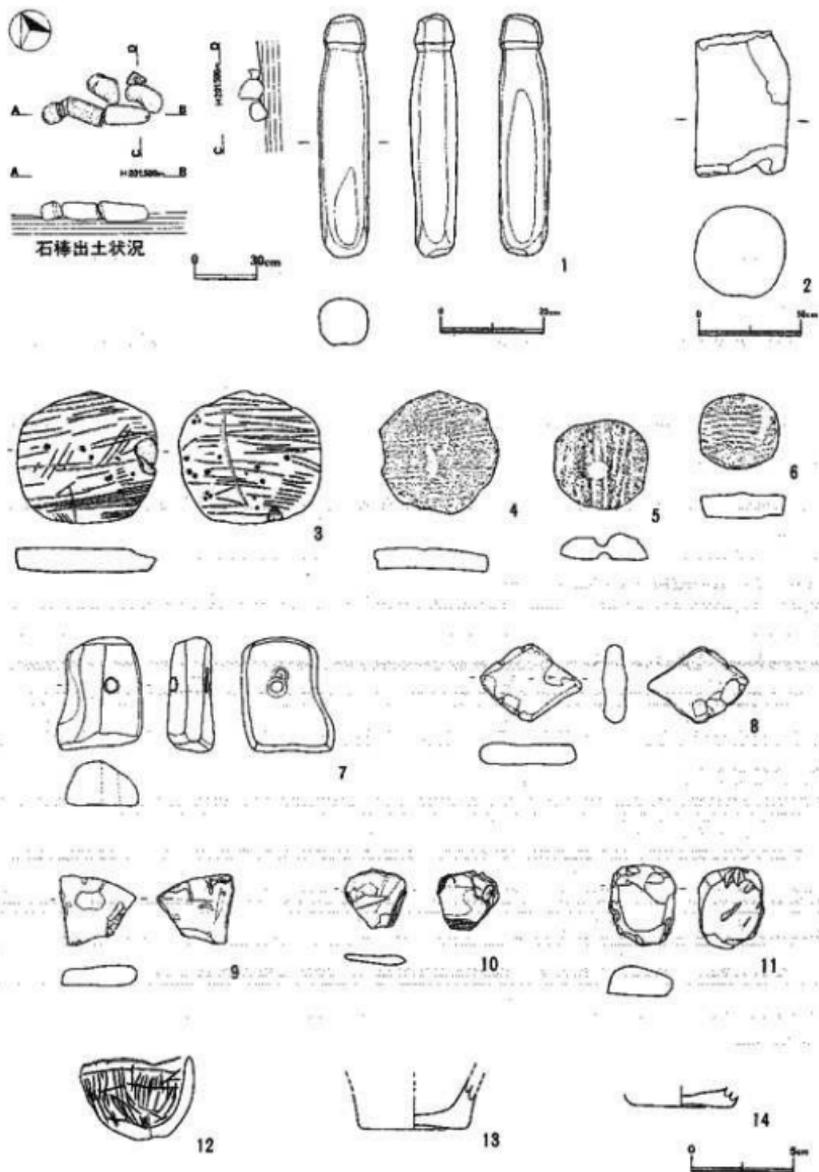
#### 凹石（第68～70図）

29点である。石質は安山岩・流紋岩が多く、次いで凝灰岩である。いずれも自然石の形を変えることなく利用している。

器形は長方形を呈するもの、円形を呈するもの、楕円形を呈するものがあり、凹みは2～4箇所のものが多い。

#### 石皿（第63図109）

縁をもつものを形態上から台石と区別して、石皿とした。



第72図 遺構外出土石製品・土製品・石棒

1点の出土で、多少は現存していない。

中央部は平坦で、脚はない。石質は凝灰岩と思われる。

台石（第71図176～179）

4点の出土である。扁平な自然の河原石を使用している。176、178、179は中央部が凹み177は平坦である。

石質は安山岩である。

石棒（第72図1・2）

2点出土している。石質は1が石英安山岩、2が安山岩かと思われる。1は長さ47.7cm、幅9.7cmで、先端を男根状に成形した有頭のもので、頭部に強いくびれをもつ。断面は隅丸方形で長軸の4側面が成形により平坦になっている。調査区の中ほどの東側のL G61グリッドで、3ヶの自然石と一緒に、3つに折れた状況（第72図出土状況図参照）で出土した。その周囲及び下に遺構は検出されなかった。2は欠損しているもので全体の形状は不明である。幅9.0cmで、断面は1に比べ、丸みをおびるが、長軸の2側面に、成形による平坦面を残す。1、2とも形態から、中期の所産と思われる。

(3) その他の遺物（第72図3～14）

①土製品

ミニチュア土器（12～14）

3点出土した。12は外面に浅い沈線を縦・横・斜めに描くもので、内外面に凹凸がみられ、色は赤褐色を呈する。13は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、脆い。14は底部のみで胎土、焼成は良好である。

円盤状土製品（4～6）

土器片の周縁を加工して再利用したもので、円形を呈するものである。4、6は胴部の破片で捺糸文を施文。5は口縁部でその幅は狭い。縄文の側面圧痕文、隆帯上に刺突文がみえ、表裏に孔をあげようとした痕跡がある。

いずれも胎土、焼成とも良好で、色調は橙色を呈し、表面は研磨されている。

いずれも前期の円筒下層式の所産で、5は円筒下層d式期のものである。

②石製品

円盤状石製品（3）

円縁を円形に打ち欠いてから、擦りにより成形したものである。表裏に1方向を主に条痕を有する。石質は凝灰岩である。

垂飾品（7）

1点のみで、石質は硬玉（ヒスイ）である。長さ2.2cmで、断面は台形で、長軸の面に加工

痕があり、平坦となっている。有孔のもので胸飾りと思われる。

その他（8～11）

10を除き、いずれも表裏と周縁を加工しているものである。8は菱形となっているもので、2個縁にそれぞれ2つの刻目を入れている。9は多少は残っていないが、個縁を丸く加工している。10は板状に剥がれやすい石の周縁を打ち欠いているだけのものである。11は表裏が擦りにより成形され、平坦となっている。

## 第2節 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は検出されず、土器（第56図125～133）がわずかに出土した。いずれもⅣ層からの出土である。

126は鉢形土器で、底部から口縁部にL R縄文を施文後に、口縁部に5条の平行沈線を施文するもので、中期の二枚橋式に比定される。

125は胴部がゆるやかに立ち上がり、頸部でややすぼみ、口縁部が「く」の字状に外反するもので、小波状をなす。胴部には半節縄文が斜めや横に施文される。胴部上半の外面に煤状炭化物の付着が著しい。色調は橙色で、胎土に砂粒の混入があり、焼成は良好である。胴部半分と底部が欠損している。

127、128は同一個体である。半節縄文の上に平行沈線文、その下に連続山形文を描くものである。煤状炭化物の付着がみられる。

125、127、128は後期の天王山式に比定されるものであろう。

129～133は口縁部に1～2cmほどの幅で横位に撚糸文を施文し、胴部には縦位に撚糸文を施文するもので、後期後半の小坂X式に比定されるものである。

## 第3節 平安時代の遺構と遺物

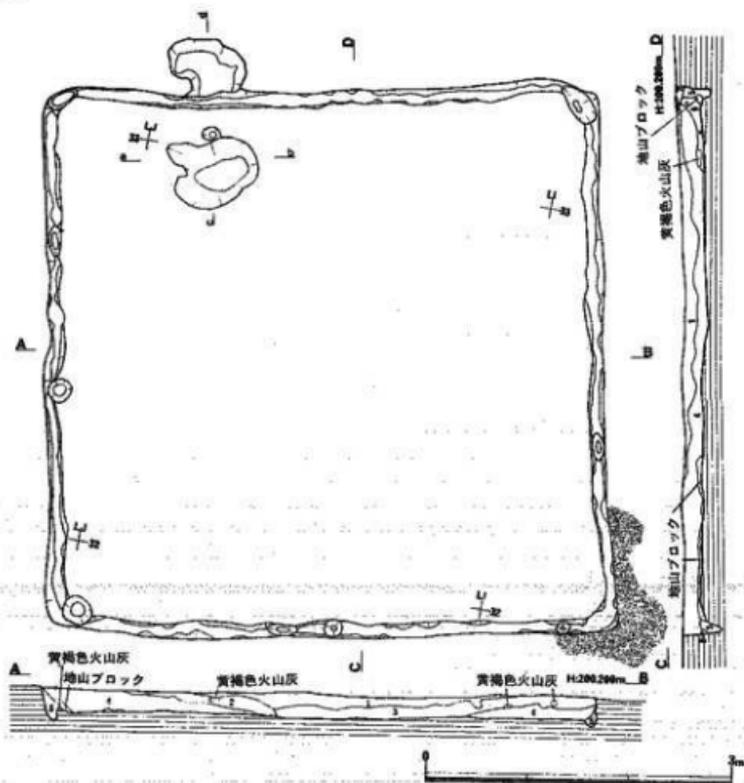
### 1 発見遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡

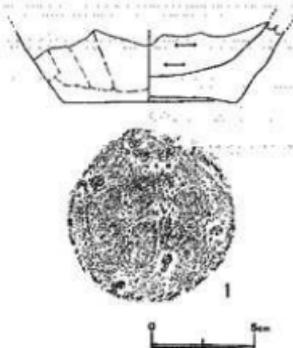
##### S 1002竪穴住居跡（第73・74図）

【位置と確認面】 LI 32グリッドのⅢ層の大湯軽石層上面で検出された。南東コーナーで大湯軽石層の厚い堆積（スクリーン・トーン部分）があり、それを切って構築している。

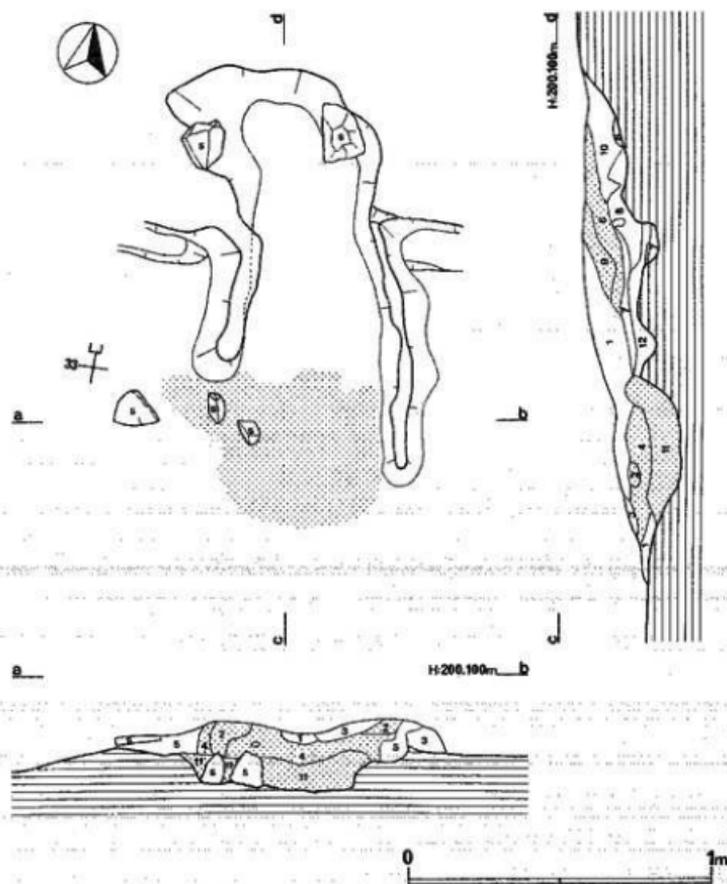
【平面形と規模】 隅丸方形で、長軸5.5m、短軸5.4mで、面積は30㎡である。主軸方位はN-11°-Wである。



層位	色調	備考
1	黒色土 (10Y R 5)	白色の浮石粒が混入、粘性なく軟かい。
2	暗褐色土 (10Y R 5)	白色の浮石粒と地山粒子が混入、炭化物が混入、黄褐色の丸山礫子が混入、やや硬い。
3	暗褐色土 (10Y R 5)	地山粒子がほとんど混入、石子硬い。
4	黒褐色土 (10Y R 5)	白色浮石粒、地山粒子が混入、地山の小アブロックが混入、粘性あり硬い。
5	暗褐色土 (7.5Y R 5)	白色浮石粒、地山粒子が混入、粘性なく軟かい。
6	暗褐色土 (7.5Y R 5)	浮石粒と地山粒子が混入、やや粘性あり。
7	黄褐色土 (7.5Y R 5)	
8	暗褐色土 (7.5Y R 5)	黄褐色火山灰と黄褐色土のアブロックが混入。



第73図 SI002竪穴住居跡・出土遺物



層位	色 調	備 考	層位	色 調	備 考
1	桃 色 ナ (7.5 Y R 5)	地山粒子混入, 粘性がある。締り良い, 炭化物2割程度混入	7	黒 色 ナ (7.5 Y R 3)	粘性有る。締り良い。
2	橙 色 ナ (7.5 Y R 6)	赤みの強い焼土。粘性有り締りも良い。	8	橙 色 ナ (7.5 Y R 6)	地山の黄より濃い。粘性強い締り良い。
3	暗 褐 色 土 (7.5 Y R 3)	荒い地山粒子混入。粘性は弱いか締り良い。	9	褐 色 ナ (7.5 Y R 4)	焼土。粘性あり締っている。
4	褐 色 土 (7.5 Y R 6)	焼土。粘性有り。締り良い。	10	暗 褐 色 土 (7.5 Y R 3)	淡黄々地山粒子混入。粘性ある締っている。
5	明 褐 色 ナ (7.5 Y R 6)	地山粒子混入。粘性有り。締っている。	11	明 褐 色 ナ (7.5 Y R 6)	焼土。粒子荒い。粘性弱く鬆く締っている。
6	暗 褐 色 土 (7.5 Y R 3)	焼土。粘性あり締っている。	12	黒 褐 色 ナ (7.5 Y R 3)	粘性有る。締っている。

第74図 SI 002 竪穴位住居跡カマド

〔壁・床面〕 壁高は20cmほどで、床面はたいして固くない。床面と壁のなす角度は95°である。

〔壁溝〕 深さ10～15cm、幅15～20cmで全体をめぐる。

〔柱穴〕 南西と北東コーナーに穴があるが、柱アタリも確認できず、また掘り込みもすっかりしておらず、柱穴とはしがたい。

〔カマド〕 北壁の東寄りに位置し、全体の規模は長軸153cm、短軸75cmである。壁の外側に張り出した煙道部を持つ。火床部の焼土範囲は50cm×70cmほどで、浅く鍋底状に、煙道部は浅く「U」字状を呈する。袖部は、明褐色の粘土で作られ、固く縮り、内側は加熱を受け脆い。

〔出土遺物〕 覆土中より土師器甕が出土した。外面は胴部下端よりヘラケズリ、内面は横位に荒いナデを施すもので、底部には木葉痕が残る。胎土には石英、小石を含む。他に細片ながら1点だけ、内面に稜底のある土師器が出土した。(図59)。

#### S 1003 竪穴住居跡 (第75・76図)

〔位置と確認面〕 LH 37グリッドの第Ⅲ層上面で検出された。

〔平面形と規模〕 長軸591m、短軸5.02mで隅丸方形で、東壁に幅60～90cmの張り出し部をもつ。張り出し部を除いた面積は28㎡である。主軸方位は、N-25°Wである。

〔壁・床面〕 壁高は20～25cmで、床面は比較的良く締っている。壁の角度は96°である。

〔壁溝〕 深さ10～15cm、幅20cmでほぼ全体をめぐるが、東側の張り出し部の中央部で途切れる。張り出し部の東壁と北壁の一部にも壁溝があり、深さ15cm、幅15～20cmである。

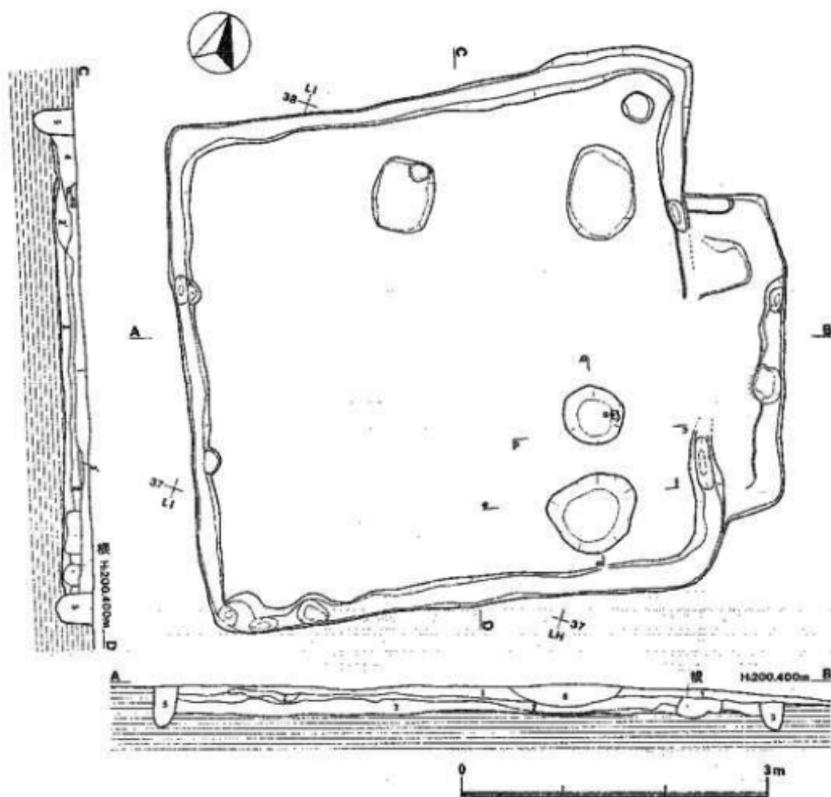
〔柱穴〕 西壁と北東コーナーに柱穴らしきものがあるが、確実に柱穴とはしがたいものである。

〔炉〕 南壁の東側寄りに位置し、楕円形を呈し、長軸180cm、短軸140cmである。南壁とは接しておらず、40cmほど離れた床面にある。内部には長軸に沿って焼土がレンズ状に2ヶ所に認められ、円形を呈する。焼土の下の床面は、いずれも焼土とほぼ同じ範囲で、浅い鍋底状に掘られている。その深さは10～15cmである。

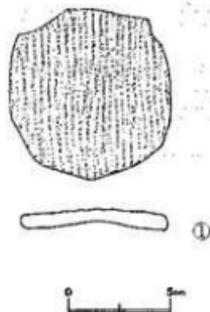
〔出土遺物〕 (第75図1、第77図)

土器は土師器甕、壺や鉄滓などがある。

2、3、5～8は甕である。2は口縁部が緩い曲線を描くもので、胴部下半から緩やかに立ち上がり、口縁部でわずかに外反するものである。外面はナデにより器面調整をした後に、ヘラケズリにより二次調整している。内面には刷毛目を施す。口縁部の内外面にはナデがみられる。胎土には石英、砂粒を含む。3は口縁部の内外面は刷毛目、胴部の内外面はヘラケズリを施すもので、胎土は細かい石英・金雲母を含み精選されており、焼成も良好である。5は口縁部が薄く、わずかに外反するものである。5、6はいずれも外面に粗いヘラケズリを施し、胎

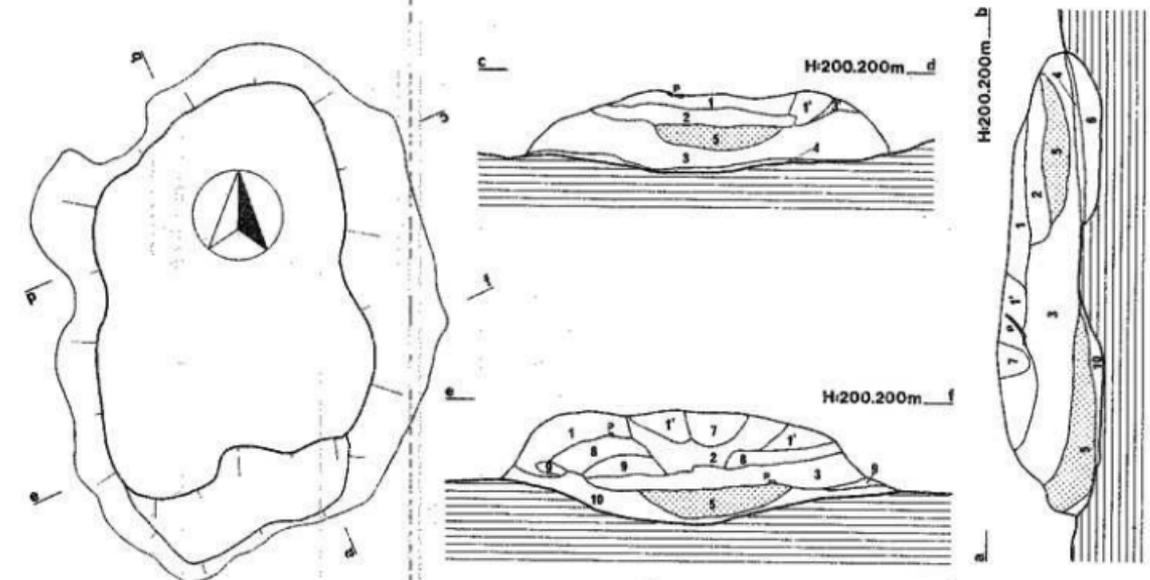


層位	土質	備	考
1	黒褐色土 (B-V 25)		
1	層		
2	赤褐色土 (B-V 25)	しまり中、黄色い砂がフロッツ状に、砂岩混入、	
3	赤褐色土 (B-V 25)	紫褐色土がフロッツ状に混入、	
1	黒褐色土 (B-V 25)	黄褐色土(B-V 25)、アレーナ状に、黒岩混入、	
3	赤褐色土 (B-V 25)	紫色土、黄色い砂がフロッツ状に混入、若干の瓦片物有り、	
4	赤褐色土 (B-V 25)	浮石が混入、50%程度褐色土を含有、	
7	砂		

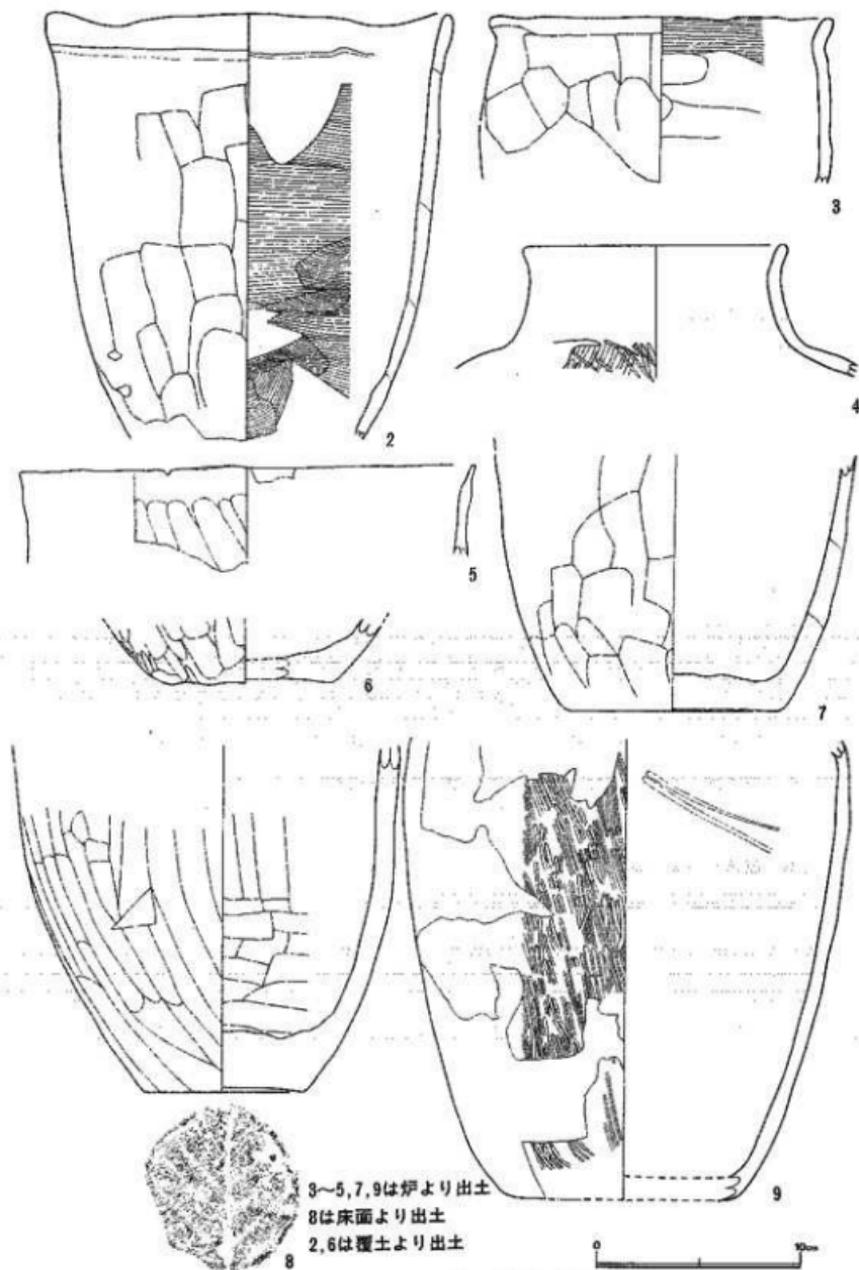


第75図 SI 003 竪穴住居跡・出土遺物

第76図 SI 003 堅穴住居跡



層位	名	説明	特徴
1	焼土層 (10YR5/8)	焼土層、しまりなし、やや粗粒。	
2	灰層 (10YR7/2)	灰層、粗粒あり、やや粗粒。	
3	焼土層 (10YR5/8)	焼土層、しまりなし、やや粗粒。	
4	灰層 (10YR7/2)	灰層、粗粒あり、やや粗粒。	
5	焼土層 (10YR5/8)	焼土層、しまりなし、やや粗粒。	
6	灰層 (10YR7/2)	灰層、粗粒あり、やや粗粒。	
7	焼土層 (10YR5/8)	焼土層、しまりなし、やや粗粒。	
8	灰層 (10YR7/2)	灰層、粗粒あり、やや粗粒。	
9	焼土層 (10YR5/8)	焼土層、しまりなし、やや粗粒。	
10	灰層 (10YR7/2)	灰層、粗粒あり、やや粗粒。	



第77図 SI 003 竪穴住居跡出土土器

土に小石、砂粒を数多く含む。8は内外面にヘラケズリを施し、底部は木業底である。

4は壺で、9も同じ器形となるものと思われる。4は頸部から口縁部が外反する。4、9とも外面には細めの工具でヘラケズリを行なうもので、内面には横位のナデが見られる。

1は須恵器甕の破片を円形に打ち欠いたもので、外面は叩き目が見られるもので、内面は凸凹している。他に炉の覆土中、焼土の上3～10cmで、鉄滓が3点出土している。

【その他】 浅い鍋底状の落ち込みが、住居跡の北の床面で2ヶ所、張り出し部で1ヶ所検出されたが、用途は不明である。

#### S 1004 竪穴住居跡 (第78図)

【位置と確認面】 LG 45、46グリッドで、第Ⅲ層上面で検出された。

【平面形と規模】 隅丸方形で、長軸5.00m、短軸4.57mである。面積23㎡で、主軸方位N-17°-Wである。

【壁・床面】 壁は高さ10～12cmで床面は平坦で縮っている。西壁と北壁に炭化した板材が貼りつくようにして、わずかに残っていた。

【壁溝】 深さ7～15cm、幅は10～23cmで、壁際に沿ってめぐるが、北壁の一部とカマドの下では途切れる。

【柱穴】 検出されなかった。

【カマド】 南壁の西寄りにある。暗褐色土～褐色土で袖部を構築している。燃焼部に45～50cmの範囲で焼土があり、その下には50cm×60cmの浅い鍋底状の掘り込みを持つ。燃焼部にはRP4とした把手付土師器が倒立した状態で出土したが、支脚として使用されていたものと思われる。煙道部は壁外には延びておらず、煙出口は検出されなかった。

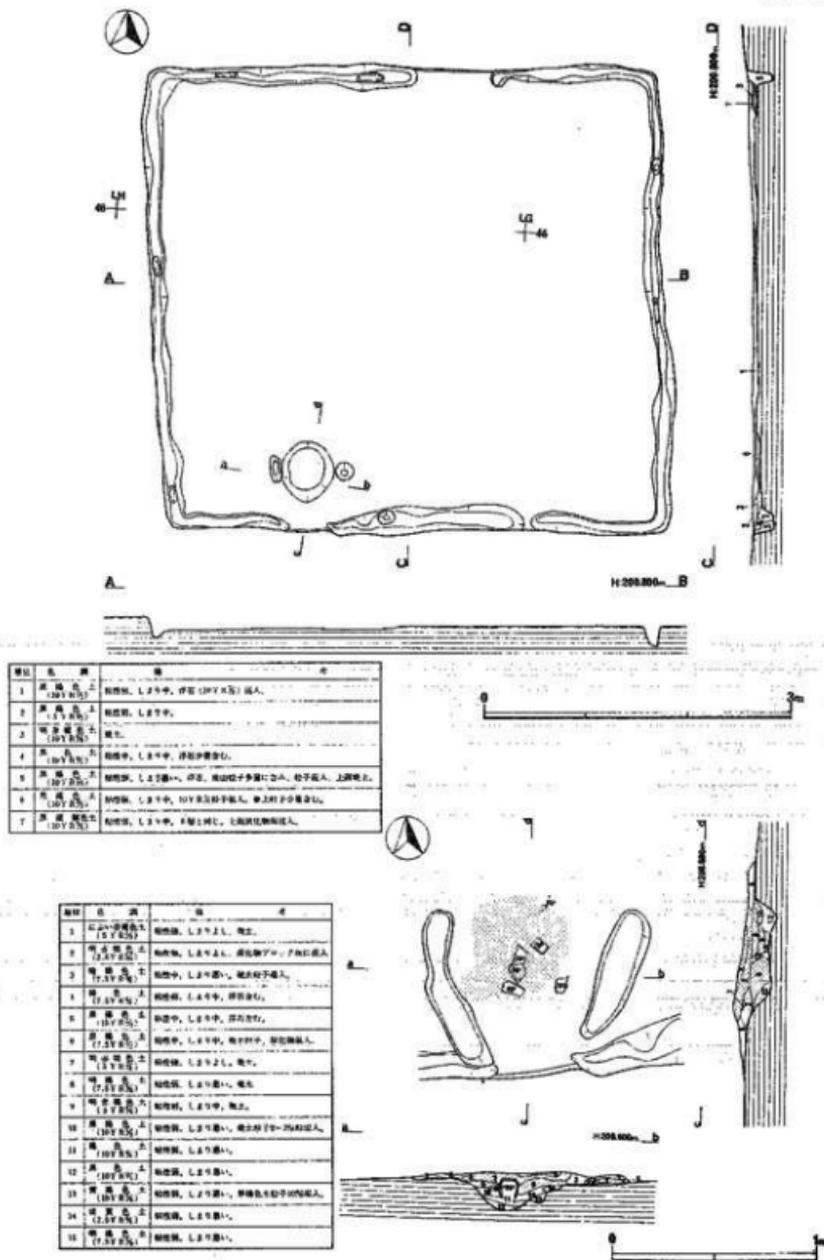
【その他】 北壁の中ほどで壁溝の途切れている所があるが出入口の可能性も考えられる。

#### 【出土遺物】 (第79図)

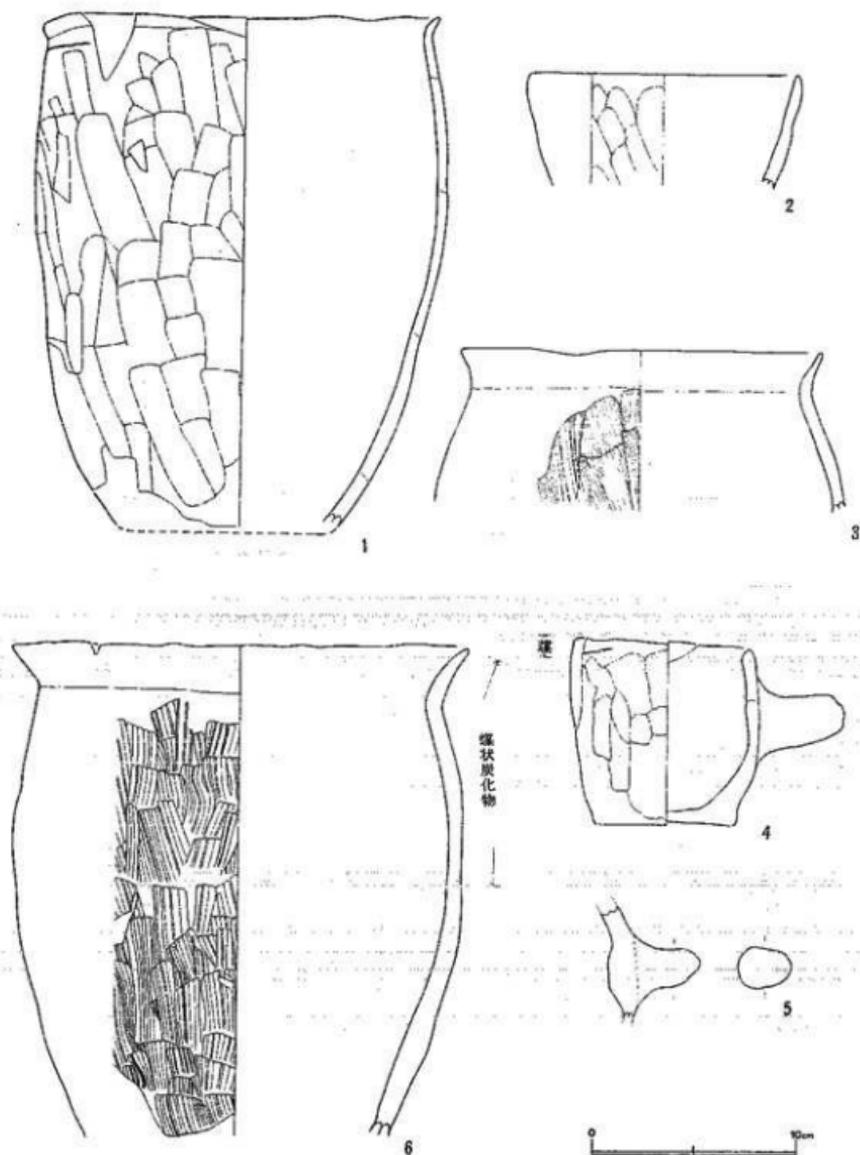
いずれも土師器で、甕と把手付甕が出土している。

1、6は胴部下半から緩やかに立ち上がるもので、胴部上半でわずかにすぼむ。口縁部は、1がわずかに、6は「く」の字状に外反する。外面は、1がヘラケズリ、6が刷毛目を有する。3も6とほぼ同じ特徴を有する土器である。2は外面のヘラケズリが雑で、胎土に小石の混入も多い。

4、5は把手付甕で、4はほぼ完形、5は把手のみである。4の外面は粗いヘラケズリを施すもので、把手は胴部に付けたもので、その部分にもヘラケズリを施している。内面は横位のミガキを有する。5は、4の把手に比較してやや扁平であるが、同様な手法で作出されている。胎土には石英・砂粒、小石を多く含むが、焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈する。



第78図 SI 004 竪穴住居跡・カマド



1、4はカマド内出土  
他は床面出土

第79図 SI 004 竪穴住居跡出土土器

## S1005 竪穴住居跡 (第80・81図)

【位置と確認面】 LF47グリッドにあり、第Ⅲ層上面で確認された。東側半分は路線外の為、調査できなかった。

【平面形と規模】 隅丸方形で、西壁は4.01mを計る。主軸方位はN-2°-Eである。

【壁・床面】 壁は北で高さ30cm、他は5~10cmである。床面は凹凸があり、たいして締っていない。

【壁溝】 深さ5~15cm、幅15cmほどで、壁際に沿ってめぐると思われる。

【柱穴】 5本検出された。南西、北西の各コーナーのものが主柱穴と考えられる。他に西壁に2本、床面の中ほどに1本検出された。

【カマド】 南壁の西寄りに位置する。煙道部は壁際までで、壁外には延びておらず、煙出口は検出されなかった。火床部に53×54cmの範囲で焼土が広がり、その下には浅い鍋底状の落ち込みが確認された。袖部は褐色土か暗褐色土に粘土・大湯軽石・地山粒子の混じった土を用いて固めてあるが、あまりしっかりした作りではない。

カマドの上面には、焼土や灰(?)の混じった土が覆っていた。

【出土遺物】 (第80図1~4)

4は土師器甕で底部は欠損している。胴部下半から丸みをもち、上半でほぼまっすぐ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。外面には胴部全体に、内面には部分的にヘラケズリを施す。口縁はわずかに波状を呈し、内外面には横位のナアがみられる。胎土には石英・石粒をやや多く含むが、焼成は良好である。外面に比較し、内面は凸凹しているが滑らかである。カマドの覆土より出土したものである。

2、3は土製品で、胎土は精選され、焼成も良好である。外面はいずれも黒く、光沢がある。2は丸玉で、中央に2mmほどの穴を穿ち、周囲に浅い沈線めぐらす。直径1.5cmである。3は勾玉で2mmほどの穴を穿つ。長さ3.5cm、幅1.2cmである。いずれもカマドの覆土より出土した。1は刀子である。刀身部の断面は「V」字状で、長さ4.8cm、幅1.1cm、茎の長さ1.3cmである。

## S1006 竪穴住居跡 (第82図)

【位置と確認面】 LE52、53グリッド周辺に位置し、第Ⅲ層上面で確認された。

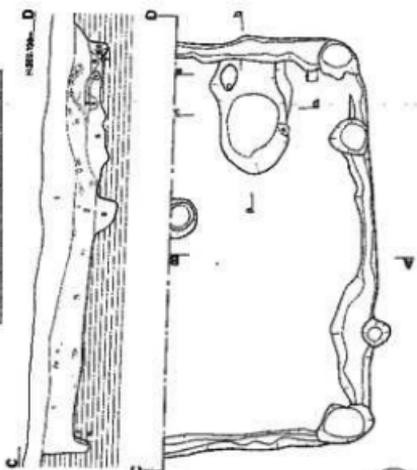
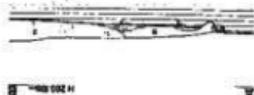
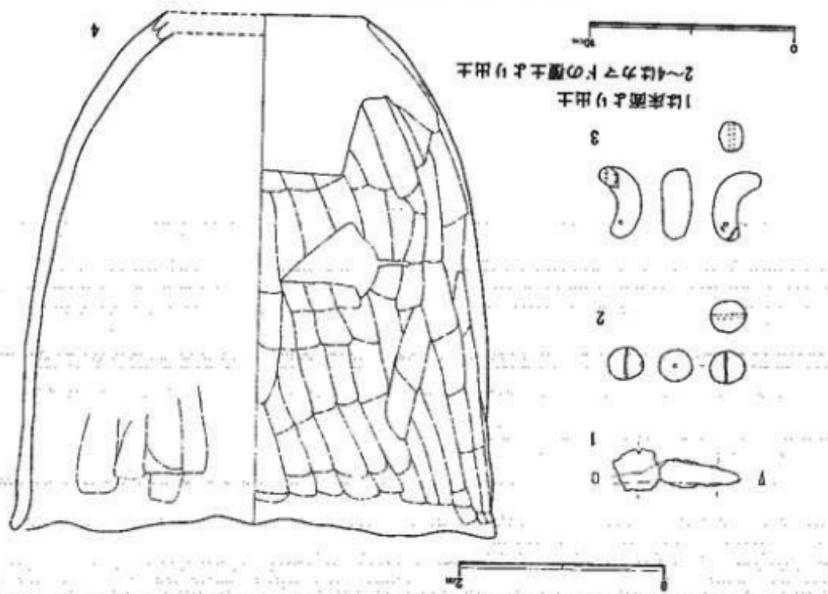
【平面形と規模】 住居跡の東半分は路線外である。隅丸方形を呈するものと思われる。西壁の長さは7.13mである。主軸方位はN-7°-Eである。

【重複】 S1018 竪穴住居跡の上に構築されており、本住居跡が新しい。

【壁・床面】 壁は高さ9~15cmである。床面は平坦でやや締っている。

【壁溝】 深さ14~22cm、幅30cm前後で、幅は他の住居跡に比較して広い。壁に沿ってめぐ

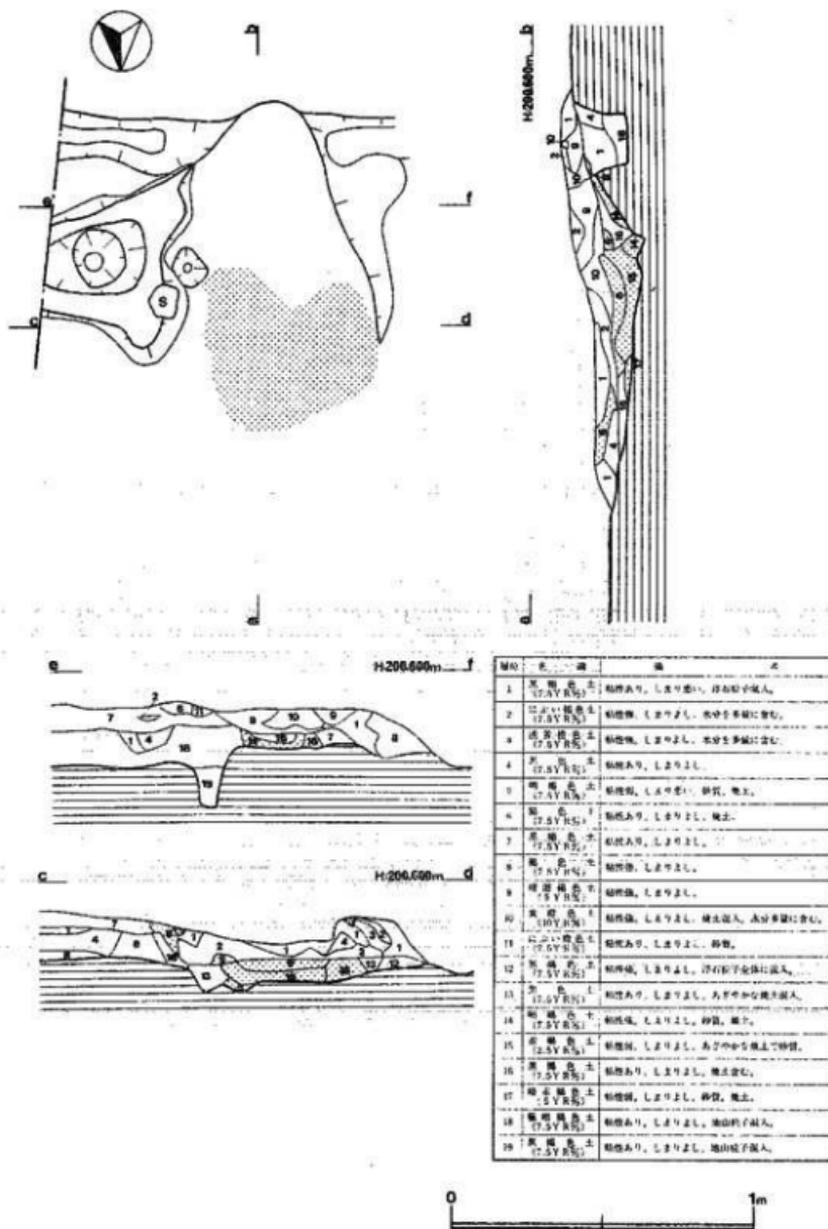
第80図 SI 005 竪穴住居跡・出土遺物



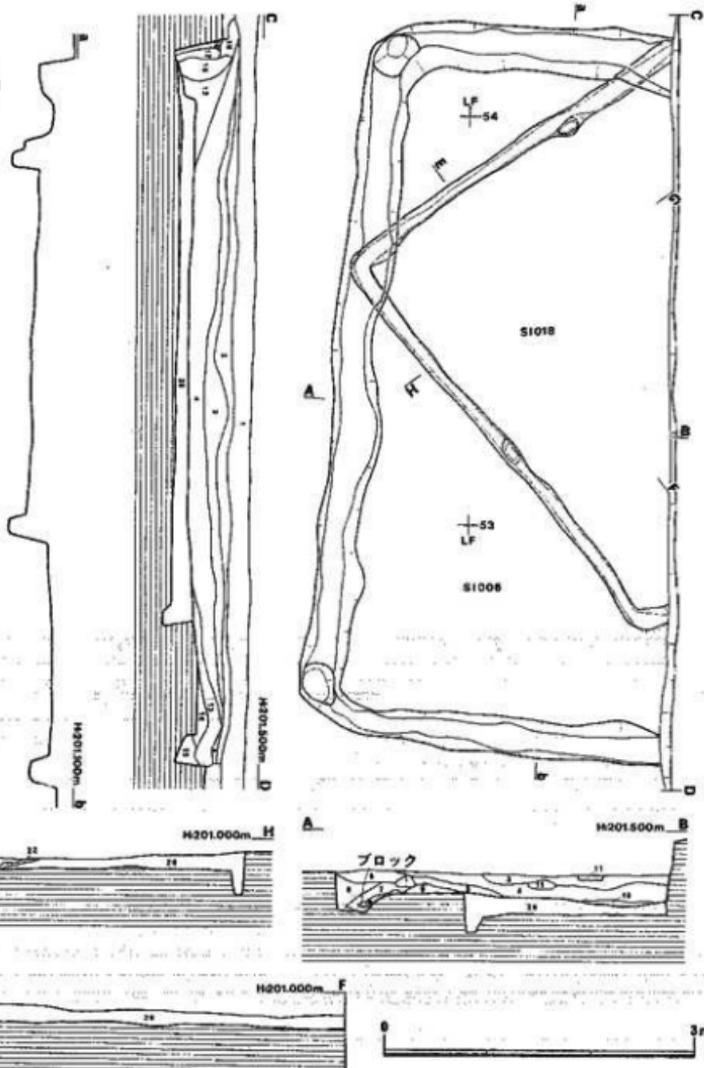
層位	遺物	説明
2	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
1	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
3	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
4	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
5	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
6	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
7	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上
8	竪穴	竪穴跡、径約1.5m、深約1.5m、土上



（北）

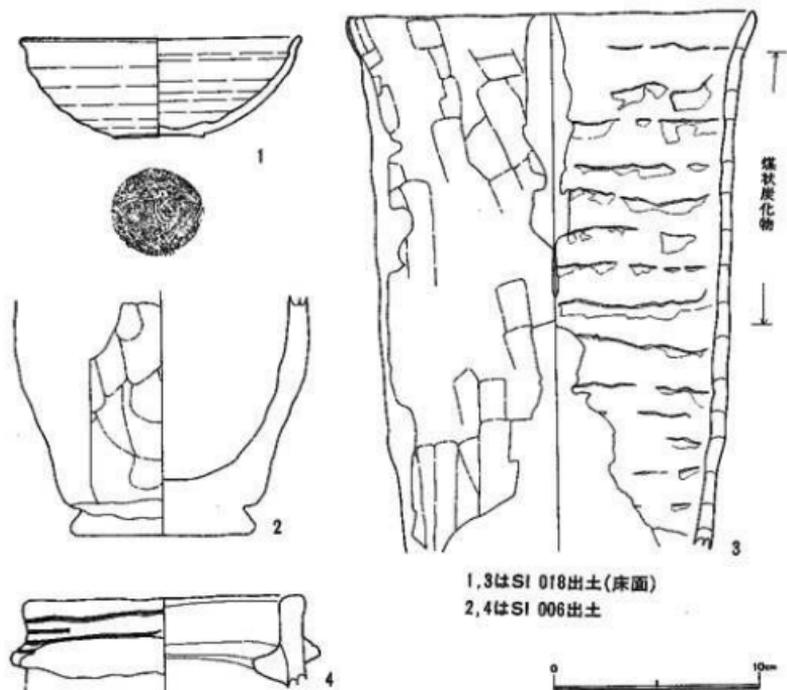


第81図 SI 005 竪穴住居跡カマド



層位	高さ	説明									
1	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	9	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	16	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	23	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
2	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	10	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	17	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	24	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
3	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	11	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	18	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	25	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
4	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	12	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	19	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	26	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
5	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	13	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	20	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	27	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
6	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	14	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	21	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	28	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
7	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	15	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	22	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	29	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
8	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	16	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	30	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	30	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。
9	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	17	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。	31	黒色土 (107.8%)	粘状質、しまりよし。			

第82図 SI 006-018 竪穴住居跡



1,3はSI 018出土(床面)  
2,4はSI 006出土

第83図 SI 006-018 竪穴住居跡出土土器

るものと思われる。

〔柱穴〕 北西と南西コーナーで検出された。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 (第83図2・4)

土師器甕と縄文時代後期初頭の鈎付土器が出土している。2は外面に大変粗いヘラケズリ、内面にはナデを施すものである。外面はかなりの凸凹が残り、全体的に厚い。胎土には石英、小石を多く含む。4は鈎付土器で口縁部に平行沈線文を施すもので、十腰内Ⅰ式に比定されるものと思われる。2、4とも覆土からの出土である。

#### S 1018竪穴住居跡 (第82図)

〔位置と確認面〕 LE 52、53グリッド周辺に位置し、第Ⅲ層上面で確認された。

〔平面形と規模〕 住居跡の東半分は路線外の為調査できなかったが、隅丸方形を呈するものと思われる。南西壁は4.66mである。主軸方位はN-39°-Eである。

〔重複〕 SI006竪穴住居跡と重複しており、本住居跡が古い。

〔壁・床面〕 高さ12～23cmである。床面は平坦で締っている。

〔壁溝〕 深さ14～24cmで、幅13～15cmである。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 (第83図1・3)

土師器甕と須恵器杯が出土した。1は須恵器杯で、器高5.1cm、底径4.4cm、口径13.5cmである。糸切り底を有し、その上にわずかにへラケズリを施している。胴部は丸味をおびて立ち上がる。胎土・焼成とも良好である。3は土師器甕で、胴部は筒形に近い器形で、口縁部はわずかに外反する。胴部外面にはほぼ全体に、内面にはわずかに横位のミガキが認められる。内外面には明瞭に粘土紐の積み上げ痕が残っている。胎土には砂粒をやや多く含むが焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

#### SI020竪穴住居跡 (第84図)

〔位置と確認面〕 LF59グリッド周辺に位置し、第Ⅲ層下面で検出された。

〔平面形と規模〕 住居跡の東側半分は路線外の為、調査できなかったが、隅丸方形を呈するものと思われる。西壁で6.93mを計る。主軸方位はN-25°Eである。

〔壁・床面〕 壁の高さは、西側寄りでは20cmほどであるが、東側では40～50cmほどである。これは東側が高くなっており、床面を平坦にするために東側を深めに掘り込んだ結果、そうなったものと考えられる。床面は平坦であるが、やや締りが無い。

〔壁溝〕 深さ13～15cmで、幅は平均20cmで、壁に沿ってめぐりものと思われる。

〔柱穴〕 検出されなかった。

〔カマド〕 南壁の西側寄りで検出された。火床部には45～50cmの範囲で焼土が広がる。袖部は暗褐色土～褐色土に黄褐色粘土を混ぜて構築し、その高さは10cmほどであった。壁外には煙道部や煙出口は検出されなかった。

〔出土遺物〕 (第84図1)

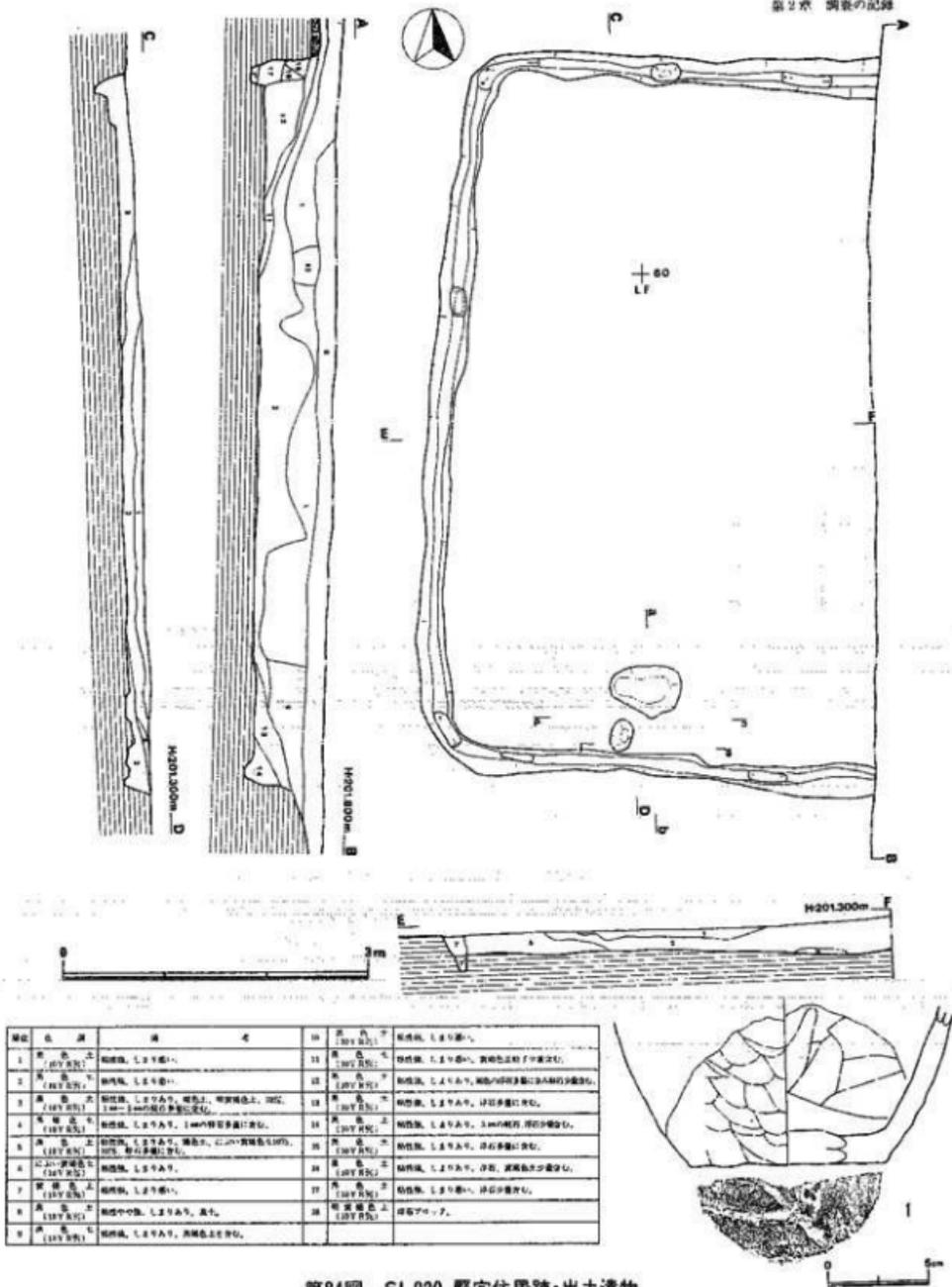
1の土師器甕だけである。外面にへラケズリ、内面にはナデを施し、底部に木葉痕が残る。胎土に石英・砂粒を含む。

#### SI038竪穴住居跡 (第86図)

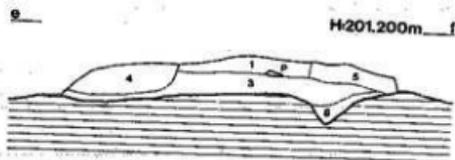
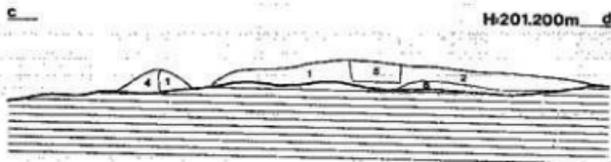
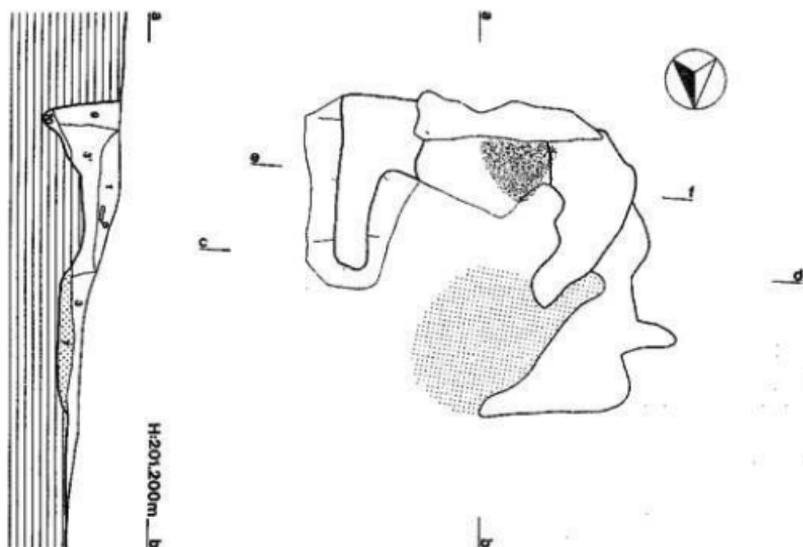
〔位置と確認面〕 LG35グリッドの第Ⅲ層上面で検出された。

〔平面形と規模〕 以上は路線外であるが、西壁は2.80mである。主軸方位はN-15°Wである。

〔壁・床面〕 壁の高さは46～50cmで、床面は平坦だが、あまり締っていない。

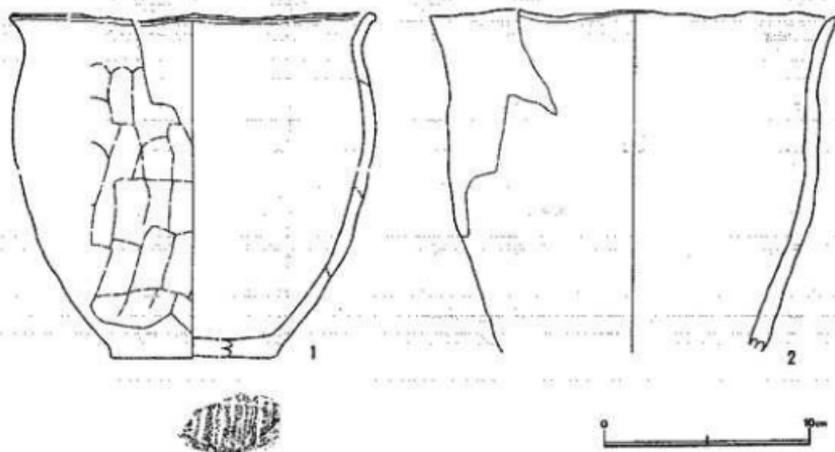
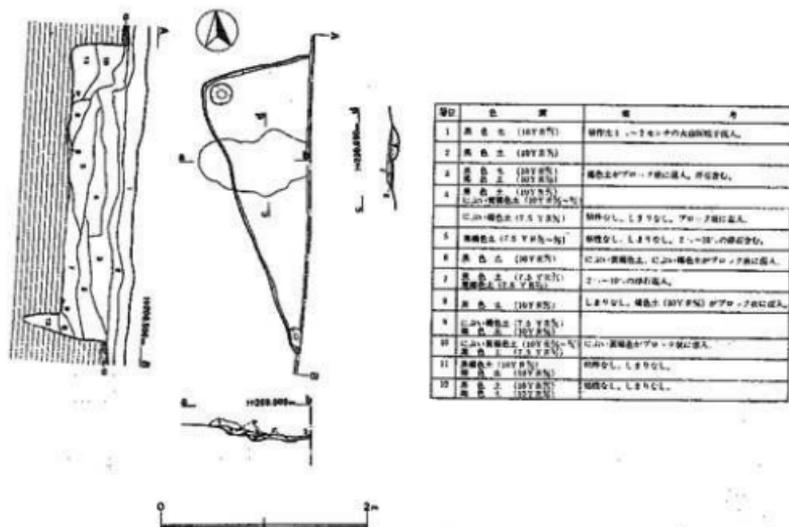


第84図 SI 020 竪穴住居跡・出土遺物

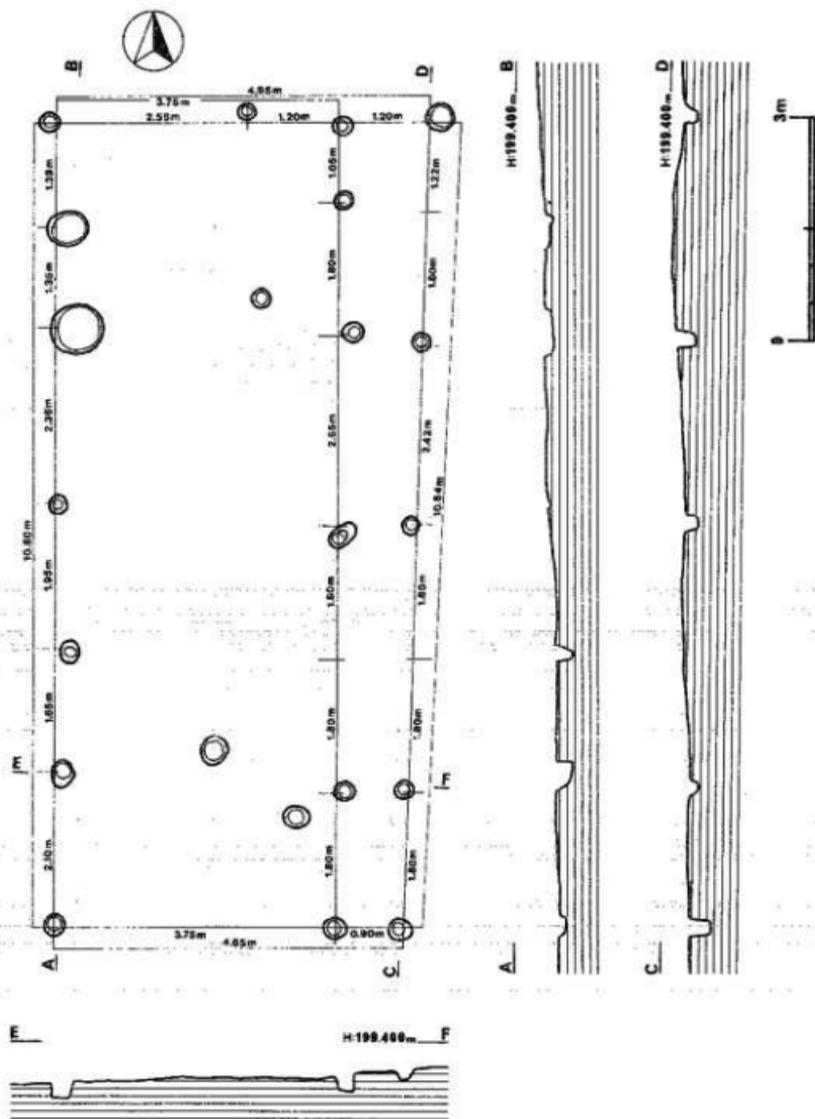


層位	名	厚	備	考
1	焼 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり、黄褐色土を伴、灰化跡認め、粘土	
2	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、黄褐色土を伴入	
3	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり、灰化跡が認め入	
4	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、中粒しまりあり、黄褐色土を伴入	
5	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり、黄褐色土を伴入	
6	石灰質黄褐色土 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり、黄褐色土を伴入	
7	黄 土 層 (7.5 以下)		灰白色、しまりあり	
8	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり、黄褐色土を伴入	
9	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり	
10	黄 土 層 (HY 2.5%)		灰白色、しまりあり、やや砂質	

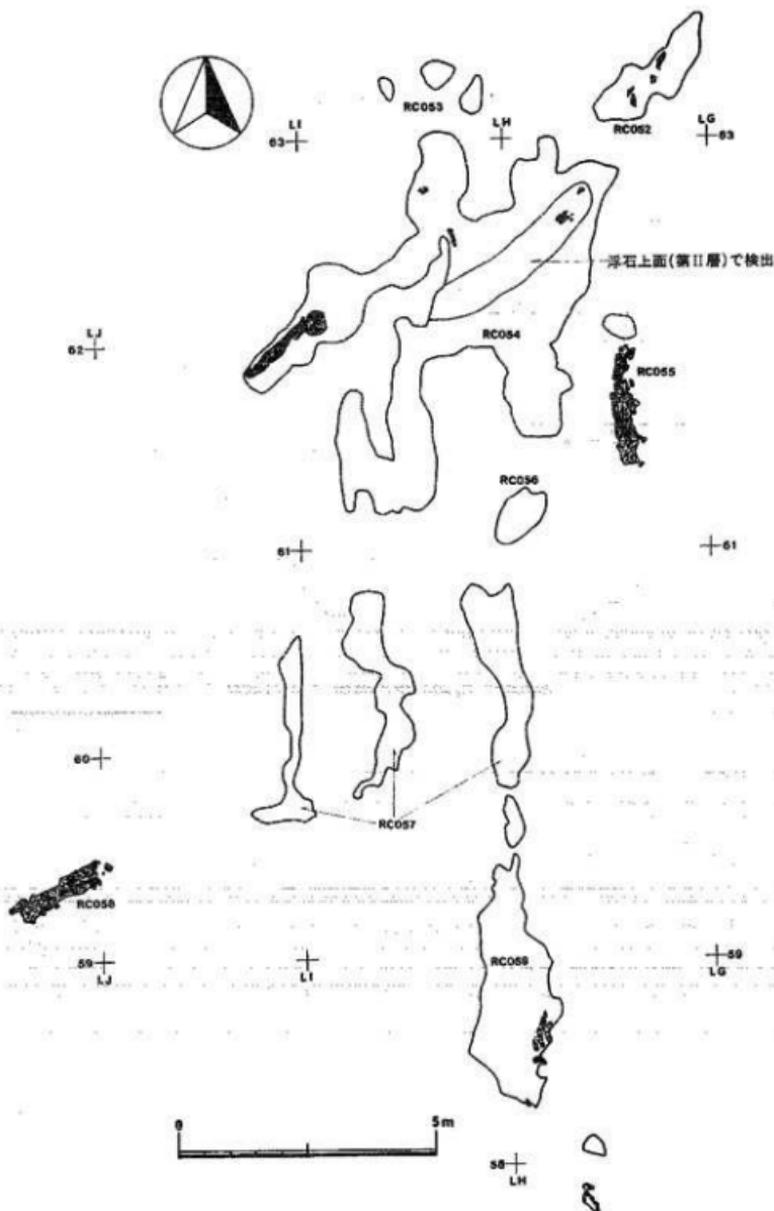
第85図 SI 020 竪穴住居跡カマド



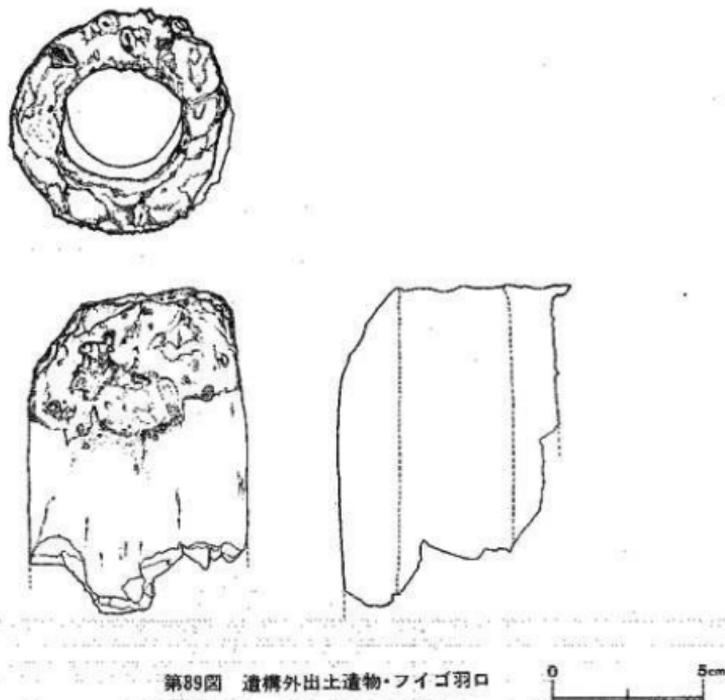
第86図 SI 038 竪穴住居跡・出土遺物



第87図 SB075 掘立柱建物跡



第88図 RC052~059 炭化材出土状況



第89図 遺構外出土遺物・フイゴ羽口



〔壁溝〕 検出されなかった。

〔柱穴〕 北西、南西コーナーで各1本ずつ、計2本検出された。南西コーナーの柱穴は深さ35cm、径18cmである。

〔カマド〕 西壁の北側寄りに位置し、遺存状態は悪く、詳しい構造については不明であるが、わずかに残っていたカマドの土層断面の観察によると、焼土の下に15×30cmの範囲で浅く掘り込みがみられる程度である。

〔出土遺物〕 1は小形の甕で、胴部は丸みをおび、上半でくびれて、口縁部が「く」字状に外反する。外面にはヘラケズリがみられる。底部には網代痕をもつ。2は内外面に凹凸があるが、外面は縦、内面は横のナデにより調整されている。1、2とも胎土に砂粒を含むが、焼成は良好である。

## (2) 炭化材 (第88図)

遺跡の中央部付近にあり、LG 59-63グリッド、LI 59-62グリッドに位置する。第Ⅲ層下面で検出されたもので、全体的に遺存状態は悪く、風化して細片となっており、原形を留めて

いない。その中でRC 054の1部、RC 055、RC 058としたものは、比較的遺存状態は良好である。いずれも幅、長さとも不明であるが、厚さ2～3cmの薄板であったものと思われる。周囲及び下に遺構は検出されず、詳細は不明である。

RC 054とした炭化材の下でも大湯軽石が、わずかな凹地に厚さ5cmほどに堆積しているのが観察された。前記したように本炭化材は第Ⅲ層（大湯軽石）の下面で検出されたもので、下の大湯軽石の間にはさまれた形になっている。これは火山の噴出物である大湯軽石が、少なくとも2回にわたって降下した、という可能性も考えられる。

## 2 遺構外出土遺物

ファイゴ羽口（第89図）が1点である。北端のLG 95グリッドの第Ⅲ層上面から出土した。欠けているが、現存長10.5cm、幅6.8cm、孔径3.8cmである。一端は高温の為、熔融状態を呈しこの部分の側面は斜めに作られている。

# 第4節 その他の遺構と遺物

## 1 発見遺構

### (1) SB 075掘立柱建物跡（第87図）

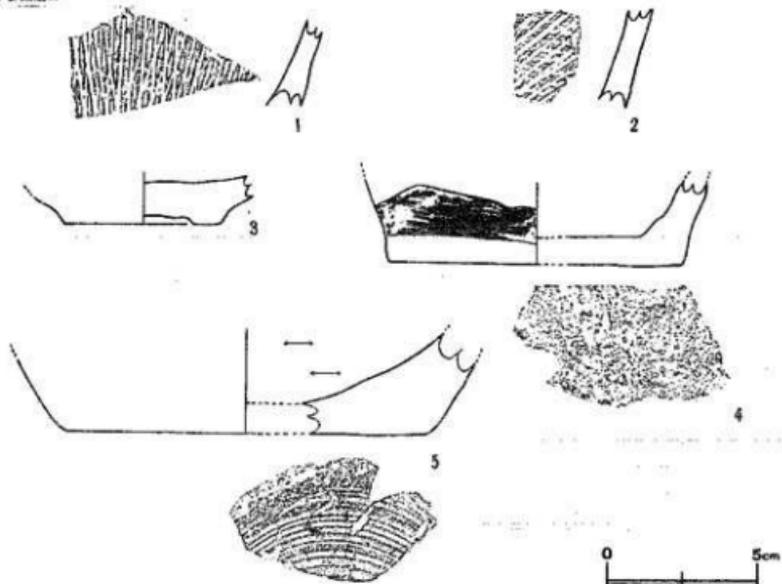
MA 27、28、29グリッドに位置し、地山上面で確認されたものである。南北棟で、身舎は桁行6間（西側）・5間（東側）×梁行1間（南側）・2間（北側）で、東廂桁行4間、梁行1間の掘立柱建物跡である。

身舎の計画尺は桁行（西側）35尺（南から6.5尺+5尺+6.5尺+7.5尺+4.5尺+5尺）、桁行（東側）36尺（南から6尺+12尺+9尺+6尺+3尺）、梁行（南側）12尺、梁行（北側）12.5尺（東から8.5尺+4尺）、廂は桁行36尺（南から6尺+12尺+8尺+10尺）、梁行3尺である。1尺平均桁行・梁行31.0cm、廂は桁行・梁行30.5cmである。建物方位は桁行で約 $N-0^{\circ}34'-E$ で磁北とほぼ一致する。

### 2 出土遺物（第90図）

陶磁器が5点出土した。いずれも第Ⅰ層（耕作土）からの出土で、完形品はなく全体の形状が知れるものはない。

1、2は擋鉢で、赤褐色を呈する。江戸時代終り～明治時代のものであろう。3は唐津系の陶器で、削り出し高台を有し、内面が施釉され、灰白色を呈する。16世紀頃の所産と思われる。4は内外面に緑色の釉が施されるもので、江戸時代のものであろう。5は内外面とも釉は施されず、底部に糸切り痕が残るもので地元産と思われる。



第90圖 遺構外出土陶磁器

## 第3章 まとめ

はりま館遺跡は、小坂川右岸の標高200m前後の台地上に営まれた遺跡で、縄文時代、弥生時代、平安時代の複合遺跡であるが、弥生時代の遺構は検出されなかった。また、今回の調査対象となった区域は、通称「はりま館」と呼称されている中世の館跡であるが、今回の調査では館跡に関係する遺物は出土せず、遺構も検出されなかった。調査区の約100m東側に谷をさきで、平坦な台地があり、そこが館の本拠地と考えられる。

### 1 遺構の分布について

縄文時代の遺構は竪穴住居跡7軒、フラスコ状ピット5基、土壇17基、Tピット14基、埋設土器5基、焼土遺構19基である。平安時代の遺構は竪穴住居跡が8軒だけである。

今回は、道路の路線内だけという限られた区域内の調査で集落全体の遺構の分布は把握し得なかったが、その状況は概ね以下の通りである。

住居跡は台地の舌状に張り出した南側寄りか、南端のわずかな斜面に占地しており、東側の平坦部にも多く分布しているものと推察される。また、フラスコ状ピットは5基のうち3基(KF029、030、031)が南端部にあり、住居跡と同様な分布を示すと思われる。埋設土器5基のうち2基(SR069、073)は、南端部の西側寄りに位置し、その北側を取り囲むように、焼土遺構や土壇が半円状に並び、西側の縁辺部にさらに増える可能性も考えられる。土壇は北側に集中して分布している。Tピットは全体に分布しているが、中央のやや南側に6基が隣接して検出された。そのうち5基は形態・規模・方向もほぼ同じであり、さらに東側にまだ存在する可能性がある。

平安時代の遺構は、住居跡8軒であり、中央部よりやや南側の平坦部にある。そのうち5軒は住居跡の半分がそれ以上が東側の路線外にあり、現在、畑や雑木林となっている。東側にはまだ広い平坦部が広がっており、そちらにまだ住居跡の存在する可能性が高いと考えられる。

### 2 縄文時代の住居跡について

竪穴住居跡は7軒検出された。そのうち出土土器等から時期がわかるものは5軒で、いずれも前期後半の円筒下層d式期のものである。時期の不明な住居跡は2軒(SI001、063)であるが、そのうちSI001は形態・規模から、中期末～後期に属するものと思われる。

前期の住居跡5軒のうち、3軒(SI007、014、015)は大型住居跡(「大型」の意味は、その集落の中で大きいという意味で使用している)である。

大型住居跡の位置・平面形・形態の特徴は以下の通りである。

- (1) 舌状に張り出した台地縁で、標高が低く、緩い斜面に位置する。
- (2) 床面積は平均71㎡で、長軸9.40～13.50mである。
- (3) 平面形はいずれも舟形を呈するであろう。
- (4) 炉は1ヶ所で、住居跡の中ほどに浅い鍋底状に掘りくぼめた地床炉である。
- (5) 床面は、土間状床面と、壁寄りで1段高くなったベッド状床面の2段構造である。
- (6) 長軸の突っただ方の段境に特殊ピットを有する。
- (7) 柱穴はベッド状床面と土間状床面の段境にあり、長軸線に対称的に配置される。
- (8) 床面に台石のある住居跡がある。(SI 007では台石と半円状扁平打製石器が各2点セットで出土した)。

本遺跡と同時期で、大型住居跡を検出した例として杉沢台遺跡<sup>(註1)</sup>(能代市)等があり、本遺跡の大型住居跡とは、位置・平面形・規模・地床炉の数・台石がないなどの違いがある。

大型住居跡は東北北部、北陸地方に圧倒的に多く、「集会所・公民館説」「祭祀遺構説」「共同作業所説」などの諸説がある<sup>(註2)</sup>。

杉沢台遺跡の他に、秋田県内で検出された大型住居跡の例としては、秋田市・柳沢遺跡<sup>(註3)</sup>(前期後葉)、能代市・館下I遺跡<sup>(註4)</sup>(中期前葉)、八竜町・堂刈沢遺跡<sup>(註5)</sup>(中期前葉)、上小阿仁村・不動羅遺跡<sup>(註6)</sup>(中期前葉)等がある。

### 3 埋設土器について

埋設土器は5基検出され、いずれも円筒下層Ⅱ式期の所産である。分布状況をみると、南端部の東側寄りにSR 069、073の2基が隣接し、中央寄りの平坦部に1基(SR 034)、中央部のSI-009竪穴住居跡の南側に1基(SR-017)、南端部に1基(SR 013)があり、SR 069、073以外は散在している。

埋設状態は、正立埋設のもの(SR 013、034、073)と倒立埋設のもの(SR 017)があるが、SR 069のように正立埋設と倒立埋設(2個体)のものが同時に埋設されているものもある。

埋設されている土器は、本遺跡から出土した煮沸用の深鉢形土器と変わりなく、ほとんどの土器の胴下半部に加熱を受けた痕跡や、煤状炭化物の付着がみられる。これらの事から、埋設に使用された土器は、一般的に使用されていた土器を転用したもので、埋設の為に特別に製作されたものではない。また、その中の半数以上が木目状摺糸文の施された土器である。

埋設土器は従来、葬棺としての機能を有した遺構であろうとの見解が一般的である。

前期の埋設土器の出土例は、東北地方でも類例が少なく、県内では大館市・芋掘沢遺跡にあるのみである。それによると本遺構と同型式の時期で、報文では、正立埋設で、口縁部直上に2個の河原石を用いて蓋をし、「死産児、または死亡した新生児、早産の胎児の死体を埋葬した葬棺(深鉢棺)」と<sup>(註7)</sup>されている。

本遺構では、土器内に人骨はみられなかったし、掘方内の堆積土中からも、焼土粒や炭化物粒がわずかに認められただけで、積極的証左に欠けるが、埋葬施設としての機能を有していた可能性も考えられる。類例の増加を待って今後の検討課題としたい。

#### 4 出土石器について

遺構内外から各種の石器が出土した。この中で不定形石器や凹石、磨石が多く出土した。これらは、住居跡や包含層の出土状況からほとんどは縄文時代前期のものと思われる。

不定形石器は44点で、他の石器に比較して数が多い。調整剥離のない剥片を含めると300点を超える。これらは、ものを切ったり、削ったりする道具で、当時の生活形態の1側面を物語っていると思われる。

その他、半円状扁平打製石器が計28点出土した。本石器は、平面形が楕円形で、断面が扁平である。安山岩か凝灰岩を選び、半円状になっている長軸の1側縁か両側縁を打ち欠き、「V」字状となった面を使用している。使用した結果、擦減って平坦になり、幅2〜3cmほどの直線部となる。

秋田県内で多く出土した例としては、<sup>(註8)</sup>杉沢台遺跡があり、18点出土している。その機能については「磨切る・磨滅らす・磨潰す」と考えられている。

今回出土した当石器の中には、長軸の両側縁の磨擦痕の他に、短軸の両側縁か、1側縁に敲打痕を有するものもあり、前記の機能とは別に、二次的ながらも「敲く・潰す」という、敲石と似たような機能を有していたとも考えられる。

#### 5 平安時代の住居跡について

検出された住居跡8軒は、いずれも第3層の大湯軽石層を掘り込んで構築されている為、覆土中に大湯軽石が混入しており、遺構平面プランの確認は容易であった。

軽石の混入状況は大きく2つに分けられる。1つは、覆土全体に軽石の粒子を含み、ある1つの層に軽石がブロック状に混入しているものが5軒(SI 002、004、005、018、038)があり特にSI 005、038に顕著に認められる。もう1つは、覆土全体に軽石の粒子のみを含むもの(SI 003、006、020)である。

8軒のうち、5軒は $\frac{1}{2}$ 以上が路線外で全容は不明であるが、いずれも平面プランは隅丸方形を呈するものと思われ、SI 020が最も大きく1辺6.93m、SI 038が最も小さく1辺2.80mで、主軸方位は、ほぼ磁北に沿っているもの(SI 005、006、020)と西に振れているもの(SI 002、003、004、018、038)がある。

柱穴は住居跡の各コーナーにみられるもの(SI 005、006、038)、SI 005のようにその間にも存在するものもある。

カマドを有する住居跡は5軒で、南壁のもの3軒(SI 004、005、020)で、北壁のもの1軒

(SI002)、西壁のもの1軒(SI038)である。そのうち煙道部が壁外まで延びているものはSI002で、SI004、020は壁際で煙道部が立ち上がる構造であると思われる。

SI003は、住居跡の南東コーナーに「炉」を有し、中から鉄滓が出土した事から小規模ながら、鍛冶工場的な機能を果していたものと思われる。

大湯軽石の年代については、研究者間に見解の相違があり、時期は決し難い。が住居跡の年代はそれよりも新しいものである。

## 6 平安時代の土器について

土器は住居跡の床面や覆土から出土したもので点数は少ない。土師器甕、壺、土師器の把手付甕、須恵器杯があるが、組成の主体をなすものは甕であり、壺や杯の量が極端に少なく1点のみである。

甕は、器高25cm前後の大形のもの、17cmほどの小形のものがあり、大形のものが多い。大形の甕は口縁部の形態から3つに分けられる。1つは口縁部が薄く、わずかに「く」の字状に外反するもの、1つは口縁部が薄く、比較的大きく「く」の字状に外反するもの、もう1つは口縁部がやや厚く直立しているものがある。小形の甕は、口縁部が薄く、わずかに「く」の字状になっている。

甕の胴部外面にはヘラケズリを施すものが多く、わずかに刷毛目を有するものもある。内面にはまれにヘラケズリ、刷毛目を有するものもある。口縁部の内外面には横位のナデを施すものが多い。

底部は木葉痕のものが2点ある。

壺は、口縁部が緩やかに外反するもので、内外面とも横位のナデを施す。

杯は、全体的に丸味をもち、口径に比較して底径が小さく、糸切底に二次調整のヘラケズリがみられる。

胎土は、甕が砂粒を多く含み、調整は概して粗く、内外面に積み上げ痕を残したままのものもあるのに対して、壺の胎土は比較的精選され、砂粒の混入も少なく、調整も丁寧である。

出土した土器は未だ編年的な位置づけが明確でなく、したがって時期は決し難い。

(註1) 秋田県教育委員会『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』1981年

(註2) 中村良幸「大形住居」『縄文文化の研究8』雄山閣1982年

(註3) 富樫泰時「秋田市柳沢発見の住居跡」『考古学ジャーナル99』1974年

(註4) 秋田県教育委員会『館下1遺跡発掘調査報告書』1979年

(註5) 八竜町教育委員会『釜川沢貝塚』1979年

(註6) 上小阿仁村教育委員会『上小阿仁村不動遺跡概報』1978年

(註7) 大館市教育委員会『芋搦沢遺跡発掘調査報告書』1972年

(註8) (註1)に同じ

はりま館遺跡土壌分析表

単位：P. mg/100g

分析法：Pearson法による

No.	試料名	試料状況	全リン酸 (ng/100g)	無機態リン酸	有機態リン酸
1	SR073	土器内埋土(上)	33.5	19.8	13.7
2	"	" (中)	29.7	21.6	8.1
3	"	掘り方内埋土	27.3	17.1	10.2
4	"	遺構外	22.5	12.3	10.2
5	SR069	①と①'の間	31.7	19.7	12.0
6	"	①内埋土(上)	32.9	17.8	15.1
7	"	" (下)	31.8	16.7	15.1
8	"	掘り方内底面	32.7	18.4	14.3
9	"	②内埋土(上)	43.4	20.9	22.5
10	"	" (中)	38.6	22.8	15.8
11	"	" (下)	42.9	20.0	22.9
12	"	③内埋土底面	39.5	21.2	18.1
13	"	掘り方内埋土	31.1	17.2	13.9



第91図 試料採取場所模式図



遺跡遠景（東▶）



調査前（北▶）



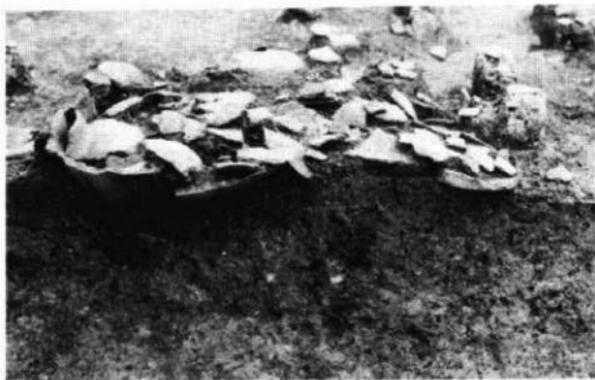
表土除去後—白っぽいのは大湯軽石層—（北▶）



調査状況—大湯軽石除去作業—（北▶）



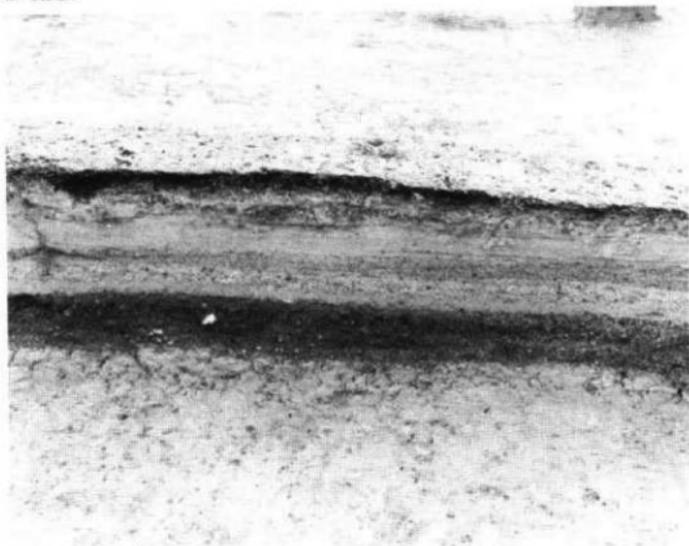
土器出土状況



土器出土状況



石棒出土状況



大溝軽石堆積状態



図版 4

S I 001 竪穴住居跡 (北▶)



S I 007 · 015 · 016 方穴住居跡 (南) ▶

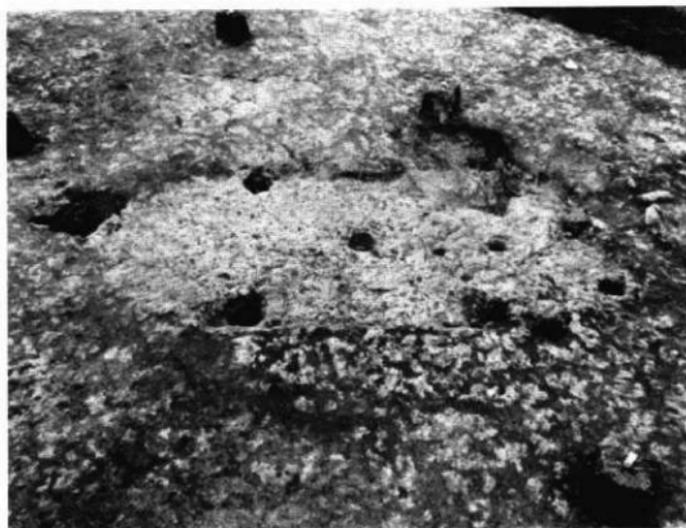


図版 5

S I 007 方穴住居跡 (北東) ▶



S I 007石器出土状況



図版 6

S I 009 竪穴住居跡 (東▶)

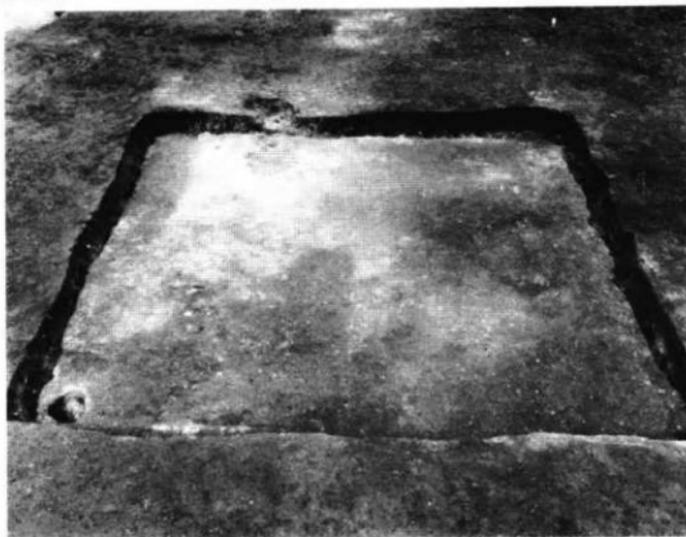


S I 009 竖穴住居跡土器埋設炉

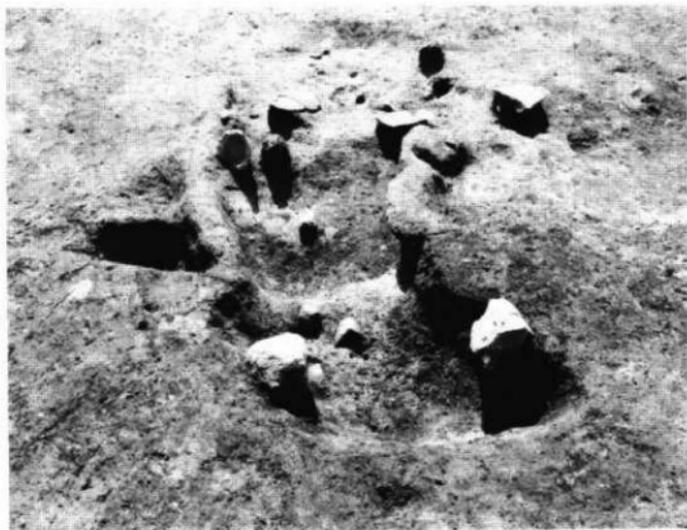


图版 7

S I 014 竖穴住居跡 (北▶)



S 1 002 竪穴住居跡 (南▶)





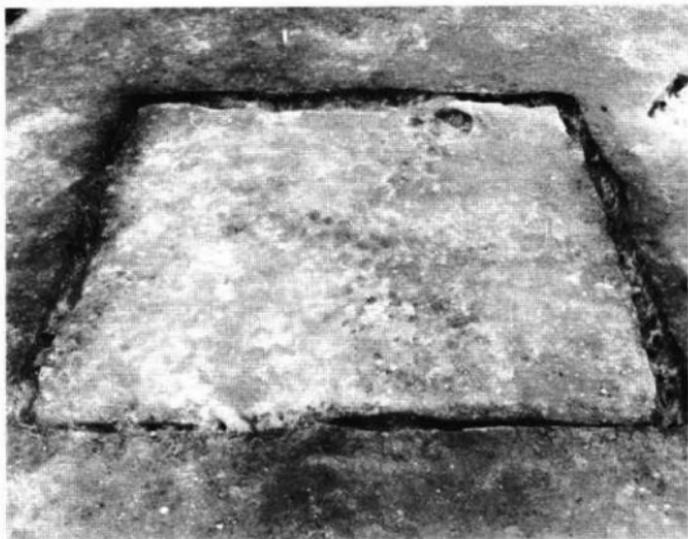
S I 003 竪穴住居跡 (東▶)



S I 003 同上炉検出状況  
(北▶)

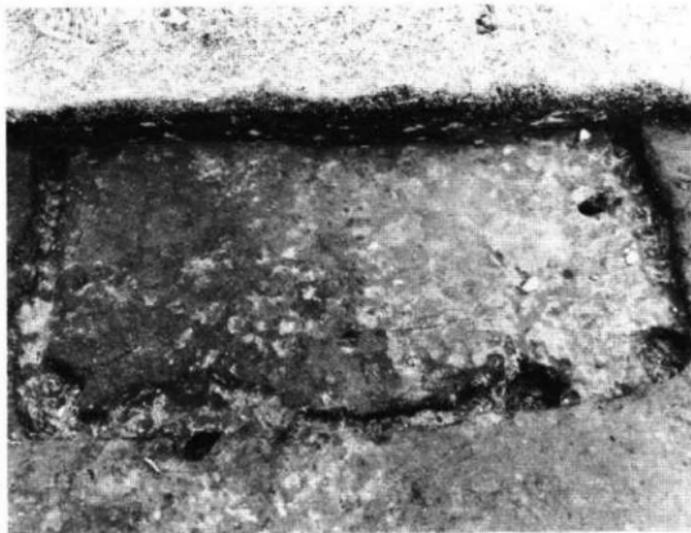
S I 003 同上炉土層断面  
—e~f— (南▶)





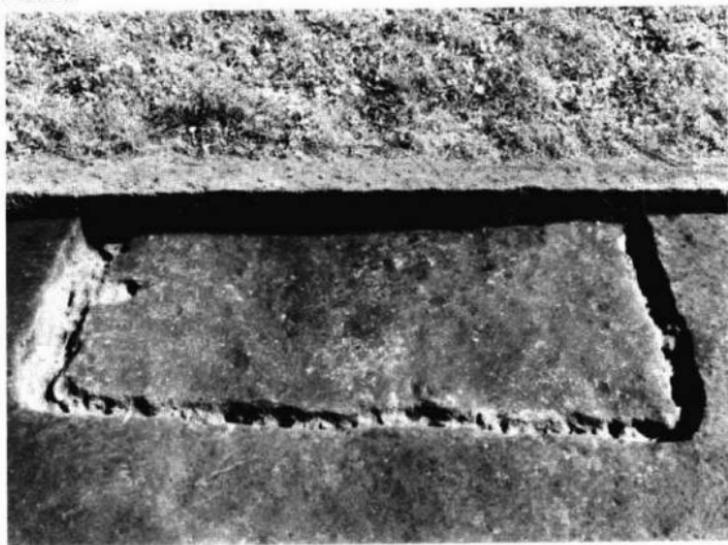
S I 004 竪穴住居跡 (北▶)



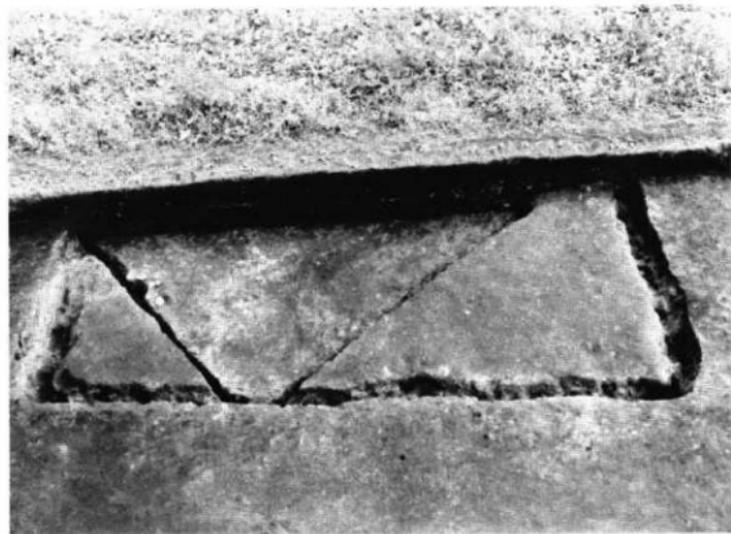


S I 005竪穴住居跡（西▶）





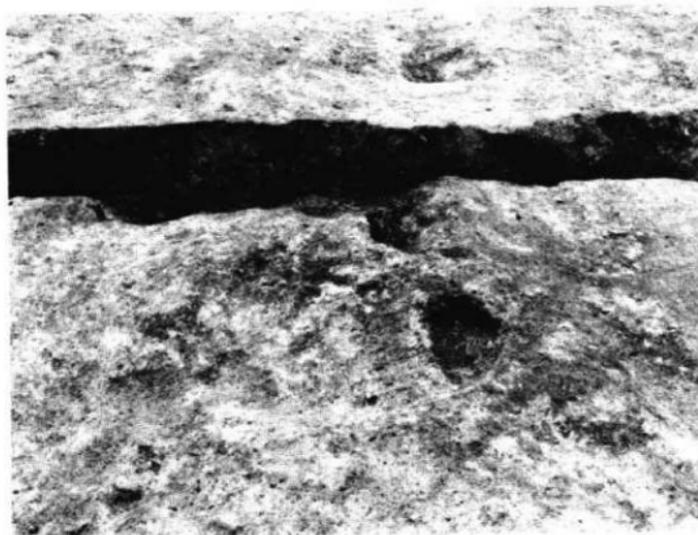
S I 006 竪穴住居跡 (西▶)



S I 006・018 竪穴住居跡 (西▶)



S I 020 竪穴住居跡 (西▶)



S I 020 竪穴住居跡カマド (北▶)



S I 038 豎穴住居跡 (西▶)

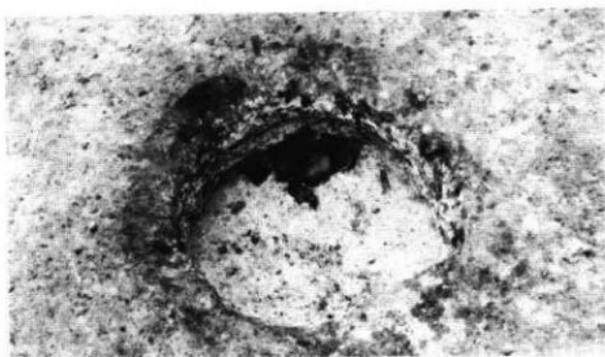


図版 14

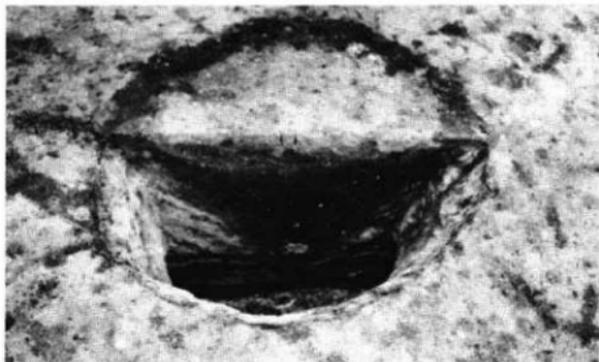
S I 038 豎穴住居跡土層断面 (西▶)



S K F 029・030・031フラスコ状ビット (東▶)



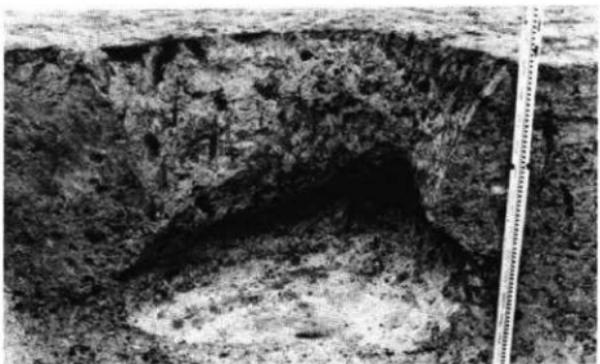
S K F 037フラスコ状ビット (北▶)



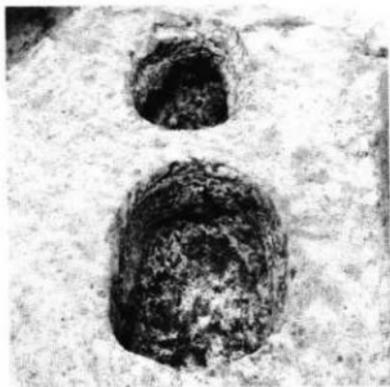
S K F 078フラスコ状ビット土層断面



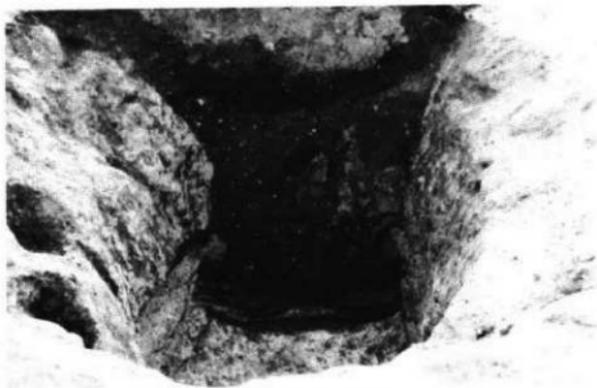
S K F 078フラスコ状ビット土層断面



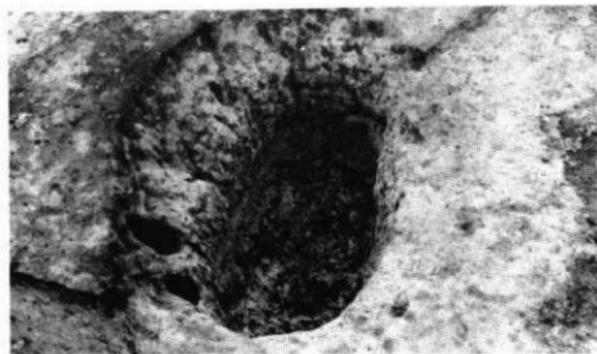
S K F 078フラスコ状ビット (南▶)



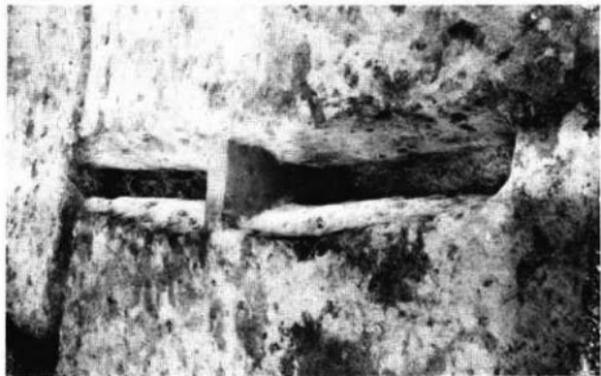
S K 076・077土坑 (北西▶)



S K 079土坑土層断面



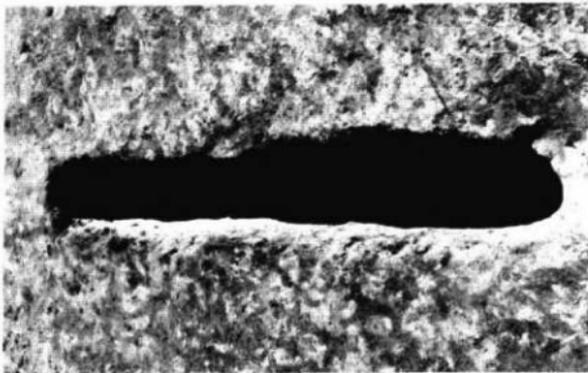
S K 079土坑 (北東▶)



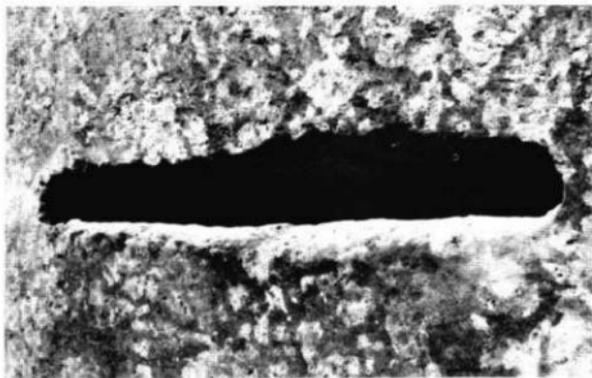
S K T 020 T ビット (南▶)



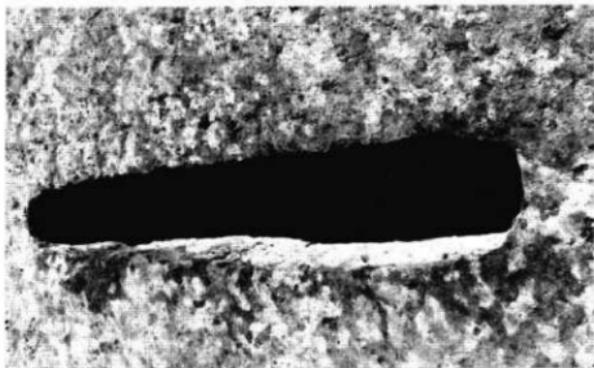
S K T 023 T ビット土層断面



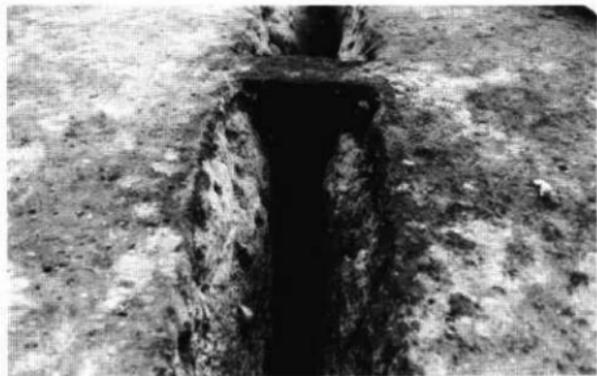
SKT 024Tピット (北西▲)



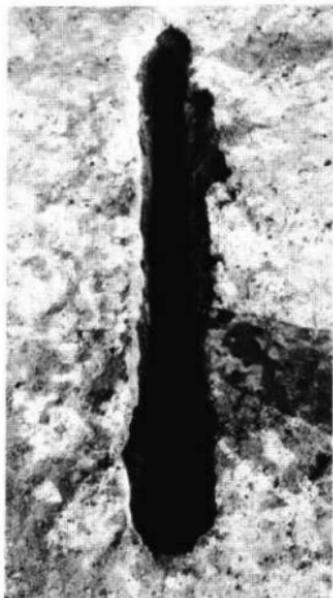
SKT 025Tピット (北西▲)



SKT 026Tピット (北西▲)



SKT 027Tピット土層断面 (北西▶)



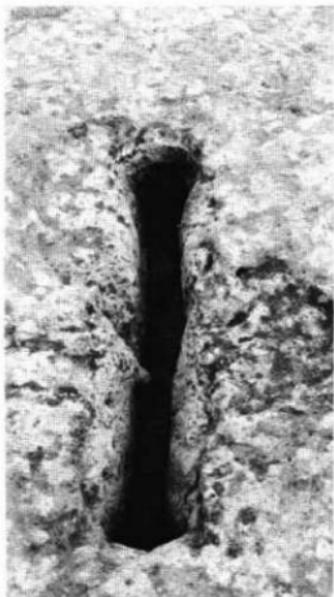
SKT 028Tピット (北西▶)



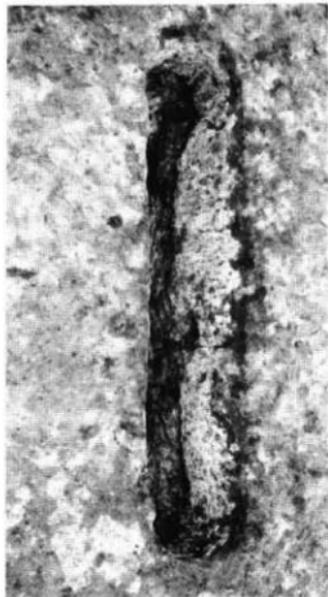
SKT 032Tピット (南西▶)



SKT 051Tピット (南▶)

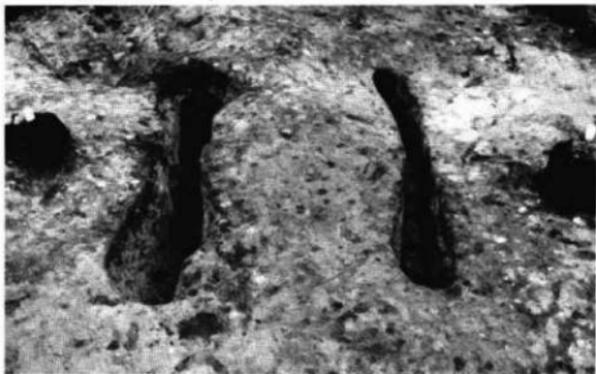


SKT 036Tピット (北西▶)



SKT 061Tピット (西▶)

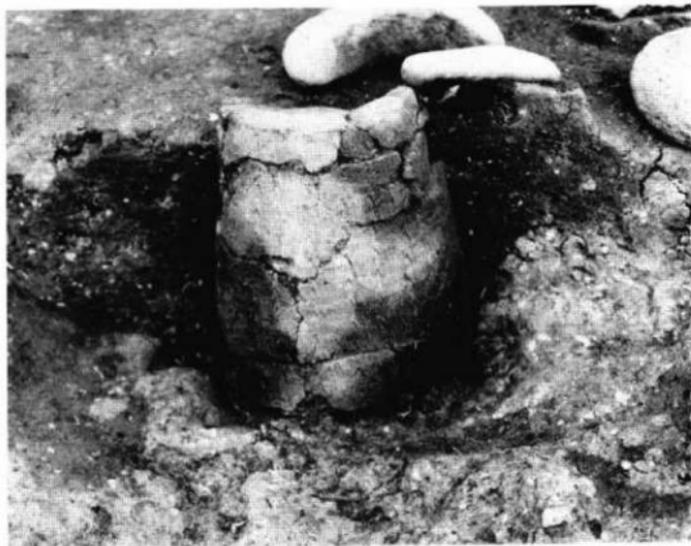
はりま館遺跡



S K T 095・096 Tピット (東▶)



S R 013埋設土器



S R 017埋設土器



S R 034埋設土器

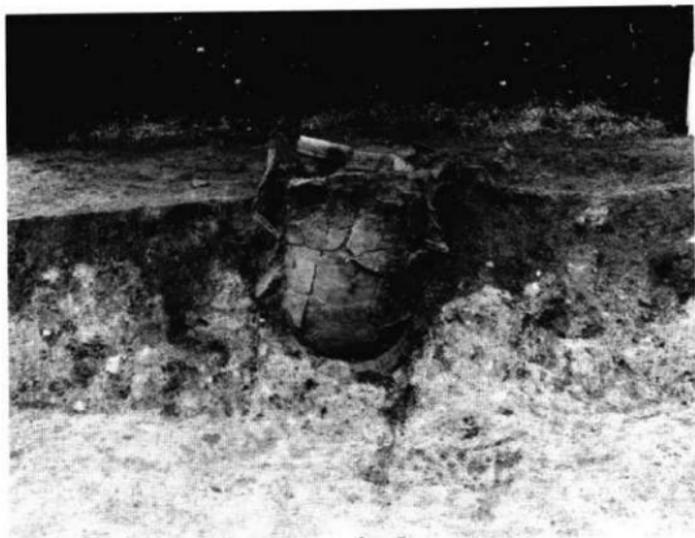


S R 069埋設土器



圖版24

S R 069埋設土器



S R 073埋設土器



図版25

S B 075獨立柱遺物跡 (南▶)



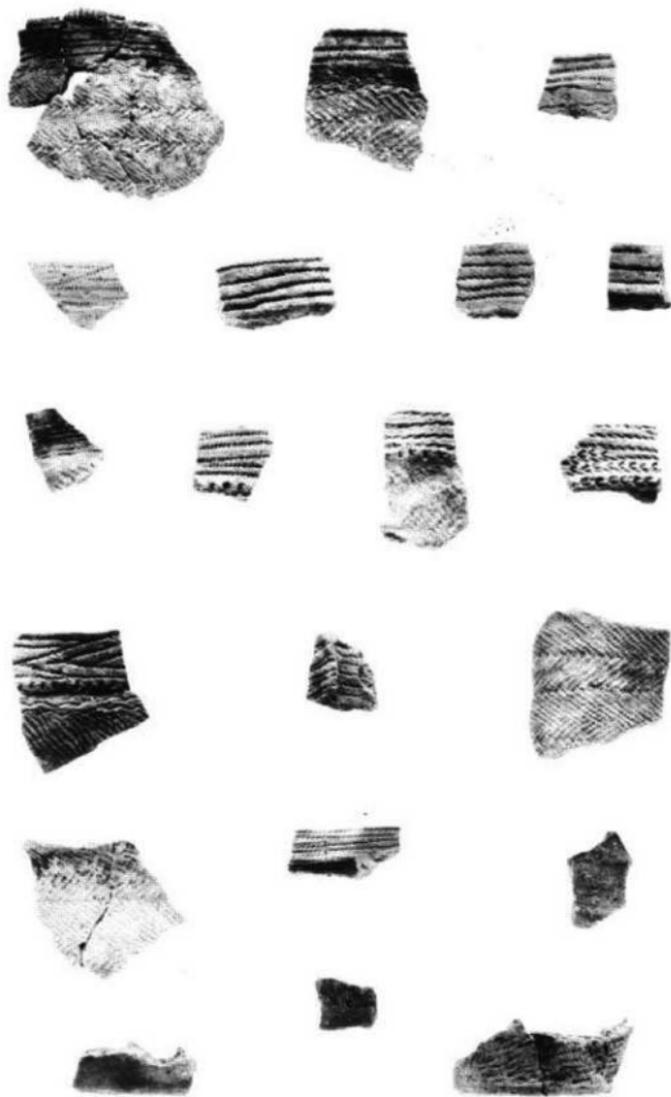
RC 炭化材全景 (南▶)



RC 054炭化材



RC 054炭化材





図版28

S1007要穴住居跡出土遺物



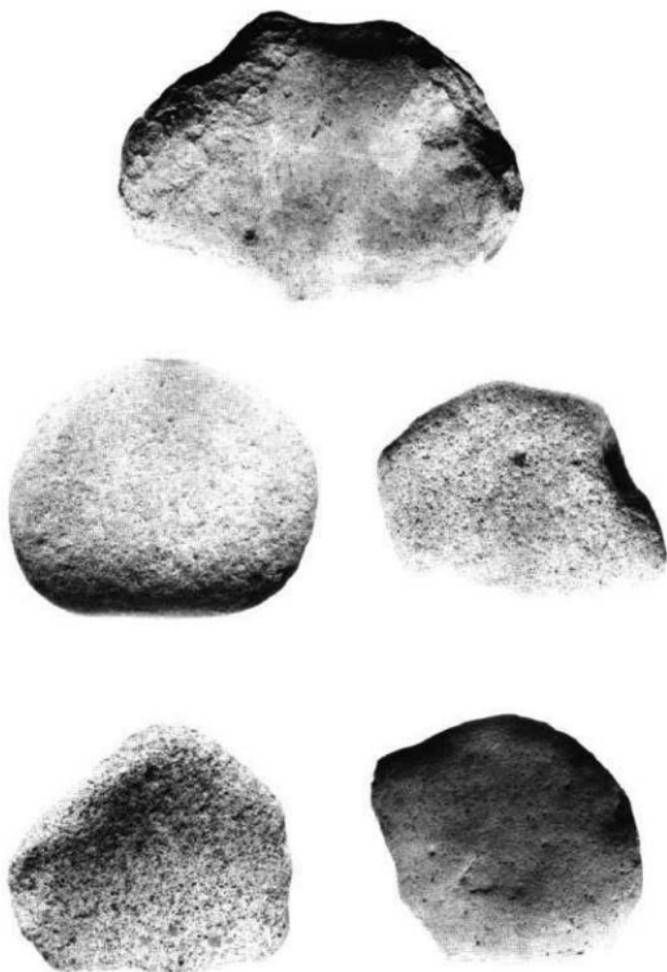
図版29

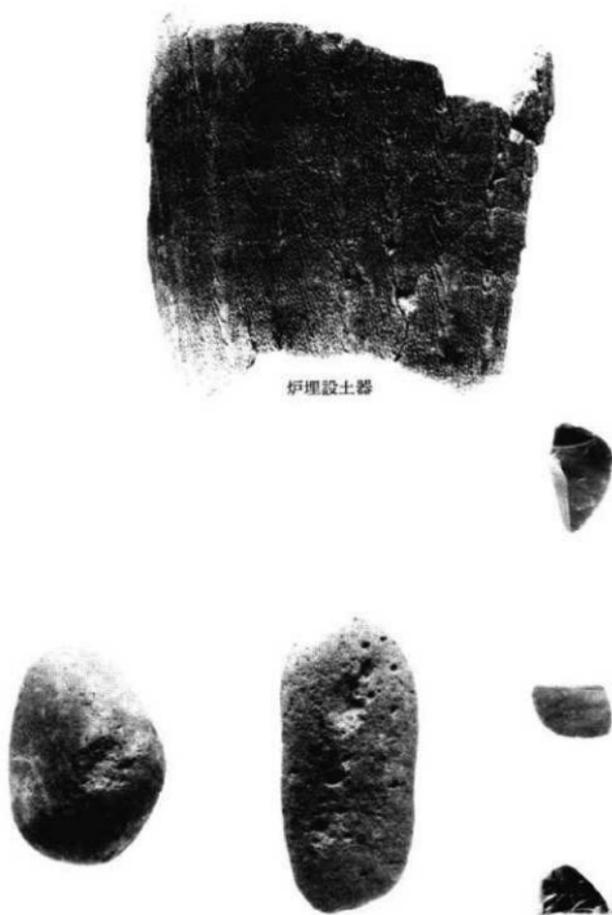
S I 007 竪穴住居跡出土遺物



圖版30

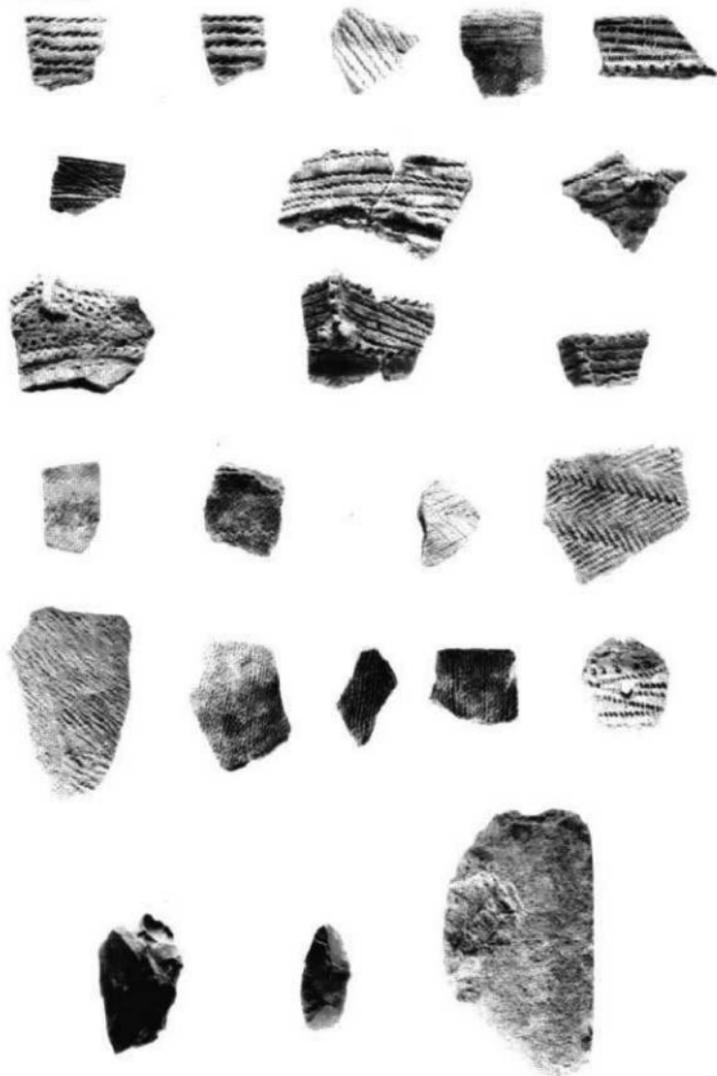
S I 015 竪穴住居跡出土遺物





炉埋設土器









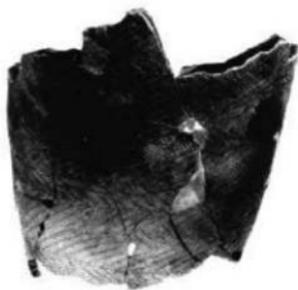
SKF 037



SR 013



SR 017



SR 034



SR 069 ②



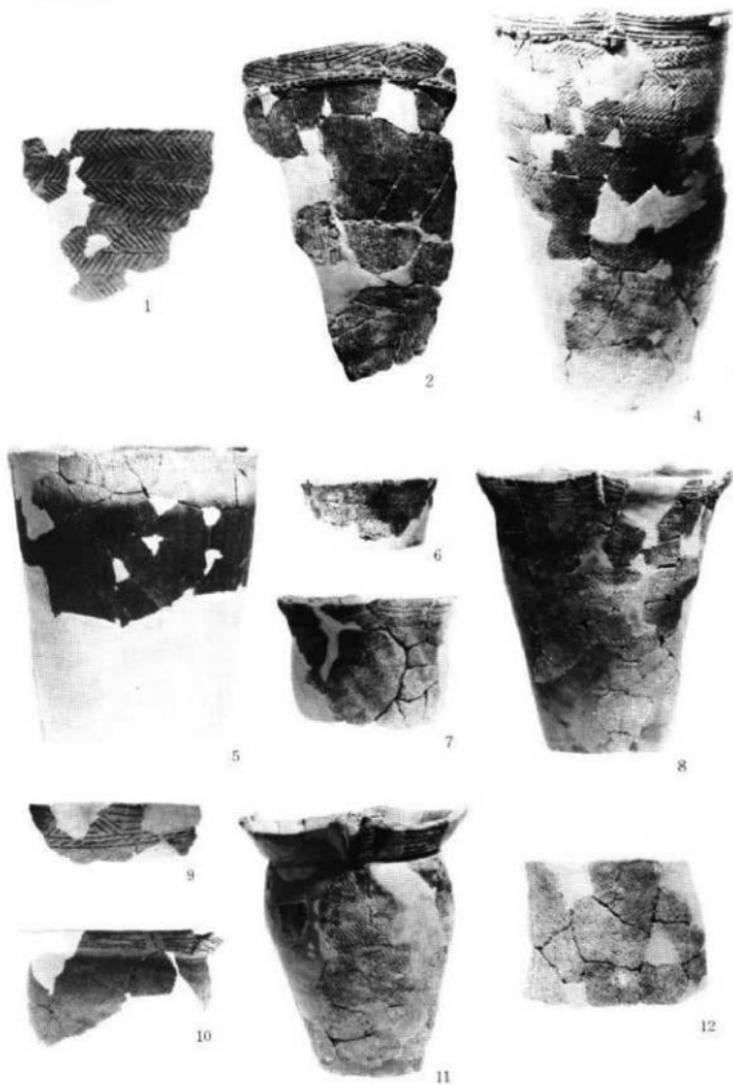
SR 069 ①



SR 069 ①



SR 073 R P I

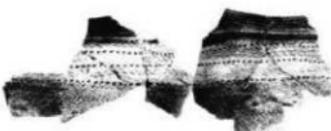


図版38

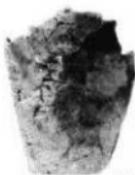
遺構外出土遺物



13



15



14



16



17



18



19



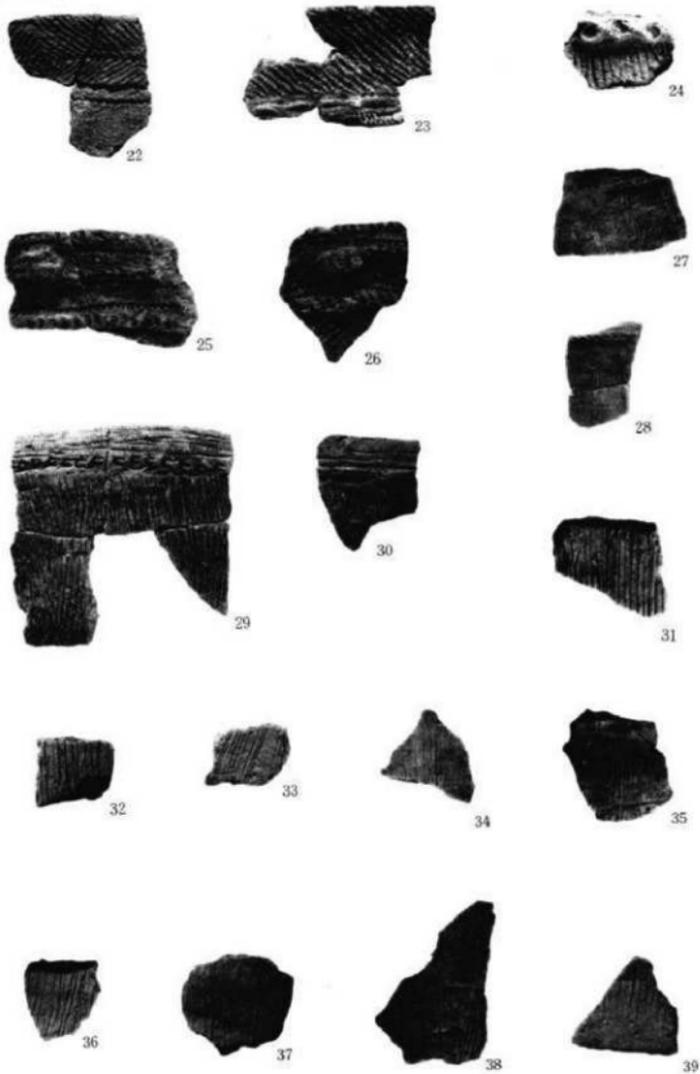
20



21

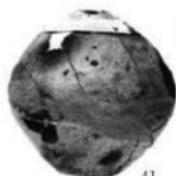


86





40



41



42



43



44



45



46



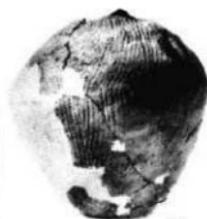
47



48



80



81



82



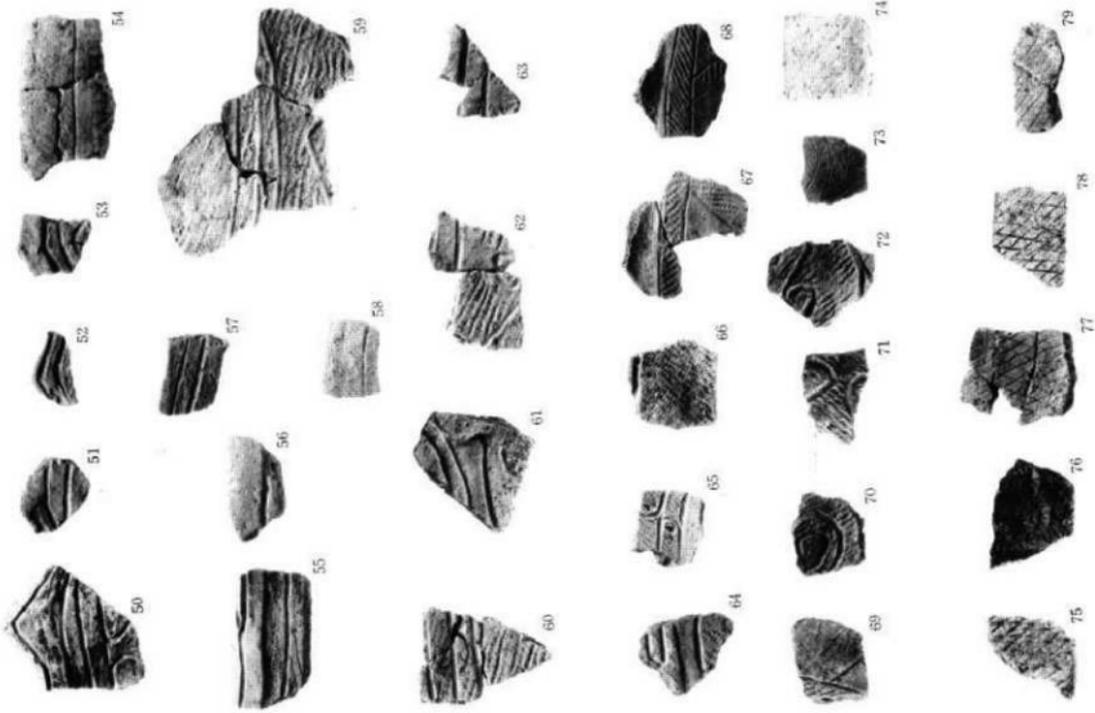
83



84



85





87



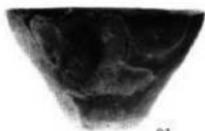
89



88



90



91



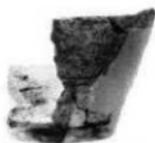
92



93



94



95



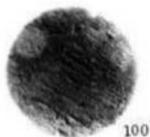
96



97



98

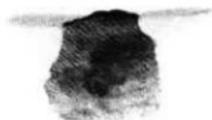


102

99

100

101



104

106



103

105

107



108



109



110



111



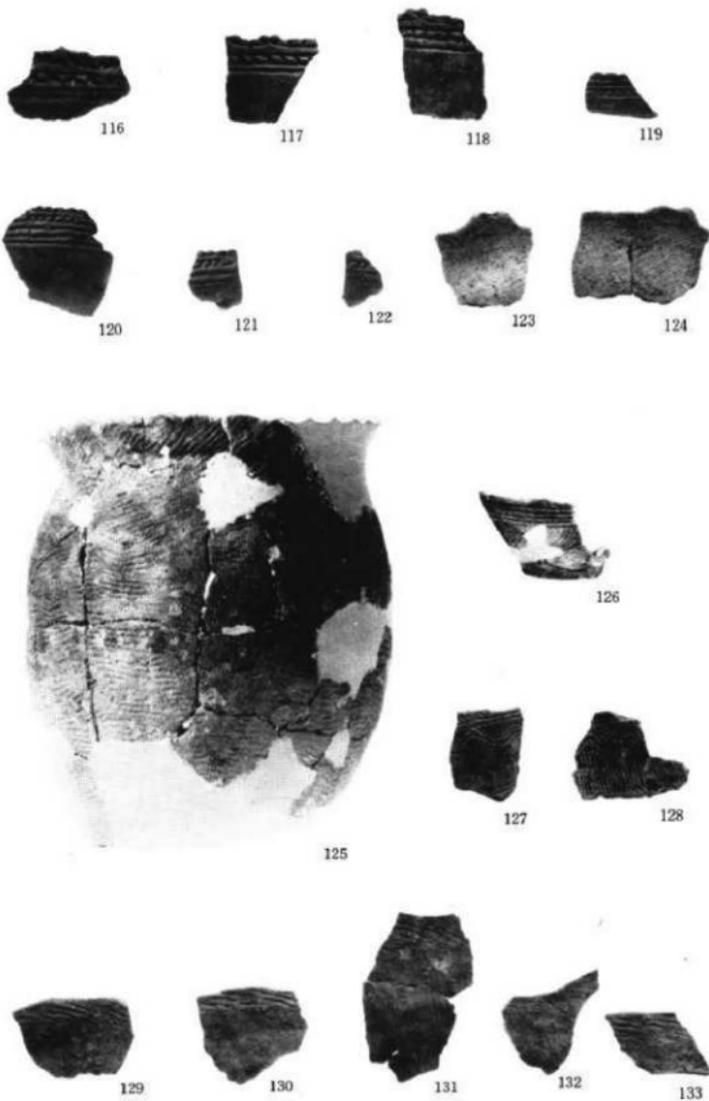
112



114



113





1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



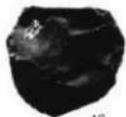
43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61



62



63



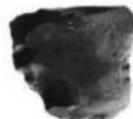
64



65



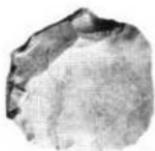
66



67



68



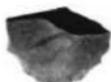
69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



105



106



103



104



107



108



109

図版52

遺構外出土遺物



110



111



112



113



114



115



116



117



118



119



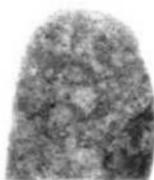
120



121



122



124



123



125



126



127



128



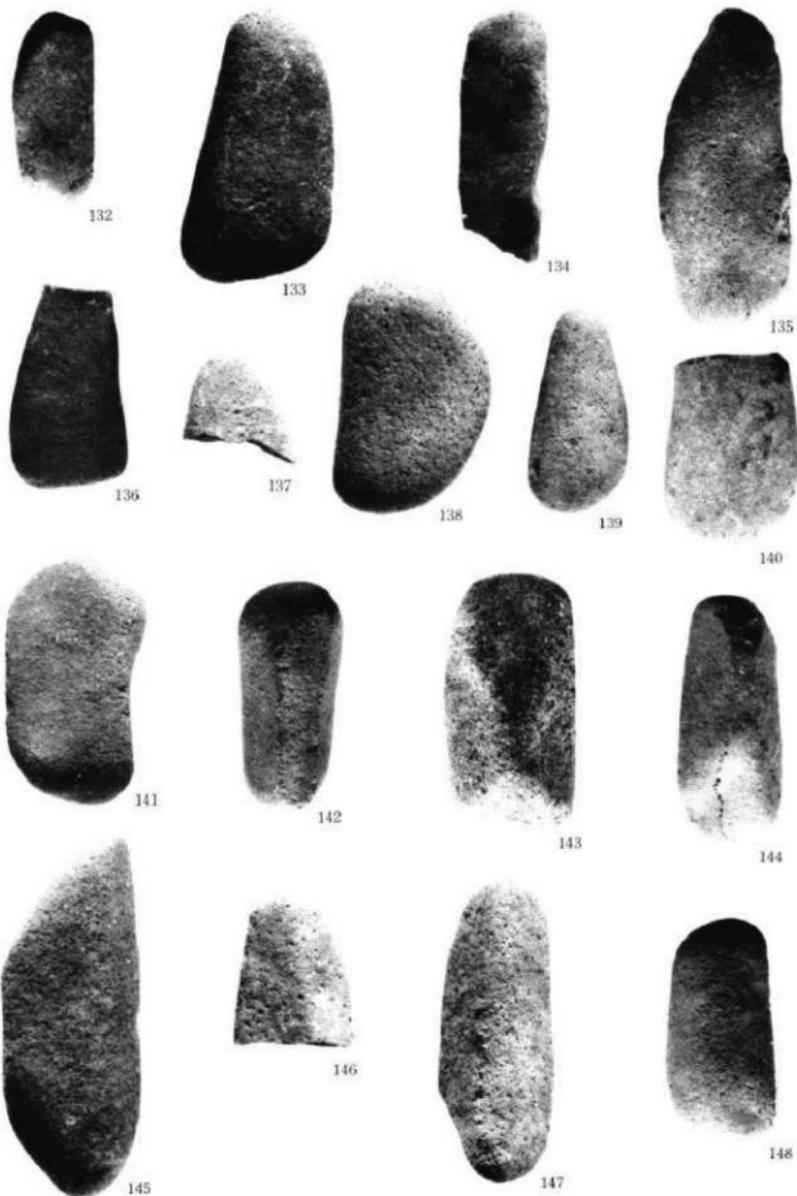
129



130



131



図版55

遺構外出土遺物



圖版56

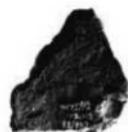
遺構外出土遺物





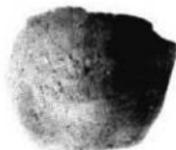
圖版58

遺構外出土遺物



稜状のある土器

S I 002 竪穴住居跡



S I 003 竪穴住居跡



圖版60

S 1 004 竪穴住居跡出土遺物



S I 005 豎穴住居跡



S I 006 豎穴住居跡



S I 018 豎穴住居跡

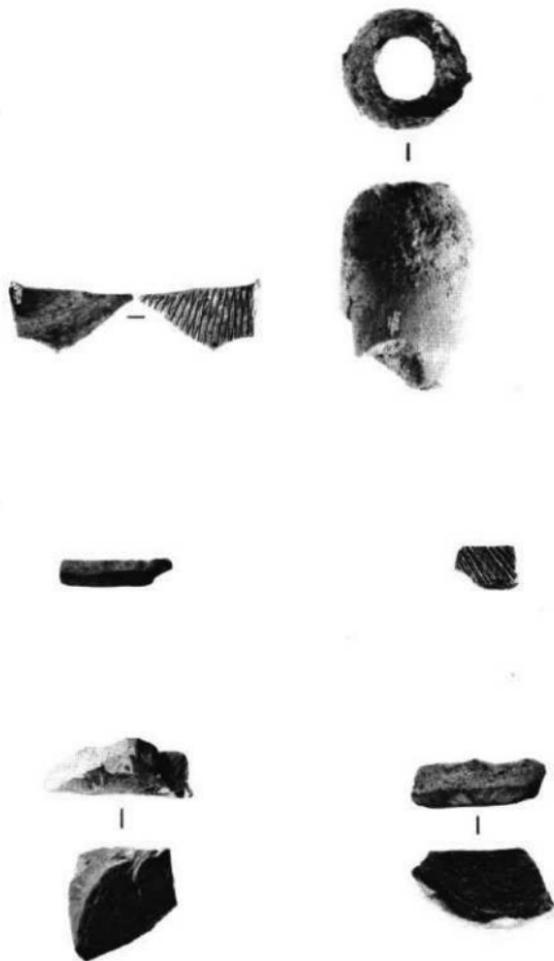


S I 020 豎穴住居跡



S I 038 豎穴住居跡





## 横 館 遺 跡

遺 跡 番 号	No.2
所 在 地	鹿角郡小坂町小坂字横館22番地他
調 査 期 間	昭和57年8月10日～9月20日
発掘調査予定面積	3,236㎡
発掘調査面積	3,700㎡

## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

横館遺跡は、鹿角盆地の北端を南流する小坂川の右岸に位置し、平坦な段丘地形（A区）と東面する緩い斜面（B区）に立地する。標高は約215m、沖積地との比高は約60mを測る。遺跡の北側と東側は浸食され、急斜面を形成している。沢水は東流して、小坂川に流れ込む。西側の後背地は、緩い起伏を呈する丘陵である。南側は、標高約200mの段丘であり、縄文時代前期後半と平安時代後半を主体とするはりま館（No.1）遺跡が所在する。

遺跡の基本層序は、上位から、黒色腐植土層→大湯軽石層→チョコレート色土層→黒色腐植土層→漸移層→火砕流堆積物と考えられる軽石質火山灰層（地山）である。表土から地山までの深さは、A区が約110m、B区が約60cmである。大湯軽石層の厚さは、13cm前後である。大湯軽石層下のチョコレート色土層から弥生時代の遺物が、この層の下の黒色腐植土層から縄文時代の遺物が、それぞれ出土する。

なお、現況はニセアカシアを主体とする雑木林である。

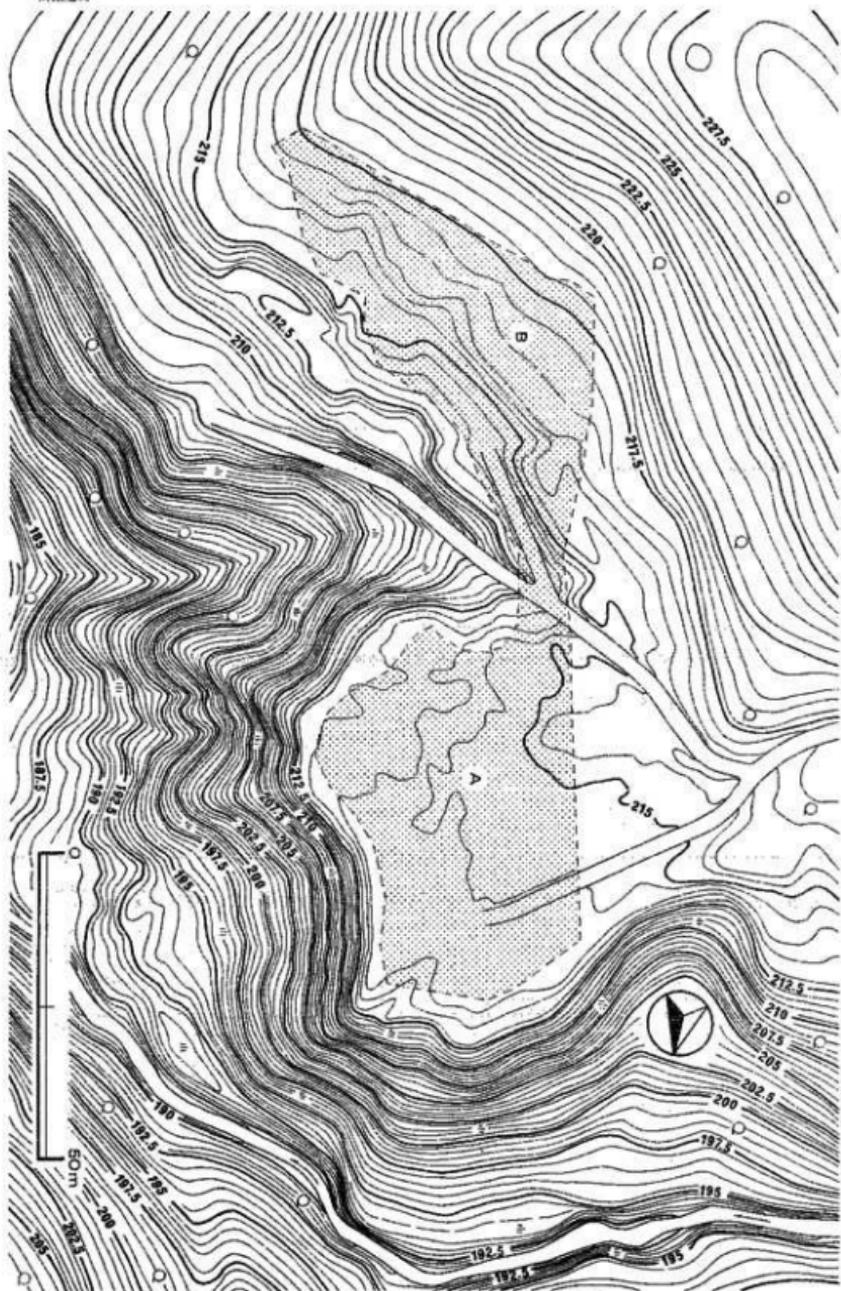
### 第2節 調査の方法

東北自動車道の路線敷は、稀少な遺跡のほぼ全域に相当する。その面積は、4,045㎡である。

遺跡全面には、大湯軽石層が分布している。大湯軽石層は、平安時代の火山灰であるため、遺構・遺物の対比において鍵層となり得る。作業日程の関係上、この大湯軽石層上の黒色腐植土層を重機で除去した。グリッド杭は、日本道路公園の設定したSTA 90+40を発掘原点とし、4m×4mに打設した。グリッドの1辺は磁北方向に一致する。グリッドの名称は、南北方向の算用数字と東西方向のアルファベットの組み合わせで呼称することにした。

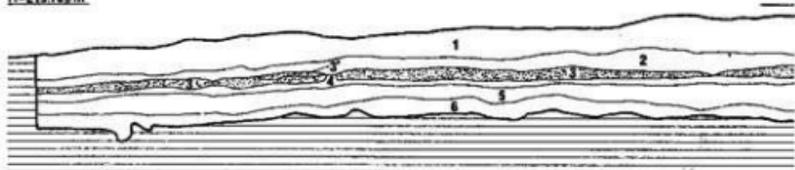
前述したように、当該遺跡は平坦な段丘面と緩い斜面からなるため、便宜的に、前者をA区後者をB区と呼ぶこととした。

遺跡の基本層序の観察は、路線のほぼ西端部にトレンチを掘って実施した。

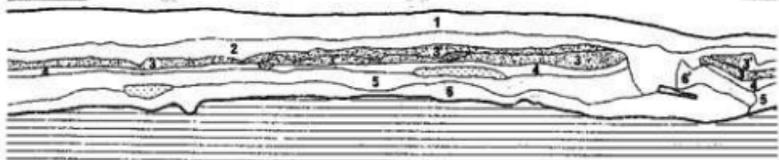


第1図 遺跡周辺の地形と発掘調査区

H=215.700m



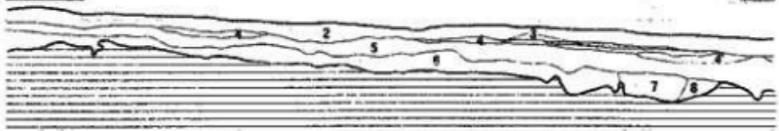
H=215.700m



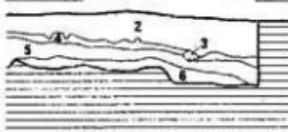
H=215.300m



H=215.000m

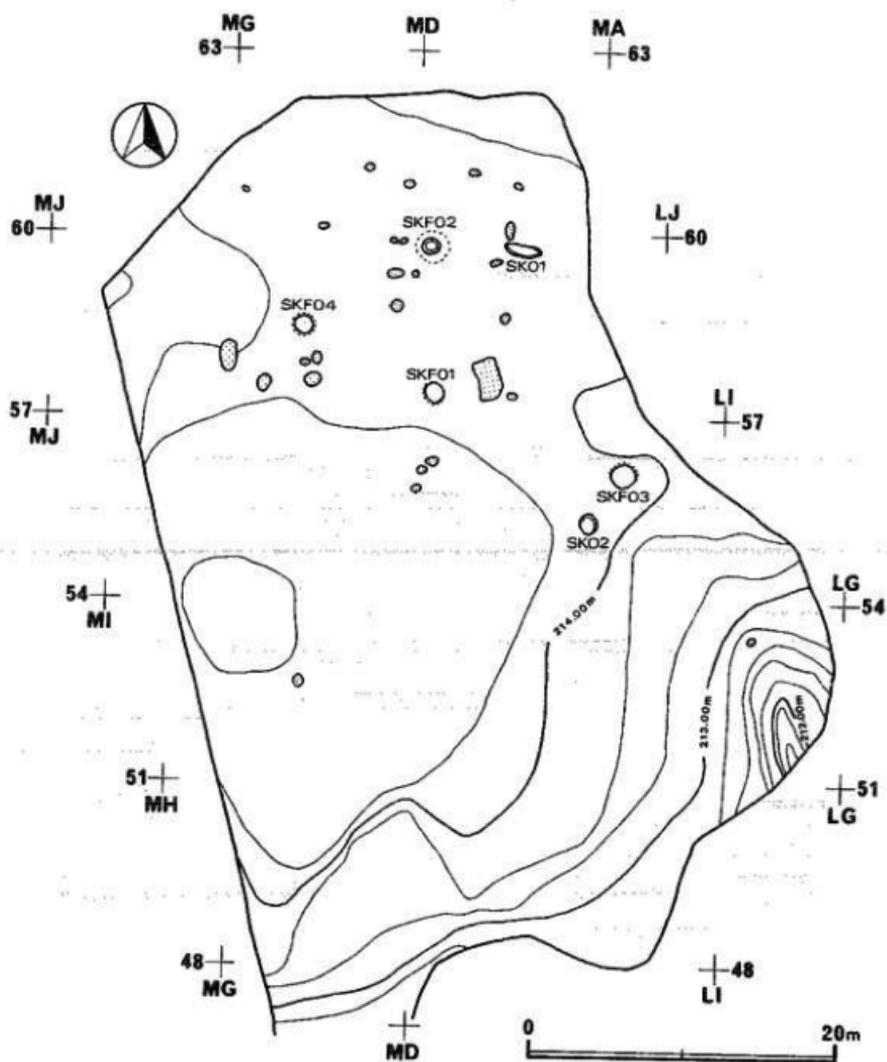


H=214.700m



- |          |         |
|----------|---------|
| 1 黑褐色土   | 4' 暗褐色土 |
| 2 黑土     | 5 黑土    |
| 3 明黄褐色土  | 6 褐色土   |
| 3' 褐色土   | 6' 黑褐色土 |
| 3'' 明褐色土 | 7 黑褐色土  |
| 4 黑褐色土   | 8 褐色土   |

第2图 土层实测图



第3图 遺構分布図(A区)

### 第3節 調査の経過

発掘調査期間は、昭和57年8月10日～同年9月20日である。

8月10日は大湯軽石層の上面で、中世の遺構・遺物の検出につとめたが、中世関係のものは皆無であった。8月11日から大湯軽石層を除去し、掘り下げを開始した。軽石層下の第4層から弥生時代の遺物が、第5層から縄文時代の遺物が検出される。8月19日からB区の調査を開始したが、縄文時代前期の土器片がわずかに出土したのみで、遺構は検出されなかった。8月26日からA区の精査を開始した。A区の北側に焼土遺構が集中的に検出される。竪穴住居との関連を追求するために、プラン・柱穴等の検出に努める。扁平打製石器・石匙の出土が目につく。9月7日から土壌・フラスコ状ピットの精査を開始する。9月10日から遺構配置図作図作業を開始する。9月13日から地山の地形図作図作業を開始する。9月16日は遺構及び遺跡の写真撮影。9月20日は発掘用具・機材を撤去し、調査を終了する。

## 第2章 調査の記録

遺構と遺物は、A区において集中的に検出された。また、表土から大湯軽石層までは無遺物層であり、軽石層下の第4層から弥生時代の遺物が、第5層と第6層から縄文時代の遺構と遺物が検出された。

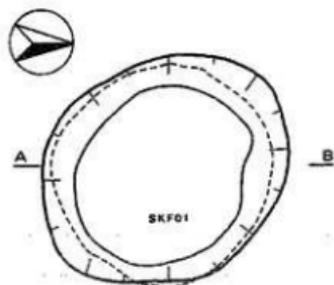
### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 発見遺構と遺物

##### (1) フラスコ状ピット (第4図)

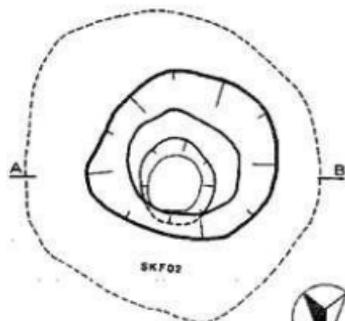
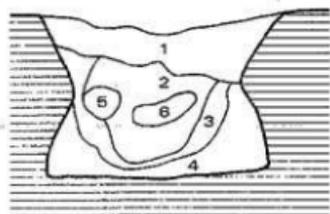
SKF01 MC57グリッド第6層上面で確認。平面の規模は長径1.74m・短径1.40mで、楕円形を呈する。確認面からの深さは1.08mを測る。断面形状は、壁が内湾ぎみに立ち上がり、ほぼ中央部で外反し、直線的に立ち上る「フラスコ状」を呈している。埋土は混入物のない褐色土と黒色土を主体とし、下層にいくにしたがって、堅くしまりが強くなる。

出土遺物は、土器片4点と凹石1点である。第6図1、2は、深鉢形土器の胴部破片で、複筋斜縄文が認められる。



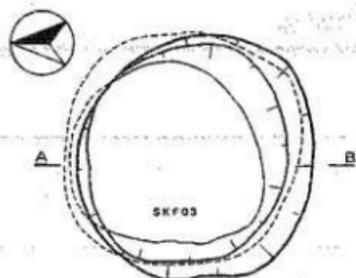
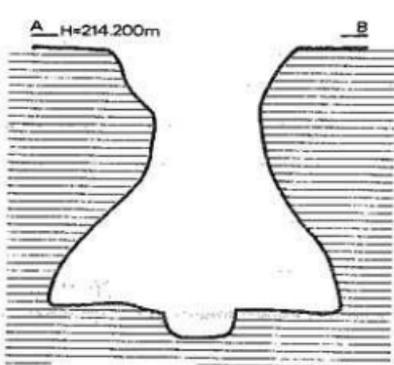
A\_H=214.200m

B



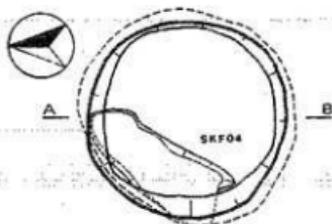
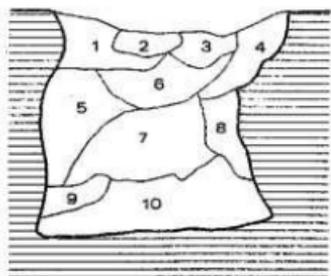
A\_H=214.200m

B



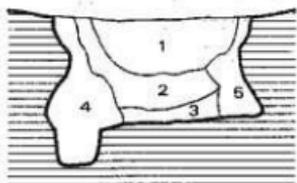
A\_H=214.200m

B



A\_H=214.200m

B



0 1m

第4図 フラスコ状ビット実測図

**SKF02** MC 59グリッド第5層上面で確認。平面の規模は、開口部で直径約1.2m、頸部で直径0.7m、底部で直径1.9mである。確認面からの深さは、1.75m。底部は円形を呈し、平坦で、堅くしまっている。底部のほぼ中央に直径0.45m、深さ0.18mの円形ビットが付設されている。埋土は炭化物を含む暗褐色土を主体とし、全体的にべとべとし、粘性に富む。

出土遺物なし。

**SKF03** LJ 55・56グリッド第5層上面で確認。平面の規模は直径約1.5mで、円形を呈する。確認面からの深さは1.48mである。断面形は、壁が直線に近い緩やかな波形で立ち上がる。南側は一部崩落しているが、「フラスコ状」を呈していたものと思われる。埋土は炭化物を含む暗褐色土と明褐色土を主体とし、下層にいくにしたがって、堅くしまりが強くなる。

出土遺物は土器片2点である。第6図3・4は深鉢形土器の破片であり、綾紋文、複節斜縄文が施されている。

**SKF04** ME 58グリッド第5層上面で確認。平面の規模は直径1.3mで、円形を呈する。確認面からの深さは0.68mである。底面北西側に、長辺約1m・短辺0.45mの隅丸方形を呈し、深さ0.3mのビットが付設されている。断面形は、壁が内傾しながら立ち上がり、上端近くに至って外反し立ち上がる「フラスコ状」を呈している。埋土は黒褐色土と黒色土を主体とし、第3層を除き炭化物を含んでいる。第3層には地山粒が混じっており、堅くしまっている。

出土遺物は、土器片11点である。第6図5は、深鉢形土器の破片で、複節斜縄文が施されている。

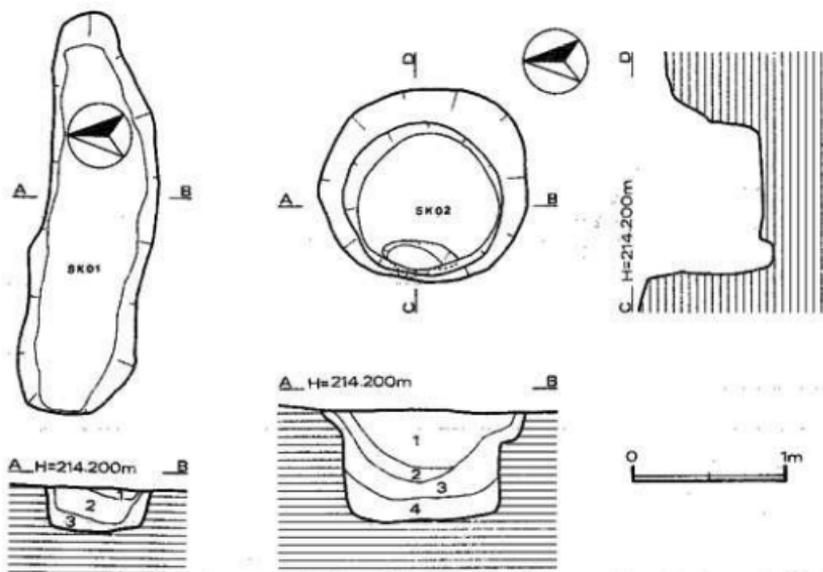
## (2) 土壌 (第5図)

**SK01** MB 59グリッド第5層上面で確認された。平面の規模は長辺2.65m・短辺0.4~0.8mで、隅丸方形を呈している。確認面から深さは0.3mである。壁は北側ではほぼ垂直に、南側では緩やかに立ち上がる。底部は平坦で堅くしまっている。埋土は3層に識別され褐色土を主体とし、第2・3層は粘性が強くしまっている。

出土遺物はない。

**SK02** MA 55グリッド第5層上面で確認。平面の規模は、直径約1.3mで、円形を呈する。確認面からの深さは、0.72mである。壁は垂直に立ち上がるが、一段を有している。底部は平坦でしまっている。床面西側に長径約0.5m・短径0.25mの楕円形を呈し、深さ0.1mのビットが認められる。埋土は炭化物を含む褐色土を主体とし、下層にいくにしたがって粘性が強くなる。

出土遺物は土器片3点である。第6図6は複節斜縄文の施された深鉢形土器の胴部破片である。



第5図 土壌実測図

(3) 焼土遺構

焼土遺構としたものは、地山面が赤色変色し、明らかに火を燃やした痕跡をいう。焼土の規模は、小さいもので径0.5m前後であり、大きいものは2m×3mもある。

焼土遺構は、A区の北半部に、集中的に分布する。

2 遺構外の出土遺物

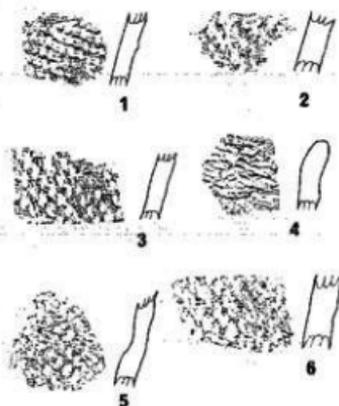
(1) 土製品

① 土器

a 第1群土器 縄文時代前期(円筒下層A式およびB式)の土器である。

第1類土器(第7図1) 円筒形を呈し、口径14cm・底径6cm・高さ15cmである。器表面には複節斜縄文を施し、底面にも縄文が認められる。胎土には繊維を含有している。

第2類土器(第8図4・5、第9図2) 器形は円筒形を呈する深鉢形土器である。口縁部



第6図 遺構内出土遺物

には綾絡文を施し、胴部には複節斜縄文を施している。いずれも胎土には繊維を含有している。

第3類土器(第9図1、第10図5) 器形は円筒形を呈する深鉢形土器である。器表面には縦位の擦糸文が施されている。

第4類土器(第9図3) 器形は円筒形を呈する深鉢形土器である。口縁部に太い隆帯を貼付する。器表面と隆帯には、縦位・斜位・横位に不整擦糸文を施している。器壁には繊維を含有している。

第5類土器(第9図4・5、第10図1~4) 器形は円筒形を呈する深鉢形土器で、大型である。口縁部には綾絡文が、胴部には単節および複節の斜縄文を施している。これらの土器に共通することは、口縁部に隆帯を貼付し、隆帯上には指頭圧痕文を施している点である。また、指頭圧痕は口唇部にも施される例が多い。胎土には繊維が含有される。

第6類土器(第10図6・7) 口縁部破片のみで全体の器形は不明であるが、円筒形を呈する深鉢形土器であろう。口縁部には押圧縄文が認められる。胎土には繊維が含有される。

第7類土器(第9図6) 口縁部がわずかに外反し、円筒形を呈する深鉢形土器である。口径18cm・底径9cm・器高30cmである。口縁部には結束羽状縄文を、胴部には縦位の擦糸文が施されている。口縁部には2条の押圧縄文が州繞する。2条の押圧縄文の間には、刺突文が施されている。

b 第2群土器(第10図8・9) 縄文時代中期(大木7b式)の土器と考えられる。押圧縄文が直線状および曲線状に施文されている。胎土には繊維を含有しない。

c 第3群土器(第10図10~14、第11図1) 縄文時代中期か後期の土器と思われるが、確定できない。粘土紐の貼付と沈線文が施される。破片のみであるが、深鉢形土器であろう。内面にはミガキが認められる。

d 第4群土器(第11図2~13) 縄文時代後期(十腰内I式)の土器と考えられる。

第1類土器(第11図2~10) 沈線文の施文される類。

第2類土器(第11図11) 斜位の擦糸文の施文される類。

第3類土器(第11図12・13) 単節斜縄文が施文される類。

## (2) 石製品

### ① 石器

石鏃(第13図1~3) 3個出土。1と2は押圧剝離技法で成形された細身の無茎鏃である。1は先端部が細くなるが、2はやや幅広である。2の基部にはアスファルトが付着している。3は二等辺三角形を呈する無茎鏃である。石材は、いずれも頁岩である。

石匙(第1図4~18、第2図1~15、第3図1~9) 39個出土。縦形が圧倒的に多く、横形は1個のみである。石材は、第13図の16が流紋岩、第14図の4が鉄石英、他は頁岩である。

搔器（第15図10～13） 4個出土。背面に押圧剥離を施し、先端部を丸く仕上げている。主要剥離面への加工は認められない。石材は、いずれも頁岩である。

石筥（第15図14・15） 2個出土。14は、背面および主要剥離面に階段状剥離を施し、断面は菱形を呈する。15は、背面および主要剥離面ともに押圧剥離を施している。石材は、いずれも頁岩である。

削器（第16図1～12、第17図4・6～8、第18図1～8、第19図1～8） 33個出土、剥片の両側縁、または、1側縁を調整して、刃部を作出している。石材は頁岩である。

石槍様石器（第17図5） 1個出土。形態は石槍に類似するが、鋭さに欠けるため、石槍としての機能ははたしえなかったものと考えられる。頁岩を使用している。

三日月形石器（第17図1～3） 3個出土。形態は弧状を呈し、背面の両側縁に加工が施される。主要剥離面への加工は認められない。

両面加工石器（第19図9～11、第20図1・2） 5個出土。両面に階段状剥離が施され、周縁に使用痕と思われる刃こぼれが認められる。いずれも頁岩を使用している。

石皿（第20図3） 1個出土。周縁が1cmほどたかまる。石材は花崗岩である。

半円状扁平打製石器（第20図4・5、第21図1～5、第22図1～5） 16個出土。扁平な石材を半円状に成形し、直線状を呈する側縁を使用している。使用した部分は磨滅して平坦であるが、第21図1と第22図1は、弧状を呈する側縁も使用している。石材は安山岩である。

凹石（第23図1～4） 4個出土。礫に数カ所の凹部が認められる。石材は安山岩である。

礫石器（第23図5・6） 2点出土。断面三角形の1側縁に使用痕が認められる。

研磨礫（第24図1・2） 3個出土。表面が研磨され、光沢が認められる。

②円盤状石製品（第24図4） 凝灰岩を直径約7.5cmの円形に成形したものであり、表裏に成形痕が顕著に認められる。

③刻線礫（第24図5） 直径約10cm・厚さ2cmの礫の1面には、中央にある凹部を中心に刻線が認められる。他面にも刻線が認められるが、判然としない。

④垂飾品（第24図6・7） 凝灰岩を扁平に成形し、ほぼ中央に孔を穿っている。平面形は楕円形を呈するが、周縁には刻み目が施される。7は欠損品である。

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は検出されなかった。弥生時代の土器が、A区第4層から出土したのみである。

### 1 遺構の出土遺物

#### (1) 土器

第1類土器（第11図14～20） 斜位・縦位の単節縄文地の上に沈線文が施される類。17～19の内外面には口縁に平行に、数条の沈線文が施され、口唇部の内外には刻み目が施されている。なお、20には、地文としての縄文は認められない。

第2類土器（第11図21～29） 口縁部には横位・斜位の単節縄文が施されるが、沈線文は認められない。29の頸部の縄文は磨消され、無文帯を構成する。26～29は同一個体と考えられ、小突起を有し、口頭部には沈線文が施されている。

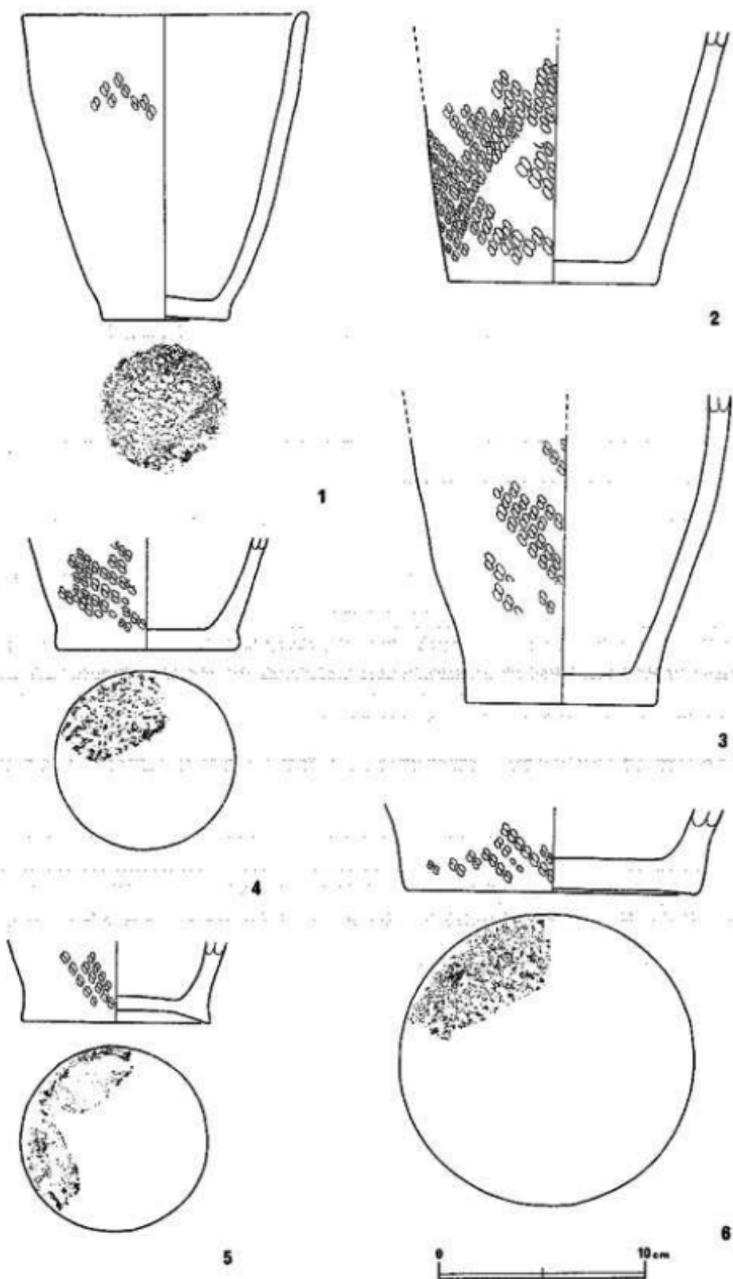
第3類土器（第12図1～13） 緩い波状口縁をなす深鉢形と考えられる。口縁部には幅約1cmの摺糸文を横位に施し、胴部には縦位の摺糸文が施されている。胎土・焼成は良好である。11は胴上半は不明であるが、胴下半部と底部に摺糸文が施されている。

第4類土器（第12図14～17） 口縁部が外反する鉢形土器であろう。口縁は波状を呈するものと考えられる。口縁部には、先端の細い工具で斜位・横位に沈線文を施している。胴部には摺糸文が施されるようである。胎土・焼成は良好である。

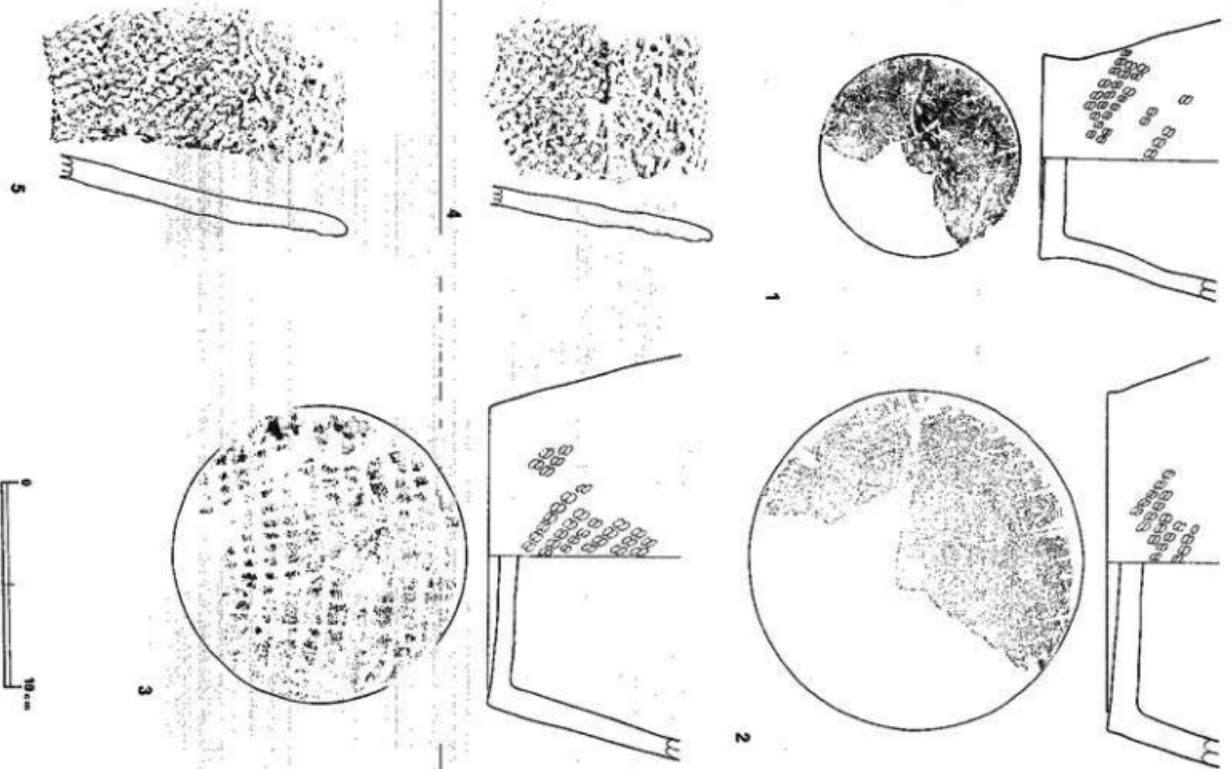
第5類土器（第12図19・20） 頸部が内彎し、口唇部の内外に刻み目を有する土器である。胎土・焼成は良好である。

第6類土器（第12図18） 交互刺突文の施文される土器である。1片のみの出土である。

第7類土器（第12図21） 口縁部の外反する深鉢形土器である。口唇部は棒状工具を、外側外方から内側に押して、凹部を作出しているため、小波状を呈する。表面は無文である。胎土・焼成はあまりよくない。外面には炭化物が付着している。

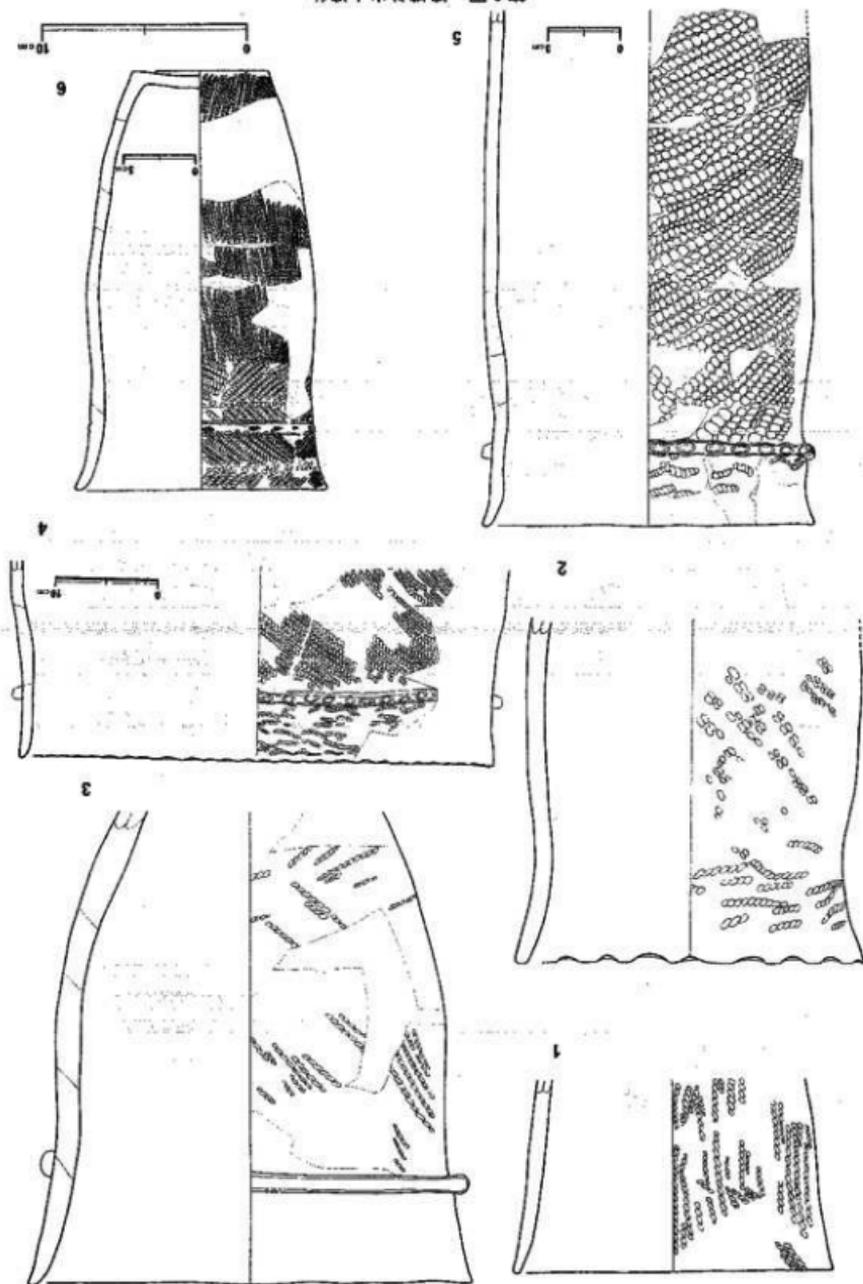


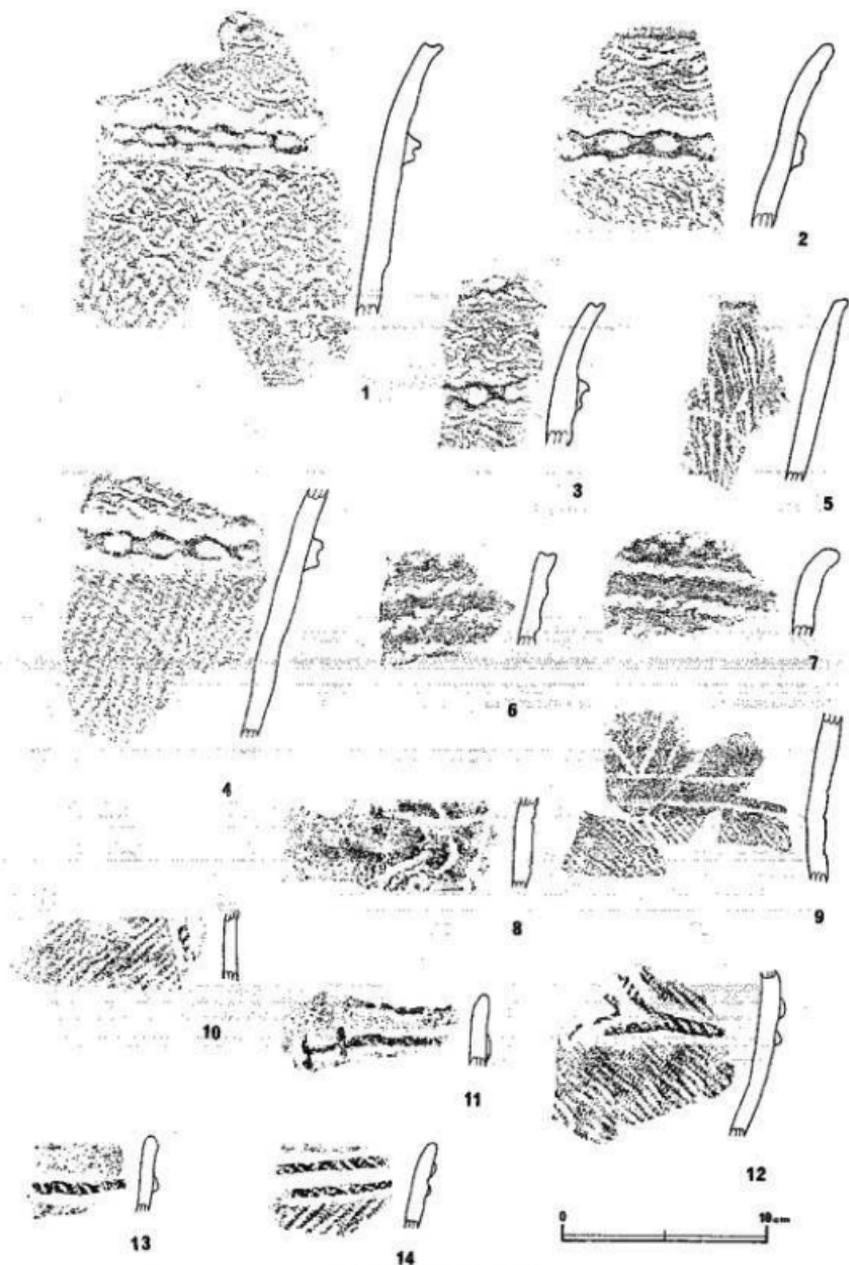
第7圖 遺構外出土遺物



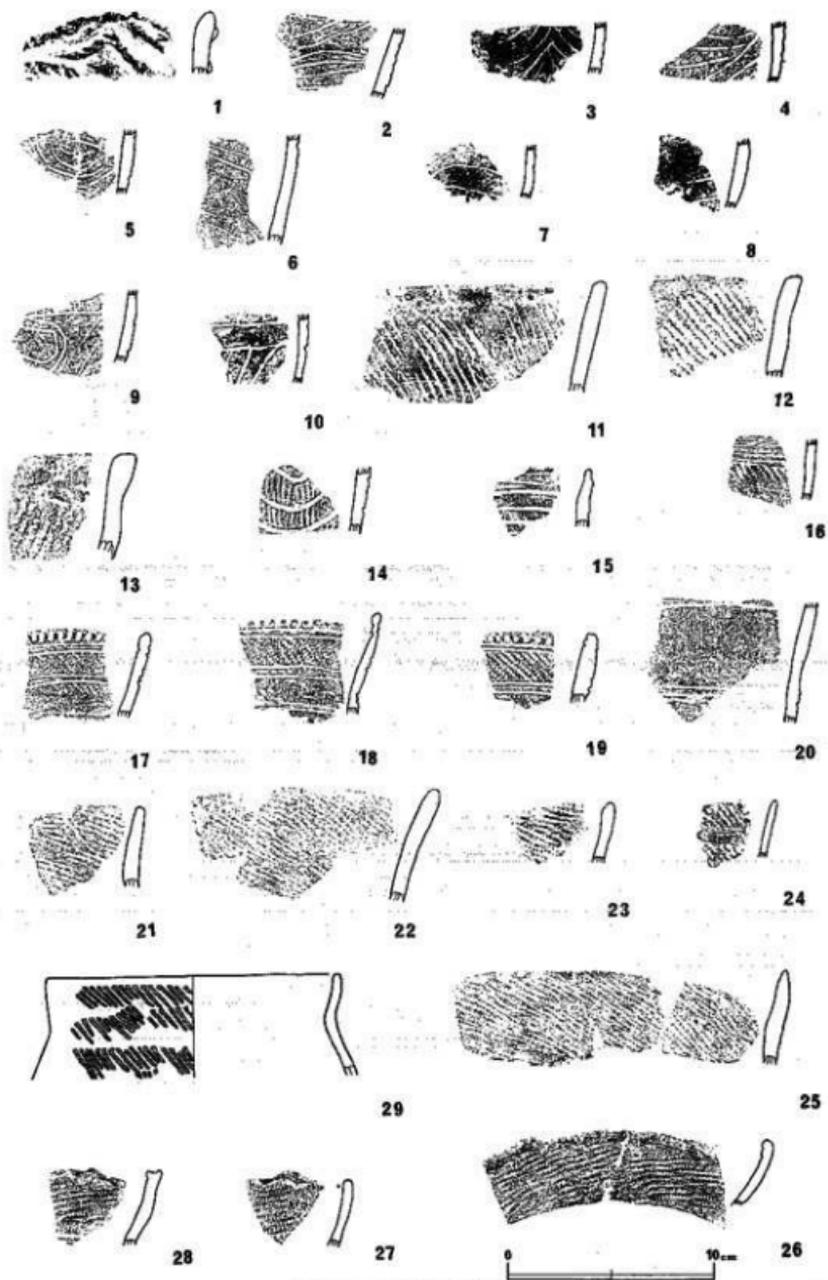
第8圖 遺構外出土遺物

第9圖 遺構外出土遺物

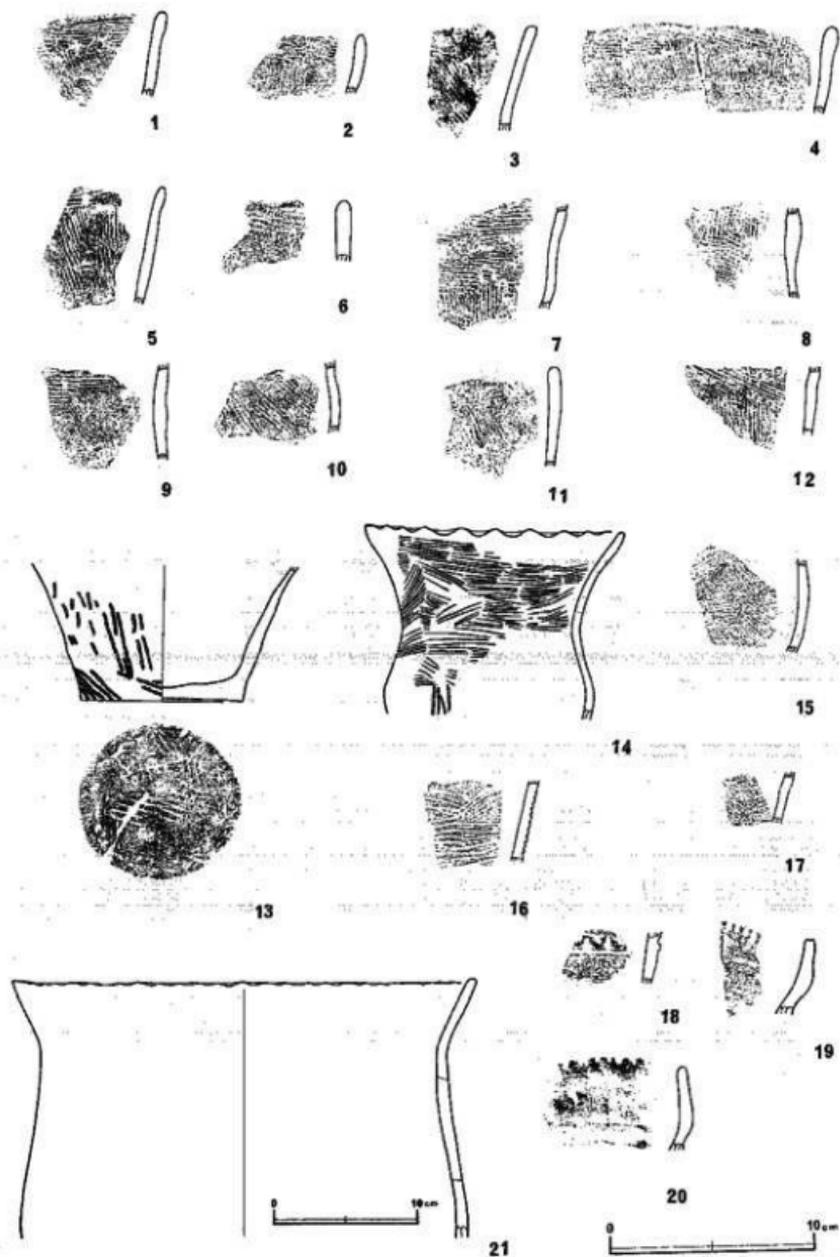




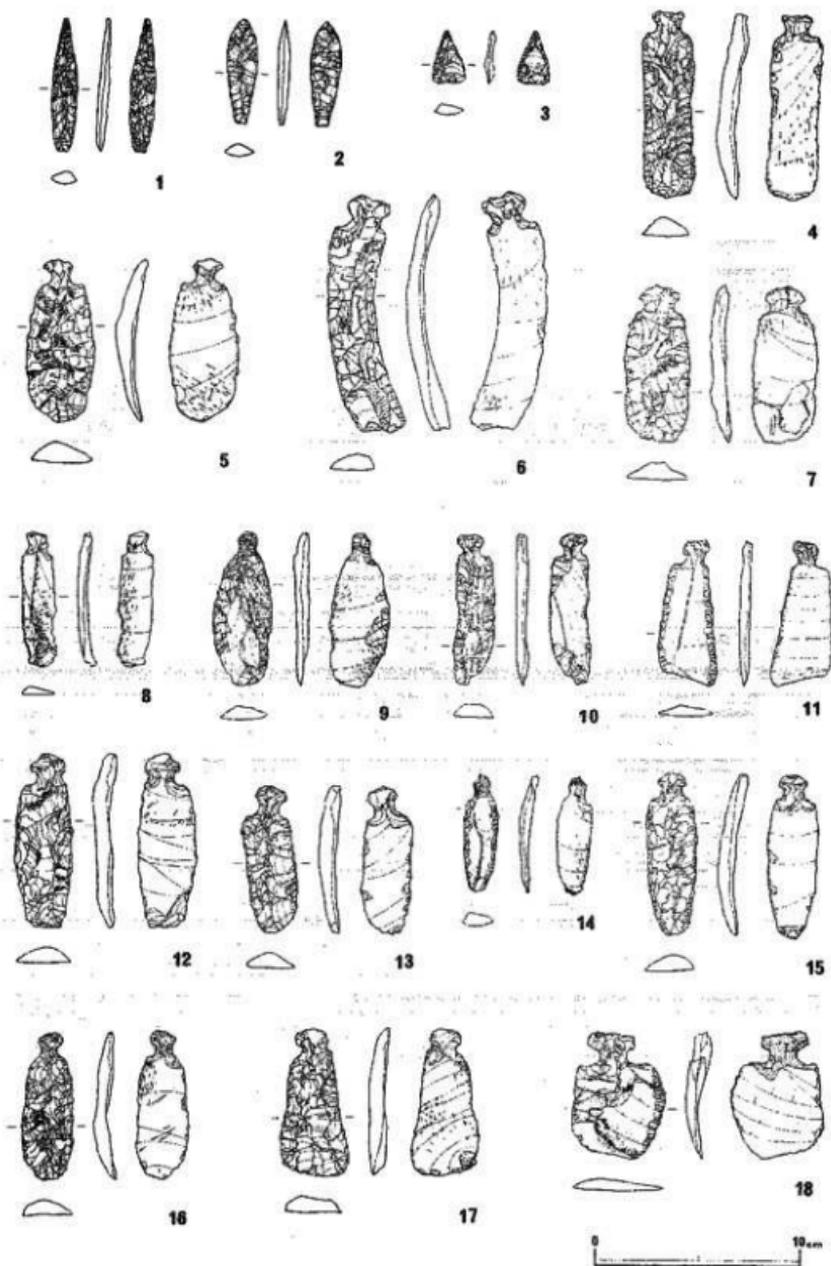
第10圖 遺構外出土遺物



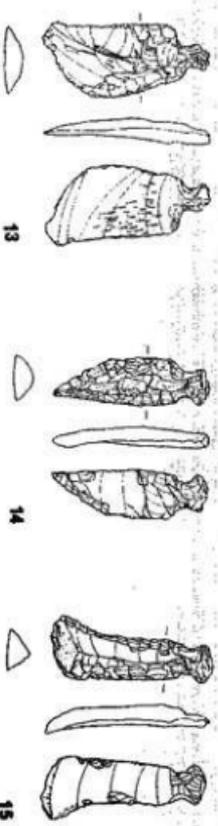
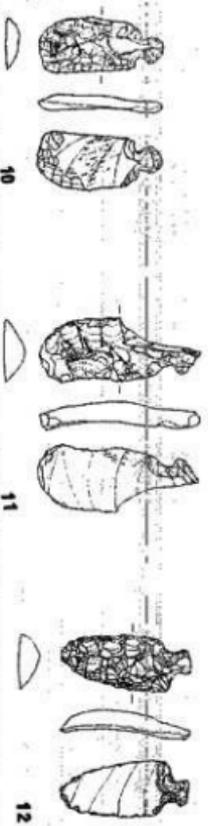
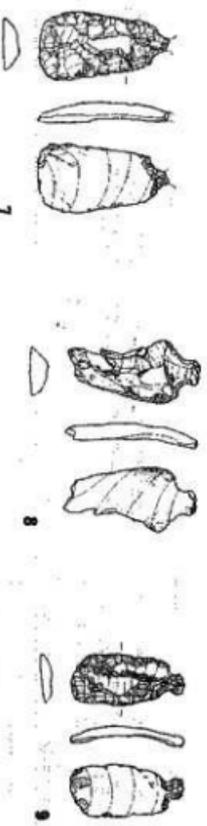
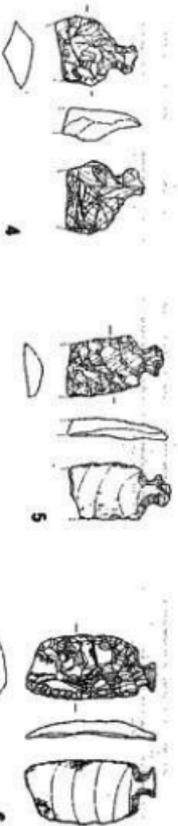
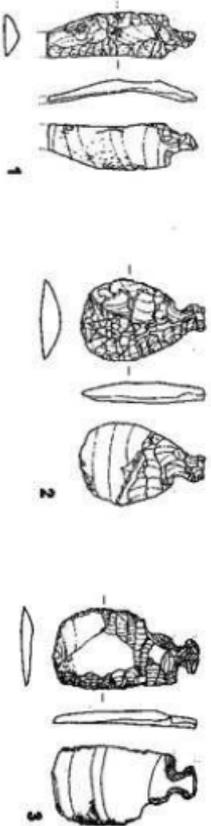
第11圖 遺構外出土遺物



第12圖 遺構外出土遺物

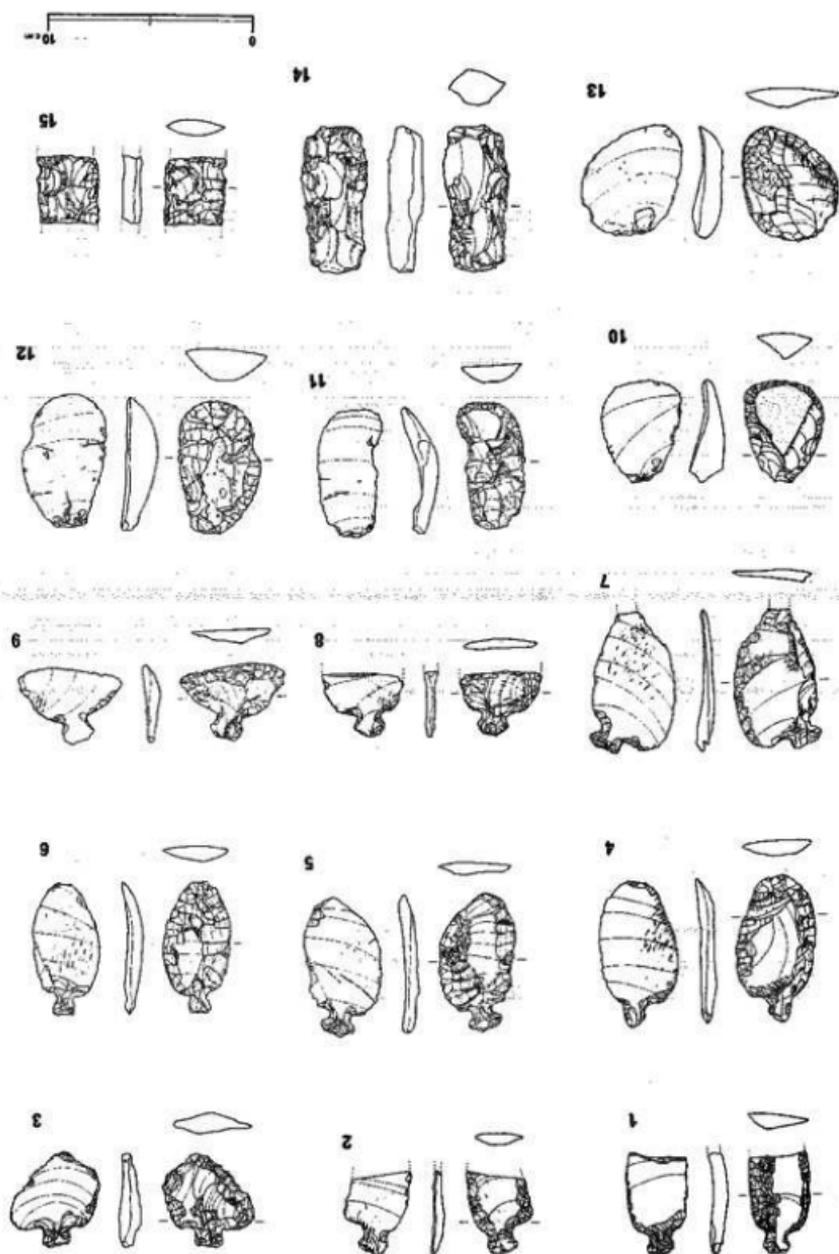


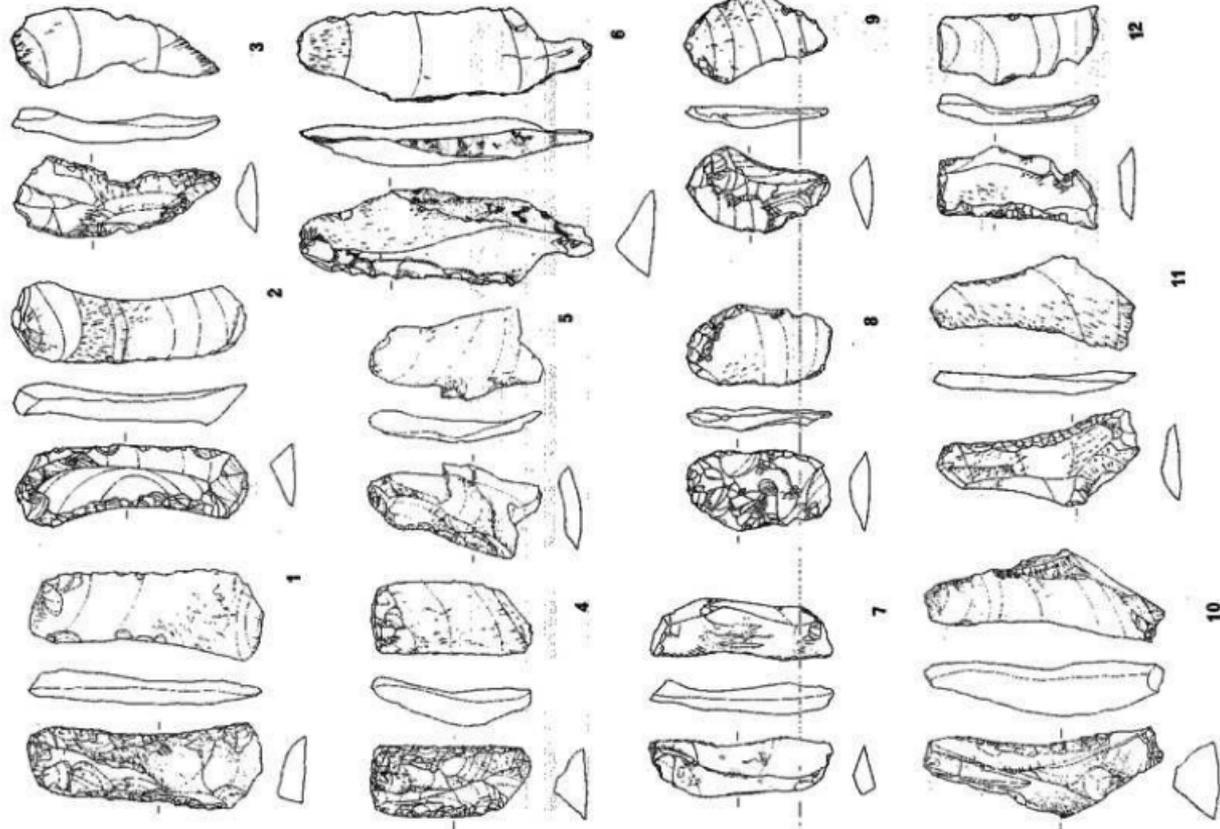
第13圖 遺構外出土遺物



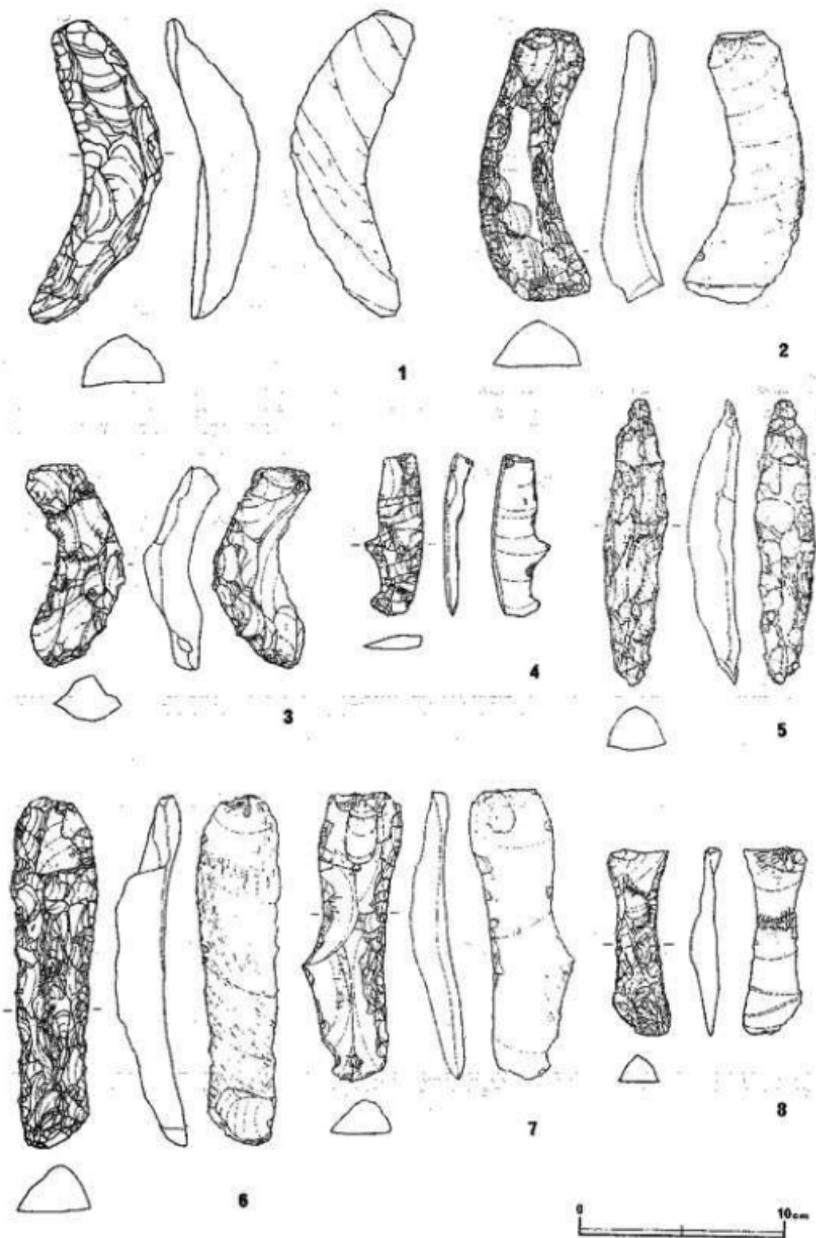
第14圖 遺構外出土遺物

第15圖 遼東外出土遺物

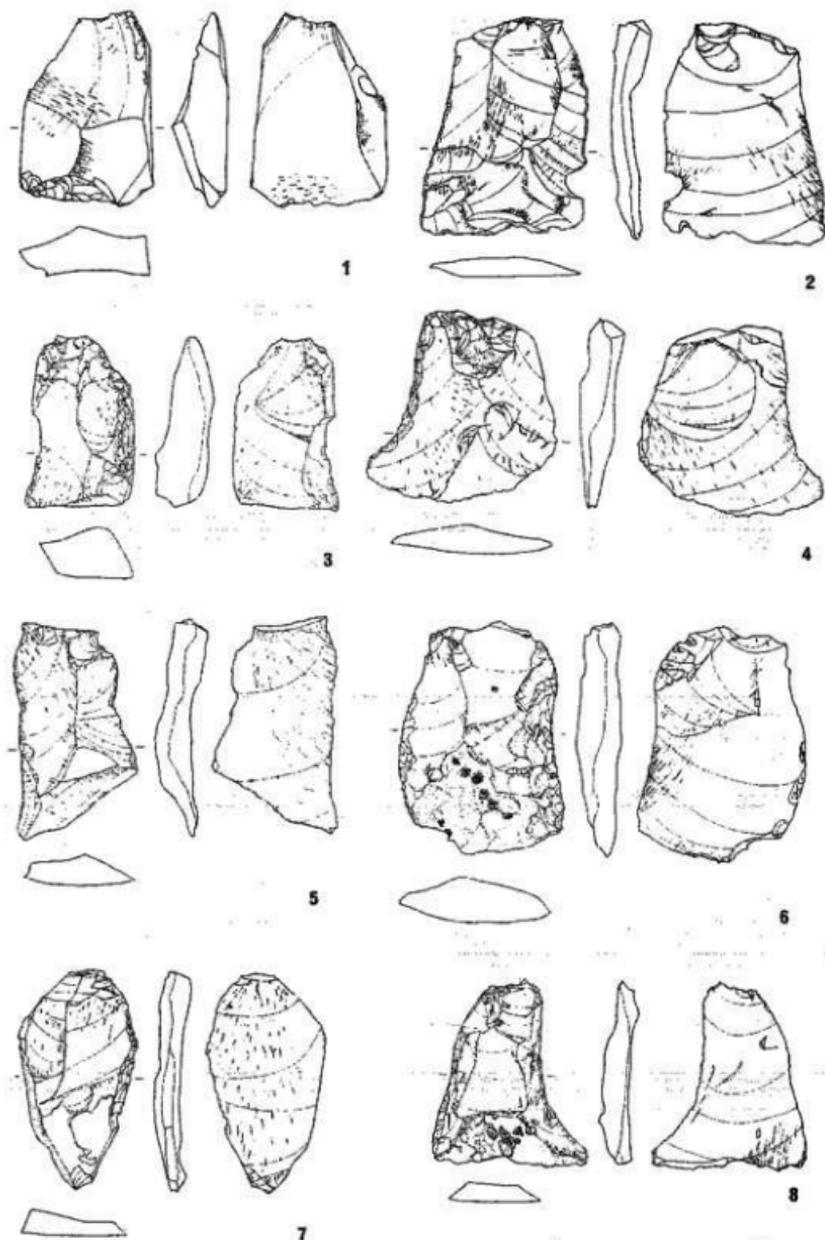




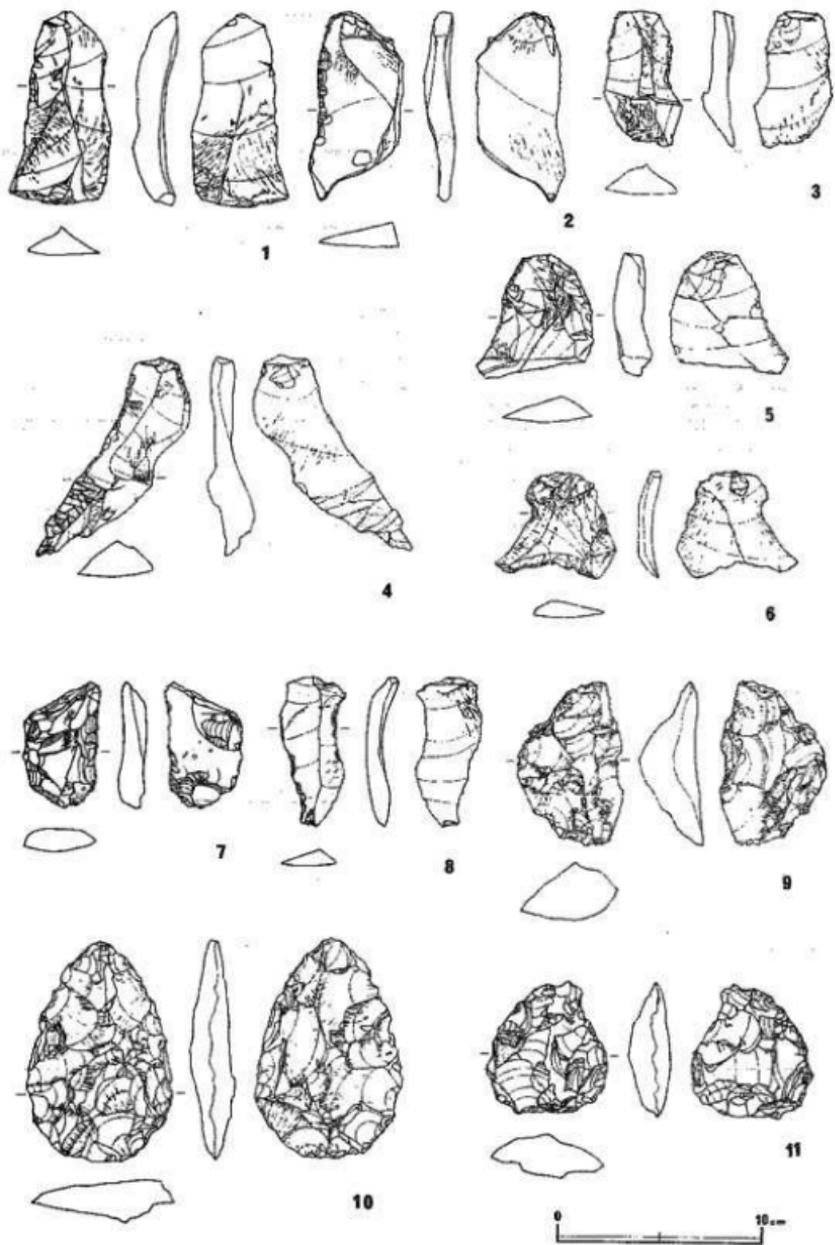
第16圖 遺構外出土遺物



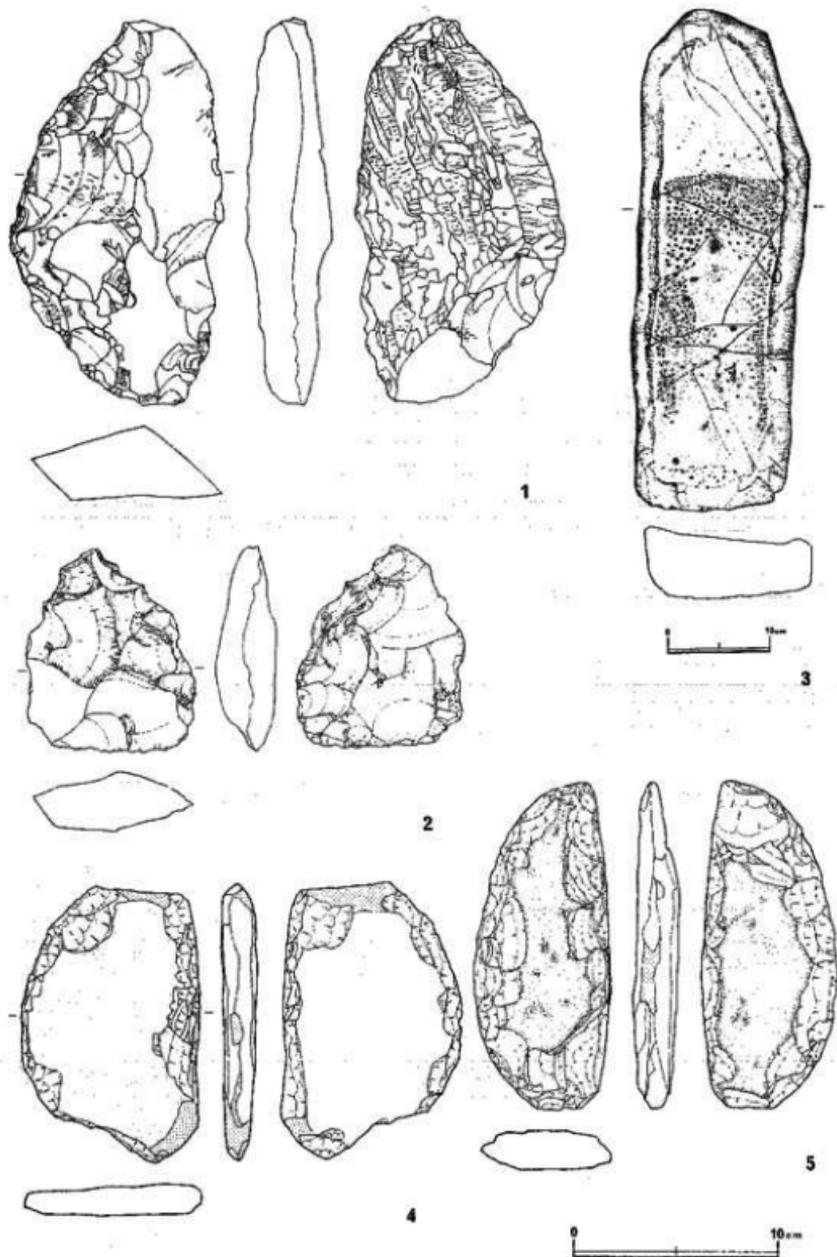
第17圖 遠禰外出土遺物



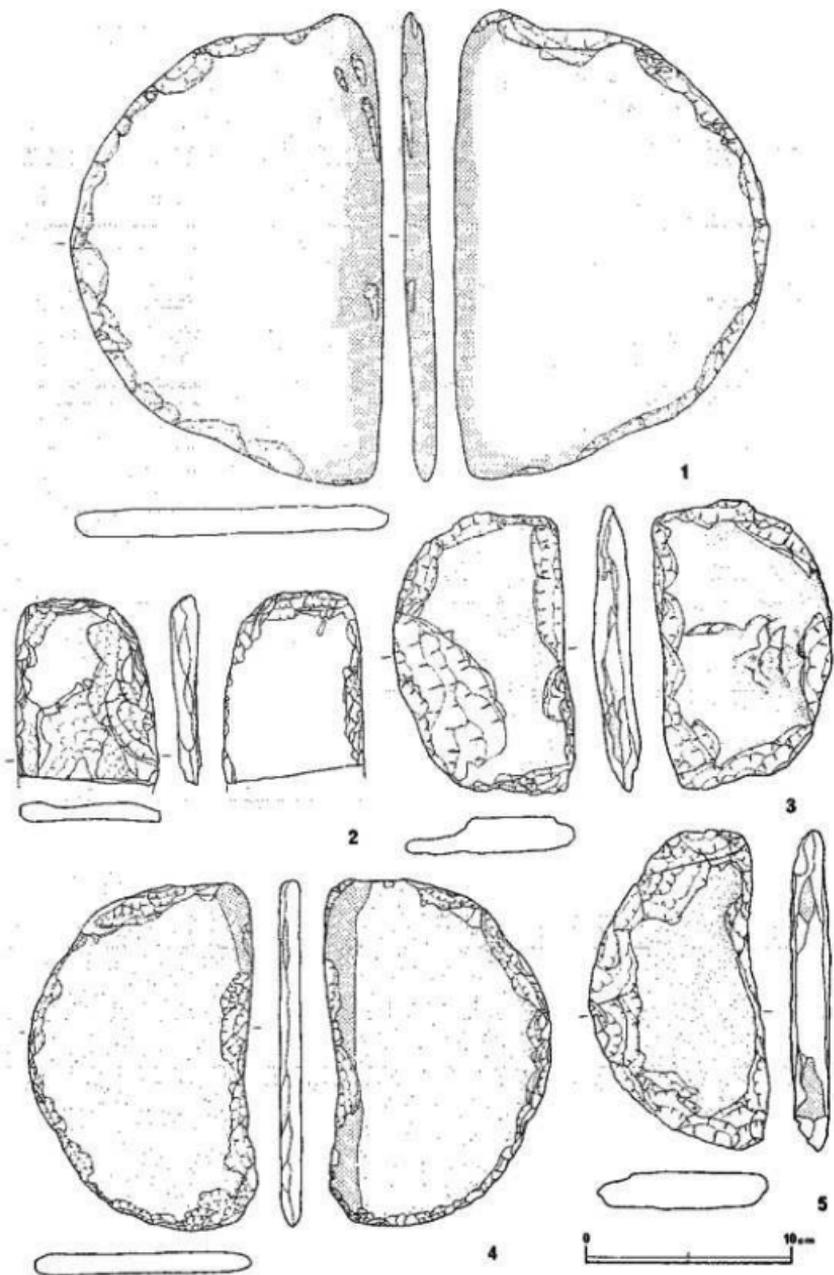
第18圖 遺構外出土遺物



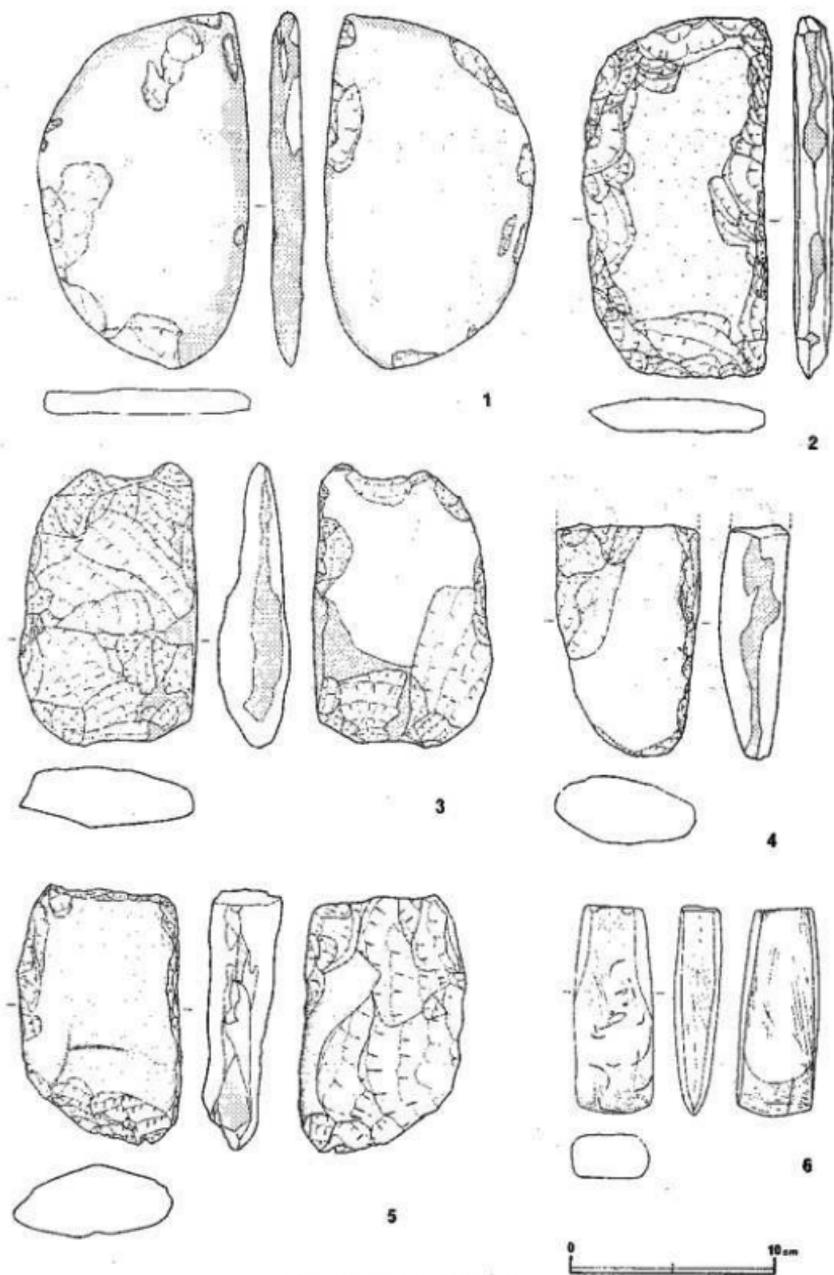
第19圖 遺構外出土遺物



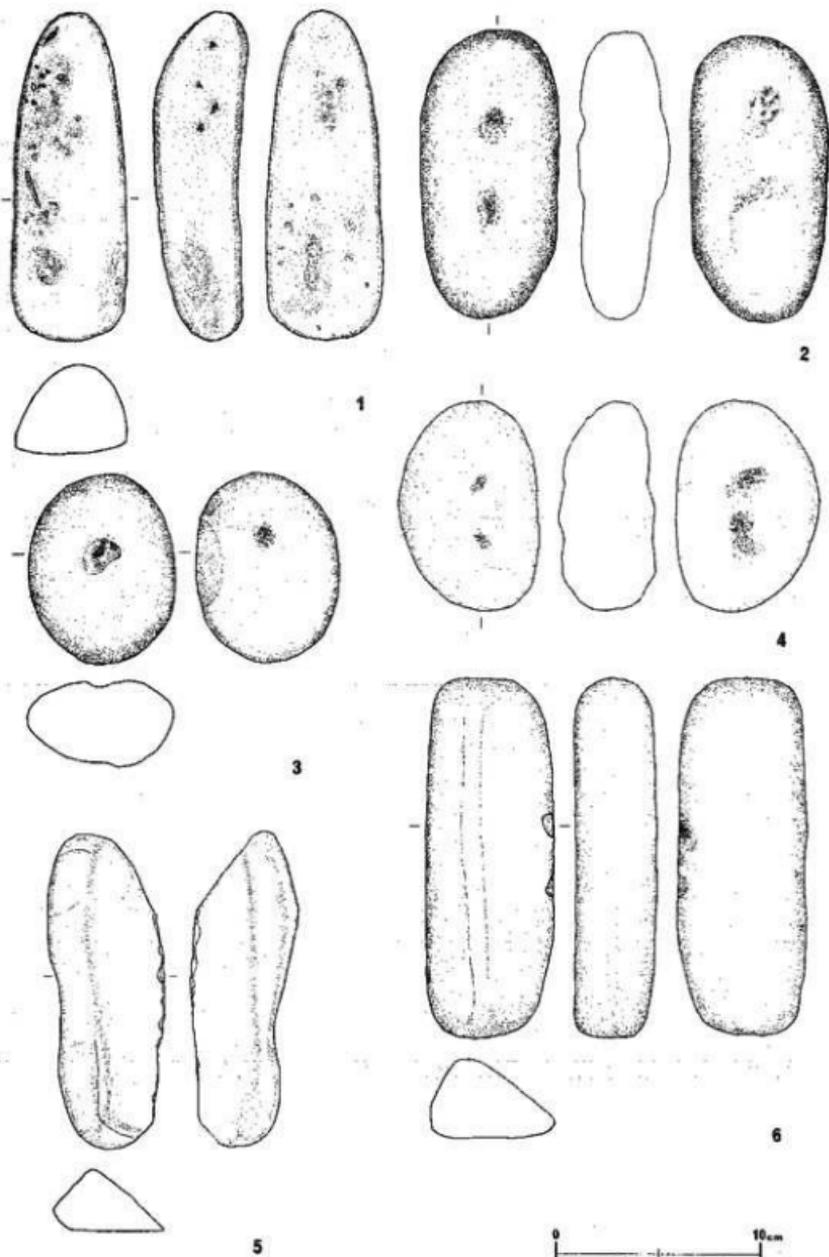
第20圖 遺構外出土遺物



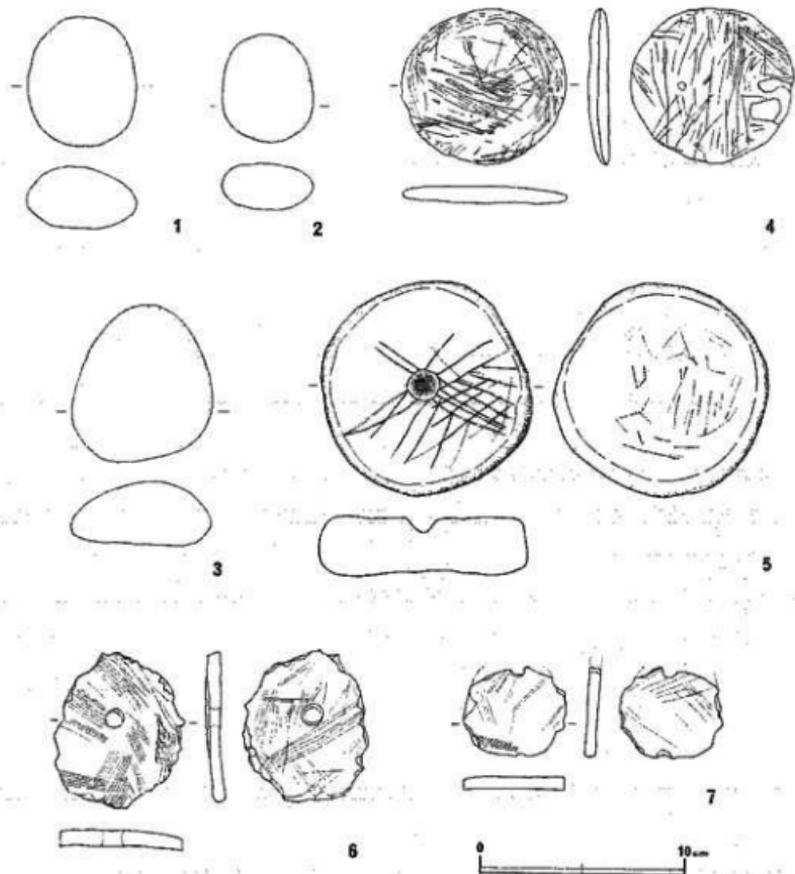
第21圖 遺構外出土遺物



第22圖 遺構外出土遺物



第23圖 遺構外出土遺物



第24圖 遺構外出土遺物

### 第3章 ま と め

横館遺跡は、平坦な段丘面（A区）と緩い斜面（B区）とからなる。遺構と遺物はA区から集中的に検出され、A区が生活の中心をなす地域であったことが理解できる。遺構と遺物は層位的に把握することができた。弥生時代の遺物は、大湯軽石層下の第4層で、縄文時代の遺構と遺物は第5層と第6層で検出された。

縄文時代の遺物は、前期（円筒下層A式およびB式）に属するものが主体をなす。フラスコ状ビット4基・土壌2基・焼土遺構26基もまた、出土遺物と確認面から円筒下層a式およびd式期に構築されたものと考えられる。縄文時代前期の土器・石器やフラスコ状ビット・土壘・焼土遺構の検出にもかかわらず、当該時期の竪穴住居跡は検出されなかった。遺跡のほぼ全域の調査でも、住居跡が検出されなかったことは、この遺跡の性格を暗示しているようである。26基の焼土遺構・4基のフラスコ状ビットと調理・加工用具と考えられる石匙・半円状扁平打製石器の多数検出などから、ある時期（季節）になんらかの生産活動を行ったキャンプ・サイトの的な性格が想定される。おそらく、本拠地（集落）はこの遺跡から、そう遠くないところに存在しているものと考えられる。

大湯軽石層下の第4層から出土した弥生式土器のなかで、主体をなす土器は摺糸文土器である。この種の土器は、小坂X式と呼称され、弥生時代後期後半に編年されている。小坂X式の出土遺跡は、小坂町内の袋・大谷地・からみ山・杉沢・砂山遺跡のほかに、鹿角市湯瀬瀬・同町大地平・同町上葛岡Ⅲ・同町猿ヶ平Ⅰ・同町新斗米・大館市柏木・同市鳶ヶ長根Ⅳ遺跡などである。秋田県内では、米代川流域の大館盆地、鹿角盆地の辺縁に分布する。土器片がわずかに出土するのみで、住居・生産用具などの検出がないため、文化内容は不明である。

（註1） 奥山潤・安保彰「十和田湖西南部（小坂鉦山）の弥生式文化とその後続形態（上・下）

『考古学雑誌 49巻2・3号』 1963年

（註2） 橋本光「弥生土器—東北 北東北4—」『考古学ジャーナル168』 1979年

（註3） （註1）に同じ

（註4） （註1）に同じ

（註5） （註1）に同じ

（註6） 奥山潤・安保彰「小坂X式の新示準資料」『北海道考古学 第四輯』 1968年

（註7） （註6）に同じ

（註8） 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』 1981年

- (註9) (註8)に同じ
- (註10) (註8)に同じ
- (註11) 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅴ』 1982年
- (註12) 鹿角市『鹿角市史 第1巻』 1982年
- (註13) 大館市『大館市史 第1巻』 1979年
- (註14) 秋田県教育委員会『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』 1981年



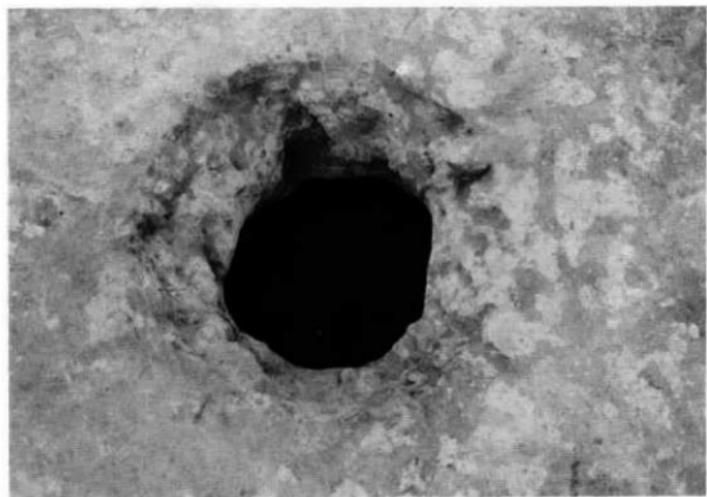
圖版1 上 遺跡遺景(左岸→右岸) 下 遺跡全景(南▶北)

橫船遺跡



図版 2

上 土層 下 発掘風景

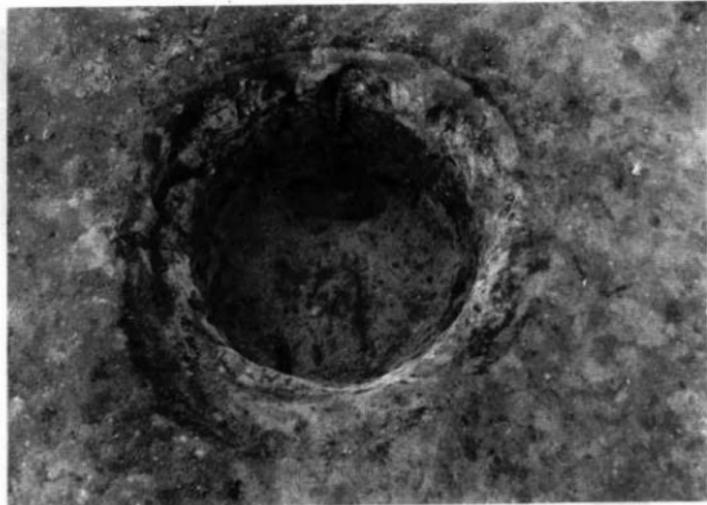


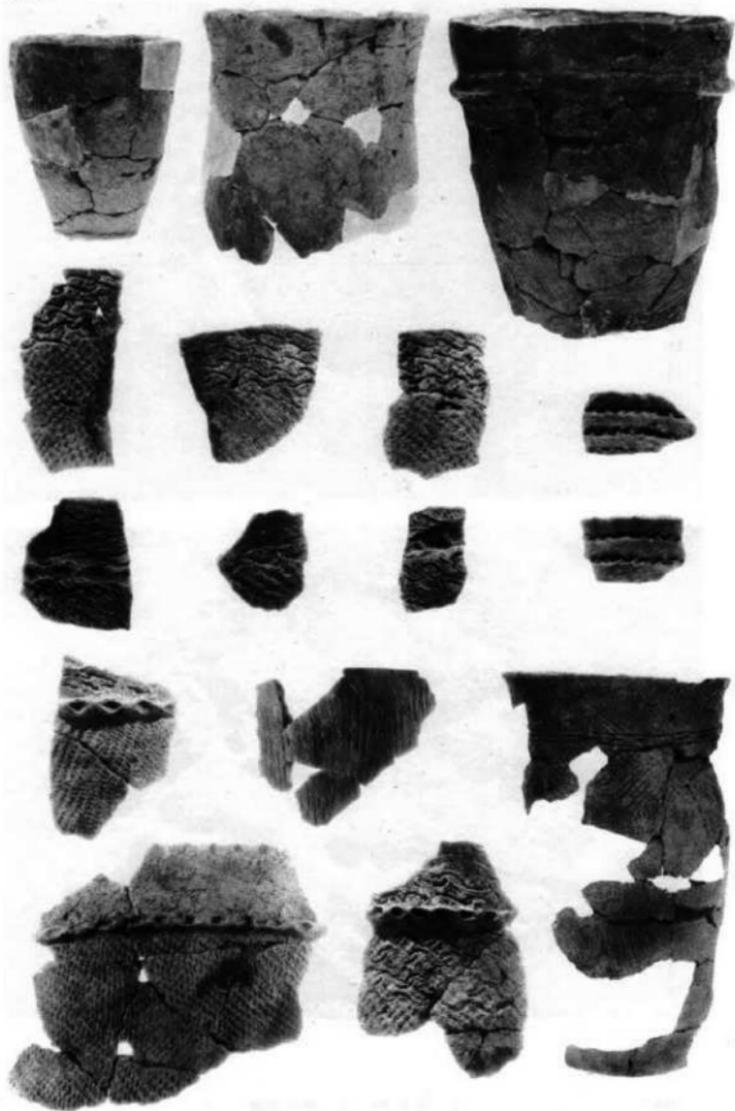
横断遺跡



図版 4

上 SKF 03 下 SKF 04







図版 7

遺構外出土遺物 (第2~4群土器)

横線遺跡



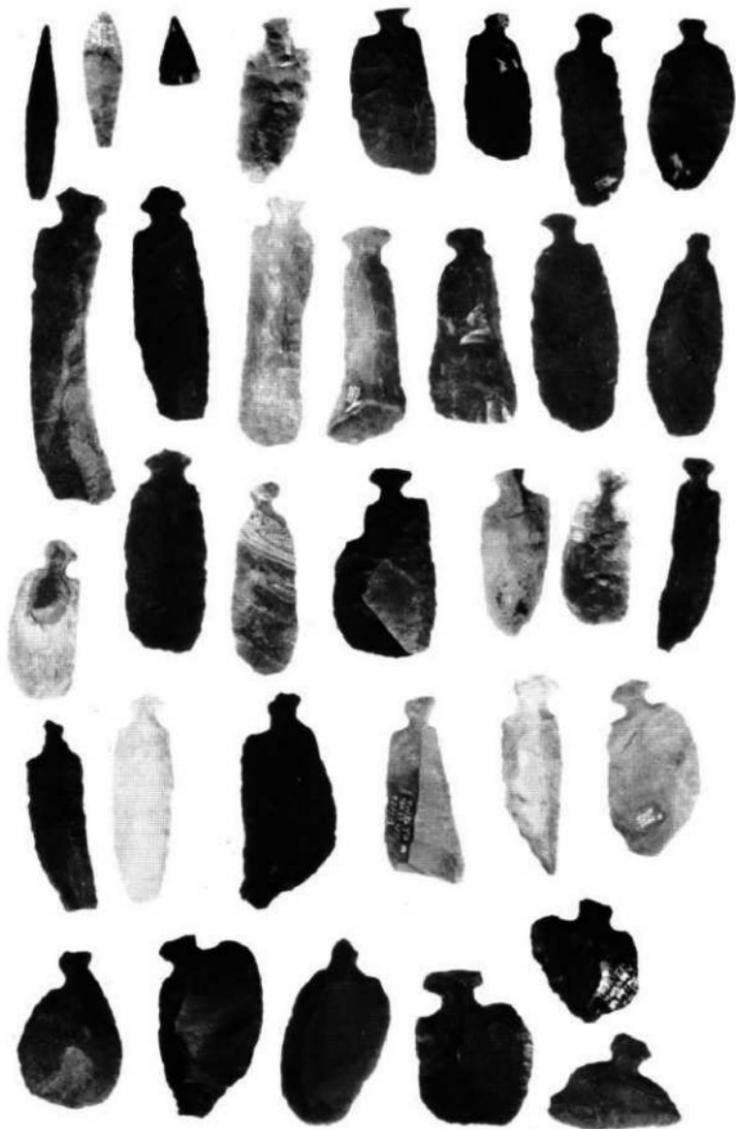
図版 8

遺構外出土遺物 (弥生土器)



図版 9

遺構外出土遺物（弥生土器）



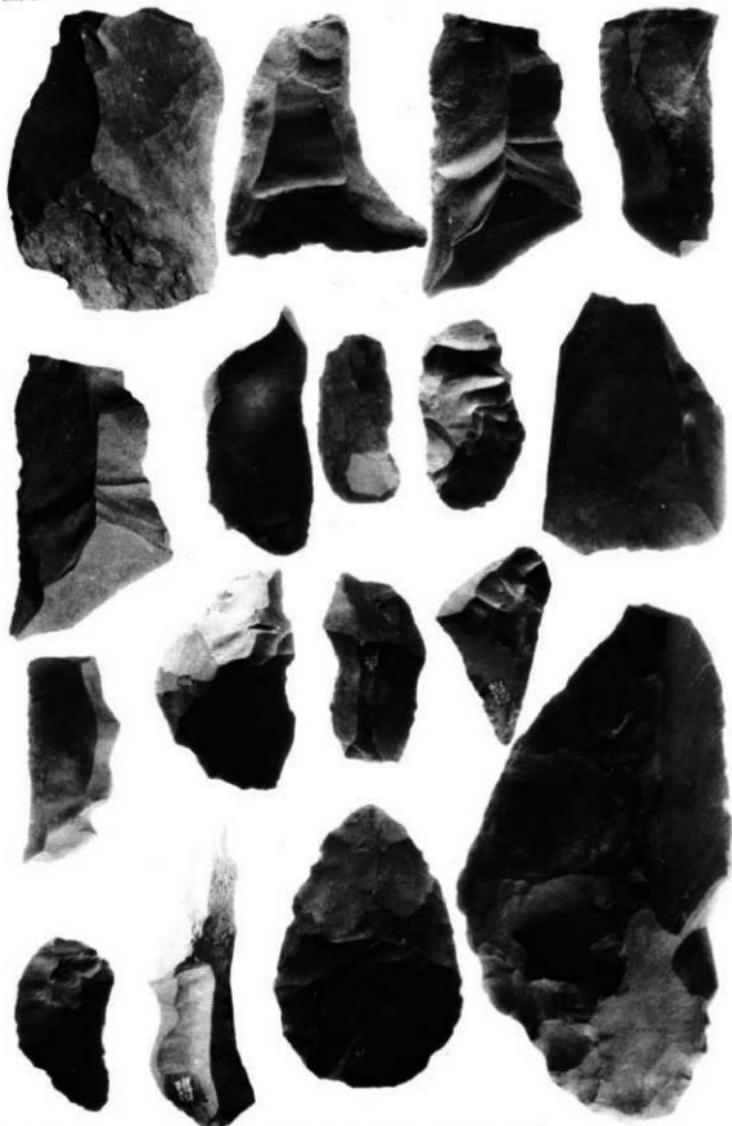
新石器



図版11

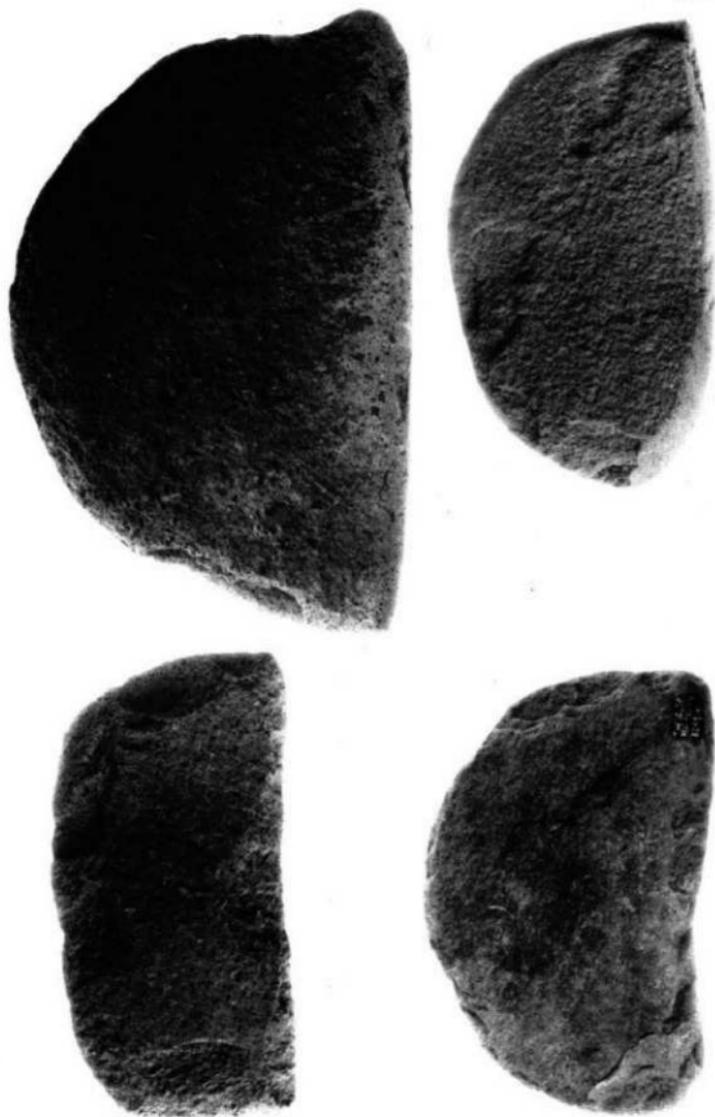
遺構外出土遺物（三日月形石器・擲器・削器等）

横加通碑



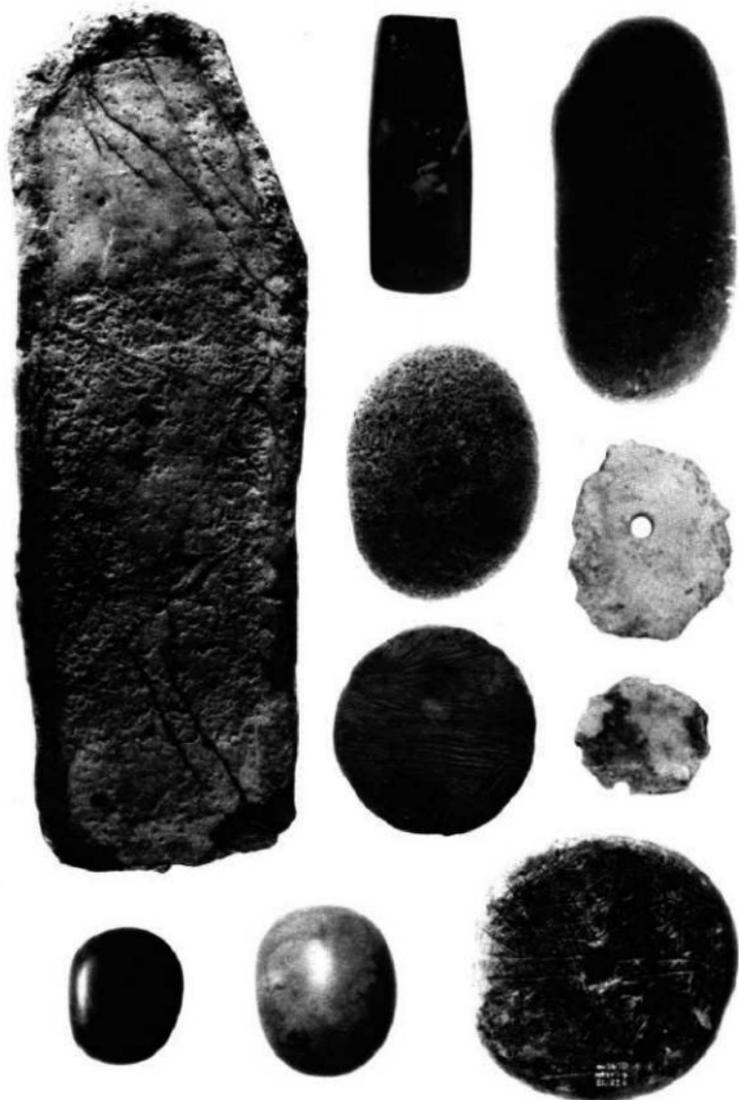
图版12

遺構外出土遺物（削器・両面加工石器）



圖版13

遺構外出土遺物（扁平打製石器）



## 大岱 I 遺跡

遺跡番号	No10
所在地	鹿角郡小坂町小坂字大岱8番地他
調査期間	昭和57年6月7日～9月11日
発掘調査予定面積	20,856㎡
発掘調査面積	18,624㎡

## 第1章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

#### 1 遺跡の立地 (図版1・2)

大岱I遺跡は小坂鉄道小坂駅の北北西 2.5km、細越部落の西側台地に位置する。東経140°44′-45′、北緯40°20′-21′である。

和田湖の西、白地山に源を発する小坂川は、その両岸にいくつかの段丘面を形成しながら県北の大河、米代川に向かって南流する。大岱遺跡群(大岱I-IV、円川原遺跡など)は、それら段丘面のうち、小坂川の右岸、小坂川とその支流堀内沢川に挟まれた二つの段丘上に立地する。二つの段丘の標高は、それぞれ230m前後、255m前後で、本遺跡及び大岱IV遺跡は前者にある。この低い方の段丘面は南北約700m、東西100-130mの広さで、西側は直線的であるが、東側は小沢が入り込み四つの突起状の舌状台地(第1図、南からA・B・C・Dの記号がそれぞれである)が形成されている。

今回は、このような台地の西端をほぼ南北に直線的に調査したのであるが、遺物の出土状況及び遺構の分布等を観ると、各時代の生活の中心部は、前記舌状台地であったことが予想される。このことは、この後に調査された大岱IV遺跡の調査結果からも明らかである。

#### 2 遺跡の基本層序 (図版3)

大岱I遺跡のある段丘は関上面である。この関上面の上に堆積した土の基本的な層序は第2-3図ようになる。すなわち第1層黒色耕作土、第2層黒色土層、第3層大湯軽石層、第4層暗褐色土層、第5層黒色土層、第6層黒褐色漸移層で、この下にはいわゆる関上面の最上位にあたる黄褐色火山灰層がある。

このうち、第1、2層は耕作等によって分層が困難なところも多く、大湯軽石層の比較的硬い軽石が混入している。遺物包含層は第4、5層であるが、第4層の上部からは弥生時代の、下部からは縄文時代晩期の遺物が出土する。第5層では縄文時代後期以前の遺物が混在するという感じであるが、大まかには上部からは後期の、下部から前期の遺物が出土する。

また、ごく限られた狭い範囲ではあるが、第5層の下に黄白～乳白色の火山灰様の土が分布する部分がある。これが火山灰だとしても、この時期等については全く不明であるが、大岱I遺跡においては、円筒下層b式土器がこの層の上面に接するようにしてあり、同時期の遺構も

これを切って構築されている。

### 3 遺構の分布

南北約 440 m、東西20～80 mの広大な調査区の南には、遺構が非常に少ない。この理由は遺跡の立地の項でも触れたように、調査区そのものが、各時代の遺跡としての中心部分のやや外縁であったためであろう。

今回検出された遺構は、これを大きく時代別に分けると、縄文時代前期、同後期、弥生時代になる。このうち縄文時代前期の遺構は、同時代の竪穴住居跡が発見された大谷IV遺跡（第1図のA）に近い調査区南端部に集中する。縄文時代後期の遺構は、調査区北部東側にあり、この時期の中心部は第1図C台地上にあったことが窺える。前二者に対して弥生時代の遺構は、両者の中間に位置するようにも見える。しかしながらこれは、数も少なく特に集中するような分布状況は示していないが、強いて言えば、第1図B台地に近いと言える。

### 4 遺物の分布

今回の発掘調査では縄文時代前期から晩期までの土器、石器、石製品と、弥生時代の土器が出土した。これらの遺物の分布は、後期のものが調査区北東部（第1図のC舌状台地の付け根の部分）周辺に限られ、前期のものが遺跡南部に多いのを除けば特に偏りは見られない。つまり、後期を除いた時期の遺物は、南北に長い台地西側に1片だけ、あるいはほぼ1個体分という具合に散在する。

## 第2節 調査の方法

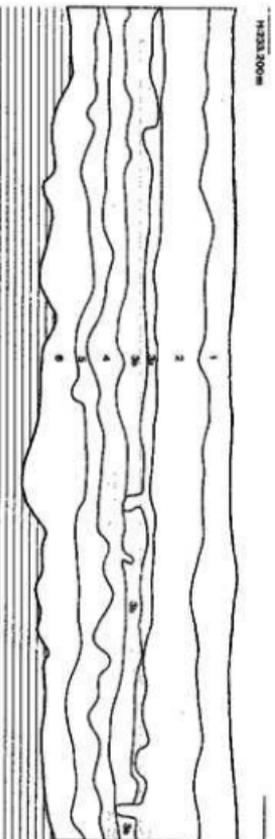
東北縦貫自動車道の路線は大谷I遺跡ではほぼ南北に走る。このためグリッドを設定するに当っては、調査区ほぼ中央にある工事用中心杭（STA 125）を基準点としてトランシットによる磁北を求め、これを南北基線とした。グリッドは4 m×4 mを1グリッドとし、南北は算用数字2桁、東西はアルファベット2文字の組み合わせを用いた。個々の名称は、そのグリッドの南東隅の交点の記号とした。

## 第3節 調査経過

発掘調査の開始は諸機材の事情により大幅に遅れ、6月初旬であった。このため、4月中に、遺跡の基本層序を知る目的で、3本の横断トレンチを入れた。この結果、大湯軽石層（第3層）



第1図 遺跡の立地



第2図 土層図

は遺跡全面に10～20cmの厚さで堆積しており、黒色表土（2層に分層）も比較的厚いことがわかった。（第3図）

5月20日、重機による表土除去と排土の運搬を開始する。同下旬には、プレハブ設営と発掘機材の搬入を行い、6月1日からはグリッド杭の打設を開始して調査準備は整った。

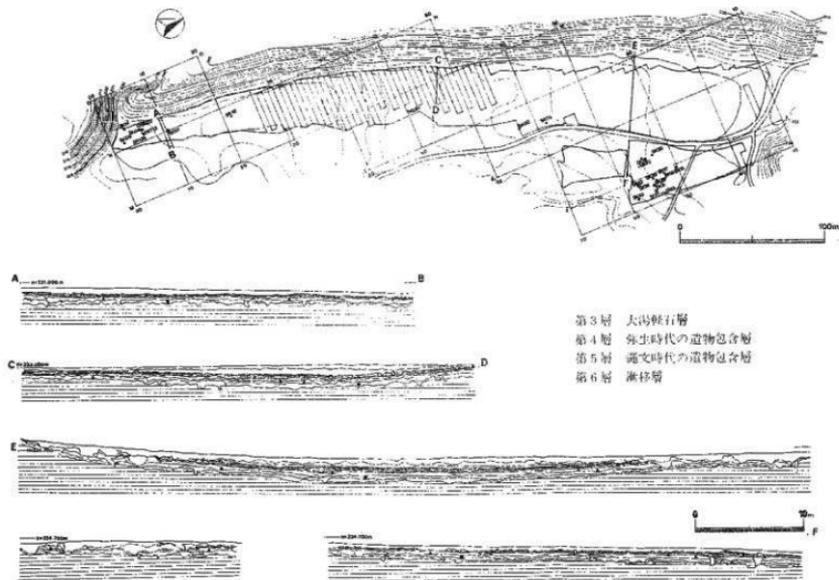
6月7日、作業員に調査上その他の諸注意等を行って、いよいよ発掘調査に入った。調査はまず、大湯軽石降下後の遺構の存在の有無を窺うため、軽石の上面をきれいにした。作業は南側から北側へと行ったが、全体の約半分程のところまでで、遺構等を全く認め得なかったため、再び南端から軽石層下の調査を行うこととする。この作業を行うにあたっては、トレンチ調査の時点で、遺物・遺構とも多くないことが予想されていたため、東西に4 m トレンチを入れるような形で4 m おきに掘って行き、遺構や遺物が集中する部分についてはそれに応じて拡張する方法をとることとした。

6月9日、調査区南端部では第4層暗褐色土中から弥生式土器が、第5層黒色土下部からは縄文時代前期の土器が散発的に出土し始める。これらの遺物は決して多くはなく、1片から数片程度のかたまりである。6月30日までに調査区の西側全てを4 m 間隔で調査したが、特に遺構は発見できず、遺物も集中する部分は見られない。ただ、遺物の量は少ないが、縄文時代前期から、中期・後期・晩期・弥生時代とバラエティーに富んでいる。6月29日までで、4 m 間隔の調査を終了し、これ以降は比較的遺物の少なかった調査区中央南側を除き、平面的な調査に入る。

7月9日、調査区東北部で、黒色土中から円形の石囲炉を発見する。石囲いの一部には石の代わりに深鉢形土器を用いており、周囲の状況からこれを住居跡とした(SI 01)。しかしながら、この後の精査でも明確な壁・床面・柱穴を確認することはできなかった。7月29日、風倒木痕の上に掘られた土壌(SK 02)を検出。弥生時代の小型鉢形土器が溝口北端に横たわっている。周辺からは同時代の遺物がほとんどないところから、弥生時代の墓塚と考えられた。7月30日、SI 01の東側9 m で再び黒色土中から石囲炉が検出された。方形の石囲炉で精査の結果、直径4 m の竪穴住居跡であることがわかった。

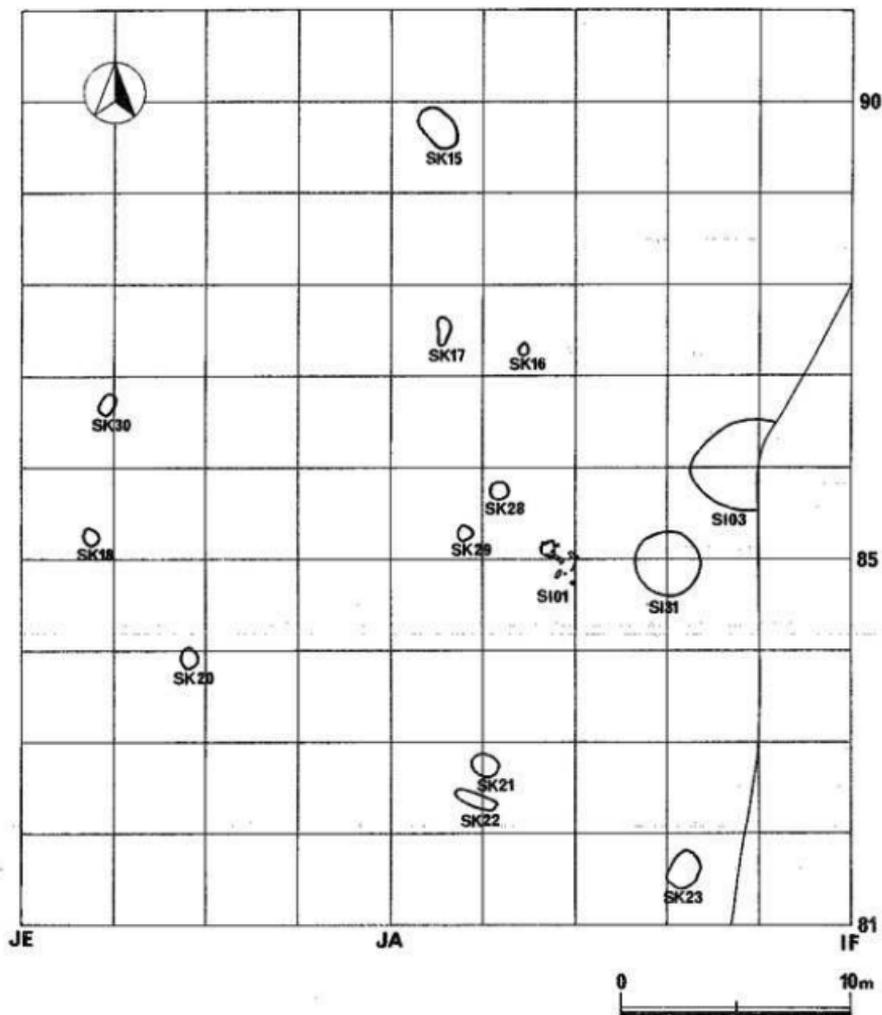
この後調査は、南端部、北部中央、東端部などに分散して行なわれた。8月17日、南端部で縄文時代前期の土壌2基が検出され、同31日にはTビット(SK 12, 13)も確認された。また調査区中央部では8月19日、SK 02から離れること90 m 北で、別の弥生時代の土壌墓と思われる遺構が検出された。完形の甕形土器が口縁部を南にして潰れた状態で墓中央に横たわっていた。埋土中をていねいに探したが、他の副葬遺物のようなものは見えない。

9月2日からは連日のように、調査区東端部で、円形の土壌(SK 15など)などが検出され、同7日にはSI 31竪穴住居跡も確認された。この間、少ない遺構・遺物の検出に努めながら、



第3図 遺跡全体図・土層断面図

遺物出土状況の実測、写真撮影などを併行して行った。その結果、一部遺構の補足調査を残して大借I遺跡の調査は一応9月11日で終了した。



第4図 調査区北東部遺構配置図

## 第 2 章 調査の記録

大谷 I 遺跡の今回の調査では、縄文時代と弥生時代の遺構・遺物が発見されている。これらについて、以下、各時代の遺構とその伴出遺物、遺構外の出土遺物の順で説明する。

### 第 1 節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 発見遺構と遺物

縄文時代の遺構は竪穴住居跡 3 軒、土壇 16 基、T ビット 2 基、井戸状遺構 2 基の他、焼土が約 20 基発見された。これらの遺構は石囲炉のある竪穴住居跡を除いてはほとんどが第 6 層漸移層上面か、第 7 層地山上面で確認されたものである。

##### (1) 竪穴住居跡

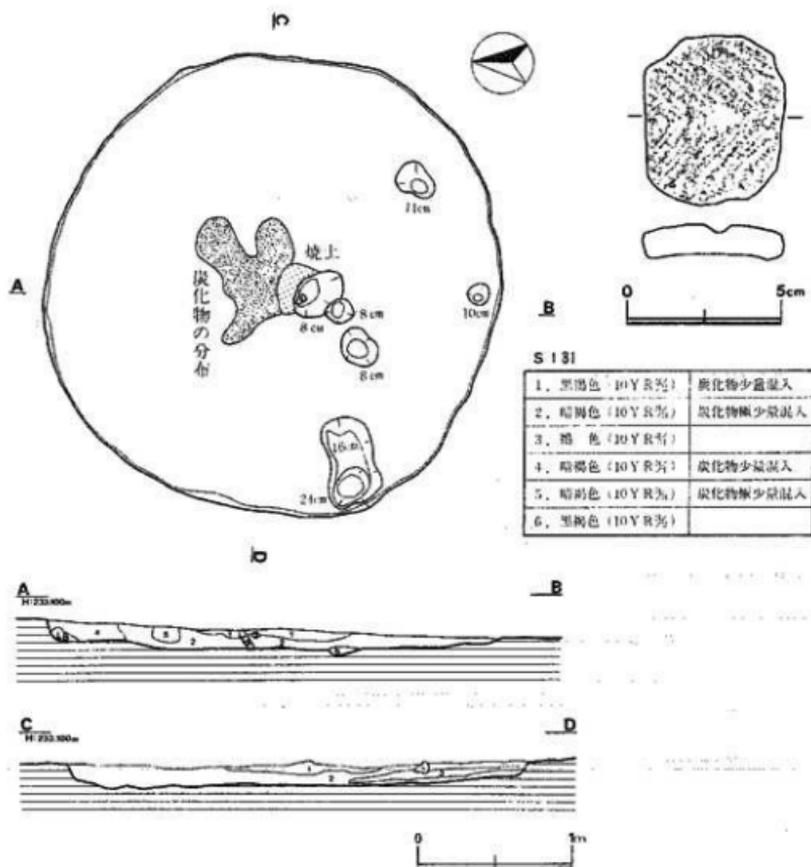
竪穴住居跡は前期 1 軒、後期 2 軒の計 3 軒が調査区北東端部で発見された。このうち後期の 1 軒は明確なプランは把握できなかったものである。

##### S 1 31 竪穴住居跡 (第 4、5 図、図版 4、15)

第 6 層漸移層上面で、I H 85 グリッド杭を中心にして径 2 m の黒褐色土の広がりが認められた。このため、第 7 層地山土上面で精査したところ、径 3 m の円形に土色(暗褐色土)の違いが認められたものである。規模は直径が約 3 m で、正円に近い円形プランを呈する。床面は中央部ほど、よく踏みしめられており堅く、東西方向にはほぼ平坦であるが、南北方向に見た場合には中央部分径 2 m の範囲がわずかにくぼんでいる。壁は、地山面が北側で若干高くなっていることもあって、北壁が明確でほぼ垂直、南側の壁はそれ程明確ではない。炉は床面中央部にあるが、それほど広範囲に焼けてはいない。焼土の北側に炭化物の分布が認められる。直径 15~20 cm、深さ 10~15 cm の小ビットが床面上から 6 個検出されたが、いずれも主柱穴と考えるには不十分のものである。

遺物は確実に床面に接した状態のものではなく、埋土中から土器片、フレイクが数点だけ出土した。図示した遺物は、比較的床面に近い埋土中から出土した円盤状土製品である。中心部に穿孔しようとした痕跡があるが、目的を達しなかったものと思われる。施文されているのは、結束第 1 種による付加条のある羽状縄文で、前期のものである。

この竪穴住居跡の時期は、確認面及び埋土、形態、出土遺物などから、縄文時代前期のもの



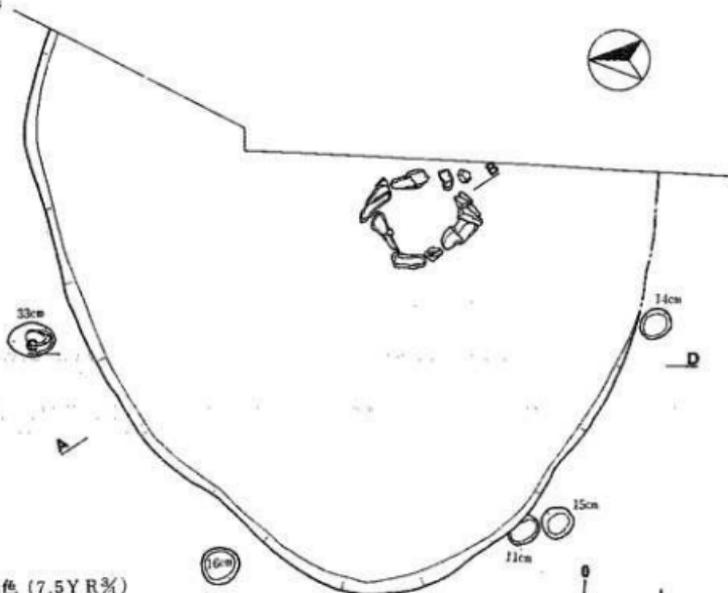
第5図 S 131 竪穴住居跡と出土遺物

であると考えられる。

#### S I 03 竪穴住居跡 (第6図、図版5、15)

I G 85 グリッドの第5層下部で、調査区の東端壁から石囲炉が顔を出すような形で発見された。石囲炉を中心にして径約4 mの範囲に、暗褐色土が分布し、いわゆる土の汚れの状態を示していたが、木の根等による影響も強いと感じられ、平面観察だけではプランを確定することができなかった。第7層地山までは掘り込んでいない床面もそれほど堅くはなく、ややしっかりしていると観察された北壁などを主として推定した平面プランは、径約4 mの不整円形を呈

大谷1遺跡



S103

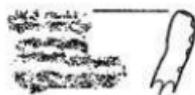
1. 暗褐色 (7.5YR 3/)

炭化物少量、焼土粒少量混入

A—H:233.400m

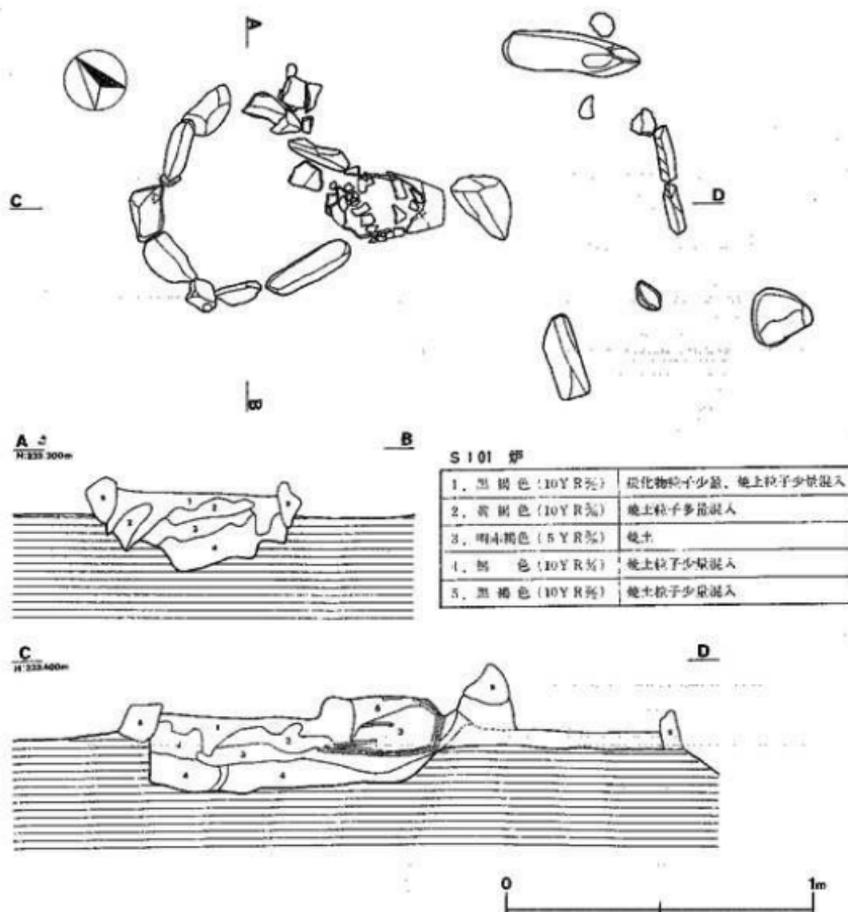


C—H:233.300m



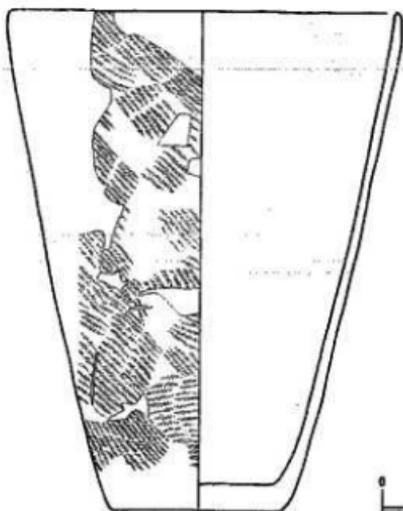
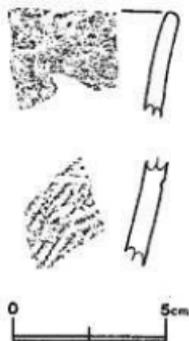
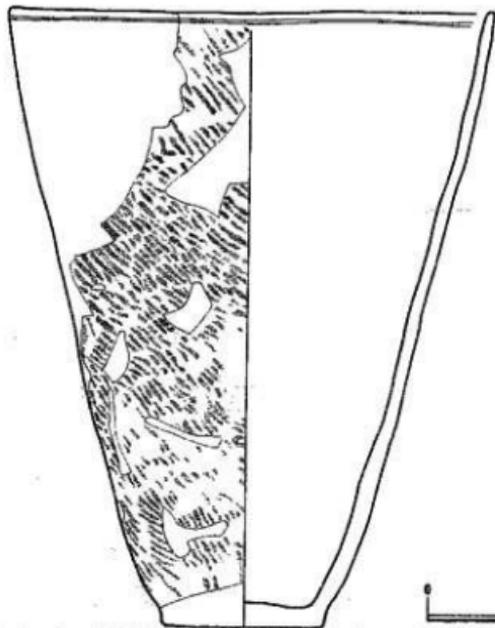
0 5cm

第6図 S103竪穴住居跡と出土遺物



第7図 S 101 竪穴住居跡

する。炉はプラン中央やや南寄りにあり、一辺約 0.6m の略方形を呈する石囲炉である。炉に使用している石は北辺が 1、西辺 3、南辺 1、東辺 2 の計 7 個で、これらの内側は火熱によって非常に良く焼けている。特に、南辺に用いられている石は、他の石が丸味を持った河原石であるのに対し、板状節離による一枚岩で、これが火熱によって、上端部が欠失し、数ヶ所で割れている。石囲炉に使用された石は良く焼けているが、その中央部には焼土がそれほど厚く堆



第 8 図 S 101 竪穴住居跡出土遺物

積してはいない。頻繁に掻き出された結果であろう。床面上に柱穴は認められなかった。屋外に径25cm前後のピットがあり、これが柱穴かとも思われるが、北側の1個を除いては深さが10～15cmと浅い。

床面から出土した遺物はない。拓影で示したものは床面に近い埋土中から出土したものである。1を除いてはいずれも後期前葉に属するものである。1は前期後葉の深鉢形土器の口縁部の破片である。

この住居跡の時期は石囲炉の形態、確認面、埋土中の遺物などから、後期前葉のものと思われる。

#### SI 01 竪穴住居跡 (第7、8図、図版6、15)

II 85グリッド周辺の第5層黒色土層を掘り下げ中に、石囲炉が発見された。この石囲炉の南東1mには扁平な河原石2個が立て並べられており、その横には立っていたと想像させるような長大な河原石が横たわっていた。この段階で平面的に周囲を精査したが、石囲炉の南西と南東の2ヶ所に風倒木痕があり、明確な床面、壁とも確定できず、プランも把握できなかった。その後も若干の掘り下げ等を行ってみたが、柱穴も発見されず、床面も黒色土の上にあったものと思われ、結局プランの確認はできなかった。しかしながら、この炉が屋外の炉であったとは周囲の状況から考えにくく、図版6の上に見る通り、最初に石囲炉を発見した時点での土の汚れの状況などから、石囲炉が住居跡の中央よりもやや南東寄りにある直径約4mの竪穴住居跡であったと推定した。この石囲炉が中央よりも南寄りにあるという形態はSI 03と共通しており、恐らく南西壁は前記の河原石が立て並べたあたりであると思われる。石囲炉は合計9個の河原石を径0.7mになるように立て並べたもので、南東部分には石の代わりに粗製深鉢形土器を横たえている。この深鉢形土器は口縁が炉の内部を向くように2個が重ねられており、第8図1が外側に、2が中に入っていた。炉の内部は良く焼けている。特に土器が強く火熱を受けており、これに近い石の内側が赤化している。

炉に使用されていた深鉢形土器は、いずれも典型的ないわゆる深鉢形で、底部からほとんど直線的に外傾して口縁に至るものである。無節の斜縄文が全面に施されている。

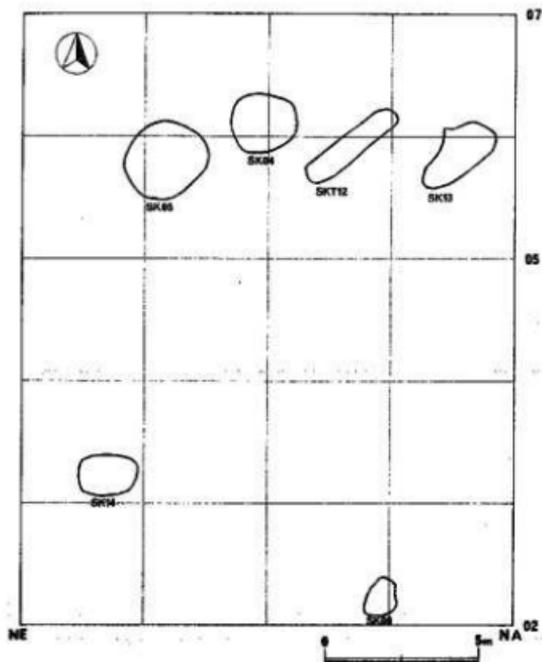
SI 01竪穴住居跡は炉の形態、土器からSI 03とほぼ同じ後期前葉のものと思われる。

#### (2) 土壌

縄文時代の土壌は、調査区北東部と南端部で発見された。形態から、大型円形土壌、袋状土壌、円形土壌、その他の土壌に分けて述べる。

##### ①大型円形土壌 (第9図、図版7)

縄文時代前期に属し、直径2mを超える円形土壌である。調査区南端部で発見された3基の土壌がこれで、SK 04と05は隣接しているが、SK 07はこれらより約20m北に離れている。



第9図 調査区南端部遺構配置図

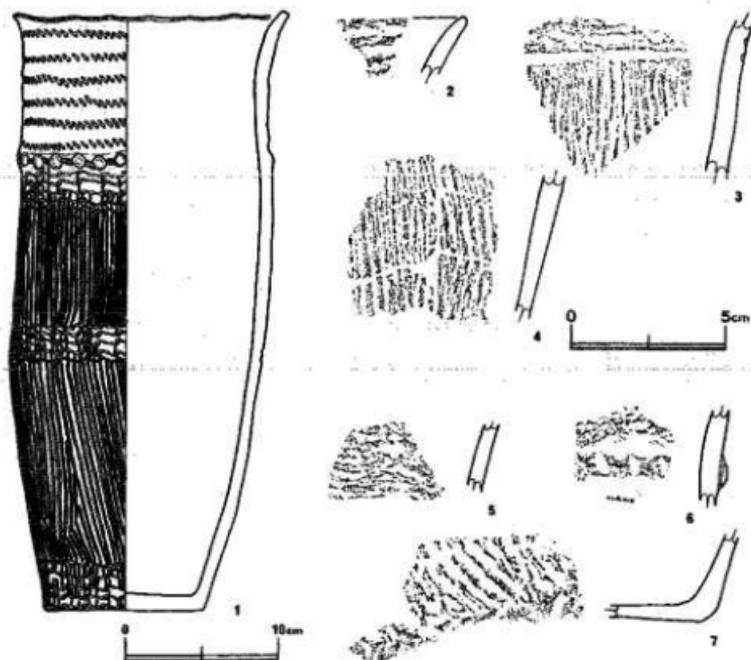
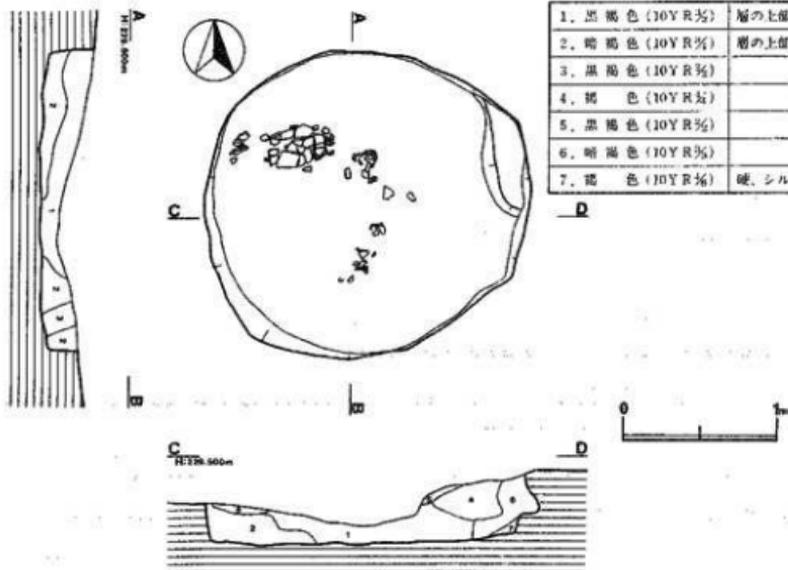
## SK 04 (第10図、図版7、16)

NC 06グリッド周辺の第6層漸移層を掘り下げ、地山上面で遺構・遺物の存在の有無を確認中、前期の土器の分布しているのが認められた。このため精査したところ、直径2mの円形の土壌であることを確認した。この遺構の掘り込み面は、残っていた土層の観察から第5層黒色土下部であり、南東部で風倒木痕を切っていることがわかった。従って、SK 04の本米の深さは約0.6mあったと思われる。床面はやや波打つかほぼ平坦で非常に堅い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、しっかりしている。床面や壁周囲には柱穴様のピットはなく、焼土等も全く認められない。

埋土中、床面から10~15cmほど浮いた状態で第10図1の深鉢形土器が北西部から、2が中央部から出土した。1は、小さな底部からゆるやかに膨らみながら胴部中央に至り、頸部でややすぼまって、口縁で大きく外反する前期円筒下層b式土器である。器高38.7cm、口径18cmを計り文字通り細長い円筒状を呈している。口頸部文様帯と胴部文様帯は器高の約 $\frac{1}{3}$ の高さに付された隆帯によって区画される。隆帯上には2条の押圧縄文、その後に指頭状の刺突が並ぶ。口頸部には6条の絡条体圧痕文が十分に間隔を取って施される。口唇部にも同様に施されたようであるが、大部分は消えている。胴部には縦位の燃糸文を施した後、三段にわたって燃糸による綾絡文を巡らせている。胎土は繊維を含み、焼成良好である。これ以外の土器はほんのわずかであるが、2~7の拓影で示した土器が出土している。2~4と5~7はそれぞれ同一個体で、いずれも小型深鉢形土器である。2~4は短い口縁部が外反し、この部分には5~6条の絡条体圧痕文が横位に付される。隆帯はなく、胴部には縦位の燃糸文が施されている。この土器の破片の一部がSK 05埋土中から出土している。5~7は口縁を欠くが、ほぼ円筒形の胴部から口縁部が若干外反する器形をとるものと思われる。口頸部の文様は横位回転の綾絡文であるが、2種類の原体を用いている可能性もある。厚味のない隆帯上には、爪あるいは半截竹

SK04

1. 黒褐色 (10YR 5/3)	層の上部炭化物少量混入
2. 暗褐色 (10YR 5/2)	層の上部炭化物少量混入
3. 黒褐色 (10YR 5/3)	
4. 褐色 (10YR 5/4)	
5. 黒褐色 (10YR 5/3)	
6. 暗褐色 (10YR 5/2)	
7. 褐色 (10YR 5/4)	硬、シルト質



第10図 SK04土壌と出土遺物

管様の工具で右方向から突かれた半円上の刺突が並ぶ。胴部には撚り戻し気味の原体による斜位の捺糸文が施されている。2～4、5～7の両者とも胎土は繊維を含み、焼成は不良で器外面に煤状炭化物が付着している。

出土遺物、確認面、埋土の状況などから前期中葉の土壌と考えられる。

#### SK 05 (第11図、図版8、16)

SK 04の西側1m離れて同レベルで確認された土壌である。この付近では、第5層黒色土層と第6層暗褐色漸移層との間に乳白色～黄白色の火山灰様の土の分布が見られ、SK 05はこの土層を切り込んで、構築されている。長径2.8m、短径2.4mであるがほぼ円形と見てよい。床面は非常に堅くしまっており、東側がやや高まるがほぼ平坦である。壁は東～北側が垂直に立ち上がるのに対し、南～西側はやや傾斜する。現存する深さは約0.4mであるが、SK 04同様、掘り込み面からの深さは0.7m前後あったものと思われる。床面上及び壁周囲には柱穴様のピットは全くない。床面上中央部に炭化物が比較的多く見られたが、床面は焼けていなかった。

遺物は第11図1の土器が埋土中、中央部から南東側にかけて出土した。円筒状の胴部から短い口縁部がわずかに外反する深鉢形土器である。文様は口頸部が横位回転の捺糸による綾絡文、胴部は縦位の捺糸文が施され、隆帯上にはSK 04出土1土器と同様の指頭状の刺突が見られる。また、わずかではあるが、SK 04出土の土器(第10図2～4の拓影)の小破片が出土している(第11図2)。

SK 05の時期も出土遺物などから、SK 04と同じ前期中葉頃の土壌と思われる。

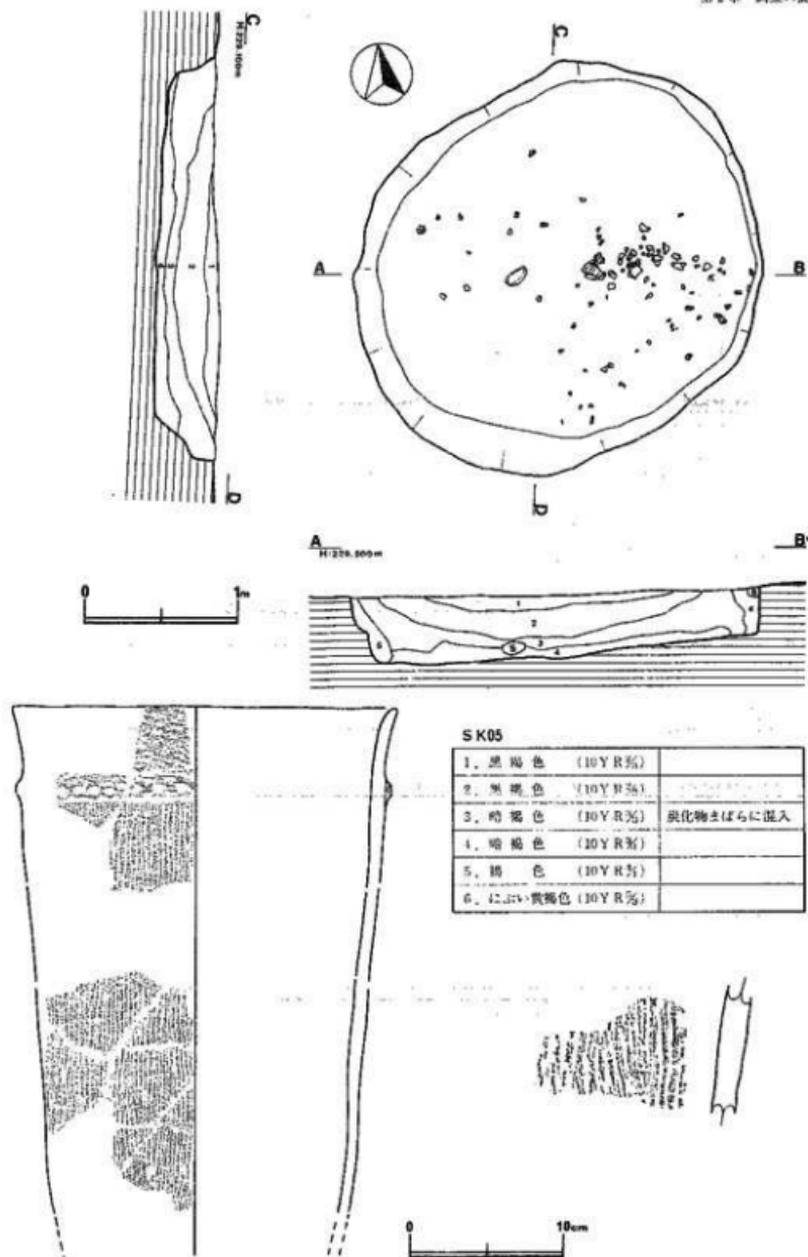
#### SK 07 (第12図、図版9、16)

SK 04、05の土壌の北約20mで発見された土壌である。NA 10グリッド周辺の第7層地山土上面を精査中、黒褐色の落ち込みを確認した。掘り下げたところ直径2mの円形の土壌となった。確認面からの深さは、0.35mを計る。埋土中では、床面から約15cmほどのところに3ヶ所の焼土が認められたが、これはブロック状のかたまりで、この場所で火を焚いた結果というよりも、焼土をここに捨てたという感じのあり方であった。床面は平坦で、堅くしまっている。壁はほぼ垂直で、一部オーバーハングしているところもある。床面上には焼土はなく、また柱穴もない。

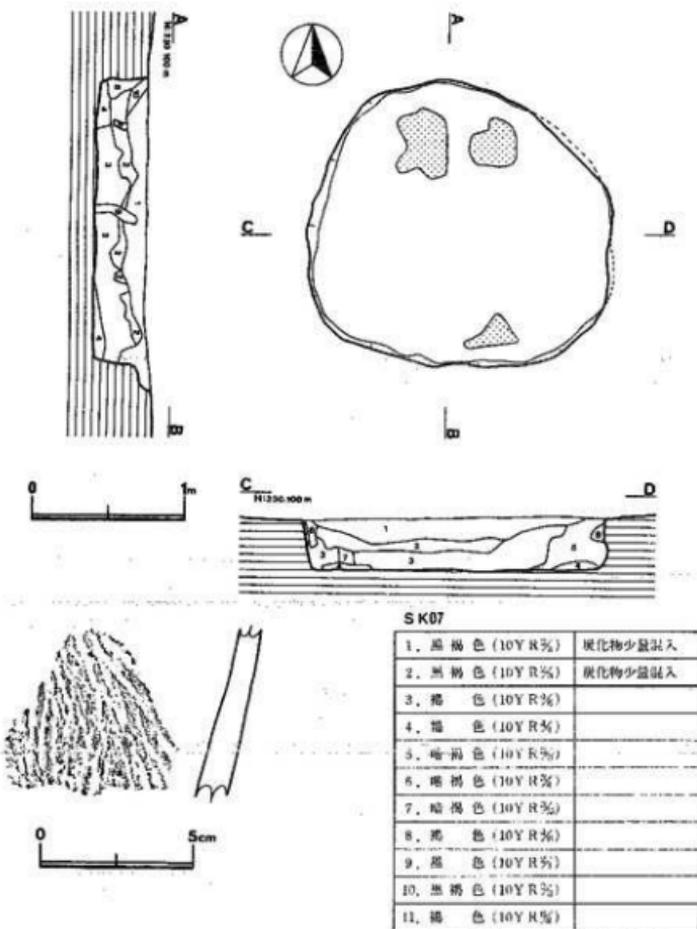
SK 04、05と規模、形態ともよく似ており、ほぼ同時期の同じような性格の土壌であると思われる。遺物は拓影に示した1点だけであった。前期円筒下層式の深鉢形土器胴部破片で、撚り戻しの繩による捺糸文が縦位あるいは斜位に施されている。

#### ②袋状土壌

土壌のうち、ある程度の深さを持ち、壙底や壙の中央部よりも壙口部の小さいものを袋状土壌とした。SK 10・50・20の3基がある。



第11図 SK05土壌と出土遺物



第12図 S K07土壌と出土遺物

## S K 10 (第3、13図、図版9)

MH 21グリッド第6層漸移層上面で確認された袋状土塚である。開口部の直径は1.1mで、頸部でわずかに窄まり、底部で再び広がる。従って断面形は口の大きい袋状を呈する。現存する深さは0.55mで、これが、第5層黒色土から掘り込まれたとしても、それ程深い土塚でなかったと思われる。埋土は黒褐色土が多く、壁などの崩落はあまりなかったものと思われる。

埋土中などからの出土遺物は全くない。

## SK 50 (第3、13図)

調査区中央部、KG 67グリッド周辺の地山土上面を精査中発見された袋状土壌である。形状はSK 10とほぼ同じであるが、これよりも1回り大きい。壙口部の直径1.5m、深さ1.1mである。埋土は上部ほど黒色に近い土であるが、中位より下は地山土と同じような黄褐色土が多く、その中に縞状にうすい黒色土が入る。このことからわかるように、この袋状土壌では壁などの崩落が多くあったと思われる、壁がしっかりしているのは上部だけである。

遺物は全く出土しなかった。

## SK 20 (第4、14図)

J C 83グリッド、第6層漸移層中で確認した。壙口部は直径0.9mの円形を呈し、底部は東側に入り込む形になっている。壁は北側ほど明確で若干オーバーハングしているが、南側は逆に不明確である。これは埋土からもわかるように壁の崩落の結果と思われる。現存する深さは0.4mと浅い。壙口部の埋土からうすい焼土が検出されたが、捨てられたものと思われる。

遺物は全く出土していない。

## ③円形土壌 (第4、13、14図、図版10、11)

調査区北東部にある竪穴住居跡の周囲などから、平面形が直径0.8~1.1mの円形である土壌が数基発見された。SK 21・18・28・29がそれである。これらの土壌の確認面は第6層漸移層から第7層地山土上面で、そこからの深さは0.2~0.45mである。壁、床面とも次のその他の土壌に比べてしっかりしているものが多い。埋土は黒褐色~暗褐色の比較的軟かい土が多い。

埋土中などから遺物が出土したものは1基もない。

## ④その他の土壌 (第4、14、15図、図版16)

土壌の分類の際にまとめ得なかったような不整形のものを、その他の土壌とした。SK 15、17、30、16、22、23などがこれにあたり、③の円形土壌と同じ地区、同じ層位で確認された。この中で、SK 22だけは長楕円形土壌とでも呼称できるような土壌である。長径2m、短径0.6m、深さ0.2mであり、壁、床面ともしっかりしている。また、他の土壌からは出土遺物が全くないが、SK 23の埋土中心部からは、第15図の拓影1~3で示した後期前葉の土器が出土している。

## (3) Tピット

調査区南端部、SK 04、05などと東西に並ぶように2基のTピット、SK T 12、13が発見された。2基のTピットは長軸がいずれも北東-南西方向で約2m離れて並んでいる。確認面は第6層漸移層上面である。

## SK T 12 (第9、16図、図版12、13)

SK T 12は、壙口部の長径3.45m、短径0.9m、底面の長径4.05m、短径0.4mであり、Tピットの中でもかなり長大な部類に属する。断面形は長軸方向が大きな袋状、短軸方向が案据

大田 I 遺跡

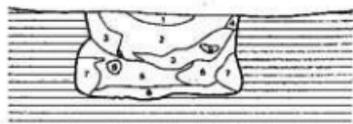


A

B

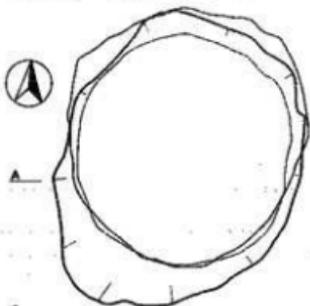
A  
#230.000m

B



SK10

1.	黒色 (10Y R 5/1)
2.	黒褐色 (10Y R 5/2)
3.	黒褐色 (10Y R 5/3)
4.	黒褐色 (10Y R 5/2)
5.	黒褐色 (10Y R 5/2)
6.	黒褐色 (10Y R 5/2)
7.	褐色 (10Y R 5/1)
8.	黒褐色 (10Y R 5/2)
9.	黒色 (10Y R 4/1)

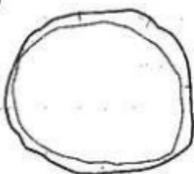
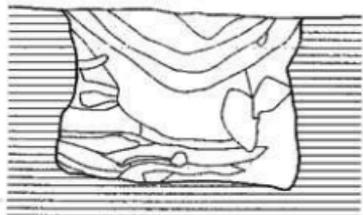


A

B

A

B



A

B

A  
#233.000m

B

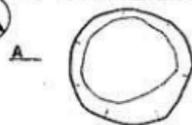


SK21

1.	黒褐色 (10Y R 5/2)	
2.	黒色 (10Y R 5/1)	炭化物少量混入
3.	黒褐色 (10Y R 5/2)	強く締まっている
4.	黒褐色 (10Y R 5/2)	壁面の崩れた層

SK18

1.	黒色 (10Y R 5/1)	締まりが無く軟らかい
2.	黒褐色 (10Y R 5/2)	脆く崩れやすい
3.	黒褐色 (10Y R 5/2)	水分を多量に含む
4.	黒褐色 (10Y R 5/2)	
5.	暗褐色 (10Y R 5/3)	水分を多量に含む



A

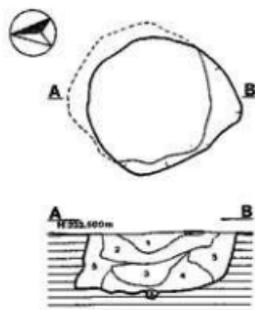
B

A  
#233.700m

B

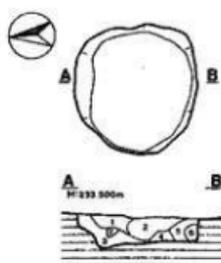


第13図 SK10・50・21・18土壌



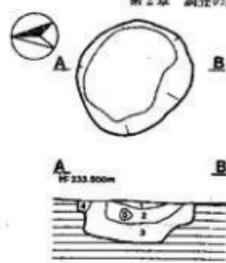
SK20

1. 黒褐色 (10Y R%)	炭化物少量混入
2. 黒色 (10Y R%)	
3. 黒褐色 (10Y R%)	
4. 暗褐色 (10Y R%)	
5. 暗褐色 (10Y R%)	炭化物極少量混入



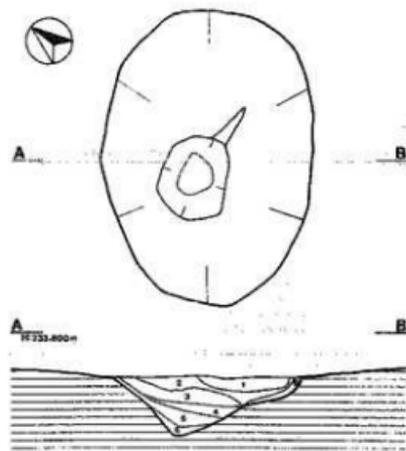
SK28

1. 黒褐色 (10Y R%)	
2. 黒褐色 (10Y R%)	炭化物片混入
3. 暗褐色 (10Y R%)	
4. 褐色 (10Y R%)	
5. 褐色 (10Y R%)	炭化物少量混入
6. 褐色 (10Y R%)	
7. 褐色 (10Y R%)	



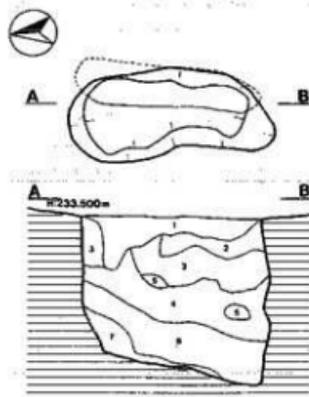
SK29

1. 黒褐色 (10Y R%)	
2. 黒褐色 (10Y R%)	
3. 暗褐色 (10Y R%)	
4. 褐色 (10Y R%)	
5. 暗褐色 (10Y R%)	



SK15

1. 黒褐色 (10Y R%)	
2. 黒色 (7.5Y R%)	
3. 黒褐色 (5Y R%)	
4. 黒褐色 (10Y R%)	
5. 黄褐色 (10Y R%)	
6. 黄褐色 (10Y R%)	
7. 明黄褐色 (10Y R%)	



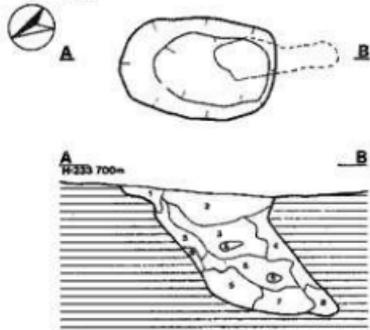
SK17

1. 黒褐色 (10Y R%)	
2. 暗褐色 (10Y R%)	炭化物少量混入
3. 黒褐色 (10Y R%)	
4. 黒褐色 (10Y R%)	樹皮質
5. 黄褐色 (10Y R%)	
6. 黒褐色 (10Y R%)	
7. 黒褐色 (10Y R%)	黄褐色土ブロック50%混入、ホソボソしている



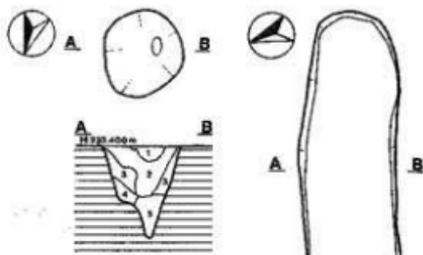
第14図 SK20・28・15・17土壌

大位1通称



SK30

1. 黒色 (10Y R%)	
2. 黒褐色 (10Y R%)	
3. 黒褐色 (10Y R%)	炭く崩れやすい
4. 黒褐色 (10Y R%)	
5. 黒褐色 (10Y R%)	
6. 黒褐色 (10Y R%)	
7. 暗褐色 (10Y R%)	
8. 暗褐色 (10Y R%)	
9. 濃い黄褐色 (10Y R%)	ローム多量混入



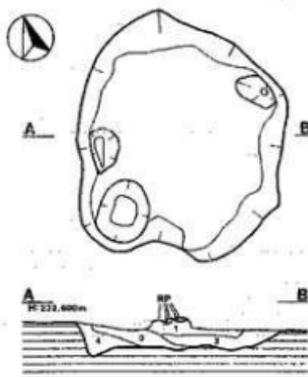
SK16

1. 黒色 (7.5Y R%)
2. 黒褐色 (7.5Y R%)
3. 褐色 (10Y R%)
4. 黄褐色 (10Y R%)
5. 黒褐色 (10Y R%)



SK22

1. 黒色 (10Y R%)
2. 暗褐色 (10Y R%)
3. 褐色 (10Y R%)

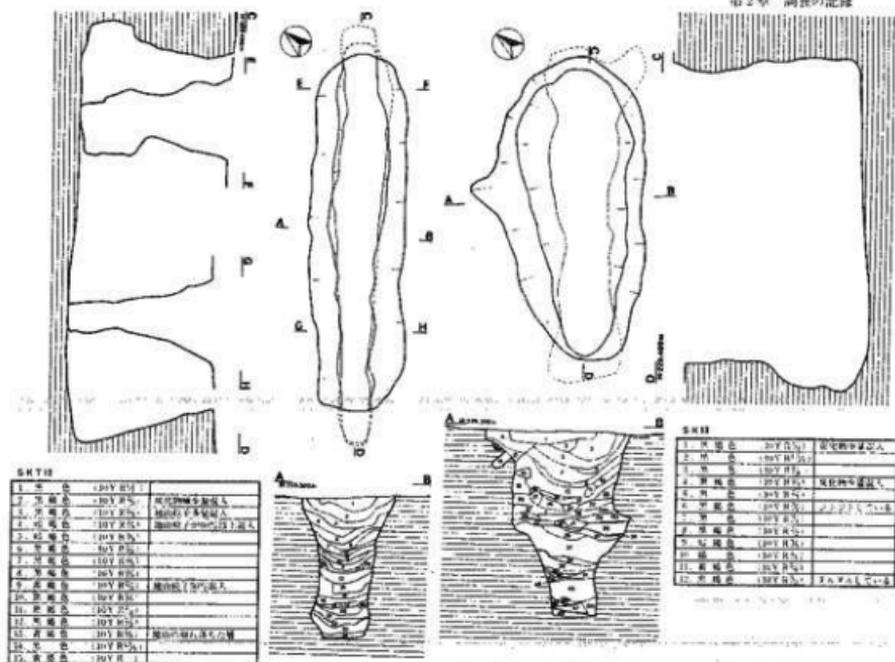


SK23

1. 黒褐色 (10Y R%)	炭化物少量混入
2. 黒褐色 (10Y R%)	
3. 黒褐色 (10Y R%)	炭化物少量混入
4. 褐色 (10Y R%)	浮石少量混入



第15図 SK30・16・23土壌と出土遺物



第16図 SK12・13Tピット、SK14・09井戸状土塙

りの井戸状を呈する。四周の壁面は中位くらいまでは明確で堅いが、底部に近づくにつれ、やや軟質になる。この傾向は長軸の両端が著しい。埋土は上部ほど黒色に近い土であるが、底部に近づくにつれ、崩落土と思われる地山土様の土が多くなり、それらの中にサンドイッチのような状態で黒色土がバンド状に入っている。従って、両端が断面図で見ると、これほど明確なオーバーハングを構築時からしていたかどうかは問題のあるところである。床面はしっかりした堅い平坦な面である。

埋土中などから遺物は全く出土しなかった。

#### S K T 13 (第9、16図、図版13)

S K T 13は、確認時の平面形が長径 2.9m、短径1.35mであり、楕円形の土坑と考えられた。しかし掘り進むにつれ、S K T 12に近い形となり、最終的には、底部の長径 3.2m、短径0.45m、深さ 1.8mのTピットであることがわかった。平面形、断面形ともS K T 12にくらべ、ずんぐりしているが、埋土中には崩落土がS K T 12よりも多く、かなりの部分で壁などが崩れ落ちてこのような形になったものと考えられる。

埋土中からはS K 09埋土中に見られた剥片と同様の剥片が1点出土したにすぎない。

#### (4) 井戸状遺構

調査区最南端から、中世の館跡などで見られるような井戸状の遺構が2基発見された。S K 09、19、14がこれである。形態は確かに井戸状を呈するが、この部分のすぐ南側は急峻な崖になっており、井戸が掘られたということは考えにくい。縄文時代か弥生時代の何らかの遺構であると見るのが妥当である。確認面は第6層漸移層である。

#### S K 09 (第9、16図、図版14)

平面形は開口部で径1.1m、底面で0.4mの円形、断面形は底部からほぼ垂直に立ち上がり、中位からゆっくり開く素掘りの井戸状を呈する。西壁に径 0.2mの柱穴様のピットがあり、これを切って掘り込んでいる。壁はしっかりしていて堅い。埋土中下部から、大きめの剥片2点が出土している。

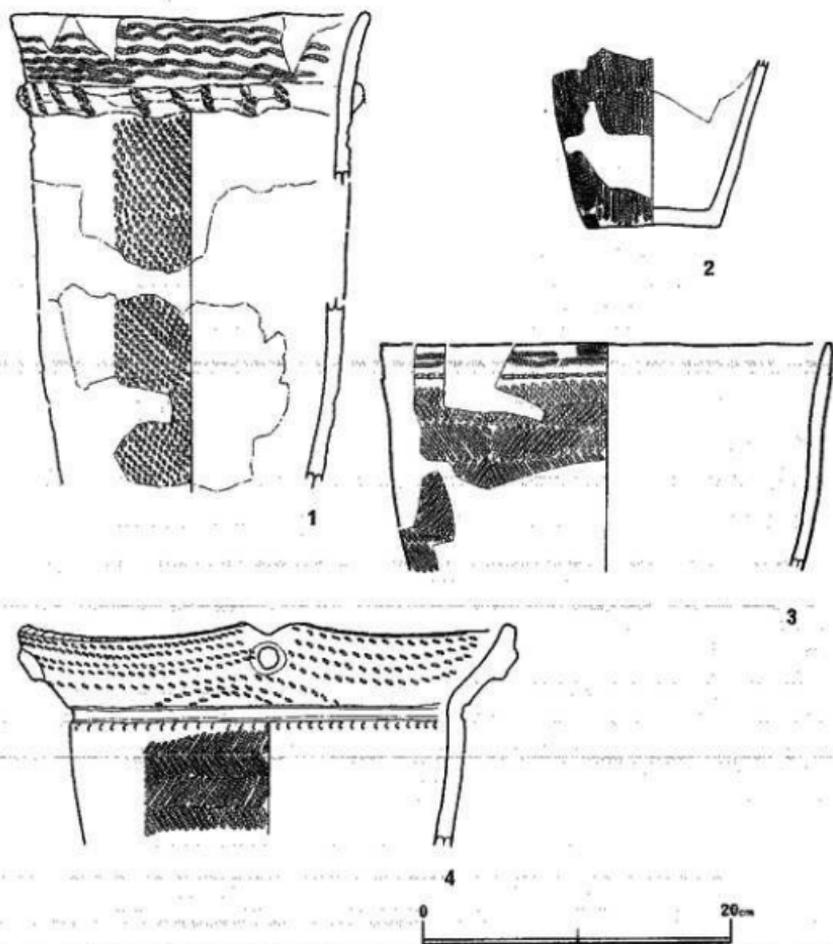
#### S K 14 (第9、16図、図版14)

開口部が広く、中位で窄まり、そのまま円筒状に底部に至る形である。埋土は上部ほど黒褐色土が多いが、中位以下は地山土に似た黄褐色である。遺物は全くない。

#### 2 その他の出土遺物

大谷1遺跡の調査では、遺構外から縄文時代前期以降各時期の土器、石器などが中コンテナで約20箱ほど出土している。これらの遺物については、土器は各時期毎、石製品は各器種毎にまとめて記述する。

##### (1) 土製品



第17図 縄文時代前期の土器

土製品としたが、そのほとんどは土器であり、土器以外には円盤状土製品があるだけである。土器の多くは破片で、完形品は少ない。縄文時代前期・中期・後期・晩期のものが出土している。便宜上これらを時期毎にⅠ群～Ⅴ群に分け、さらに各群の中を分類した。(なお、分類は必ずしも型式別の分け方とはなっていない)

## ①土器

a 第Ⅰ群土器：縄文時代前期の土器群である。これらの土器は層位的に分層できるような

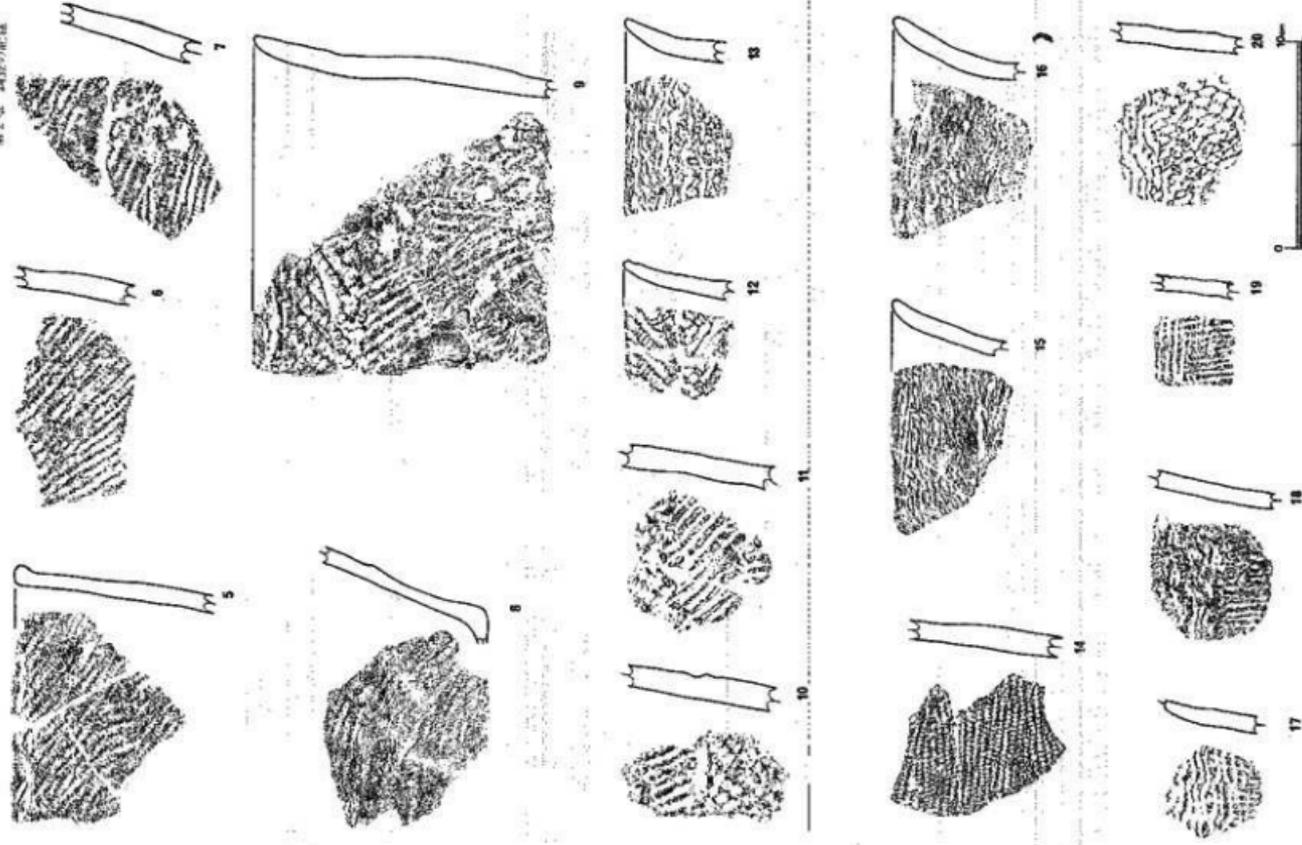
形での出土ではない。口頸部の文様などにより9つに分類した。

第1類土器(第18図5~8、図版18) 1ヶ所に集中して出土した1個体分の土器である。小さな底部から胴下半にかけて内湾気味に開き、わずかに外傾する口縁部に至る深鉢形土器で、これを本類とした。口唇部は平らにされ、その分だけ口縁端部が外に張り出している。器外面にはR Lの単節斜縄文が全面に施されている。内面への施文はなく、みかきも見えない。焼成は良好で、胎土は繊維を含んでいる。円筒下層a式よりも古手の土器であると思われる。

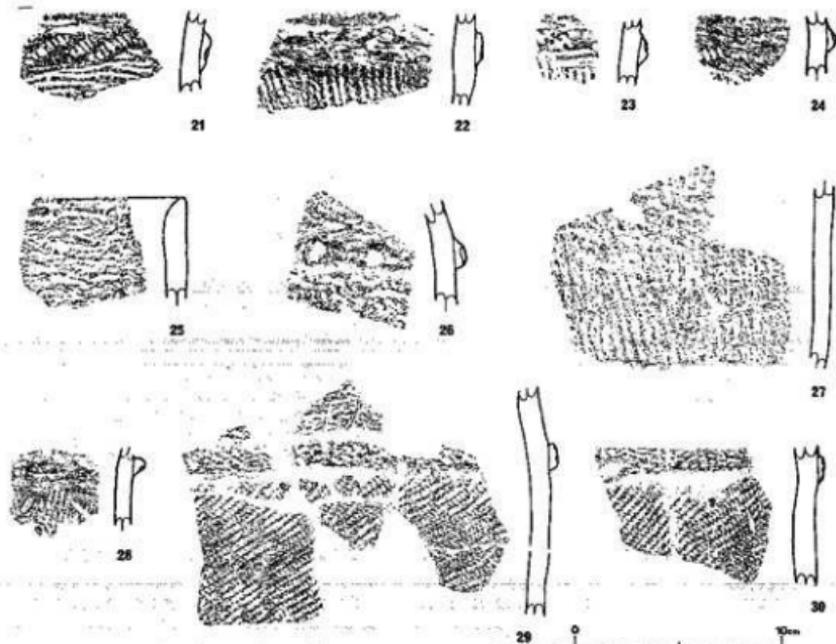
第2類土器(第18図9~20、図版18) 器形は円筒形深鉢形土器と思われ、口頸部文様帯には縄文原体を回転施文させ、隆帯を有しない土器群を本類とした。円筒下層a式土器かと思われる。9~11は同一個体で、口縁部がわずかに外傾する。口頸部文様は口縁端部に太い原体と細い原体を横位に押しつけ、その下に極端に太さの異なる2本の原体による結束羽状縄文を施している。胴部中位以下は10、11のように口頸部と同じ原体による羽状縄文であるが、上半は羽状になっておらず、同一の原体のR Lの部分のみを不定方向に回転させたものかもしれない。胎土には繊維の他、径3mmの小礫やそれ以下の粗砂を多量に混入させている。12も口頸部に結束羽状縄文の施されたものである。14を除く13~20の口頸部には横位回転の綾絡文、捻糸文、不整捻糸文など、胴部には縦位の捻糸文の他、20では複節の斜縄文が施されている。15、16は同一個体である。14は胴部破片であるが、13、15とともに胎土に繊維の他多量の粗砂を含み内面のみがみかき見られないので、この仲間とした。

第3類土器(第17図1、第19図、図版17、19) 口頸部と胴部の区画に太い隆帯を用いるものを本類とした。器形は円筒形で、口頸部はわずかに外反するか外傾する。円筒下層b式土器と思われる。口頸部文様帯には結び目の間びした綾絡文、胴部には斜位、縦位の縄文が施されているものが多い。17図1は口頸部に綾絡文、胴部に複節の斜縄文が施されている。太くボリュームのある隆帯上には胴部に用いた原体を斜位(右下り)に2~3回を1単位として押圧している。第19図21~24、29の隆帯上には捻糸文が左下りに押圧されている。25と26、29と30はそれぞれ同一個体で、隆帯上には、前者は指頭状刺突文、後者には多輪絡条体の回転文が施されている。これらの土器の胎土は繊維を含み、粗砂が多量に混入されているものもある。

第4類土器(第20図、図版19) 口頸部には綾絡文や網目状捻糸文が施され、低く細い隆帯を有する土器群を本類とした。口頸部がわずかに外反するものや外傾する深鉢形土器と思われ波状口縁のものもある。円筒下層b式土器であると思われる。隆帯上には第20図31のように柄円形の刺突文や、34のように縄文原体の圧痕の施されるものがある。32と33、34と35はそれぞれ同一個体で、32、33では隆帯が剥落している。34、36は波状口縁を呈し、口縁に沿って、波頂部からは垂直に捻糸及び縄文原体の押圧文を施文している。40~44は頸部以下の様相が不明であるが、口縁に沿って1~2条の押圧縄文あるいは捻糸の圧痕文を加えている。44は波状



第18圖 1群1・2類土器



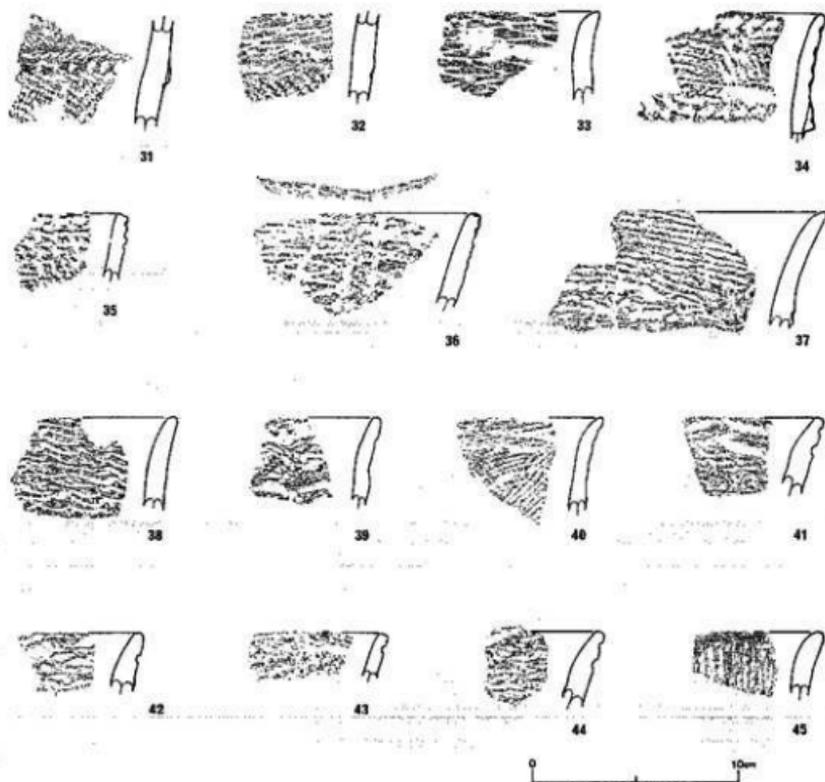
第19図 I群3類土器

口縁の波頂部である。胎土は繊維を含み、粗砂はそれほど顕著でない。

第5類土器（第21図、図版20） 底面に縄文のあるものや、胴部破片を一括して本類とした。底面に縄文のある土器群は円筒下層a-b式であると思われる。第21図56は多軸絡糸体の縦位回転文である。胎土は繊維を含み、焼成は普通～良好。

第6類土器（第22図56～62、64～71、図版21） 口頸部に数条の押圧縄文で変形文等を描いた土器群を本類とした。円筒下層c式土器と思われる。平口縁のもと凸起状の波状を呈する口縁がある。第22図58～60は同一個体で口頸部が大きく外反する。頸部には申し訳程度の隆帯を有し、その下には2条の綾絡文、胴部は羽状縄文である。口唇部にも縄文の回転施文がある。65～67は同一個体である。71は口縁部に2つの穿孔があり、その下に瘤状の粘土粒の貼り付けがある。胎土は繊維を含み、焼成は普通である。

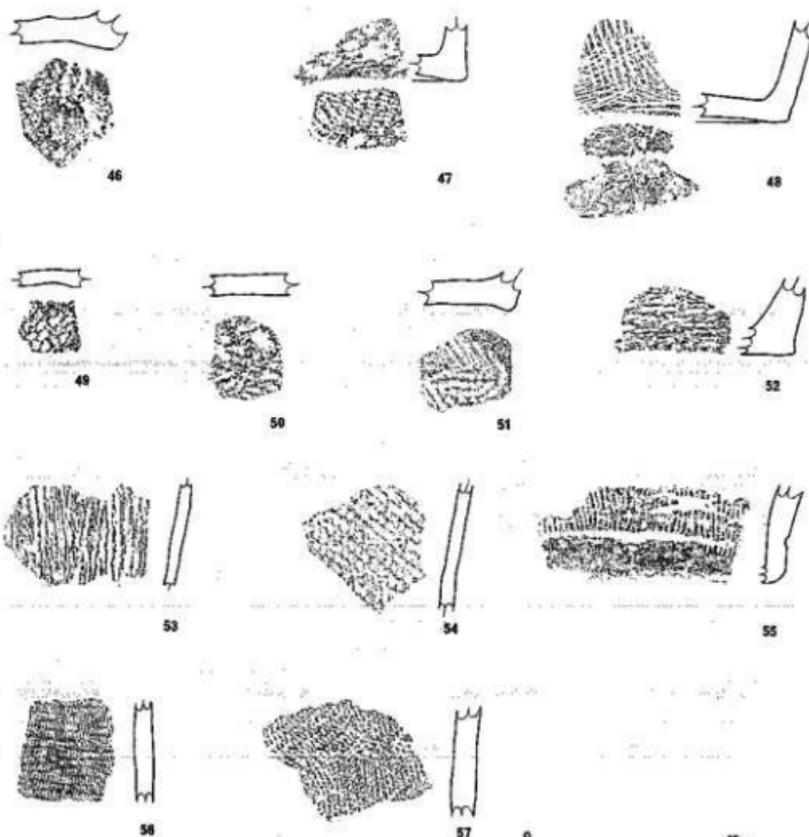
第7類土器（第17図3、22図72～75、図版17、21）口頸部文様帯の幅がせまく、隆帯のないものを本類とした。円筒下層d式土器と思われる。口頸部には押圧縄文が撚糸の圧痕文が横位に



第20図 I群4類土器

加えられ、頸部に半截竹管の刺突が圍繞するもの(74)もある。第22図72、73は同一個体で小さな波状口縁を呈する。短い口頸部には、原体R LとL Rの2木一組の押圧縄文が横位に4条施文され、小さな波頂部からは同じ原体による押圧が2条加えられている。胴部上半には結束羽状縄文が数段、その下には縦位の縄文が施されている。第17図3は胴部上半でわずかに窄り、口頸部が直立気味に外傾する深鉢形土器である。口頸部文様は72と同じで短く、頸部には棒状工具の先端による右方向からの刺突が施されている。胴部文様は結束羽状縄文である。

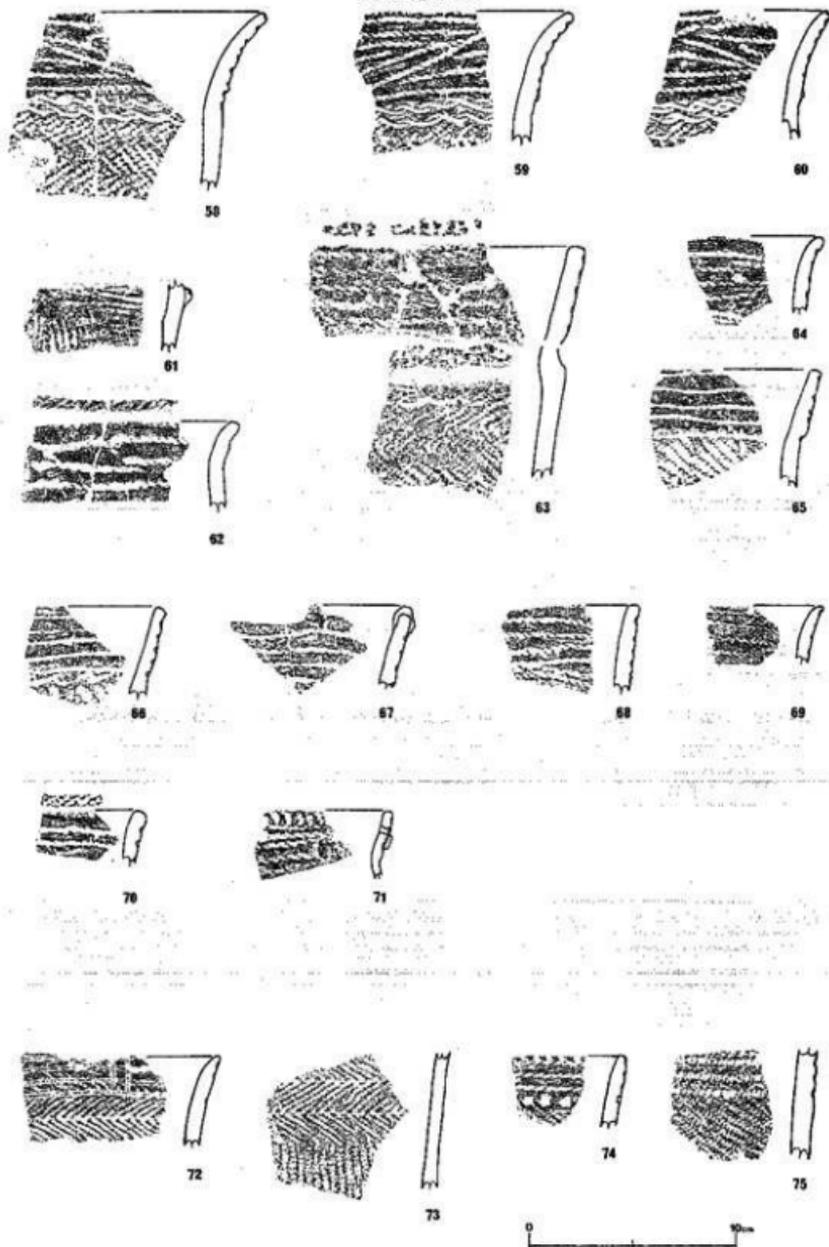
第8類土器(第23図76~82、図版22) 口頸部文様が捻糸の圧痕文や押圧縄文で、頸部下端に低い隆帯や刺突列を施し、口頸部の外反の度合の強い土器群を本類とした。円筒下層d式土器であると思われる。波状口縁の深鉢形土器も多い。第23図76は、ゆるい波状口縁を呈する深鉢形土器で、波頂部下には横幅5.5cmの隅丸長方形の穴がある。口頸部の文様は捻糸の押圧文が



第21図 I群5類土器

施されているが、これには2種類ある。1つは普通の撚糸の押圧で、他の1つは網口状撚糸文になる原体の押圧である。79も波状口縁の土器で、口頸部には撚糸の押圧文が施され、波頂部からは同一原体による3条の押圧が加えられている。頸部には極く低い隆帯を有し、その下には単位の短い羽状縄文が一段囲繞され、その下には縦位の縄文が施されている。80の頸部には半截竹管文がめぐる。胎土に含まれる繊維はほんのわずかである。

第9類土器（第17図4、第23図83-95、図版17、22）頸部が幅広の凹帯になり、それから口縁部が大きく外反、あるいは外傾する深鉢形土器を本類とした。口縁は波状口縁のものが多く、波頂部から垂下する隆帯や、円形の貼付文などが見られる。円筒下層d式土器と思われる。



第22図 1群6・7類土器



76



77



78



79



80



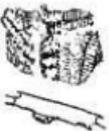
81



82



83



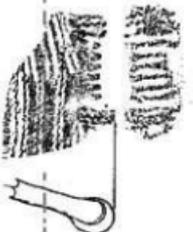
84



85



86



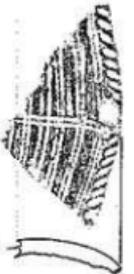
87



88



89



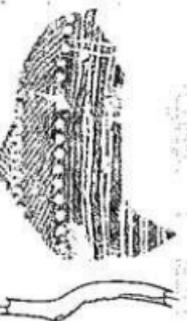
90



91



92



93



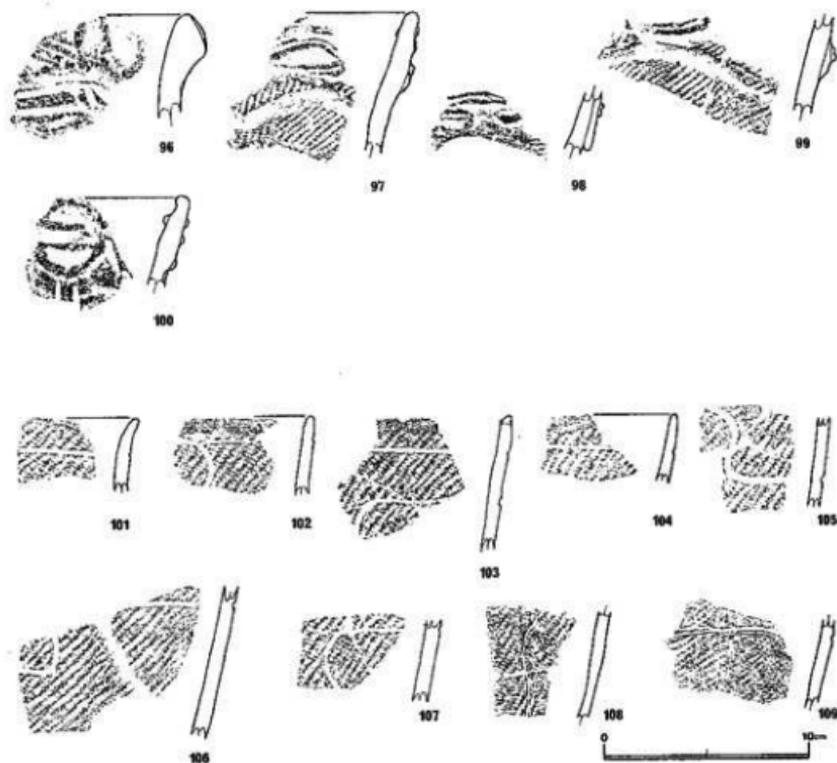
94



95

第23圖 I 群 8・9類土器





第24図 Ⅱ群1・2類土器

第17図4と第22図63は同一個体である。円筒形の胴部から幅広の凹帯になる頸部に至り、そこから内湾気味に大きく外に張り出す器形の深鉢形土器である。波状口縁の波頂部は半円状にくぼんでおり、その下には円形の大きな粘土瘤が付されている。口縁部には複節の押圧縄文が波頂部を中心にして施され、口唇部には半截竹管文が施されている。胴部は結束羽状縄文で、その上端には口唇部と同じ竹管文が施されている。83～85も同一個体で、波状口縁を呈するものと思われる。波頂部からは隆帯が1本垂下し、これが頸部の隆帯とつながっている。垂下する隆帯上には口頸部と同じ捲糸圧痕文が施されるが、頸部の隆帯上には原体の異なる縄文圧痕が加えられている。87、88は波状口縁の波頂部が台形状になっており、その上底の両端は円形の凸起状となっている。89～94も同一個体で、波状口縁を呈する。波頂部下には指頸状の円形押圧痕があり、胴部と口頸部文様帯の間は円形の刺突列によって区画されている。

**b 第II群**：少量であるが縄文時代中期の土器が出土している。施文の違いから2つに分類できる。

第1類土器（第24図96～100、図版20） 文様構成が粘土紐貼付で行なわれる土器である。円筒上層d式土器と思われる。口縁は大きな波状を呈するもの（96）や、扇状把手の付くものである。口縁部は折り返し口縁か、粘土紐の付加によって帯状に厚くなっており、この上に細い粘土紐が貼付されている。97～99は同一個体で、粘土紐の上に押圧縄文が施されている。100は扇状把手の下に2条の沈線が垂下する。

第2類土器（第24図101～109、図版20） 単節の斜縄文を施文とし、その上に浅く細い沈線で曲線などを描く土器である。中期末葉～後期初頭の土器と思われる。101～107は同一個体で、口縁に沿う一条の沈線が引かれ、この下に曲線文が描かれている。

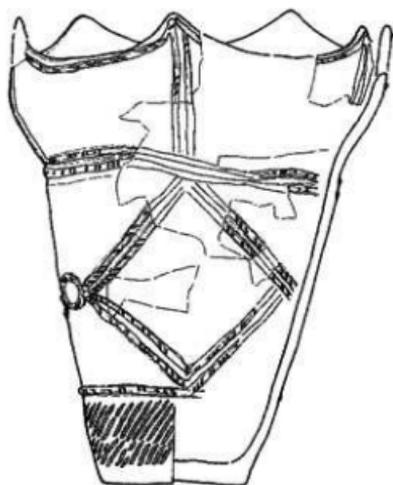
**c 第III群土器**（第25図110、図版23） 縄文時代中期末葉に属する土器と思われるが、現在のところあまり類例のない土器が1点だけある。これを第III群土器とした。

わずかに外傾気味の円筒形胴部から口頸部が内湾しながら外に開き、そのまま立ち上る深鉢形土器である。5個の波頂部を持つ波状口縁を呈する。胴部下半はLRの単節斜縄文、それより上は粘土紐貼付による文様構成となっており、地は無文である。粘土紐は、口縁に沿ってと、胴部下半の文様帯区画には一本だけであるが、他は2本一組となっている。2本の粘土紐は波頂部から頸部に垂下し、頸部で1周する。頸部から胴下半にかけては、3ヶ所からそれぞれ右下り、左下りに斜行し交わりながら、胴中央に3個の菱形を形成する。この3ヶ所の交点のうちの1ヶ所には円形文が中央に配されている。粘土紐の上には単節縄文が施され、無文部のみがきは顕著ではない。焼成はやや不良で、器内外面とも暗褐色～褐色を呈する。

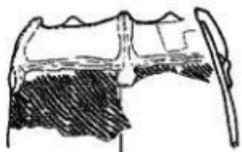
**d 第IV群土器**：縄文時代後期の土器を本群とした。前葉から後葉までの土器が出土しており、6分類した。

第1類土器（第25図111、図版23） 後期初頭にあたるとと思われる。胴部中位以下を欠くが、胴部上半から内湾したまま口縁に至る深鉢形土器である。頸部には粘土紐が一層のように貼付けられ、これから口縁にかけ5本の鱗状の粘土紐が加えられている。この粘土紐の上端は平らな口縁をつき抜けて、突起状となり、その下端にはボタン状の円形貼文が付されている。

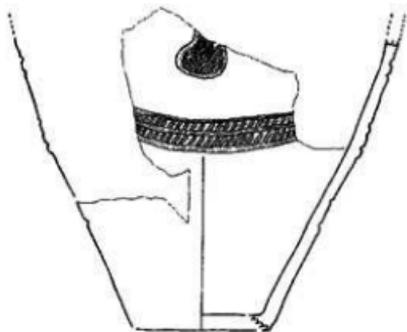
第2類土器（第25図112、113、114、第26図、第27図137～143、第28図163、171、172図版23、24、25） 後期前葉の土器である。深鉢形土器（112など）、壺形土器（113、137～143）などがある。深鉢形土器の大部分のものは波状口縁を呈するものと思われる。2本一組の沈線による文様構成を主体とし、磨消縄文のもの（112、119～134）や、円形刺突のあるもの（119、120、135、136）などがある。第25図114は基本的には本類に後続する土器と思われるが特に類別しないで、これに含めた。台付で卵形の胴部から頸部で強く窄まり、内湾



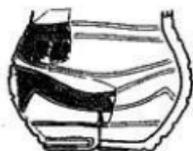
110



111



112



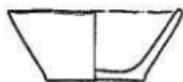
113



114



115



116



117



118



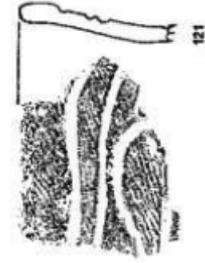
第25図 III群 IV群土器(1)



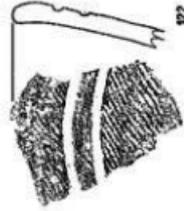
119



120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



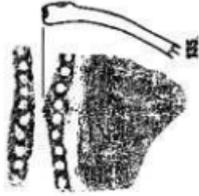
132



133



134



135



136



第26圖 IV群 1類土器



137



138



139



140



141



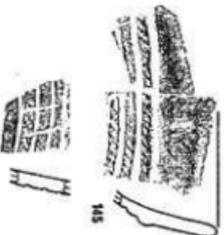
142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152

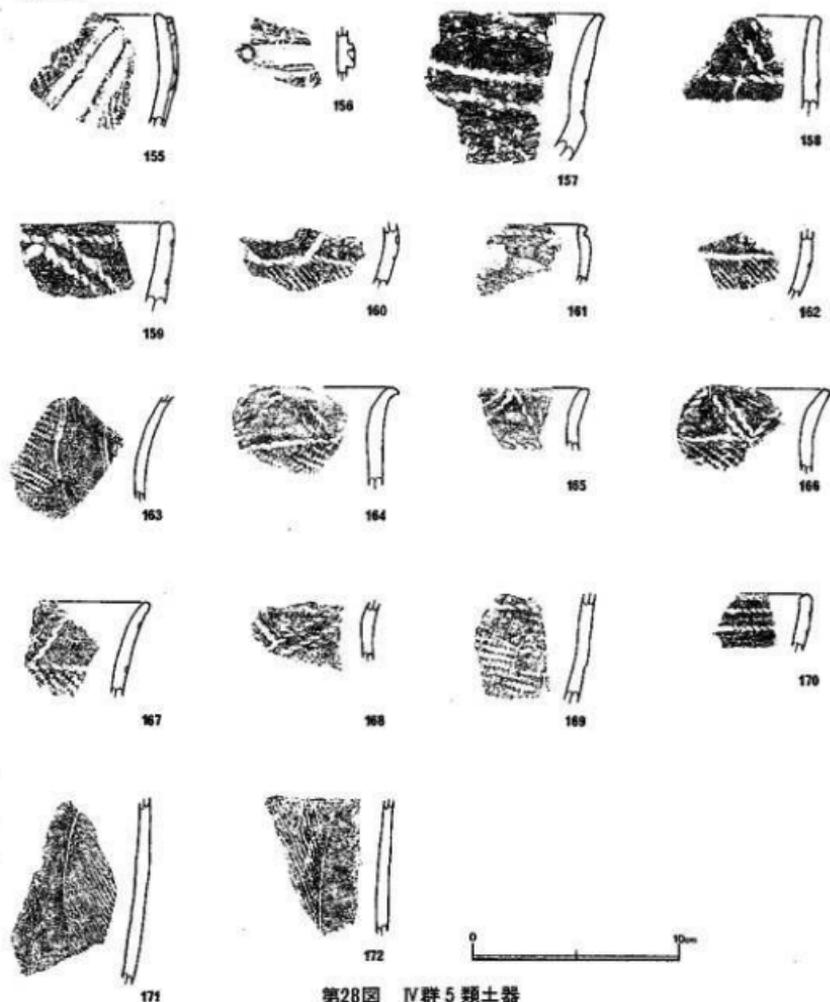


153



154

第 27 圖 IV 群 2・3・4 類土器



第28図 IV群5類土器

気味の口縁部になる独特の器形を呈する。口縁は3つの波頂部を持つ波状口縁である。波頂部の内面には盛り上りのある円形粘土瘤が付され、その周囲には押圧縄文が施されている。器外面の文様構成は細く浅い沈線で胴下半に磨消帯を持つ。

第3類土器（第25図 116、第27図 144～146、第30図 193、195、図版23、25、28）後期中葉の土器を本類とした。深鉢形土器（193、144）や鉢形土器（195、145、146）などがある。いずれも地は無文で、その上に沈線による曲線文が描かれている。



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



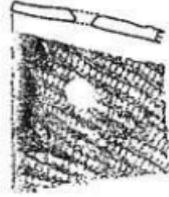
183



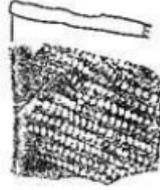
184



185



186



187



188



189



190



191

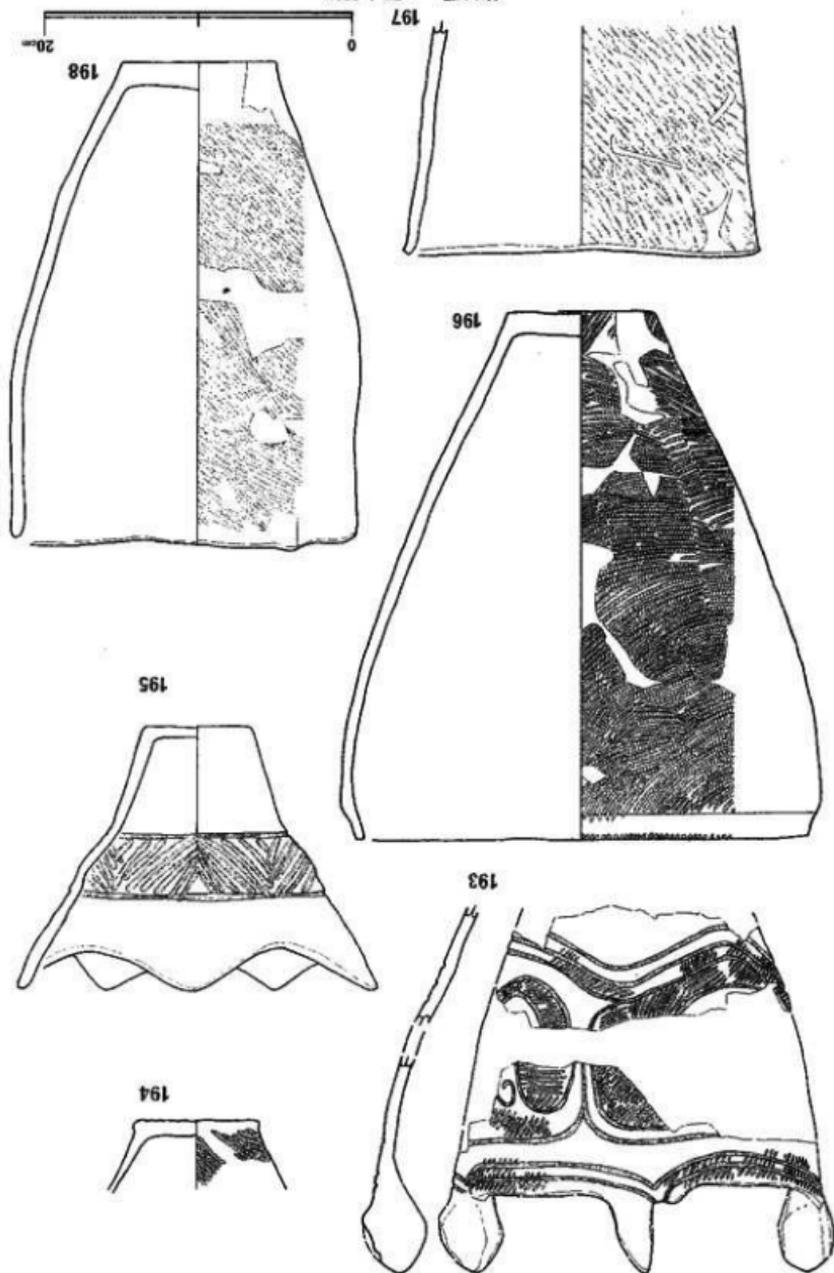


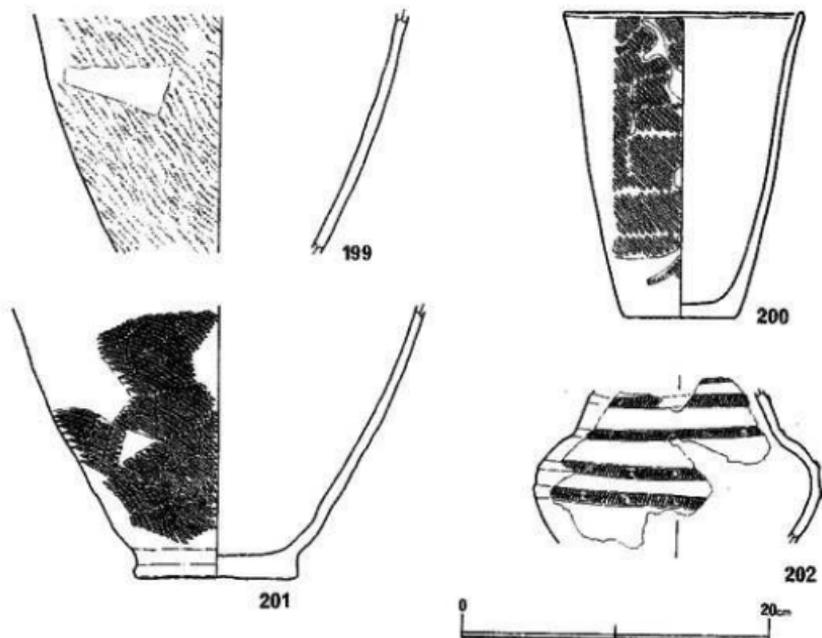
192



第29図 IV群6類土器

第30圖 IV群土器(2)





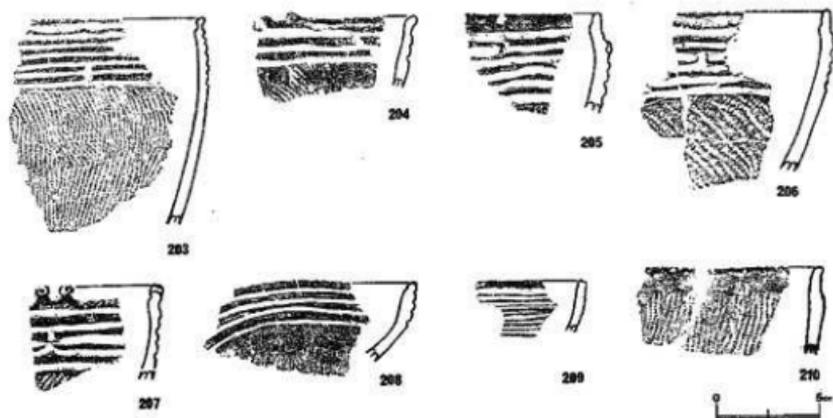
第31図 第IV群土器(3)

深鉢形土器では口縁部に耳状の把手が4～5個付くものが多い。第25図 116は無文の土器であるが本類に含まれるものと思われる。

第4類土器(第27図 148～154、第31図 202、図版25、29) 後期後葉のいわゆる貼瘤のある土器である。第27図 148～154は深鉢形土器の同一個体で、口縁部には短く低い突起が付され口唇部には刻みが加えられている。文線帯は胴上半に限られるようで、上下を刺突列で画している。文線構成は細く粗い沈線で、沈線の集まる部分には低い円形の貼瘤が付されている。第31図 202は注口土器と思われる。幅のせまい縄文帯上に小さな貼瘤文が付されている。

第5類土器(第28図 157～162、164～170、図版26) 口頸部無文帯に押圧縄文が施された土器を本類とした。胴部は斜縄文である。後期前葉の土器であると思われるが、あるいは弥生時代のものであるかもしれない。押圧縄文は2本一組で用いられ、全体としては連続する山形文を描くと思われる。

第6類土器(第25図 117、118、第30図 196～198、第31図 199～201、第29図 173～192、図版23、27～29) 縄文のみが施された粗製土器を一括して本類とした。後期前葉に属する



第32図 V群土器(1)

ものが大部分と思われる。口縁部には内反するもの(第29図 173など)、直口ないし外傾するもの(175、178など)、外反するもの(183など)、折り返し口縁のもの(189～191など)がある。縄文は単節斜縄文のものと無節のもの(第30図 197、198など)がある。第25図117、118は口径に比べて高さの低い鉢形土器で、特に118はそれが著しい。

e 第V群土器(第32、33図、図版29、30) 縄文時代晩期の土器を一括して本群とした。鉢形土器(第33図 212、214)台付鉢形土器(211)、粗製深鉢形土器(213、216)などがある。晩期中葉～後葉の土器群である。

#### ②円盤状土製品(第34図、図版31)

土製品では円盤上土製品だけが出土している。この他土偶等は全く出土していない。

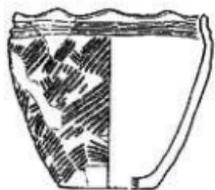
土器片を丸く打ち欠いて作製した土製品である。大きさと孔の有無によって2種に分類できる。

a (第34図1～23) 円盤の直径が3cm前後～5cm未満のもの。土器片の文様などから、いずれも縄文時代後期のものであろう。

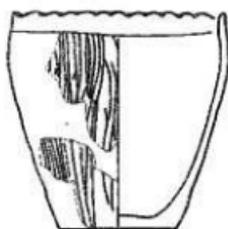
b (第34図24、25) 円盤の直径が7cm前後と大きいものである。中心部に最小径0.5cm前後の孔を穿っており、有孔円盤状土製品である。孔は表、裏両面から穿っており、中心部ほどその径は小さくなっている。24は半分ほど欠けている。使用された土器片から、縄文時代前期のものである可能性がある。



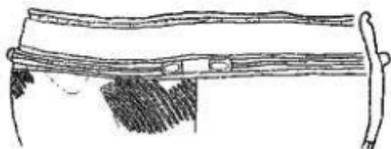
211



212



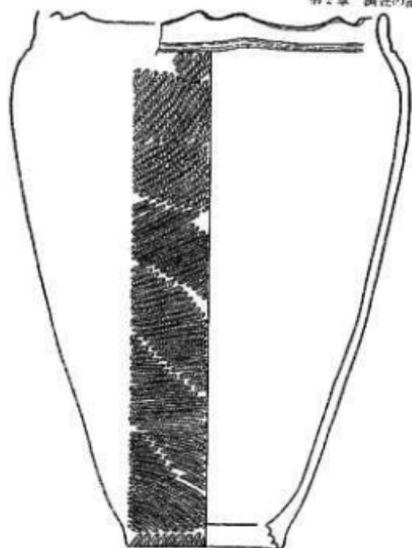
214



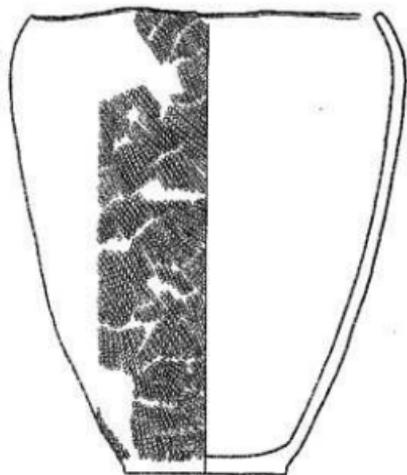
215



217



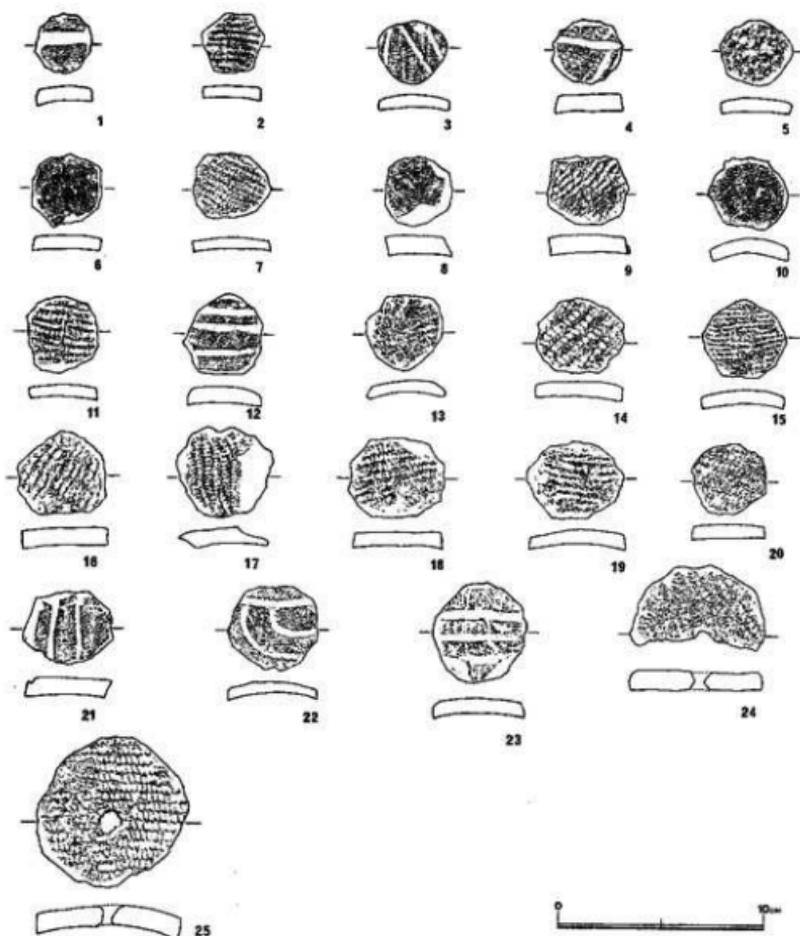
213



216



第33図 V群土器(2)



第34図 円盤状土製品

(2) 石製品

縄文時代の一般的な石器と、石製品が出土している。

①石器

石鏃、石匙、石槍、搔器、削器、筥状石器、半円状扁平打製石器、凹石などが出土している。これらの石器の時期については、その大部分を明らかにすることはできなかった。そのため、

ここでは各器種別にまとめて記述する。

石鏃(第35図1~10、図版32) 合計10点出土している。基部の形状によって4種に分類できる。このうち、3、7、9、10を除いた6点は押圧剥離技法によって非常に薄く丁寧につくられている。縄文時代前期の石鏃と思われる。石質は3が硅質頁岩、7が玉髄であるのを除いて頁岩である。

ア(1~3) 基部が直線的であるもの。3は基部、右側辺とも調整の雑なものである。

イ(4~8) 基部が凹むもの。4、5のように凹みが少ないものと、6~8のように大きいものがある。

ウ(9) 基部に柄のあるもの。基部にアスファルトの付着が認められる。

エ(10) 基部が丸いもの。

石匙(第35図11~23、第36図24~27、図版32) 縦長、及び不定形の剥片の一端につまみを有する石器である。大部分のつまみ部は、剥片の打面側に作出されているが、21、23、25などのように反対側に付けられているものもある。つまみ部の作出は11、15などのように丁寧なものもあるが、24~26のように、ごく簡略なものもある。27のつまみの位置は剥片に対して斜位である。これらの石器はつまみの反対側の形状などにより細分も可能であるが、大まかには先端の尖るもの(11~14)、直線的なもの(15など)、丸味を持つもの(16~23など)などがある。石質は全て頁岩である。

石槍(第36図28~32、図版32) 明確に石槍であろうと考えられるのは28だけであるが、他のものもその形状から石槍とした。29、31、32は横長の剥片の一端を尖らせ、基部を調整したものである。全て頁岩を使用している。

搔器(第36図33~38、第37図39~44、図版33) やや幅広い剥片の一端及び側縁に、裏面からの加撃によって刃部を作出した石器である。主要剥離面(裏面)と刃部とのなす角度は60°よりも大きい。この搔器に用いられている剥片の主要剥離面は、主要剥離面を水平面においた場合に、中央部あるいは刃部に近い部分にやや大きな隙間のできるものが多い。刃部の形状は弧刃(33~35、41、42など)、直刃(38、39、43)、尖刃(44)がある。石質は全て頁岩である。

削器(第37図45~55、第38、39図、第40図82~85、図版33、34) 縦長及び不定形の剥片の1~2側辺に、一面からの加撃のみで刃部を作出した石器を削器とした。刃部の調整は縁辺部のみのものである。計41点ほど出土しており、剥片石器の中では最も量が多い。刃部の数及び形状によって3種に分類できる。

ア(第37図45~55) 縦長の剥片の両側辺に刃部のあるもので、刃部は直線であるものが多い。45のように調整のほとんど見えなく、使用痕のみが見えるようなものもこの仲間に入れた。

47の右側辺は直線的な刃部であるが、左側はゆるく凹刃になっているものもある。また、47、48～52などのように、石器のほぼ中央部分から折れているものが多いことが特徴である。

イ（第38図、第39図68～78、図版33、34） 縦長及び不定形の剥片が相半ばして用いられているが、それらの剥片の側面に刃部を作出したものである。直刃のものが多いが、75、77、78のように刃部の一端が尖るものもある。

ロ（第39図79～81、第40図82～85、図版34） 主に不定形の剥片に弧刃を作出したものである。

鹿状石器（第40図86～97、図版34） 部厚い縦長の剥片を平面形か二等辺三角形になるように両面から調整した石器である。調整は表側が91、94などのように全面調整で、裏面が縁部調整であるものが多い。刃部先端の調整は96のように両面から行なわれるものは少なく、大部分は主要剥離面からの加撃だけであり、裏面側には第1次剥離面を残すものである。石質は全て頁岩である。

楕円形石器（第41図98、図版35） 削器の仲間とも思われるが、その形状などに異質のものがあるので、このような名称を付した。部厚い縦長の剥片を用いて、表面は全面調整、裏面は弧を描く側面のみを調整し、他の側面は直線的になる石器である。

小型円形石器（第41図99～102、図版35） 小さな剥片の全周、あるいは3分の2周ほどに片面からの加撃によって刃部を作出したものである。薄いものが多い。

その他の石器（第41図103～114、第42図、図版35） 不定形石器などと呼ばれるものである。不定形の剥片の一部に刃部を作出したり、挿入を行ったものなどがある。定形的な石錐が全く出土していない本遺跡にあって、107などは石錐である可能性がある。

半円状扁平打製石器（第43図、第44図140～144、図版36） 安山岩、泥岩、砂岩などの板状に剥がれ易い比較的軟質の石材を用いて、平面形が半円状を呈するように作られた石器である。完形品はなく、小さな破片で出土した。130は4片が散在して出土したが、接合したものである。これによる完形時の大きさは、長さが約24～25cm、最大幅10.8cm、厚さ1.4cmであったと思われる。縁辺は全周にわたって両面からの打ち欠き痕があり、直線部分（これを刃の部分と考え直刃部とし、反対側の弧の部分を弧部とする。）は断面形が楔形に、他の部分は、平滑になるようにきれいに磨かれている。このようなことは他の131～138の破片でも認められる。また130、138に見られるように、弧部の斜肩の部分に小さな挿入状の打ち欠きのあるものもある。130～138と、139、140、143などの未製品の破片と思われる（あるいはこのような状態のまま使用された可能性もあるが）ものから推定される製作工程は、以下のとおりである。①板状になった安山岩、泥岩などの比較的軟質の長方形の石材を準備する。②長辺の一端は直線的に、他の一端は弧を描くように打ち欠く。③直刃部は断面楔形になるように、両面

から斜位に擦る。弧部は必ずしも楔形とはならない場合もあるようであるが、同様に擦る。  
 ④両面の平面部分も凹凸が大きい場合は平滑になるように擦る。この①～④の工程の中で、③、④については、139、140、143などのように、どの面にも擦った痕跡がないのに破片で出土しているものがあることを考慮すると、あるいはこの擦痕がこの石器の使用結果として残った可能性もある。

有擦痕打製石器（第44図 145、第45図、第46図 152～155、図版36、37） 145～147、150、153、155のように、半円状扁平打製石器の仲間と考えられるものもあるが、石材、使用部分の形態の違いなどから、このような名称を付した。基本的には、長さ15cm前後（20cmを超えることはないようである）、幅10cm未満のやや硬質の安山岩などの河原石の全周あるいは一部分を両面から打ち欠いた石器である。打ち欠いた部分には弧を描く脚辺の他に必ず直線部分が作出され、この部分が潰す、擦るなどの結果、平面的に擦られた面として残っている（スクリーントーンの部分がそれである）のが特徴である。148、149、152などは剝離された面がほとんど残らないほどに擦り減っている。151、154などは、縁辺の打ち欠きが不十分の段階のものと考えられる。146、147は半円状扁平打製石器と本器種の間型のようなものである。

磨製石斧（第46図 156～160、第47図 161～169、171、図版37、38） 15点の磨製石斧が出土している。石材は緑色凝灰岩、花崗岩、流紋岩などである。平面的な形状は2種ある。1つは156、160のようなやや細長いもので、他は159、161のように三味線の撥形のものである。刃部はいずれも弧刃で、両刃である。

磨製石斧様石製品（第47図 170、172、173、図版38） 形態は磨製石斧に似ているが、石材などから磨製石斧ではないと思われる石製品である。170、173は凝灰岩製、172は緑色凝灰岩製である。172、173は細身で、両端に片刃の刃部を持つ。両端の刃部はその刃の向きが90°違っている。172は右側辺に、原材からの切り離しの際の擦切りの痕が明瞭に残っている。

石皿（第47図 174、図版38） 整った石皿が1点だけ出土している。やや軟質の安山岩製で裏には脚が付いている。脚は4つと思われるが、半分は欠けている。

多目的礫器（第48～55図、図版38～42） これまで一般的には、凹石、磨石、擦石、敲石などと別々の名称で呼ばれていた石器群をまとめて、このように呼称することにした。石材は安山岩が大部分で、これに一部花崗岩、凝灰岩、泥岩などが混じる。長径8～17cm、短径7～10cmの楕円形もしくは円形の河原石の2～6面をいくつかの目的に使用したと思われる石器である。それらの面に残された痕跡には大きく分けると3種類ある。（この3種類の痕跡は実測図ではスクリーントーンで分けているが、その説明については例言を参照のこと。）<sup>(A)</sup>凹みの部分＝広い2つの面（表面と裏面）の中央部に1～2個あるのが通例であるが、176、183のよう

に片面にしかないものや、希に 182のように両側面も合せて4面にあるものもある。凹みの深さは3～5mmのものが多いが、186のようにこれより深いものや、179のようにほんの痕跡程度でほとんど凹んでいないものもある。㊸ゴツゴツあるいはボツボツした面＝両側面あるいは上下両端面にあり、平坦な面をなしている場合が多い。硬い石などの上で物を押し潰すか、敲き潰したような痕跡である。平坦な面は176～182のように側面にあり、やや滑らかで、上下両端のそれは丸味を持ってゴツゴツしている。㊹ツルツルした面＝表面か裏面、あるいは両面にあり、ツルツルしている。凹みの部分と同じ面にあるのが通例であるが、両者の前後関係はわからない。

本石器群の中にはこれら㊸～㊹の3種類の痕跡を全て有しているものや、1種類しかないものもある。以下その組み合わせによって㊺～㊻に分類した。

㊺類(第48図 176～第50図 197)：㊸、㊹、㊺の痕跡全てを有するものである。㊹は両側面、両端にあるものが多く、側面のそれは平坦で整っている。㊺は全体に非常にツルツルしており、191などのように部分的なものは少ない。

㊻類(第50図 198)：㊸、㊹2つの痕跡だけのものであるが、その数は少ない。

㊼類(第51図 199～第52図 212)：㊸、㊺2つの痕跡のあるもの。

㊽類(第52図 213～第53図 219)：㊹、㊺2つの痕跡のあるものである。213、215のように、原材が細長い場合は一方の端に㊹のある場合が多い。

㊾類(第53図 220～第54図 235)：㊸のみのものである。本器種の中ではこの㊾類が最も多く、約50%を占める。

㊿類(第61図 237～244)：㊺のみのものである。この中で237、238、240は石皿の破片とも考えられるが、比較的小さいため、この仲間に入れた。

以上㊺～㊿類まで6つに分類したのであるが、このうち㊺～㊿類までのものでも、微細に観察すると器表面の僅く一部に㊸、㊹、㊺の3つの痕跡全てを持つように見えるものが多い。しかし、このことについて判断に迷うような場合には、これを全て除外して実測図に表わしたため、このような結果となっている。

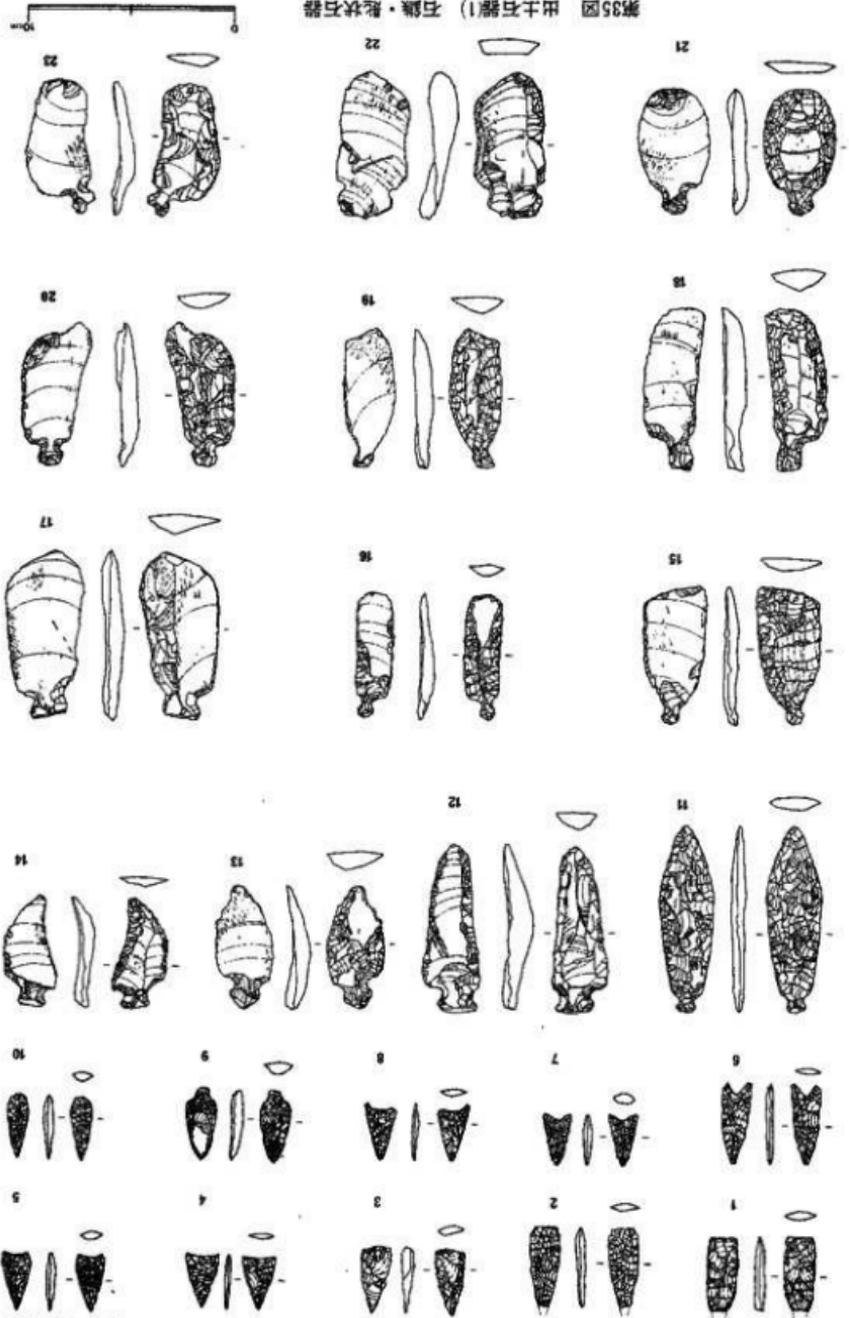
## ②石製品

石棒、有孔石製品、線刻磗、有擦痕磗、有溝磗、円盤状石製品などの石製品が出土している。

石棒(第47図 175、図版38) 石棒も頭部だけ1点出土している。野球のバットを両端から押し潰したような形を呈するものと思われ、頭部の先端はゆるく凹んでいる。全面よく磨いており、頭部先端から14cmのところには直径2.4cm、深さ0.9cmの円形の凹みが1カ所だけにある。石材は安山岩。

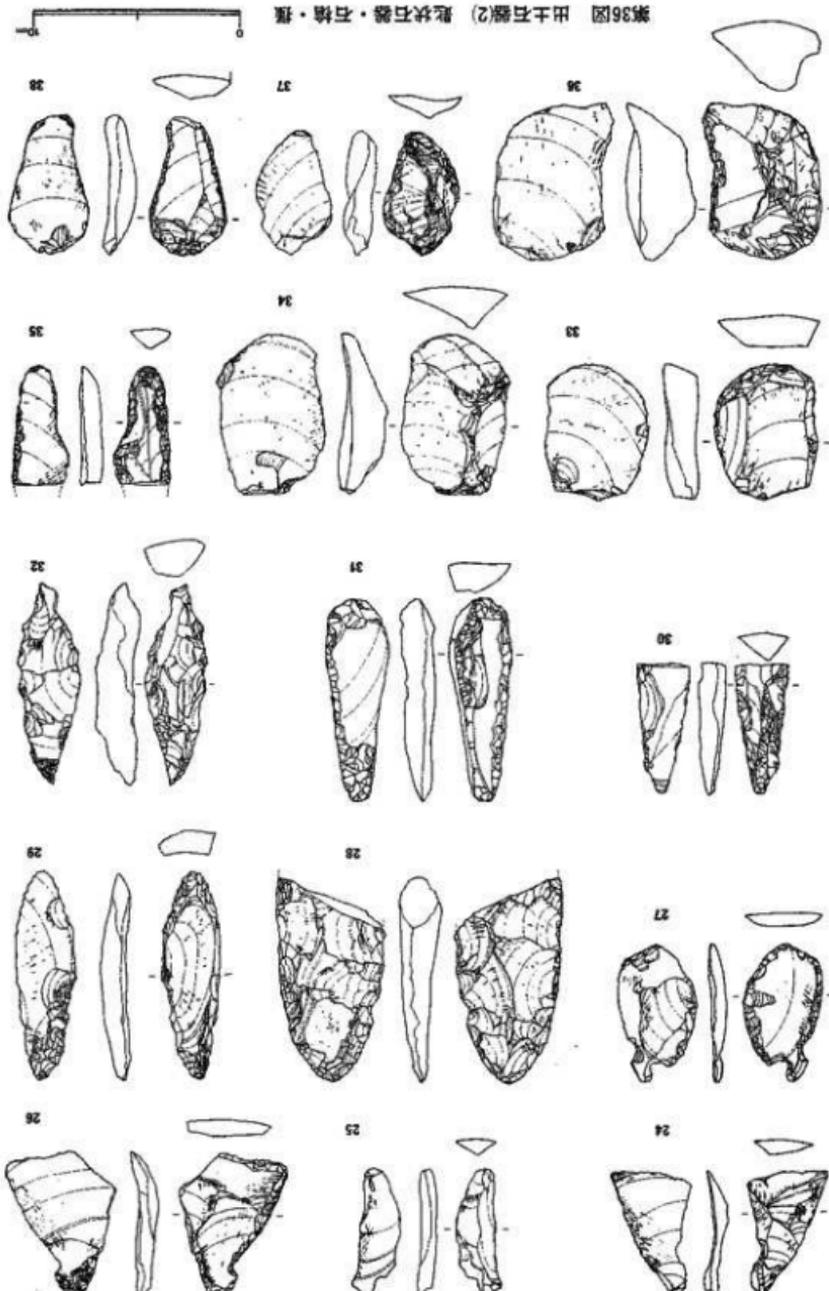
有孔石製品(第57図 268～272、図版43) 全部で5点出土している。石材、形状、意匠と

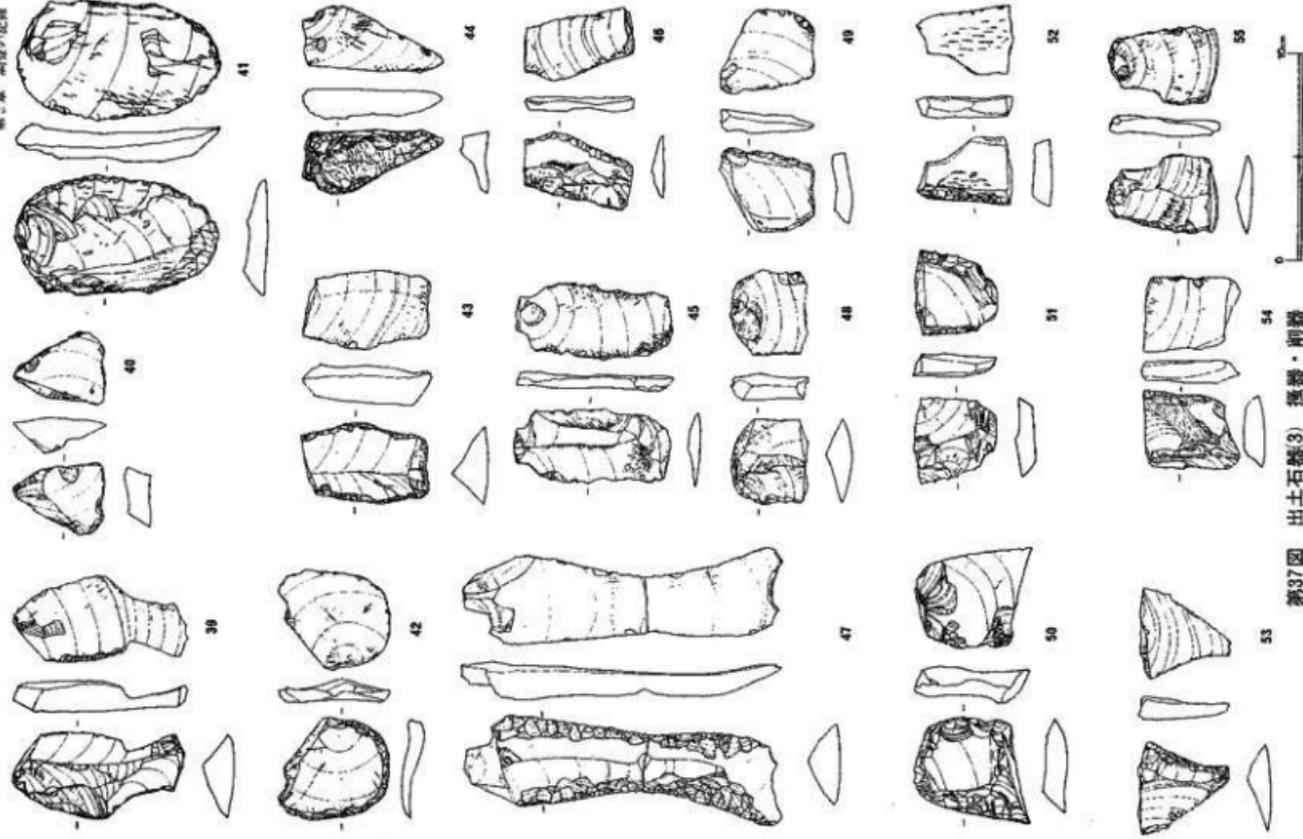
第35圖 出土石鏃(1) 石鏃・匙状石器



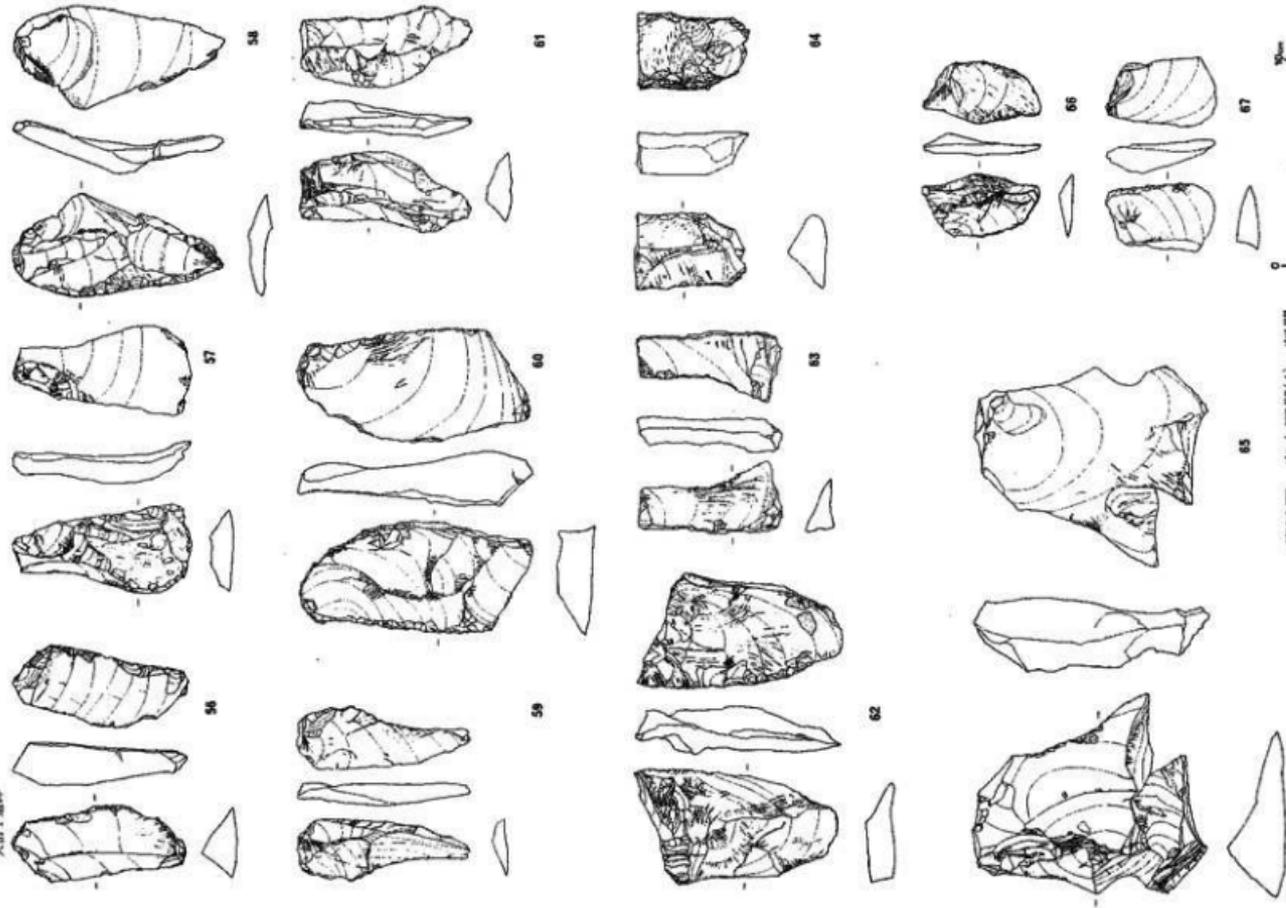
第2章 調査の記録

第36图 出土石器(2) 匙状石器·石枪·石镞

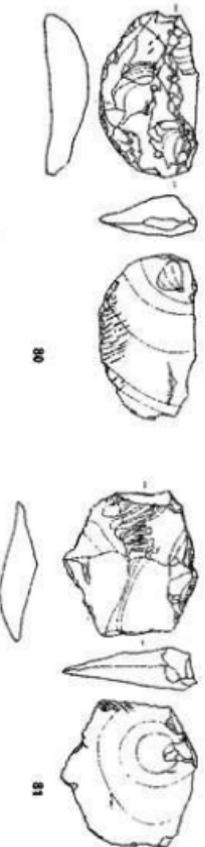
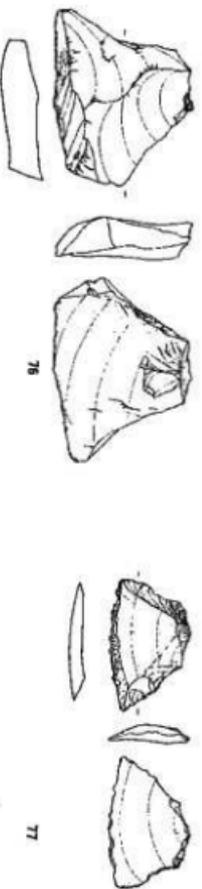
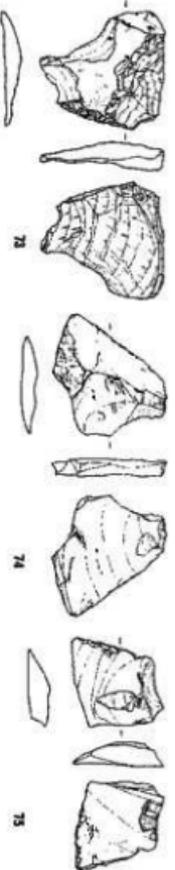
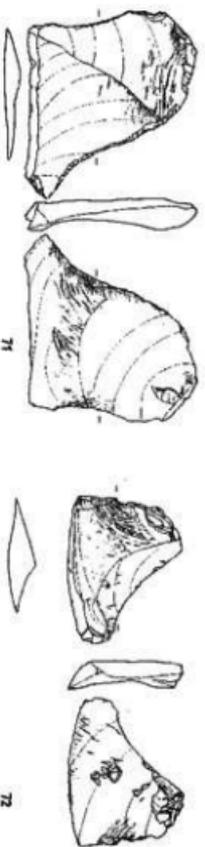
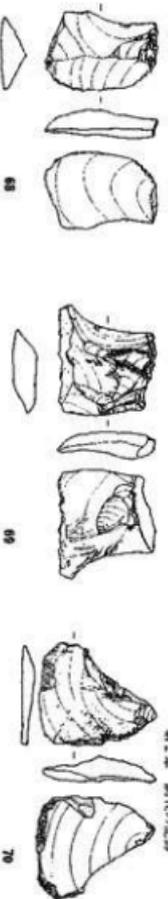




第37圖 出土石器(3) 遺器・附器

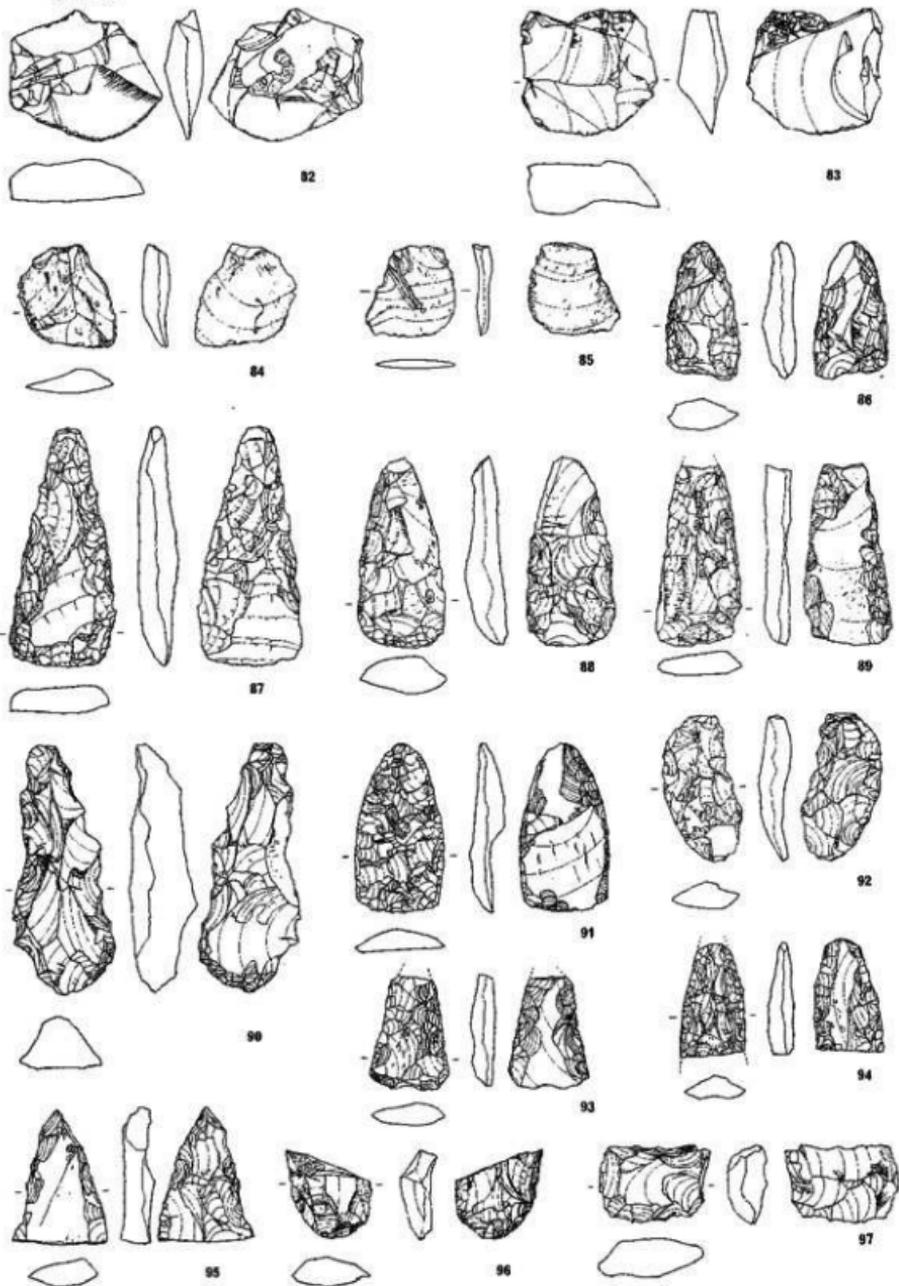


第38圖 出土石器(4) 附器



第39図 出土石器(5) 削器





第40圖 出土石器(6) 削器・簞状石器



第41圖 出土石器(7) 楕円形石器・小型円形石器・その他の石器

